

太閤薨後には信長老を相加へ給ふ其後免長老遷化し信長老も老年に及べるを以て駿府に圓光寺の地を給ふを以て時々の出仕にて傳長老壯年にして才智有故其始は名代の如く諸事を任せたるゆへ毎度御前へ出るに御旨に相叶ひ惣録を給ふにより當時に至るまで公邊の其代替り云へども其職を勤るに依て是より惣録は南禪寺にて持寛永の末年遷化す本光禪師と諡す丹後の一色左京大夫義口が末子なり傳長老の師は靖叔長老と云て其始は河内の眞觀寺に住夫より南禪寺の塔頭信乘院に移り是を移轉して金地院に住し傳長老其跡を相續すかゝる譯ゆへ畠山家眞觀寺は代々の菩提所に付其由緒を以て當寺畠山家此檀家なり此地の内に松倉豊後守畠山長門守石塔あり島原一揆の時松倉の家滅して跡吊ふ人なし當院滅罪の法事供養所は別に立置葬送の門は外に設て出入し本院の方には死穢の火を嫌ふ古來より御成も有て御崇敬の院室なれば客殿方丈まで丁寧至極なり第二世良長老是を大興禪師と諡す三世普濟禪師四世通應禪師是を三長老と云普濟通應共に公邊の思召に甚叶へり第五海堂和尚第

六大川和尚是は木下民部の舍弟なり第七乾慶雪雄長老是當時享保の頃の住侶なり

佃島

一佃島住吉の社此島攝州の佃島を以て名とす攝津國の田箕の島と云は佃島のことなり當國にも此島のことは權現様御事太閤御在世には伏見に御詣被遊慶長四年五年には大坂城西の丸に御座有し時其佃島の彦作と云者御膳の魚の御用を承り其後大坂より御歸に付御用を失ふを以て何とぞ江戸へも慕参り度心に付其頃大坂にて御船手川口の御番を蒙て勤められたる石川又四郎へ相因甚目をかけられ候に及て此願の趣を語り石川罷下られ候節跡より馳下りたり石川は御船手に付江戸の東手の海中に洲の有しを居所に願ひ申請住居せり後八左衛門と改名せる故其所の名を八左衛門殿島と普く呼習はず彦作其程は下りて其島に落付居て大坂にて御用承りたる譯を申立御魚御用承りたきよしを相願に付則仰付らる故に此島より御膳の御用を相違すかゝることなれば大坂へも獵師共を申遣し段々下りし上獵師ども同地に廿人罷下り此所より獵船を乗出

し網漁したり八左衛門殿住居の前なれば土地狭き儘段々築出し彼等共住馴て今の佃島と成八左衛門殿島とは隣たり借海上渡世に仕る者共なれば住吉の宮を勸請せしかば其社司の類を招き神官に定む是を津守日向守と呼ぶ斯新地なれば松杉等の樹も植込しか共潮風に痛み育兼しかども藤を植ければ思はずはびこり渡りて神前の庭一ぱいに柵搔渡して暮春の花見に来る人多く渡し船の往來繁し六月晦日には定たる住吉の碓ひ日なるを此島にては前日に取越し氏子ども船に乗出し船にて神樂を奏したり其後魚獵年々薄く渡世仕兼候由訴出歎しかば京橋の南詰にて四方屋敷を賜はり家建家代納るを島中の者に配分す是を彦作屋敷と呼しが是も寛文の先後より他人の手へ渡りたり

三十三間堂

一三十三間堂淺草新堀川の西手にあり京都東山の麓に有し頭痛山を移したるなり彼の堂の義は通し矢とて矢數の長間をためし來る所にて國々より馳上りて堂を通すこと年々なり江戸は別て國々の武士の集り來る所なれば當地に此堂有ば繁昌すべしと

思ひつき大坂屋久右衛門と云材木屋三十三間堂建立任度由相願是を建たり是より年々矢數度々にして賑ひしが元祿年中江戸大火の後其地深川へ移し今は洲崎に是あり是より先を築出させて六萬坪といふ夫より先炮烙新田にして中川の端なり當時は此川を境て武藏下總と國を隔て本所筋皆武藏の地なり

三線山

一三線山増上寺古へは光明寺と云て眞言宗にて赤坂の貝坂にありしが後年今の芝の地に移れり當時三代目西譽上人の時傳通院の良譽上人の弟子と成是より寺も浄土宗と成増上寺と寺號を替たり西譽より四代目を穩譽と云此上人常の誓願にも法談の場へ黒雲たな引かゝりしかば上人願て其雲に飛乗立去給ふ是を世に火車に乗ると云西譽より八代存應源譽の時關東御入國成て貝坂の寺前を御通りの時存應門前へ立出御禮申されしかば當地にての御菩提所の御約束遊されて明朝當寺へ御入成さるべく御齋召上られ候様との仰にて翌朝御來臨遊されたり貧地のことなれば差上べき品もなしと御粥を差

上候其御汁に黒大豆を入られたり是より御檀縁として御歸依に付寺次第に繁昌し右の御齋を此寺の佳例として年々元朝の粥當寺の祝儀なり浄土の法式定めにて大檀林の頭として諸檀林の能化當會下より皆出る四ヶの本寺の智恩院と對座なり光明寺傳通院是に差續て二番紫衣なり大光院弘經寺常福寺は一番紫衣なり其外檀林残らず香衣なり當寺の下知を得るを以て大僧正たり

東叡山

一東叡山寛永寺南光坊天海大僧正開基なり當所上野と呼て藤堂和泉守高虎屋敷にて東照宮の御恩有がたく此屋敷の内に御宮を建祠置れしを天海僧正申受られ寺院とせり不忍の池を江湖にかたごりて叡山を移されたり故に此山の裾を坂本と名付しも日枝の山を移せる故なり依て東叡山寛永寺と號するも其山開闢の時の年號なりもと東叡山と云ふは常陸國の黒子の千妙寺の山號にして叡山を東國へ移したるにて東叡山と勅額其寺にあり是より前天海僧正川越仙波の喜多院を造立し住職の時に東叡山と言山號を喜多院へ取て用ひらるゝ時千妙寺をば

古東叡山と古の字を冠らせしが當山を東叡山と號せしめ給ふに仙波の喜多院は此時より星野山と改られし院室の名を圓頓院と唱ふ藤堂高虎右の譯故當地の御宮は元其建立に付其御別當の名に自分の院號を名乗らせ寒松院と呼せ五重の塔は永く藤堂家より修理せり當時造立に付上行堂法花堂は尾紀兩家の御建立經藏は水戸御施主なり故に鐘樓は土井大炊頭利勝の施主なり元祿二年中堂建立の時樓門吉祥閣も御建なり

一天海僧正には寛永二十年癸未十二月二日遷化百三十五歳なり慈眼大師と諡す御弟子久遠壽院へ御跡を譲り給ふ清華花山院殿の御子なり是二世は後水尾院法皇の御子なり東福門院の御子分に付て將軍家の御養子と成され本照院と申第四世も同じ法皇の御子なり解脫院と申之將軍家口慈眼大師より天台の血脉を請繼せて是を本照院へ御讓成され候付解脫院にも其嗣法なり第四世大明院是は後光明院の御子なり公辨親王と申准三后なり第六世靈元院の御子にて公寬親王と申准三后にて崇保院と申第七世中御門院の御子公遵親王なり

當寺の院主を輪王寺の宮と申ことは第三世の本照院此寺に始て御入にて毘沙門堂にて御行法御嗣法成されての後當寺へ御越し有し故なり尤寛永寺の事叡山の座主御掛持にて三門跡と申青蓮院妙法院梶井の上座といへ共昔よりの輪王寺の宮と稱す

月桂寺

一月桂寺川田ヶ窪に有濟家也月桂院尼公の建立なり此は天正十八年關白秀吉公小田原征伐よりして奥州に御馬を入らるゝ刻御止宿の所にて夜の御相手として由有人を御撰にて生實の御前の御息女忍の成田が息女容色麗きを以て兩人御伽に召されたり既に御歸洛に付ては忍の息女は父成田下總守に那須の内にて所領を給ふ息女を御返し成され生實の息女は都へ召され供口口にて御旨に入し人なれば關東公方の御末を御尋の時委細申上られ古河の義氏卿には勢ひ盡御薨逝ありて御男子もなく其跡絶たり此女を初め義氏の御子分と成給ふ其御家絶たるを以て實方の舍兄生實の足利頼純當時は奥州境喜連川に居住せり口に入給ふが義氏薨逝の刻三歳なりし女子有之との事に付古河の里民に御尋に付

御答申も同じことにて其所にかこにて有之よし申上故に三百石の秩祿を給りそにて御長育なり其後殿下には重て委細を御聞に付足利頼純の子息を以て其義氏の息女に娶せ關東公方の御跡を立べしと仰出さるゝに付其趣に事を定めて御目見えの御禮として頼純の子息國朝上洛の時殿下には朝鮮征伐として西國へ御立有しかば御跡を追て備前まで参り拜謁して夫より相隨ひ藝州まで趣きし前に途中にて煩出しついに相果たり斯て月桂院殿より重く御跡相續のことを願はるゝに付國朝の舍弟頼氏に仰付られ御歸洛の時御目見相調しかば兼て國朝が妻にすべしとある義氏の御息女も直に頼氏の妻にせよと御養女として是を賜り仰にて嫁娶相調義氏の跡として夫より喜連川に居館せりと云傳ふ

頼氏の内室の事喜連川の地にて傳ふる説には守都宮下野守國綱の舍弟遠江守が元妻なり遠江守には那須の家と取合の時打死に付其所領早乙女五百石の所を寡婦として守居しが頼氏の妻と再嫁し行を以て此五百石の領地喜連川の領地と成しと云是を以て見れば義氏天正十七年薨逝の時

に三歳になりし女子に殿下より御扶持の地を賜
と云ふより考れば文祿三年の頃は漸八歳なるべ
し此度嫁娶せらるゝと云ならば何程幼少にても
十三四歳なるべし思ふに其幼少なる義氏の息女
も國朝死して後頼氏といまだ配偶なき内に息女
も早世なりしに付宇都宮遠江守が後室にも義氏
の御妹か又は身近き一族なるを以て委細殿下へ
申上御免許を得て頼氏の妻としたる物ならんさ
なくば夫頼氏より遙年増にして始終の申傳へ齟
齬せり

月桂院殿には太閤秀吉公薨御の時尼と成給ふ江戸
大御臺にも京都よりの御因みに付江戸へ下られ折
折大奥へも御心安く御出入に付一字建立し先祖の
菩提を吊ひたき由御願の儀御免成て川田ヶ窪にて
其地を下されしかば其身に給ふ所の秩祿を則寺領
につけ一堂建立し月桂寺と號せらる依之位牌を立
らるゝに付足利の大祖尊氏公を正中に立置て左に
足利義氏右に豊臣秀吉公と書載たり秀吉公の御名
を載る事御高恩にあづかりし事と申立の願なり當
御代秀吉公の御位牌を立し所は當寺のみなり斯る

由緒に付常寺は喜連川の家にて代々菩提所なり

柳島平河山

一法恩寺本所柳島の地に天和年中より在寺なり京都
本國寺の末寺の觸頭なり其古へ太田道灌江戸在城
の時は城の東北に寺院并居たり浄土寺法恩寺の三
寺にて各平河山と稱するは其故なり其始は本住院
と呼候道灌の嫡子六郎左衛門資康が父持資入道道
灌には主人扇谷の上杉定政方より招かれ相州糟谷
の旅館まで來れる所へ急に討手押寄浴室にて生害
せり其刻此資康は源六郎といふて未若輩にして同
國鶴の臺の壘に住居す夫より山内の上杉顯定へ從
屬し奉仕に付永正十年九月相州三浦にて戦死せり
大明寺に葬る法恩齋日恩と戒名す其嫡子源六郎資
高には相武の兩國は北條家の武威に摧れ皆隨逐に
付資高も北條に隨ひしより一忠義して祖父の口を
報せん志し永正四年正月謀を定め北條の人数を
江戸城の搦手へ手引して乗取らしむ北條氏綱には
至極の働なりと褒美し息女を送聲とし大和守に任
せしむ夫よりして江戸の本城には富永三郎左衛門
二ノ丸に遠山丹波守三ノ丸に大和守資高を居らし

む此三ノ丸道灌の江月亭と名つけ建たる梅林の地
也此人當城にて生しかば祖父道灌生害に付城を立
たりしが今年三十八年目にして城へ移居す其後父
六郎左衛門資康十三回忌に及びしかば法事を取行
ひ城外の本住院を招きて供養の時父の法名を則其
寺へ送り此時より法恩寺と號し寺を建立し天文十
六年資高三ノ丸にて病死し法恩寺へ葬る萬好齋と
諡す其子新六郎康資には北條氏康の甥なれば康の
字新の字を送り給ふ然れども若年なれば其儘三ノ
丸に居らしむるに付江戸城の義は先祖の城と云ひ
父が働きにて北條の手に入しかば我また氏康の甥
なれば當城は預らるべきことなるに家臣を居守ら
しむることよき常に憤りし所へ岩槻の城主太田美
濃守入道三樂には元相互に祖父には兄弟にして三
樂も新六郎も道灌の祖孫にして從弟の末なりける
を以て三樂上杉憲政忠義不變より何卒北條を亡し
申さんとの志にて常に其働せしより新六郎手引し
て江戸を乗取り先祖の在城なれば御身を其城主に
取立んと申送るより新六郎同心して其相談のこと
他所にては事洩易からんと法恩寺の鬼神堂に參會

す其密談を住持聞届當城に事出來せば我寺も事危
からんと思ふより其由を富永遠山方へ訴へしかば
事起らざる先に早々新六郎を生取にせよと討手を
差向たり是より以前に新六郎は此謀叛の志よりし
て三ノ丸を立去り本郷へ居所を移したれば討手の
者其方へ差向ふ斯法恩寺の住僧の訴出る由を同宿
本行坊聞てひとしく新六郎方へ相告しかば偕は事
顯れぬと新六郎兄弟妻子一同に本郷の家を明去り立
退き此危所を遁たり兼て此一味の事房州へ申通し
置しより里見義弘人数を率し國府臺まで出張せし
かば三樂にも新六にも皆里見の陣へ立越敵を待つ
江戸城より富永遠山出軍の由を小田原へも申送け
れば北條氏政軍兵を牽し出て永祿七年正月八日國
府臺にて合戦有初度は討勝しかども後度の戦に味
方討負里見の勢房州へ引入しかば新六郎は力戰數
回し是も安房へ引入十五年の後天正九年十月五十
一歳にして卒す武庵日高と號す三樂も嫡子源五郎
氏資家臣備中資宗等が勧めに依て父に謀反し岩槻
の城をせき出しければ是非なく佐竹を頼て常陸へ
入て片野に在住したり二男梶原美濃三男太田安房

が時に及で佐竹も常陸より秋田へ所替の時又浪々し其後兄弟ともに越前へ招かれ奉公せしが兄弟共に子孫に及び散々成谷中の本行寺は彼の同宿本行坊を太田家より取立一字をもたせたる所寺と成りたる丸山の淨心寺は新六郎康資が妻の父太田下野守を國府臺合戦の時新六郎が打殺したるを以て其妻是を歎きしかども親の事なり夫の事なり如何ともし難く終に尼と成淨心と號し本郷の丸山に庵室を結び居たりし跡寺と成則寺號とす兩寺共に法恩寺の末寺なり

太田青松寺

一青松寺は愛宕山の隣なり萬年山と稱す古へは貝坂に有しが當所に引たり太田道灌の嫡男に青松殿と云少年有しに早世成しを葬たりし故此寺を建立し青松寺と名付らる當所の儀は道灌江戸在城の時分飯倉砦とよびて軍兵を入置れし所なり此砦に道灌の守り本尊たる觀音を安置し一堂を建置たり後來寺も添たり御入國以來江戸段々廣がりしより寺は他所へ引れ觀音堂計り殘し置たる儘今は牧野駿河の屋敷庭の山に有り此山初は正中に道有道より西

北の方牧野屋敷と成道共に東の方青松寺の境内なり今以て寺の山へ登りみれば林の間に其道有と云云道灌の砦の時は長臣太田口口預り守りしと云

四谷西光寺

一西光寺今は四ッ谷船板横町の先に有初めは今の紅葉山の御祠堂の所に有後年當所へ寺地引たり故に紅葉山と稱す其初口州の住人に田中某重家と云ふ者有國民と争ひ其父は討れたりしを憤り入道して以下と號し沈落せしに終に父の寇を報じたりしが數年の困窮に落魄のまゝ、塾居し有しを太田道灌其由聞届彼が武勇を常に感心せる心より道灌只一人日關に尋行夜中に面會し則同道して江戸城へ來り扶持し置て後道灌妹を送り縁を結びたり然るに道灌生害し江戸城も退轉せし故以下甚歎憤し其妻も相果しかば城外の紅葉山の内に庵室を結び西光塚と改號して念佛を友とす以下往生して後人々是を寺とし西光寺と名付以下が傳記并道灌よりゆづられたる太刀什物としてあり

駒込白華山

一養源寺駒込に有白華山と號す妙心寺派なり稻葉古

丹後守開基にして其人の院號殘る然るに其子息美濃守正則は黄蘗の鐵牛和尚歸依にて在城小田原の地に其寺建立なり天澤山と稱せしを天澤寺と呼たり此養源寺建立の時の開基を無口和尚と云二代目東固和尚三代目天溪和尚是東國の弟子にて始は堀尾山城守家人大沙氏の子なり堀尾家斷絶して出家たり

澁谷祥雲寺

一祥雲寺澁谷の廣尾に有大徳寺派にして館中の三院より年々輪番持なり始は麻布市兵衛町の先に有しが丁酉の江戸大火より當所へ引移たり開基は龍岳和尚なり

笑嶺宗訴

春屋宗園

古溪宗陳

一凍紹瀾

玉甫紹琮

蘭叔宗秀

月岑宗印

龍岳宗劉

惠瓊

蕨州沼田郡金山領主武田刑部少輔信重末子毛利家菩提所の住持安國寺なり天正十四年

從秀吉公於伊豫之國內賜二萬三千石且御口入を以從諸大名俸祿を送られ都合十二萬石の身上なり

玉甫紹琮三淵宗蕪子なり

又若狹守武田宮内少輔宗蕪聲なり惠瓊の父刑部少輔信重は別人なり尤時代の古き事一世許り(紫巖譜略曰玉甫三淵伊賀守晴員之子細川幽齋舍弟也)

龍岳西國より出て東福寺の龍室和尚の弟子にて其寺へ住居せし所に關ヶ原合戦終て蕨州の安國寺惠瓊和尚も罪せられ梟首に付て此和尚は東福寺の先住のことなれば其首を取て葬るべくと龍岳頻りに申と云ども大衆是を取らんことを恐れ不同心也依之龍岳一人思立其首を取埋め隠し東福寺には出家たらんものは一人もなしと嘲弄し五山派を捨て大徳寺派と成大徳寺の廣照禪師古溪和尚には千の利休が木像の事にて太閤よりして御咎有しかば出寺せり其後御免と云へども歸寺せず大徳寺の内の總見院をば弟子玉甫にゆづり市原へ隱塾し其居を常樂庵と唱ふ後遷化に付ては弟子月岑に之を譲り常

樂庵と號す龍岳是より月岑の弟子と成を以て古溪の横難の時若僧徒に不似合罪を得ば忽生害せんと志し懐劍を嗜み給ふ其刃物月岑方に傳へ有しを龍岳譲り得しかば江戸へ下向し黒田家溜池の屋敷に暫居所を持參し其後肥後の妙解寺の住持は龍岳の弟子成を以是により今に肥後に有之由龍岳後年市兵衛町の先に一寺建立の時祥雲寺と號したり世説に石田が首を龍岳盜取しより直に江戸へ至りしと云は誤り月岑の同じ會下に有し敬書記には石田に縁有者故同心の僧徒之を盗み得たるに付敬書記理を盡し貰ひ得たるなり

青山長谷寺

一長谷寺青山の末筭橋の脇に有其初は麻布溜池の南の端に有しを山口伊州當澁谷の地青山にて屋敷地を坪廣く下されし故長谷寺の住持と相談して溜池の端の寺地を上屋敷として住居し其代りとして當所の屋敷地の内にて廣く代地を渡され初より如何成約束故か其寺を屋敷の内にて構させ出入の口をも屋敷の門よりせさせて内寺とせらるる譯を毎度非と申云へども別口にせず終に其住持は遷化し

後住の代に公事と成尤他所にある寺地を自分の居屋敷とし其代地を下屋敷の内にて出入の口も別にせられざること無道の致され方と聞えしまゝ山口の方より東の方を寺へ添地して出入の門を設けさせたり故に外よりの見分もよく其東の表通りの分門前の借屋と成古跡地となりて立像の釋迦を本堂に摸したり此時より妙心寺派を改曹洞宗と成る

雲光院

一雲光院今は深川に有其初は岩井町と云町屋敷の地にあり雲光院と申院號は一位の局の號なり存生の内に願を立一寺を建立し寺領百石を申請寄附す故に死後此寺に葬り雲光院從一位と稱す其初は今川の家臣神尾孫兵衛が妻なり天文の晩年御幼年にて駿州今川義元の方に御在住の時神尾夫婦御勞り申たりとて其後義元は桶峽間にて討死の時孫兵衛相俱に討死に付其妻親里なれば甲州へ行き飯田筑後が子の久左衛門方に住す其刻懐胎なれば爰にて男子出生し猪之助と名付たり天正十年武田家滅して後秋に至て武田の空國を北條と御争ひのとき甲州黒駒にて御馬入らるゝ時神尾が妻幼子猪之助を伴

ひ出て路次にて御目見申久敷打絶如何成行しと思召しかども何方へ御尋有べき様もなく御座候所に能こそ罷出候と其世倅共に遠州へ參り候様にと濱松へ召連れられ世倅儀は御小姓に召仕はるべしとなり母の儀は賢き者故常に御側に差置れ何事も御側御用取計ひ阿茶の局と被召猪之助は元服して神尾

部大輔同腹の弟にして岡田竹右衛門が子なり二代目の飯田久右衛門が聲の縁を以一位の子分と成故神尾と稱す

淺草報恩寺

一報恩寺淺草觀音堂の西手なり其始は今の八官町に有し是は常州下妻に有しが江戸へ引たり親鸞上人を關東にて歸依に付其弟子に自作の像を添て差下され宗門を勧められし御頼有故に一宗の口口にして東本願寺派にては院家の上座なり

芝五智如來

一如來寺芝高繩手通り五智の如來堂にして世に芝の大佛と云ふ此佛建立せしは天台宗にて但昌といへる木食なり依て本堂迄取立て東叡山の末寺なり當所江戸創業の始は刑罪の屠所なりしが其後鈴ヶ森の地へ引たり但昌其後相州一石山に籠り藥師如來を建立し其所にて遷化す其跡の一石山は同宗成し因み故目黒の地にて寢釋迦建立したりし木食空譽其所へ來り續て一石山再興しそこにて是も逝せしが其後打續一石山繁昌すとなり

東海寺

故なり故に子孫尾張に住す神尾市左衛門は土屋民

一東海寺北品川西手にあり其頃の地を御殿山と云ふ是御茶屋の御殿の跡にて寛永十五年澤庵和尚の開基なり是より先澤庵は南宗寺の院主にて大徳寺派の二宗にて時の老和尚なり其根本春屋宗園古溪宗陳一凍紹滴の三人笑嶺和尚の弟子にして萬江宗程玉室宗珀江月宗玩澤庵宗彭共に春屋の弟子なりしが春屋遷化して澤庵には一凍の弟子たり然るに萬江の弟子天祐紹果と玉室の弟子玉舟宗璠いまだ齡五十歳に満たざるを和尚となさしめたること一宗の法令に叛き法儀を破れりと紫野の一宗申立對決に及ゆる玉室江月澤庵追放と成玉室鬼界が島へ流刑澤庵は羽州上の山へ(領主土岐)被謫江月には大徳寺内に閉門なり江月には配所なきことは一宗の老僧なき故遠く追放せざる由なり三年の後御免の時玉室には老年にして海上の往來難儀のよし申上られ歸らず竟に島にて遷化澤庵には立歸られしを江戸へ召れ法儀を御尋にて公邊能當東海寺開基なり天正元癸酉年生但馬國出石三浦介義明末裔秋庭綱典子なり正保二乙酉年十二月十一日寂春秋七十

三

(紫巖譜略に玉室奥州棚倉とあり鬼界島とあるは愚説なり鹿が谷會合など一般ならず)
 (同十二) 乙亥十二月承命到江府寓于但馬守柳生宗矩之淺部之別業先玉室江月之
二老在江府
 (同十三) 丙子七月二日師及玉室江月於江城問宗門意旨十月歸洛云々到季冬歸東海寺正保二乙酉十二月十一日寅時書夢一字擲筆而化壽七十三歲)

廣尾光琳寺

一光琳寺今は麻布廣尾にあり初は麻布谷町の脇にあり盤桂和尚の開基なり和尚は播州の生れにて備前の三友寺の卜翁和尚の弟子にして妙心寺の派なり小僧の時より禪機有十七八歳の時長福寺に往て隱元禪師の會下にして下僧を勤め法意を尋問して隱元の答へ心に應せず故に之を捨て諸國を經歷して京へ出是より江戸に來り淺草の乞食の中へ入て修行す松浦鎮信の馬乘屋敷の外へ出て馬の口を乘直すこと毎日なり時に乞食の形にて蕪をかぶり馬責せし邊に立て其乘馬の乗方を笑ふ馬乘之を咎めたりしを其乘心を批判するに依て其意を感心し之を用人等傍輩に語る終に主人鎮信の耳に達す鎮信不

審に存られ又重て馬乗せ置て通り掛りに鎮信之を駕籠の内より見るに先年長崎にて隱元の會下にて見覺られたる若き出家の面色有と見又其通りに再遍見届使を以先年長崎にて隱元の會下にて對面有て其名は何と云と尋られしかば其通りに御座候と答ふるを以用人に申付翌日迎を遣し呼迎られけるに蕪着たる儘にて參り候に付先風呂へ入れ衣服を着替させ對面有て夫より鎮信の方に留置法を尋問斯懸意せらるゝに付谷町にて一字を建立し光琳寺と號す盤桂の一弟子は鎮信なり夫よりして京都へ上り法を説く諸宗にて心法を練たる僧徒來て法を聞き皆弟子と成る依て仙洞の叡聞に達し法義を説くゆゑ弘智廣才禪師と號を賜ふ京都にも寺を取立て直に弟子にあたへ本國播州網干へ來り寺を取立龍門寺と號し夫より備前へ來り師匠卜翁へ對面し三友寺にて百日說法す後網干にて遷化す

麻布善福寺

一善福寺麻布一本松の先雜色町の南に有西本願寺派にて院家地なり當地は眞言宗にて瑜伽の祈念する寺にて住持を了海と云親慈當國下向の時此寺に止

宿し住持と法談せり甚時依して夫より一向宗と成東國にての大寺の内にして是より本願寺門主關東下向の時は必此寺へ立寄らるゝなり

正覺院

一正覺院三田寺町に有元來福島左衛門大夫正則の院號なり元和五己未年六月安藝備後兩國沒收にて羽州由利にて四萬五千石賜ふ息備後守も相共に羽州へ移り備後守は無程病死し正則には寛永元年七月十三日彼地にて六十四歳にて病死せり江戸へ注進につき檢使として堀田勘左衛門到着の所に之を待うけず家人津田四郎兵衛が計ひにて火葬仕を以て配所領召上られ末子市之允へ三十石賜ふ故に火葬せし骨をば京都に登せ妙心寺にて葬り墓を收棺中て一字建立し正則の院號を以て其名に呼たり依て蘭秀和尚を開基とす是大龍和尚の弟子なり其後蘭秀和尚江戸へ下向し當地にても一字建立せり是此三田正覺院にて正則の墓も建たり妙心寺の派なり

泉岳寺

一泉岳寺當時は芝高細手の北續にして浮島の森と云

は此山の事なり其砌は麻布溜池の東の方の高みにて今の土岐家の屋敷地に有し由也橋場總泉寺愛宕下青松寺常寺曹洞の觸頭に於て江戸三ヶ寺と唱ふ開基口は常寺の玄光和尚閑居せる事は此人曹洞宗にては學才にして獨庵譚語の書も撰めり心越禪師和朝に渡海せられし時は濟家にて隱元禪師來朝し其派の尊者と崇敬せしめ曹洞派にては心越を長者とせん志し執計はせられしかども玄光が才力に不及を見劣捨たり是より本國河内へ隱蟄して經師村に住せりと

東禪寺

一東禪寺之高繩手の海岸にあり其始は溜池の東南の側岡にして其所に有之其右手麻布通りの坂を靈南坂と云は當地の開基を靈南和尚と申に依て皆人斯呼びたり妙心寺派の觸頭に於て三ヶ寺の内なり

宗房卿他情通

一勸修寺宰相宗房卿他情に通ず治承四年六月九日福原新都の事始と盛衰記に有り同書五條大納言邦綱卿賜周防國六月廿三日事始六月十日棟上と建らるることもあり又六月二日都を福原へ移され既に八月

に成平安の古郷口口隨て口行に見ゆ十一月山門の訴狀に付て入道人々の異見を問時新都を譽たるを聞て秦趙高が事を思ひ出して「鹿をさして馬と云ふ人ありければ鴨をも鷺と思ふなるへし」と勸修寺宰相宗房卿詠給ふは十一月廿日なり翌廿一日朝俄に京遷御沙汰あり都遷の後彼卿の一ツ會合の席に抑入道のさしも執し給へる福原の都なり諸人新都を褒しに宰相殿は何心おはしてか只一人謗給けるぞと問ければ宗房卿の給ひけるは君も臣も諸事に於て思ひ立時は心をゆるして人に問はず思煩ふ事は必ず人に問答すされば入道の心のはやる儘に都遷とて下り給ひたれども人の歎きも多く流石古郷に不及栖佗給ひたる折ふし山門の訴訟有人の言へかし都遷せんと思ふ心の内あらはなりと推量て斯は申たりとぞ云れけるゆゝしくかしこぞ思ひ申給ひたり

惺窩先生

一明壽院藤歛夫諱は肅冷泉三位爲純の子と云々貞の母は毛利河内守(八万石餘系不詳)秀頼が娘なり始め京極長門守高吉に嫁し宰相高次侍從高知を産む

高吉逝去して非藏人の方へ再嫁す此非藏人下冷泉家庶流の者也其方にて歛夫を産す故に京極高次高知共同腹の兄弟なり非藏人冷泉家の流なる故暫本家の看防せり始は僧と成て禪首座とて父横死し其息爲勝幼少に付一族の内より看防として此人を還俗して暫家を持て後本縁の爲勝に家を復し渡し夫より儒學者たり始て宋儒の性理學を開て朱子の新註を甘し講せり門人多く世世崇敬し惺窩先生と稱す其後頭に髮を一握程殘し其長きをたばね置たりと是頭を剃ると云へども父母の肉をそこなはざる儒道の志よりなり後洛の南久留巢野に居す大御所様所司代板倉伊州を以て罷出べく弟子どもにも扶助の爲に御合力米可賜との御事といへども不能出重て伊州自身參られ強く被申聞けれども不能出候に付弟子にて林道春被召出其後永非信濃守在城淀に御暇にて休息の内二男伊賀守十五歳なるを同道し先生の閑室へ立寄り時一間へ不入竹椽に侍して慇懃に手をつき一時餘り對談なりしに付伊賀守にも其内竹椽に手を突居たり甚威強き人なりと伊賀守物語せられしとなり理學此人にて道立詩賦を能

し和學に達せり明壽院と崇敬せらるゝことは始僧たる時相國寺の塔頭なる明壽院を持たる故の坊名なり父爲純の敵を討んと還俗し赤松氏の人を助とし讐敵を討取られしと云ふ説有り冷泉家爲純の息爲勝に歛夫より復し渡し爲勝爲將爲景と相續せり(爲純爲勝父子 天正六年四月於播州戦死爲純八男爲將于時幼若也故兄明壽院禪首座還俗而看坊其家去れば本文の説不審なり)爲景も此歛夫の子と云ふ野間三竹の家譜に三竹柳谷子常々惺窩先生が子藤爲景松永長頭丸が子昌三と屢會すと載らる是等にて其爲景は歛夫の子にして後年歛夫の分脈にして本家を繼しと見えたり元和五年九月十二日に卒す時に五十九歳なり世間に四書の道春點といふは惺窩の文義理を考門人に素讀を教へ傳られたる讀くせを道春に教られたるを道春直に點付板行に起したれば先生の句讀なり

良經公横死

一九條攝政兼實公の御男後京極攝政良經公建永元年三月横死なり是誰人の所爲なることを知らず此御方秀才にして歌を能し中納言定家が弟子たる所に

御歌は定家にまさり給ふと世に賞玩申ゆへ定家之を嫉み其頃は親鸞には法然の弟子にて九條殿へ常に参られ候故親鸞へ頼まれ天井に忍入て夜陰潜に害し申せりと世に云傳へたり(愚説採るべからず)後土御門院の時明應五年京極の家に在し日記叙覽に入べきよし勅諭に付差出され然るに皆此日記の中程に紙三枚を封じて封有し故此儀御尋有しかば先々代より斯の如く封印して子孫共に會て封を切て見るべからずと申傳へしに付如何やうの事にて斯の如くせしめ置しや存せぬよし勅答有之夫共に叙覽有たきよしなれば其儀は格別のこと、申故封印を切て叙覽の所に建永元年九條良經公を殺害申たること委書記し有り此事年久敷相知れざる所に其事慥成こと天眼に及しかば其分にして差置れ難きとの評議にて先祖□□が科を以て當時の正四位下少納言京極在散に死を賜ふ(唐橋在敷とすべし)在數明應五年正月七日於九條殿享被害年四十九)九條殿方にて殺害せらる依て其子在名も謫せられ家絶しかば此子孫在通後年召返され再京極の家を興す

赤座直陳

一赤座久兵衛直陳は織田信忠の御供申二條の御城にて明智日向守が爲に討死したる赤座七右衛門の嫡子にて後に大阪陣の時籠城したる赤座内膳が兄なり大岡より召出され越前の庄にて大祿を賜はる關ヶ原の時大谷刑部少輔が催促に出軍し北國征伐の列として夫より大谷に伴ひ美濃へ馳出で相共に關の藤川の臺に陣取九月十五日の合戦には脇坂中務少輔朽木河内守小川土佐守と相共に四人藤川を前に當て張軍し東軍に向ひ合と云へども松尾山に陣取たる筑前中納言秀秋の手を兼歴たり是秀秋には敵へ裏切の約有といふ風聞を以て大谷がしたる所なり案の如く秀秋には裏切せんと思へるよりして此四人の方へ軍使を馳て某關東方へ通達し裏切仕故各にも軍を出し關東方へ通達し軍忠あらば恩賞の儀よきに執成し申進すべくと云れたり脇坂は是より前關東方へ参るべしと申通し置たるを以て早速軍を進めしに付朽木も此誘引に付一同す小川は運を兩端に荷ふ心より同じく軍を出したりといへども忠戦なきゆへ本領安堵の後も公邊よろしから

中家督立すして其家潰れり赤座久兵衛には裏切本意にあらざるゆへ手勢を引連れ陣を引取夫より直に今庄の領地へ引上しが關ヶ原落去し味方退轉に付今庄を立去り加賀へ來て中納言利長を頼み隠れ居しが辭謚に及て利長祿を賜ひ家臣と成永原備後と改名し客分なり其後孫九郎家督の後土佐と改父以來連歌を嗜み土佐尤達人にして禁裏へも其名聞えしかば武藏鏡と云ふ題を賜り
一聲はむさし鏡かほとゝぎす

又夏の發句に
見渡せば夏こそきゆれ不二の雪
二句共に叙感有て鏡の紋付たる金紋紗のきれを賜ふ子孫今に持傳へり土佐後に入道し如閑と號す其子永原久兵衛後に左京と號す是より四代當時の左京なり

定家卿筆古今集

一駿州今川家に定家卿の古今集有是は三條西殿方に持傳へたるなり亂世の頃公家衆は見つぐべき人もなく方々へ御越有しに三條殿は今川に縁有故時々見繼有し禮として送られしなり(農民はなしなり)

探るべからず)武田信玄之を借りて返さず止置しが滅亡の後徳川殿御手に入公儀の御文庫に有しを元祿年中美濃守吉保に下し賜りしが一とせ彼家の焼失のせつ此書火災にかゝりて滅す惜むべし

石川五右衛門

一石川五右衛門と云者生國遠州濱松の侍なり始は眞田八郎と云ふ河内の石川郡の山内古庵と云ふ醫者と所縁あるを以て其家を頼み居り石川五右衛門と改號し終に強盜と成る文祿の末年捕られ釜炒の刑に行れたり時に三十七歳なり一郎と云ふ幼き子も相共に煮らる

石川や云々と辭世したり

大塚村怪異

一江戸大塚村今は御城より西北に續て家居の並なり此大塚の南の方の地低なる所を茗荷谷と呼ぶなり小日向の服部坂より登り先へ通る所にして小屋敷共の前を通り右の谷へ行此邊もおしなべて小身衆或は小寺のみにて物淋し寺地に右に付て通る所の左側に明き屋敷地にて三四百坪計の所畠の作り物もせず荒地なり稻富氏の人主たりと云へども屋敷

守の人らしき者にて爰におらず入口たる川の少し
 脇に道心者のやう成もの小屋がけの如くにして唯
 獨居りて出入の人終に見かけずいつの頃よりして
 有來るや屋敷の内に大なる石塔三ツ四ツありて垣
 根よりはるか高く見えたりすべて此屋敷の由緒知
 る人なし所がら一しほ物淋し夫に付て人通りもな
 き外面なれば夜に入ては曾て往來の人なき故此邊
 にあやしき物有といふより右の明屋敷に化物あり
 と沙汰すること年久し大野三太夫と云者小日向の
 方より大塚組屋敷の宿へ歸るとて日暮過に及びし
 かば此所を通るにいと物すこき折ふし先へ立て行
 く出家あり是こそ能き道連なりと足早に追付既に
 廿間計も隔つらんと思ひし時其出家の丈ヶ高く成
 事明き屋敷の垣根を越し大石塔の五輪の上より遙
 に見上る程に成り其門口迄行かと思ひしが見失ひ
 たり惣じて此邊怪敷こといも時々あり山下氏の人
 是も日暮に及し頃通りしに付道を急ぎ足もとへ蛙
 鳴出て飛行に連てそこ爰よりも出つれて足にまご
 はる半町計斯して道のさがりへ下りて溝端の草む
 らに蛙多く集りしが頓て東西に別れて一疋ツ、左

右より出て喰合たり喰負たる方より又一疋出る時
 向よりも又外の蛙出て喰合ふことなりはや夜にも
 入る故是を見捨て立歸りしが其跡たる所も知らず
 と物語しけるに付我等も去年其所にて蛙の其如く
 喰合たるを見たり其果には惣蛙兩方より一度にか
 かり喰合ふと語りし

小野通女

一 小野のおつうと云女は常陸水戸の城主武田常陸介
 信吉卿の家臣小野和泉と云ふ者の女なり其始關白
 秀次公の御家人鹽川志摩と云者の妻と成しが死別
 の後天樹院様大坂城へ御入興の時御介添に成て御
 供す尤秀才にして萬に器用なり然るを陽光院の女
 御新上東門院御入内の時御貫ひにあづかり參て供
 奉す其後御暇取しかば直に東福門院様へ招かれ相
 勤む後年江戸へ召され百人扶持二百兩の御合力を
 賜るかゝりし女なれば大御所様の御前へも以前よ
 り度々罷出しより尊影を書寫したきよし申上調た
 り渠が男子父と共に播州網干に有しが池田輝政姫
 路在城の時召出され祿を賜ふ鹽川喜太郎と云へり
 外に女子一人ありおつう内裏に仕へし時相伴て是

をも在仕せしむ將軍家上洛の時眞田内記供奉し逗
 留の内此女子と密に通じ夫より御暇取京都に置れ
 たり男子一人産たりおつう江戸にては春日の局と
 懇にして執成し多きを以て稻葉美濃守の吹擧にて
 眞田内記の胤の男子公儀へ召出されて三千石賜は
 り眞田勘解由と名乗たり此勘解由の男子後年本家
 の家督を相續す

新上東門院入内の節勤仕は非なり新上東門院は
 後陽成帝の國母なり此帝即位天正十四丙戌七月
 より秀頼臈中千姫君入興慶長八年癸卯七月廿八
 日なれど十八年目なり又奥に著はす所新上東門
 院侍女なりしが崩御以後秀頼臈中入興介添と見
 えたり此文段にては後光明院の女御ならでは年
 代不都合か

借内記の妾たる女には後年江戸へ參らるゝに付春
 日の局へ頼み入尾州御簾中御琴の師と成る尤琴の
 上手なり後尾州にて尼と成り淨閑と號すおつう小
 野の姓を殘置度に付才藝ある人にと志すより神子
 上典膳是を幸に所望故稻垣三左衛門と云人執持に
 て小野を貫ひ小野次郎右衛門と號すおつう學才あ

るを以て世に遊ぶ琴の組十二組の歌の文句を付る
 當時の琴の事は箏の事にて十三絃也唐土にて上古
 神農のはじめて桐の木を削り糸を繩にして絃とせ
 りと古書にも記せり是に黃帝の五音を調へて二十
 五絃の法立たり我朝にては神代天の香弓かゆみを立なら
 べ絃を鳴らして木々の合を打て安樂の聲を備ふと
 神書に見えたり其二十五絃の半なる十三絃の半琴
 を箏といふ宇多天皇の時石川色子と云ふ命婦筑紫
 の彦山にて唐人に逢琴の彈やうを習ひ得て天皇に
 傳へ奉る是今の十三絃の琴なり故に之を筑紫琴と
 云て其曲に用る所上古とは違ひ手曲甚精といへど
 も淫聲に便り有て後年其箏にのせて諷ふ章歌も次
 第に淫聲に溺れたり百年程以前琴の上手の公家衆
 西國へ貶せられし所にて半琴を求出し是にて覺居
 給ふ本傳の琴の譜を彈じ慰めるを善導寺に住せる
 法水といへる僧弟子となり學べり法水後江戸に來
 り諸家に往來して箏を彈す斯して還俗すと云夫よ
 りおつうが作りし十二組表裏と分て路梅枝心盡天
 下太平薄雪に朝雪上の七組薄衣桐壺の裏二組とな
 し此後四季の曲須磨の曲扇子の曲雲井の曲の四組

是を極樂として習はず夫より八橋檢校此等の半琴に手を引出し彌世に玩ぶ此警者始は寺尾檢校城可が下にて前の名を城談と云後山住勾當に任せしが上永檢校が下に屬して後八橋檢校と名のりし也此盲人半琴に達せし故多くの琴の秘曲を述作したりおつう又東福門院の仰を蒙り十二段の文句を述作す是淨瑠璃御前といふ女のことよりあみ立しゆる之を淨瑠璃と呼たる初なり戸田左門殿の抱座頭澤住檢校京にて意節を付たり小關勾當是を傳へて半琴に合す近江掾淨雲是を嗜て淨瑠璃太夫と成る彼れ始は銀冶の弟子仁藏と申者なり是を好で名人と成る筑後と云は其子なり肥前と申は其弟子なり

能太夫

一慶長元和の頃能の業に於ては金春太夫下間少進と世に賞玩す故に何方にても此二人を招き仕舞仰付らる一日兩人召れたるに少進立出で舞たるに一入今日も舞見事なり續て金春太夫立出るに何のふり會釋もなし老年のことなれば鬚髭も白毛まじりにて丈低く庵相に見えたり少進には西本願寺の坊官にて流石の人にて器量よく色白く勿体有て衣服も

きらびやかに其業能きを以ていかでか少進に及ぶべきと皆人思ひし前に其堪能成こと格別成事を感じたり是を名人と云べし寶生古將監を後世皆人賞美せしが其家は上掛りにして其頃の名人喜多七太夫も稽古して修行の功なれば業ましたり是等は上手といふべし元祿の頃の金春八郎も流石の者に其家の法を守り上手なり其頃或御方にて當時の太夫何れも能く致さるゝこと、御身の所存を承りたしと尋しかば尤其家にして觀世織部年若しといへども申分なしと云ふ寶生當時將監はと尋しかば今程世にもはやされ發向の太夫のことなれば何とも申がたしと答ふ金剛又兵衛はと問ければあれは蜘蛛にこそ候へと笑ひながら答へたり

淨瑠璃の始

一淨瑠璃の始りは後水尾院皇后東福門院の仰を以て小野のおつうと云女是を作る淨瑠璃御前と云事を十二段の文に仕立る則其名を淨瑠璃と呼ぶ其十二段の切あるを以て是を十二段と名付く其意節は京都におゐて澤角檢校ふしを付謠初たり

楠流軍學

一富田小右衛門某入道覺心は加賀利長卿出頭士大將淺井左馬介某與力富田某二男なり若年より左馬介近習に仕へ壯年にして生國を出て江府に至り太田攝津守資次右筆たり太平記流の軍學を嗜む(或謂楠流)後年土屋民部少輔利直に仕ふ渠が軍學世に鳴るを以て大小名來會の時必呼出され談話時を移し其上近世諸家勝敗善惡を問はる富田殆其答に當惑す關原御合戰の始末寺澤志摩守廣高(廣高存生富田は若年たるべし兵庫頭堅高慶長の頃に至まで在世なり)淺井左馬介其外古老輩見聞の趣連々聞置所を以て其仁に對して斟酌を加へて語る且信長公秀吉公事跡次で是を古戰噺に口謂彼家斷絶ゆへ流牢困窮す資財書籍等を賣替て後門弟北條安兵衛以三が方に潜居すること累年なり是利直主の氏族相摸守政直貞享二年中入道覺心を招て仕はんとすれども老衰多病に依て辭し息小右衛門某奉仕を乞ふ政直よつて祿を賜ふ軍學弟子數多あり就中松井孫太夫某(豫州宇和島伊達家十一)北條安兵衛以三(下谷組御徒)息小右衛門某蘊奥を極めり徳川家御代々武略甲越戰爭等又覺心語りつたふる所を引古

說尤多し北條以三弟の中横田幸右衛門布政(後入道號幸山)傳へ得る所古戰話一隅のみ蓋太平記流軍學淺井三右衛門成儀と相傳成儀始は大猷院様御徒衆なり走脱上覽毎度達者仕是より御取立にて兼て記録を好候段達上聞御書物奉行仰付られ其父は治太夫伊成と云母は足利將軍家の書役攝津守某老後出生の女なり淺井伊成に嫁して一男子を産む渠若年の時父伊成卒し漸く成長して三右衛門成儀と號す或時母語て曰土藏の梁上に半葛籠あり是古き書記ともなり我父攝津守より持傳ふ父は老衰我は女子なるゆへ口授一言もなし仍ていたづらに納置なりと云ふ成儀見て往々自得す世に云太平記流の軍學は成儀を以て權輿とす此書傳來の所以を其母粗語ると云へども年月姓名字號等を覺えず唯大がい左の如し

伯耆國小早川隆景家士某代々日蓮宗なり然る所其妻歸依の眞言僧を勸めて其夫を終に改宗せしめたり依之某の檀寺憤りて京都本寺へ訴ふ則二十一ヶ寺相談して使僧を以其旨を隆景へ告んとて辨舌廣才の僧を撰みぬよつて法華法印日定

(日蓮昇口法印無僧位但野寺村院稱法印歟)使僧
 せんと諸寺承引して則路用銀等を與ふ日定伯耆
 國に至て隆景放鷹の時節を待て其場に行逢ふ隆
 景是を見御僧は何國より何所へ行や日定其時件
 の事ども直訴す則居城へ伴ひて委細の事共聞届
 け裁許の前後逗留廿日に及ぶ事畢て暇を乞ひ其
 所を發す抑今度伯州下向の思願は名和伯耆守長
 年が子孫昌三と云者舊里に是有元弘建武以來舊
 説ども傳來の段聞及び懇望に依て尋當り逢んこ
 とを願ふに依て彼方此方尋ると云へども知る者
 なく空敷兩日を暮す三日め又宛所なく所々經廻
 り歩行く時に或人の曰く此田畠の先矢村と云あ
 り隱居体の老人居住すること久し其仁は知らず
 と云ふ日定則其道程一里計行所に半葛籠負ふて
 老人來る日定傍に立てば彼老人は何心なく其前
 を過ぎたがひに振返り見て相イみ終に近寄り昌
 三事を問ふ老人則伴て茅屋に入る是則老人が室
 なり日定爰に隨て懇を盡す老人感じ太平記理盡
 抄と云書を以て口授す依之數日を経る所老人泄
 瀉して重病發し病中ながら口授殘らず相濟む凡

二十日看病し臨終に及の節我則名和昌三なり理
 盡抄並古書ども授與ふと云て終に没す日定感涙
 袖を潤し葬送追福懇に執行ひ歸京す其後其妻攝
 津家に傳授せしむ或は内縁有と云ふ是非を知ら
 ずと云々
 足利將軍義輝公永祿八乙丑年御生害此年隆景三十
 一歳是より嚮日定伯州に至り又古代義昭公落去天
 正元癸酉年隆景二十九歳伯耆國は天正十年迄隆景
 領か
 明曆丁酉春江府大火有是をさげんとして淺井資財
 を運び轉ずる刻理盡抄第二卷途中におゐて取落し
 其家になし後年太平記綱目出版淺井成儀見て是は
 理盡抄二の巻を以て推理して書弘る處なりと物語
 の由(横田布政入道幸山承傳)

戲作外題鑑

安永四乙未年護國寺秩父開帳、去年大川橋掛、清水開帳、
 大福富突始二册 清經畫 板
 六水車智恵籠三册 同
 三人頑者直敵討三册 同
 源家小鳥丸三册 同
 鞠祭望疑腹鼓二册 同
 本朝世帯道具二册 同
 新兒女智恵海二册 同
 一休悟乳柑子三册 同
 和尚紙屑二册 同
 鉦しつせのかみくす 同
 名月吉原饅頭二册 同
 全盛吉原饅頭二册 同
 外善知鳥物語三册 同
 四十忠臣鼠穴藏二册 同
 七走遊機嫌はなし二册 同
 春遊機嫌はなし二册 同
 金々先生榮花夢二册 同
 此草紙大當りにて是より青本之趣向變化す
 高名太平記三册 吟雪畫 奥村

風流はなし龜二册 吟雪畫
 風流はなし鳥二册 同
 艶道富士袴二册 桂子作 清經畫
 風流瀨川咄二册 同
 二代目瀨川菊之丞追善之戲作 山下町いせ次
 風流物者附二册 萬代矢口わたし二册
 足柄山子持山姥 清經畫
 初戀松竹梅二册 同
 義貞智仁勇二册 同
 光明千矢前二册 清滿畫
 富士淺間物語五册 清經畫
 佐藤鈴木 對之兄弟天晴梅武士三册 清經畫
 多武峯爪黒之笛三册 吟雪畫
 木に竹二册 出せやつこ 西村
 若緑色會我二册 桂子作 清經畫
 晴宗有明琵琶二册 吟雪畫 奥村
 安永五丙申年自子親音開帳、はしが

高慢齋行脚日記三冊 春町書作 △
 唐倭書傳鑑三冊 同
 風流上下の番附二冊 清經書
 船軍源氏勝鬨三冊
 本朝盆踊濫觴三冊
 酒花鳥籠蓮坊二冊
 新撰奥州古戦物語三冊
 撰新撰奥州古戦物語三冊
 浮世風便女敵討三冊 同
 今吉原たん歌二冊
 後家氣質 春町書作いせ次 △
 小兒石部金吉二冊
 うどん化物大江山二冊 春町書作
 そげ 同
 古今其返報怪談二冊 同
 鱗形屋草双紙目錄之外出版之事 同
 天狗初庚申二冊 川柳榮
 書集津盛噺二冊 政美書
 夜明茶呑咄二冊 清經書
 初笑福徳はなし二冊 同
 篠塚忠臣矢口渡三冊 同
 五郎 清満書
 佐夜山中我身鐘二冊 清經書

おとしばなし二冊
 菅原傳授手習鑑五冊 清經書
 風流化物鳴神二冊 富川吟雪書 橋三丁目 伊せ幸
 風流友世車二冊 東西南北作清經書
 流桃太郎手柄咄三冊 同
 御伽百物語三冊 同
 豊年錢塚之由來二冊 桂子作
 後三年松島八景三冊 筆耕書 同
 名玉青海浪二冊 鼎我作 同
 江戸自慢からくり屏風二冊 同
 補木會海道从義仲三冊 同
 同往古桃と酒雀道成寺二冊 同
 新田系圖梅二冊 吟雪書 同
 此書已前五冊物なりしを四五の巻二冊を上下となし外題等改め出せし物也上るりの相摸入道千足犬
 今様女景清三冊 桂子作 清經書 鶴喜
 京土産五色唐織二冊 同
 石川五右衛門物語二冊 吟雪書 奥村

安永六丁酉年湯鳴淺草開帳、於竹大目開帳
 三升増鱗祖三冊 春町書作
 女嫌變豆男二冊 同
 珍献立會我三冊 氣三次作 春町書
 鼻峯高慢男二冊 春町書作
 桃太郎後日噺二冊 氣三次作 春町書
 南陀羅法師柿種二冊 同
 花見歸鳴呼怪哉二冊 錦鱗作 春町書
 親敵討腹鼓二冊 春町書作
 下總國妙見寺月星千葉功三冊 鈴木吉洛作春町書
 童子金父母三冊 清經書
 養育 清經書
 懐胎 清經書
 用心壽春袋 同
 離芭蕉花 同
 異名上總七兵衛 清満書
 附惡 同
 手鞠歌色模様三人娘 清長書 奥村
 日待此頃背語 同
 猿利考浮世咄 同
 金平娘外題不知 同
 草浦前戀の弓張月 清經書

敵討鳴呼孝哉二冊 清經書
 外題殺人敵討垣衣摺と云再板
 祝昆布若を松前二冊 同
 靜舞末廣源氏二冊 清長書
 三徳源家長久三冊
 三保狸膏藥二冊
 持遊太平記
 扱茂其後白髮公時二冊 柳川桂子作清經書 つるや
 伊東箱優美源氏鎧雛形三冊
 北條箱頼朝七騎落三冊
 後日記 往古猿之仇討三冊
 八百屋戀櫻操芝居 清經書
 甲子待座舖狂言三冊 同
 太平出世鉢木三冊 桂子作 清經書 いせ次
 後日菅原鑑三冊 同
 桃太郎かんの鳥三冊 吟雪書 西村
 狐馬出世壽三冊
 四天王化物退治二冊
 紅皿欠皿往古噺 新撰言葉二冊

同雨夜友二册
新撰なぞ盡し一册
板元不知

相州白旗社
子寶勇子のみばへ三册

絹川堤清田の鎧三册

朝日山木曾棧三册

四天王勇力傳二册

歸花十八公の英

観音三寶利生初竹

淺草觀世音千五百年に相成開帳之節見世物に出し

ごんだれいほう大當り其外當時流行の賣藥うり菓

子うり三つ子出世の事など取交へ戲作せしなり

於竹大日利生記

當年芝愛宕山境内におゐて出羽國湯殿山黄金堂玄

良坊佐久間お竹大日如來開帳其節の戲作也

糸櫻本町育

淨るり太夫人形遣に連名不殘

同
是も初幕淺草之場より大切小石川迄二册物也

新補
板桃太郎一册袋入

七曲舎云袋入の始なるべし藍摺表紙五丁紫紙綴窪

田士平澤喜三三初稿狂名千柄岡持俗稱平角

安永七戊戌年香光寺開帳、鬼娘出、野嶋開帳

三幅對紫曾我三册

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

細見板元

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

板元不知

七曲舎案に京傳十五歳にて作名譽者未詳追可考三

御本傳來記二册

四天王男傳二册

筆累絹川堤

化物箱根先二册

名代干菓子山殿三册

雷臍喰金二册

掘出天保皮三册

神田興吉一代噺三册

敵討目貫獅子

吉原藝者曾我

其數々酒湊三册

長右衛門桂川嫌新二册

大黒目出度春二册

七ッめ人似小真似

薄化粧七人美女二册

名玉里人談

戀歌於万紅二册

豆男榮花春

鶴喜

清長書

清經書

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

大豆之助松茸賣親方三册

通人為眞似二册

青樓吉原はなし二册

入道歡樂之日記

新補
落シ梅の惠顔二册

同
怪談夜行三册

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

墨蝶亭

可立作

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

丸小

岩戸

細見板元

岩戸

淺草茅町

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

岩戸

是にならふて著述す
 虚言彌二郎傾城誠三册 通笑作 清長書 奥村
 其數々酒の癖三册 同
 かけねなし正直斬三册 同
 大通人穴扒三册 同
 かごめく籠中鳥三册 同
 桃太郎元服姿二册 同
 日照雨狐之嫁入二册 同
 粟津原旭縁起那須野傳三册 同
 新吉原 昔扇金平骨二册 桂子作 清經書 鶴屋
 卯花重與州合戦三册 同
 鳴呼勇四人與市三册 同
 右三部は黒本外題直し
 名取菊黄白長者三册 政演書 西村
 仇競夢浮橋二册 同
 新内節を草ざうしにせしは是を初とする歟
 東都見物左衛門二册 清經書
 東郷天童若神子三册 同
 朝顔姫物語 同
 蟻通之本地三册 同

隅田川梅若物語三册 同
 右四部古板の直し
 御物好薄雪染三册 吳増左作 清經書 いせ次
 傾城常陸 藝者於照浮世審判官三册 同
 初夢富士高根二册 同
 大中黒名香勝凱 清經書
 教訓譬幸二册
 いろは短歌一册
 彈的東風俗三册 文溪堂作 清經書
 白拍子於豊の傳洒落本に二板草双紙に二板あり大に行はれしものと見ゆ
 曲輪雀大通先生二册 岩戸
 七福神親方三册
 さんだ金平異國巡り三册 吳増左作 清經書
 敵討鞍馬天狗三册 文溪堂作 清經書
 怪談豆人形二册 同
 毬唄雑御山三册 同
 廓晰晦日月三册
 洒落本の名作契情虎之巻を草双紙に出せし初め也 此後追々出版

廓花扇之觀世水三册 喜三二作 政演書 萬重
 袋入是翌年運開扇子花と表題して出す
 心の鬼 蓬萊山人龜遊作 湖龍齋書
 三歳繰珠數暫袋入 同
 七曲舎云木場白猿追善の戯作 政演書風名不出
 いさちよんく二册 同
 安永九庚子年八月洪水、祐天寺開帳、金銀星出、女燈籠變
 諸事八木の飯三册 通笑作 奥村
 津以曾無弟甚六三册 同
 近頃島巡三册 同
 親父布子為握三册 同
 珍説女天狗二册 清長書
 浦嶋二度目の龍宮二册 同
 太郎二度目の龍宮二册 同
 憎口返答返袋入 同
 野黄之穴扒袋入 同
 一生徳兵衛三の傳三册 同
 山谷通伏猪の床三册 同
 本の能見世物三册 同

今様喜還城二册
 千秋樂風之嫁入二册
 艶模様曾我雛形三册
 扇屋要女 傘屋六郎兵衛米饅頭之始三册 政演書 鶴喜
 娘敵討古郷錦三册 同
 洒落模様飛羽衣三册 同
 菓物見立御世話三册 同
 顔而知勘善懲惡三册 同
 夏祭其翌年三册 同
 豊芥云此六番作者の名不知書工政演書作可成
 日東國三曲之鼎二册 同
 豊芥云十寸見河東竹本春太夫富本豊志太夫二代此 山下町
 三太夫を吳魏蜀に擬して戯作す 政演書 いせ次
 遊人三幅對二册
 御子兵衛 焼餅晰二册
 笑談於躰茶二册 躰下邊人作政演書
 大通其面影二册 常磐松作 清長書
 鎌倉山紅葉浮名三册 文溪堂作
 頼作時雨月三册 清長書 西興

通畧三極忠三册 <small>即年歟</small>	四國子作 <small>四方屋本 太郎作</small>	葛屋
虚言八百萬八傳三册		
威氣千代牟物語	王子風車作政演書	
夜野中狐物二册	政演書	
通者云此事三册	喜三二作	倉本屋
龍都四國の噂三册		
<small>伊達見立蓬萊三册 摸機</small>		
口合咄し目貫	<small>物置齋 於連作</small>	西興
銀世界豊年鉢木三册	<small>門牛齋 林童齋</small>	
東御江戸の花三册	清長書	
扱化狐通人二册		
按に扱化狐夜咄同書歟		
振袖近江八景三册		
<small>彈手空音本調子三册 餘多</small>		
通人三極志一册		
大通一寸廓茶番二册		
飛間遠矢口噂一册		
藝者呼子鳥一册		
<small>白井齋 橋岡長兵衛</small> ひよく塚一册		

十二支鼠桃太郎二册	文溪堂 鼎我作	北尾三 二郎齋	岩戸
扱化狐夜咄二册	女唄イ 少振堂作		
餅腹中能同志二册	可笑作	清長書	
<small>袖天和尙絹川物語三册 念佛功力絹川物語三册</small>			
此書目黒祐天寺開帳に付著述せしと見えたり此年			
板			
桃太郎寶噺三册	北尾門人 三二郎齋	三二郎齋	村田
<small>落茶香友達三册</small>			
<small>補</small> 青樓三浦團五册			
新狂言梅姿三册			
<small>はやりうた</small> 金々金平二册			
大におせわ			
上の一表紙裏に深川根元四季のうた所きにおせわ			
斯ありて流行唄を出す			
鐘入七人化粧三册	喜三二作		山本来 倉
此本大當りにて翌年漣返柳の黒髪と外題を改青本			
三册物とす尤此類多し			
藝者虎之卷二册	松泉堂作	北川豊 章齋	西興
呼子鳥同書にや辨天於豊於富の噂ばなし也書工北			
川豊章は北川歌麿の師なるべし洒落本をも書く			

化物二世物語二册 <small>袋入</small>	志水燕 十作	歌麿書	
身貌大神畧縁記			
世噂花師匠二册			
<small>補</small> 落咄福笑袋入			
大通間違會我	喜三二作	重政書 <small>今年初齋</small>	葛重
七曲舎云此年道具屋通笑初稿			
安永十辛丑年天明改元、三社祭			
大違寶船三册	芝全交作	重政書	鶴喜
<small>ふじや</small> 煙籠蓑麥屋真木三册	同	政演書	
淺間や煙籠蓑麥屋真木三册	同	重政書	
當世大通佛開帳三册	同	同	
通一聲女暫三册	同	同	
<small>雀</small> 敵討冷水灰毛猫二册	可笑作	清長書	いせ次
交古世昔噺二册			
通増安宅關二册			
鬼の子寶三册			
七笑顔當世姿三册		政演書	
うんつく太郎左衛門咄三册	同	同	
敵討魚名劔	同	同	

田鼠鴉の白拍子二册			
<small>化而鴉</small> の白拍子二册			
榮花程五十年見徳一炊夢三册喜三二作	同		葛重
其後瓢様物二册	風車作	政演書	
<small>息子</small> 妙藥万金丹二册			
不慮世之助噺三册	龜遊女作	清長書	
漣返柳黒髪三册	喜三二作	重政書	
四通光運開扇子花三册	同	政演書	
右二部再板			
初夢寶山吹色三册	可笑作	政美書	岩戸屋
敵討駿河花三册	同		
化物世繼鉢木三册	可笑作	清長書	
<small>ほかに</small> 極通人由來二册	同	同	
福夢想大黒銀三册			
東都大津名物	可笑作	政演書	
桃太郎一代記五册		政美書	村田
目出たし粉や鼠			
振袖江戸紫三册			
縁組連理鮎三册			
おとし菊壽盃三册			
ばなし菊壽盃三册			
突渡最惠來榮三册			奥村

間遠月夜鍋二册
不意く御代之寶三册

通笑作

鳥行水諺草三册

かき蟹牛房狭多三册
内にか蟹牛房狭多三册
化物鼻が挫二册

松村

本姓有難通の一字二册
異出見世吉原三册

南陀伽
紫蘭作
同

南州遊客古事附太平記三册同

清長書

大通狛の嫁入二册

女郎買糠味噌汁三册
但もちは餅屋三册

可笑作
清長書

西村

朝比奈唐子遊三册

豊福毛生太郎月三册
古實家七加減三册

可笑作
清長書

べにざら奥州はなし三册
かげざら奥州はなし三册
おめで古呂利山樹味噌二册
化物箱入娘

可笑作
清長書

年始御禮帳歳旦狂歌四方集
稗史の作者益並び出て滑稽を競ふ全交可笑紫蘭等

其名高し年代記に草双紙彌しやれる事を第一とす
當世風体此時より初ると云又今年四方山人草双紙
評判記を著し菊壽草と云ふ草双紙はおとなの見る
ものと成たりと云しは此時の事也袋入の双紙の名
を得たるを翌年の春青本に直して出す事初り柳の
黒髪は去年袋入の鐘入七人化粧也此類數多あり清
長當世の女風俗に妙を得たり世繼鉢木に猫の女に
化し處半面女半面猫に畫し趣尙妙なり後世の變化
物の圖に種々巧みをなす濫觴と云べし

天明二千寅年天の川辨天開帳、淺草開帳、敷枕流行

金は涌物壬の歳三册

全交作
重政書

鎌倉通臣傳二册

魚佛作
三十二才
春朗書
後改北齋

風雷神天狗之落種

全交作
政美書

勝手御存商賣物

京傳書作

飯嫌女はごふたか

古風作
政美書

息子株毛毘冠

通笑作
奥村

長生虎之卷三册
阿部清兵衛見通占三册

煙草の響ことば二册

通笑作
政演書

御代参丑の時参二册

舌舌雀三の切

通笑作
清長書

猫の嫁入

喜三二作
重政書

景清百人一首二册

春町書作
重政書

雛形いきまな顔

喜三二作
重政書

恒例間違會我三册

喜三二作
重政書

御仕着

春町書作
重政書

我頼人の正直

喜三二門人
宇三三太作
重政書

龍宮方便
網大慈悲の換玉

紫蘭作
政演書

淺草列生
花か見度くは吉野由來

紫蘭作
政演書

四天王大通仕立二册

松村

教訓蚊の咒

紫蘭作

思ひ付たり五郎兵衛商賣

紫蘭作

替つたり

通人寶船
岡崎女郎衆
はんじ物やら出盡紋所
地口やら出盡紋所

岸田杜芳作政演書

市川三升圓

同
國信書

たゞき打鼻の上野三册

同
政美書

化物通人寢言

同
政美書

天竺徳兵衛花珍しき奴茶屋

七福神大通傳二册

可笑作
政演書

敵討染分手綱

同

通風伊勢物語三册

尚古堂
春満作
清長書
西村

地獄の沙汰金次第

可笑作
清長書

藝者五人娘

可笑作
清長書

樂みはとんだ好き三册

豊里舟作
同

敵討梅と櫻三册

豊里舟作
同

助六利生ばなし

同

化物會我物語

政美書

名に響鐘の龍頭

政美書

隅田川土手の青柳

政美書

下戸上戸いろは短歌

政美書

おかし咄福笑玉手箱

政美書

祝升福壽相三册

春町作
政演書
カヤ丁二
岩月源八

石千屋繁昌三册

可笑作
重政書

昔咄とんだ桃太郎三册

同
清長書

珍説雷の婚禮二册

同
重政書

嘘から出町人男氣

同
重政書

蜀魂三津さつご

元祖三津五郎追善

豆男江戸見物袋入

道楽にわか出のたんき來袋入

世界早出

通笑作 清長畫

豐里舟作 清長畫

西村

今年も四方山人評判記岡目八目を著す草双紙の評判記此兩年に限るか外に見當らず京傳戯作の御存知商賣物に初めて畫作の名を題し文化の末まで四十餘年間妙作多し實に稗史作者中の一人と稱すべし俄の誕生に投牌の眞圖あり翌年に出たる毛通人又後に京傳作むだかるた其餘の本にも投牌賭博の圖所々に見へたり此頃はかゝる事も憚らず畫さしか寛政の初よりは憚りて畫き出さぬ事となりたり亦稗史の寓言は勸善懲惡の一端にして何事をか説き何事をか畫ざらんや享和已後に敵打の本出てよき巻毎に人を殺し火を放ち種々の慘毒の體を極めたり人を殺し火を放つは刑の大なる者なり投牌賭博は刑の小なるもの也後世の稗史刑の大なるを憚らずして刑の小なるを憚る事理にたがふといふべき歟

天明二癸卯年淺草燒、淺草開帳、通人榮

通言神代卷

鶴の者の雄

茶羅の毛通人

混雜武者愚者咄

讀と歌通の一字

仇名草伊達を下谷

惡拔正直會我三册

金山寺大黒傳記二册

姿見淺茅原二册

下總國八幡不知三册

變名用文章二册

客坊者寐取二册

化物山加羅佐登二册

通春歲旦開三册

三外三外能時よき花升よき二册

仲の町畫夢見草二册

新錢戲樂通寶二册

放蕩日本多右衛門三册

春町畫作

全交作

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

鶴屋

敵討三味線の由來三册

二枚外題

昔時通神

當時通神

誤た大和の切

廓の馬鹿村むだ字盡

猿蟹をい昔噺

古通うしろ多鷹取帳

再

間違狐の女郎買

世中狐物再刻

立歸猿人真似

本所二十四孝

牡丹餅棚有

大食壽の爲

能息子内が榮

千里走虎子ほしい

七夕姫戀玉章

現金猿が餅

願ほごき小豆餅

縦筒放唐の噺三册

南仙笑

楚瀟人作

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

清長畫

重政畫

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

萬重

重政畫

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

富士筑波二人孝行

御先僻下手横好

天の川

吾妻花妓女鑑

さそく三右衛門

新作今年咄三册

おとし咄玉の春

飛田高慢噺

鐘は上野歟

通人寶盡

化物中間破

兄弟大通榮二册

今開花の御帳二册

舞草紙曙三册

髮手木通人藏三册

三ヶ通金持容氣三册

寶船福正夢袋入

節季夜行袋入

龜屋萬歳浦嶋袋入

新例矢口渡袋入

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

重政畫

政美畫

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

村田

西村

岩戸

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

西村

年中故事附録發入	芝全交作	重政書	鶴屋
變人吉原傳授仕習鑑	可笑作	清長書	
紙屑身上噺發入	全交作	政演書	
通人いろは短歌發入	艶美作	同	
家内手本町人藏發入	業平艶美作	同	
菅原神祇再評判二冊	通笑作	天明二年	
尾上梅幸	同	奧村	
家傳壽命藥發入	同	清長書	
ついで金持會我發入	同	春常書	
十二支大通話二冊	金中齋作	春常書	
楚滿人敵討を作る此年に始る文化の頃の敵打の種史の嚆矢といふべし鷹取帳を年代記に喜三三の作とするは誤なり又万八傳をも喜三三とするは誤也年代記誤り多し前青本の吟雪と房信と別人とす又湖龍齋青本を畫かすと云戌年松茸賣の畫は湖龍也春常春潮も往々青本に畫あり	四方山人作	重政書	西村
天明四甲辰年關東飢饉	同	歌丸書	
料理缺立頂邊香有			
返々目出鯛春參			
能魂膽氣	四方山人作	春潮書	
御無文字片香噺	新杜作	政美書	
千歳御舟の吉例	通笑作	政美書	
もふく怖噺	京傳作		
天慶和句文	同		
不案配即席料理	同		
閨羅三茶替	全交作	重政書	
親動性桃太郎	同	清長書	
人不知思染井	同	黒齋作	
吉備能日本智恵	喜三三作	重政書	萬重
二枚外題	太平記万八講釋	萬象亭作	歌丸書
夫從以來記	漢國此奴和日本	四方山人作	政美書
夫は本歌	是は狂歌	萬載集着	微來歷
大千世界牆外	三和作	重政書	
龜遊書双紙	龜遊作		
梶原二度の賭	四方山人作	歌丸書	
再見			
卯年源平總勘定外題直し			
萬象亭戲作濫觴	萬象作	政美書	伊勢治

狂言好野暮大名	杜芳作	同	
八橋調能流	楚滿人作		
跡目論噺實録	杜芳作	政演書	
全盛大通記	同	同	伊勢治
物御家崑松明	幾智茂内作	春朗書	岩戸
野會喜伽羅久里	春町畫作		
卯會我實同姉妹			
吉原大通會			
混雜不通太傳記	常丸作		
夜が晝星の世界	幾智茂内作		
化物七段目	通笑作		
正説河童咒	同	政美書	松村
諸事無世話會我	同	政美書	
運開扇之花香		春朗書	
鎌行燒飯由來			
親玉燒飯由來			
江戸花名畫譽			
新田通戰記	紀定丸作	歌丸書	
忠臣藏十二段目	通笑作	春英書	
御物好茶臼藝	同	同	
大昔野人時分	同	政美書	奧村
鹿相千万家輕業	同		
一ツ星大福長者	半片作	春英書	
骨髓芝居好	通笑作	政美書	
人面疔膝共談合	邦杏李作		鱗形
當世諺問答			
鞍馬天狗三略卷			
本朝遊入始			
石出雲皿屋敷			
桃太郎再駈			
其昔龍神噺			
金平一の富			
新作落咄笑上戸			
紅葉の雛形			
遊君			
世界是男度比女			
野暮大臣南郭遊			
花都末廣扇			
花春出世十二支			
咸陽宮通約束			
萬象亭一に竹杖爲輕と號す以來記を著して大に名あり年代記に云萬象亭の作おかしみをおもにとる	無中點作	春道書	伊勢幸
	むだ書好部作	同	

或人云万象亭は古風來山人の門人也戯作の初りに書出せる淨るりは風來の作也とぞ文化の初め頃に京傳が校合して上梓せる近道太平記是なり唐來三和此年より出る寛政の中頃迄年々二三部づつ著作數多からざれども妙作多しきるの根から金のなるき廻文の外題世に名高し袋入の本此頃にて止む是より後の袋入は其年青本の上本を先袋入にして出し一月程立て直に青本にして出すことなれり

南角廊中丁子袋入	京傳作	鶴屋
全盛	雀千聲作	春道畫
夫は楠木太平記袋入	喜三二作	春町畫
是は杉	竹杖爲輕作	卯板
長生見度記三冊	鍋町	寅板
嘘無誠一卷袋入	四方作	春童畫
夫は楠木無益無委題記袋入	四方作	政美畫
是は嘘木	飯盛作	春林畫
大江山大通山人袋入	同	同板
同	同	同
壽鹽商婚禮二冊	同	同
櫻草野邊節袋入	同	同

四方山人の作此二年の内に二三部を見るのみ

天明五乙巳年嵯峨開帳、野嶋開帳	喜三二作	萬重
銷入道佃沖袋入	京傳作	同
狭中俠惡言絞骨袋入	同	同
八被般若角文字袋入	全交作	政演畫
御料理大悲千録本袋入	初作	政美畫
御知而已	眞顔作	政演畫
涎線當字之傳書袋入	爲輕作	同
千崎亮鐵炮挑灯具羅袋入	同	同
早野亮鐵炮挑灯具羅袋入	同	同
假名手本忠臣藏	鶴志藝作	松村
馬鹿那水犬傳二冊	里山作	同
大やまご智恵の親玉	里爲作	同
三國一大通の本地	同畫作	同
八代目桃太郎	通笑作	清長畫
飲中八人前	雀春滿作	政美畫
浦山太郎兵衛龍宮の走	二本坊作	政美畫
可富見得の夢	同	西村
金持容氣	同	同
髮手本通人藏	同	同

長き日恵方道	仲貫序	政美畫
出世太平記五冊	同	同
生徳宇助壽御夢想妙藥三冊	三蝶作	いせ治
兒徳夢助壽御夢想妙藥三冊	三蝶作	同
留守居大通其見乎有難山二冊	飛田琴太作	同
家老大藏其見乎有難山二冊	飛田琴太作	同
百鬼夜行化物語	同	同
きつい嘘島物語	練山人	旭光畫
星月夜坊主の道行	信齋作	同
千秋樂下司の噺	同	同
二度おぼこ堀出し物	通笑作	春英畫
通し駕籠奢判官	同	重政畫
手鞠歌古事來歴	同	政美畫
無物喰狐聲入	同	春英畫
怨念宇治の螢火	同	同
匂鬢緑香	京傳作	春朗畫
馬鹿文盲圖彙	全交作	重政畫
間合嘘つき會我	飯橋作	清長畫
おつなご	二水山人作	柳郊畫
賣たり買たりおやごうせふ	勝花	同
親譲り鼻の高名	同	春朗畫

鎌倉山女相撲濫觴三冊	喜魚芳作	西村
故事附むだ物語	夢中夢助作	柳郊畫
人真似道成寺	鳴瀧作	政美畫
落咄新米太鼓持	同	同
金太郎むかし〜	嘶問屋袋入	眞顔ノコト
桃太郎むかし〜	嘶問屋袋入	眞顔ノコト
流行七福參三冊	四方	春湖畫
嘘皮初音鼓一冊	好町作	同
嘘月會我の兄弟が工藤に對面の條は當世の人情權	貴に阿諛するさまを寫せりとぞ近世の人情にもか	る事有しといふは誠にや知らず又下巻に娼家の
厨房の様を寫せし密書あり此後に豊國國貞杯かゝ	る圖を巧に寫せども清長此頃既に先鞭を畫きたり	七曲舎云
此事元祖喜三三終歟春町の友にて名人也再考天明	八年卒す歸遊女改二代目喜三三	天明六丙午年湯島火、護國寺開帳
七福神伊達の船遊	万象作	政美畫
景清塔の寐	同	政演畫
同	同	鶴屋

御富興行會我	山東鷄告作重政書	四人結律儀尼三冊	榎雨露住作政美書
兩國信多染	同 政演書	二天作二遣一十	通笑作 春朗書
道笑雙六	芝甘交作 清長書	通人の外仙人通	同 重政書
警與見た細身の御太刀	飯橋作 政美書	幾千代廿四五	同 同
新建立天道大福帳三冊	喜三二作	高砂屋尾上の傘	同 半片作
忠臣蔵去程扱其後三冊	唐來三和作政美書	太印天上見物	白雪紅作 春朗書
夢物語	山東京傳作	一ツ星大福長者外題直し	郡馬亭書 三部別
江戸春一夜千兩三冊	同	蛇腹紋腹の仲町	三和作 政演書 寛政板
悪七變目景清二冊	同	我家樂鎌倉山	雀千聲作 蘭徳書
鳩八幡豆兼徳利二冊	万葉亭好町書作	通町お江戸の鼻筋	同 通笑作
通言武者揃三冊	芝全交作 重政書	積孝雪振袖	同 同
平假名盛通記	杜芳作 三蝶書	片言指南所	同 同
昔々相生の松	三蝶書作	心鞭走生孫三冊	同 同
毒化草摸紋化話	同	御承知猫與杓子二冊	同 同
大江山二期の榮	飛田翠太作三蝶書	無據五人道行三冊	同 同
紺屋話百物語	三蝶書作	大笑止よなけの鐘入	万象作 政美書
腹中掃除五臟夢三冊	同	嘘實説故里歸	同 同
前々太平記	自惚黄山人作	二板巻中書甚古再板外題直しならん	四方山人作政美書
大々太平記	芝甘交作	手練偽無袋入	京傳作
敵討浮木龜山五冊	藤羅縮作	三階圖繪袋入	同
化物一代記五冊	清長書		同

大佛左 <small>拾</small> 茶表紙	白山人作	寛政板	江戸生浮氣の蒲燒	京傳作	巳年改
總角繪二印籠袋入	三蝶書作	いせ二	きるなの根から金の成木三冊三和作	同	同
教訓持病癖袋入	通笑作	春英書	正札附息子容氣	同	同
無束話親玉袋入	万象作	豊國書	元利やすり鋸商ひ二冊	好町作	千代女書 未
天道大福帳に造物者をさして天道様と名付其形を			長者のまゝくわふ	同	同
日輪の淨衣したる姿に書き出せしより後の稗史み			書集芥の川々	三和作	道磨書 同
な是による早染草も是に本づく是より稗史教訓を			面白不背御年玉二冊	万象作	柳郊書 同
専とすることゝなれり年代記に草双紙段々利屈に			芝全交智恵の程	全交作	政演書
落ると云是也			日本一阿房の鑑	好町作	同
天明七丁未年川々普請、米高直			三筋立客の生上田	京傳書作	同
茶歌舞伎茶の目傘三冊	全交作	政美書	親分御目出太平樂三冊	杜芳作	政美書
艶男彼でも爰でも三冊	万象作	清長書	色男十人で三文三冊	杜芳作	同
其所 此所	甘交作	政美書	通奈物那梨三冊	同	同
現金青本通三冊	万象作	政美書	古渡日記帳二冊	楚滿人作	同
嘶錦書從長崎強飯三冊	萬一齋	豊國書	出世蜜茶太平記	春町作	政美書
夫は楠木 太平記一冊	雀千聲作	春道書	今昔万歳の島臺五冊	虚空山人作龍向齋書	同
是は朽木	万理作	政演書	今渡唐織會我	杜芳作	政演書
嶋臺眼正月	喜三二作	重政書	古道具穴掃除三冊	井久治茂内作	同
龜山人家の化物二冊	同	行廣書	假名手本通人藏三冊		
鬼ヶ窟大通嘶	同	巳年分改	昔稚種軍談四冊		

百文二朱むだかるた三冊	京傳書作	榎本
戀種是氣儘作種二冊	同	
三千年になるてふ蜘蛛二冊同		
はて嫌ひ息子の好み三冊		
世の中諸事天文三冊	堂禮作	政演書
是入御喰争三冊	杜芳作	政美書
是入御喰争三冊		西宮
新作 徳治傳二冊		泉有昌書
落咄 徳治傳二冊		鶴屋
阿房者寐待袋入	爲輕作	
陰徳兩方吉事計袋入	万象作	豊國書
同	万龜作	同
作習酒佐字袋入	同	同
同 今年長崎強飯改板	万信作	同
無束話親玉袋入	同	午先板〇
同	おとし咄袋入	三陀羅作 法師作
同		萬屋
家の化物に喜三三が肖像重政が筆真に逼といふべし稗史中作者の小傳に擬するもの春町が其返報化物語に初り芝全交智恵程万象亭戲作始京傳の浮世の酔醒一九戲作の種本其餘猶種々あるべし		
七曲舎云		
此頃より袋入表紙茶色となる此前は藍摺の模様あり		
天明八戊申年改革小人鳴出、遊屋一件、鋪多取、十七屋一件、復讐後祭禮三冊	京傳作	鶴屋
手本 眞字 義士之筆力三冊	同	
天怪着到帳二冊		虚空山人作
大々太平記五冊 先二出 同書歟		
やれ出た 龜子出世二冊		
それ出た 龜子出世二冊		
齡長尺桃色壽主二冊	甲龜作	榎本
今日現金湯起請二冊	山東鶏告作	
妹退治二冊	新好作	春英書
小倉山時雨珍説二冊	京傳作	
仁田富士之人穴見物三冊	同	
文武二道万石通三冊	龜山人作喜三三ノコト也	
將門時代世話二挺鼓三冊	京傳作	
秀頼時代世話二挺鼓三冊	京傳作	
悦最眞蝦夷押領三冊	春町	
首尾松雪女廓八朔二冊	京傳作	
見越松雪女廓八朔二冊	京傳作	
余徳目 狂言末廣榮三冊	京傳作	

摸文書今怪談五冊	唐來山人作	
鎌倉太平序二冊	春町	
引歌 六玉川流榮二冊	喜三三作	△
蝦夷渡義經實記三冊	宮村	
板垣三郎出世壽三冊	同	
無偽看板之立引二冊	同	
名物梅々枝でんぶ三冊	京傳作	西村
海中箱入姫三冊	万象門	
會通己恍惚照子二冊	京傳作	
一鉢 扮接銀煙管三冊	同	
大願 下戸之藏開二冊	万象門	
成就 下戸之藏開二冊	千差万別	
書雜春錦手三冊	可笑門	
蛤金久連里	雀千聲作	西目録
夫徳奢玉得三冊	幾治茂内作	西村
倭傘之濫觴二冊	岩戸	
見可徳言門上下三冊	蘭徳齋書	
三樂太平記二冊	虚空山人作同	
一谷嫩軍記五冊	笑給作	同
昔々於艶と云踊子三冊	通笑作	
三茶太平記二冊	南仙笑	西目録
戲作 天筆阿房樂二冊	楚滿人作	伊勢治
愚一心 苦は樂元二冊	杜芳門	
通看板 苦は樂元二冊	親慈悲成作	同
姦顔取地忍袋三冊	七珍万寶作	同
酒管卷太平記二冊	虚空山人作	西村
二昔以前の洒落二冊	七珍万寶作	
落下司の智恵二冊	通笑作	
化物大通記	清長書	

此頃の稗史に營中の遺事に擬して作る物多しと云
 万石通最眞蝦夷番杯其類なるべし是等は草莽の人
 の知るべきにあらざれば識者に問て辨すべし又袋
 入に世直大明神天下一面鏡の梅鉢杯あり是等もお
 なじ趣なるべき歟
 親の慈悲成と云名初て見ゆ後に櫻川と改暫亭と號
 七曲舎云
 本書誤擊亭可成和訓うちてい也擊亭慈悲成今年以
 來通人の名目なし初代喜三三終る
 (頭書)活東子云 うち亭誤なり暫亭と書てしば
 らく亭とよむなり又芝樂とも書す

天明九己酉年改元寛政、百眼、海苔賣、釣獨樂賣、成田古川、深川等開帳
 鷓鴣返文武二道三冊 春町 萬重
 冠言葉七目起記三冊 唐來三和作
 飛脚屋忠兵衛奇事も中洲話三冊京傳作
 早通節用の守三冊 同
 孔子編時に藍染三冊 同
 一百三升半地獄二冊 同
 無垢緋黄金肌着八丈三冊 柿發齋門人陽春亭 慶賀作
 世界緋黄金肌着八丈三冊 二代目 喜三三二作
 鳴嗚呼辛氣樓二冊 京傳作
 花東頼朝公御入二冊 同
 一生入福兵衛幸三冊 同
 仙延壽反魂談三冊 同
 二代目碑文谷利生四竹節二冊同 二代
 大千世界變人藏二冊 喜三三二作
 高半の世中二冊 新江作
 三升艾江戶花俳優最良三冊 鷓鴣告作
 路考艾江戶花俳優最良三冊 鷓鴣告作
 樂師交見世八人一座三冊 同

西宮 板本 大和田 萬重

三國面向不背釜三冊 鷓鴣告作
 其句眞實情文櫻三冊 京傳作
 武茶執行押強者三冊 櫻川 杜芳作 豐國畫
 大笑止浮氣鐘入三冊 七珍 萬實作 同
 夫れ嘘無箱根、先、再板 櫻川 同 伊勢治
 御最良他之三升二冊 同
 福來留笑顏門松二冊 同
 早雲小金艶哉女優人三冊 京傳作
 輕業希術 同
 三河島御不動記二冊 同
 親之敵現歎夢也三冊 芝全交作
 願解而拜壽仁王參二冊 同
 下紐哉 同
 ちんく山引返狸之忍田妻二冊同 物業堂禮改 政演畫 戊午 西宮
 酒宴哉天怪會合二冊 石山作
 化物樂屋異帳二冊 同 錦鱗作
 十千萬兩貨殖金三冊 深川
 百福茶大年嘶三冊 和歌 林泉作
 世の中承知重忠袋一冊 同
 天下第一面鏡梅鉢袋一冊 同

遊屋寶物鳴呼奇々羅金鶏一冊京傳作
 東都名物鳴呼奇々羅金鶏袋一冊 後に福笑門松と題す
 比文谷咄一冊 心郊 翠好作
 世直大明神黑白水鏡一冊 袋入 美足齋
 金塚之由來 象匯作
 眞似手本小人藏三冊 同
 流行謠混雜唱舞三冊 同
 六歌仙虚實の添削三冊 三橋
 地獄二口〆勘客縁記二冊 喜三三二作向樂亭也
 假宅二口〆勘客縁記二冊 喜三三二作向樂亭也
 妙智力繁花鉢木二冊 傳樂山人作
 太平權現鎮座始三冊 材木丁丁作
 木のの春雨ふる時 宗は御ながさみに書集千鳥蝶々二冊雪町作 越川
 桃太郎昔日記三冊 政美畫
 源平英筆記三冊 政美畫
 敵討於花短冊三冊 錦集堂
 臭氣麻放倉の榮二冊 軒東作
 繪本武者揃二冊 軒東作
 平治太平記三冊 軒東作
 くらかたいはなし二冊 軒東作

秩父屋

御濟の煮花二冊 莞津喜笑顔作
 同樽酒開上戸二冊 歌丸門人 千代女作
 同爐開嘶口切二冊 伊之助作
 同新米率頭持二冊 清遊軒作
 政美柳郊榮之蘭徳春朗豐國畫
 鷓鴣返孔子編太平權現杯は當年の遺事に擬作せし
 なるべし地獄一面は袋入の天下第一面の標題を假て
 また一奇をなす中洲話は土山何某と十七屋なる者
 の遺事に擬して中洲の繁榮の光景を寫す又此頃碑
 文谷の仁王利益ありしによりて作る所仁王參又四
 ツ竹節等有又三河嶋の不動此頃靈驗ありしと云々
 安永年間に清經吟雪など書し一代記の類を再摺し
 錦繪摺の外題を押板行する物多し又青本に白紙
 黒摺の外題をおしたる物に同じく再摺有此頃迄は
 黒本をも製して販出せしが寛政の中頃より絶て見
 當らず文化に合本行われてよりは青本迄も稀にな
 りたるはおしむべし

寛政二庚戌年御堀淺、琉球人來朝、壬生狂言流行

遊妓定卯角文字一冊	芝全交作	鶴喜
冷哉汲立清水記三冊	京傳作	
山題鵠蹴轉破瓜三冊	京傳作	
俵藤太振出百樂三冊	芝全交作	重政書
大森輕業本能見世物三冊	同	
楠鬼女子	信普作	松長喜
染直大名綺一冊	同	
文武二道重忠嘶一冊	竹塚東子作	
淺草磨光世中の魂一冊	京傳作	政美書 大和田
繪馬磨光世中の魂一冊	同	
大極上心學早染草三冊	京傳作	
請合資心學早染草三冊	同	
京傳憂世之醉醒三冊	同	
昔勘善富藏雀二冊	録山人作	龜毛書
孔子納藍返行義霞	京傳作	萬重
後編	東子作	同
同三編	京傳作	
地獄子淨煩梨三冊	京傳作	
一面照子淨煩梨三冊	同	
太平記玉磨青砥錢三冊	紀定丸作	
吾妻鑑	通笑作	
雄長老壽話三冊	同	
即席耳學問三冊	同	
忠孝遊仕事三冊	同	

本樹直猿浮氣嘶三冊	萬唐丸書作	
福種笑門松二冊	京傳作	
金の鶏表題直し	二代	喜三二作 文橋書 秩父
新吉原聖賢圖畫三冊	同	
聽從淺黃の罇三冊	同	
多武峯正一位織冠二冊	勝副作	
大明神	主人作	
呼繼金の成植二冊	同	
武道艶事雨三廻二冊	同	
立役艶事雨三廻二冊	同	
御存知夜討蕎麥三冊	萬寶作	イセ治
茶事加減役御番附三冊	同	
意濃張智惠艶出三冊	同	
持來餅者餅屋二冊	同	
つばもの二日替二冊	同	
五鉢惣べ而是程三冊	萬寶作	榎本
先時花芳野犬班二冊	京傳作	
怪談	石山作	政演書
新作徳政嘶夢三冊	樹下石上作	西宮
人間萬事西行が猫三冊	同	
世中豊年藏三冊	同	
榮増眼鏡の徳三冊	行町作	

何か糊琥珀の塵三冊	有西作	西村
甚五郎龍の一談三冊	萬寶作	
磁鉄頓智才兵衛三冊	虚空山人作	
遁道之路無語帖三冊	千差	
早學問	萬別作	
蝶千鳥最良達紋三冊	同	
春遊獸會我三冊	同	
紅白勳功鏡二冊	同	
根元角觥大全三冊	同	
早染草に善玉悪玉と云事を初て書出し京傳が妙作	殊に教訓の意深く大に行れて二編三編に至る後世	
に善玉悪玉と云言葉は此時に發るか青砥錢に谷風	の肖像有此書も當時のさまに擬して作る翌年より	
してかゝる事を憚り絶て作り出さぬ如くなりたり	七曲舎云	
京傳御谷洒落本流行重政政演政美柳郊豊國龜毛去	年懸川春町終	
寛政二辛亥年淺草開帳八月大饗	京傳作	萬重
盧生夢魂其前日三冊	柳郊書	

惡魂人間一生胸算用三冊	京傳作	自畫
後編	同	
世上洒落見繪圖三冊	同	
箱入娘面屋の人魚三冊	同	
京鹿子娘餘汁二冊	芝全交作	泉市
高慢至無我人鼻心神三冊	京傳作	
狂劇	同	
夫色事御存知高麗屋傳三冊	慈悲成作	
是喰事御存知高麗屋傳三冊	同	
廿日餘盡用而二分狂言二冊	大榮山人作	馬琴ノコト也
四十兩	全交門	
半右衛門眞顔貌老之仇浪二冊	芝全交作	
化物夜更の顔見世二冊	慈悲成作	
鼻毛長	同	
百者短	夜道	
天満宮敵討道々巡三冊	久良記作	
之御作	千差	
爲朝の鳥回三冊	萬別作	
龍の宮洗濯二冊	同	
狂傳和尚	同	
麻中法語	九界十年色地獄三冊	京傳作
壬生狂言	直讀見臺秋三冊	芝全交作
唐本	京傳勸請	八百万兩金神花三冊
京傳勸請	八百万兩金神花三冊	京傳作
新神名帳	御評判	高雄文覺三冊
面影歸花	御評判	高雄文覺三冊
萬寶作	柳郊書	

石上三之助が辛抱三冊	樹下石上作	西宮
福徳入紋三津引三冊	同	
壬生里名代振袖二冊	内新好作	
落腹筋問答二冊	同	
福々比來降涌金三冊	秋収冬藏作	秩父
財々比來降涌金三冊	荒金土生作	
金銀太平記二冊	慈悲成作	
壬生踊戲作面目二冊	櫻川	
有職鎌倉山三冊	慈悲成作	
純友勢入船二冊	同	
將門冠初雪三冊	同	
今昔縁氣白綾二冊	慈悲成作	いせ治
馬鹿長命子氣物語二冊	同	
鎌倉山料理献立三冊	万寶作	同
笑増厄災除講釋三冊	同	春英書
御請合戯作安賣二冊	同	同
手張子、虎之巻三冊	慈悲成作	豊國書
遊張子、虎之巻三冊	三橋喜三三作	榎本
擲交野良之蒲鋒三冊	万寶作	同
信田襖時代模様二冊	同	豊國書
枯木華作者、誓願三冊	同	同

世諺鳥混雜賞賦二冊 万寶作 豊國書
 話染廊色揚三冊 京傳作 同
 落笑、書拔二冊 政美書
 餅好酒香何之書目附二冊
 宮柱七福對二冊
 北條五代記三冊
 京傳作此頃より大に行はれ其名高し又此頃壬生踊といふもの流行して是に擬せる作多し北尾政演が青本を書事此年にして止む
 七曲舎云政演は京傳の書名也

寛政四千子年福面流行、磯吉幸大夫歸
 唯心鬼打豆三冊 京傳作 蘭徳書 鶴喜
 形寄化 芝全交作 同
 怪物徒然草三冊 京傳作
 勇士怪談話三冊 京傳作
 實語教幼稚講釋三冊 京傳作
 昔桃太郎發端話説三冊 同
 女莊子胡蝶夢魂一冊 黒本
 梁山一奇談三冊 京傳作

天剛垂楊柳三冊	京傳作	
神田利生 王子神徳 女將門七人化粧一冊	同	
浮世操九面十面三冊	芝全交作	泉市
名木二代鑑三冊	井上 勝町書	
一心土手の紅葉	同	
源平軍物語	信夫 藤彦作	岩戸屋
眞素民農鏡前二冊	岸田 杜芳作	伊勢治
於昔今南樓、通臣三冊	同	
年中故事附録	同	
新春花作者再咲三冊	万寶作	
爲恐肝心堪忍袋三冊	見得坊作	
優長源氏物語咄二冊	唐來三和作	秩父
蒲公英小徑三冊	梅山人作	村田
山入桃太郎昔話三冊	同	
忠臣藏五冊	同	
天神川 鶴千兩龜万兩	政美書	
鶴頼政名歌芝二冊	春朗書	
戀女房染分茶漬三冊	同	
御ぞんじの化物五冊	慈悲成作	西村

軍略深雪武田菱 西村
 霞之隅春朝日名二冊 京傳作 重政書 鶴喜
 神仙路考油二冊 蜀山 天業 豊國書
 花春風道行 京傳門人 馬琴作
 芝全交が長物語大に名あり此前に杜芳作に同じ趣あり外題年號を追考して記すべし全交作は是に擬して出藍也此後築地善好が小田原續物語といふあり梁山一奇談は水滸傳の繪草紙なり纔六冊十回迄にして止む近世の水滸傳の繪本すべて是に倣へり眞素民農鑑神代卷天神七代の間を記す此後一九が續記する地神五代記有此頃化物咄の本行はる、是より四五五年の間に怪談多し又一代記軍書の類行はれて今年の出版軍書怪談類多し戯作少し此頃より世間の風俗街談等を綴ることを憚りし故加様の作に移りかはるなるべし

寛政五癸丑年合中七福参、小人女見世物出る
 長物語 白髭大明神渡申 芝全交作 重政書
 後編 十四傾城腹の内 同 同

櫻葉入壽常磐仙米 胡麻入	芝全交作	重政書	萬重
皇下甸也干會我	京傳作	同	同
富士之白酒新板替道中助六	同	同	同
安倍川紙子	同	同	同
福徳果報兵衛傳三冊	同	同	同
浦嶋龍宮糶鉢木三冊	同	同	同
太郎龍宮糶鉢木三冊	同	同	同
先開梅赤本	同	同	同
頼朝即席 菩提料理四人詰南片傀儡	同	同	同
堪忍袋緒善玉	同	同	同
再會親子錢獨樂	同	同	同
年寄之冷水會我三冊	同	同	同
染相性男女占符三冊	同	同	同
大谷ごうけ百人一首三冊	同	同	同
徳治ごうけ百人一首三冊	同	同	同
鼠婚禮塵劫記三冊	同	同	同
今日は尻擽御用心二冊	同	同	同
廿八日酒の佐の字七人上戸二冊	同	同	同
盃の左の字	同	同	同
將基指揮太平話三冊	同	同	同
日永話御伽古狀三冊	同	同	同
頼智六通半略卷三冊	同	同	同
黒子	同	同	同
浮世御茶漬十二因縁三冊	同	同	同
馬琴作	同	同	同
芝全交作	同	同	同
好町作	同	同	同
曲亭馬琴作豊國書	同	同	同
泉市	同	同	同
伊勢治	同	同	同
猿尻金平牛房二冊	櫻川	慈悲成作	榎本
夫者七小町馬鹿功二冊	同	同	同
身爲着實洪福二冊	同	同	同
菊萱墨染衣日記	同	同	同
文覺勸進帳五冊	同	同	同
忠臣藏二冊	同	同	同
二代大黒二冊	同	同	同
美満齋天狗礫鼻江戸子	同	同	同
親王	同	同	同
大仕掛三界會我三冊	同	同	同
青樓育咄雀二冊	同	同	同
御目出世之角松二冊	同	同	同
歌化物一寺再興二冊	同	同	同
酒田遊氣之酒夢二冊	同	同	同
金時	同	同	同
絲瓜皮歌袋二冊	同	同	同
敵役朝比奈茶番會我三冊	同	同	同
睡月	同	同	同
變化物春遊二冊	同	同	同
音聞七種噺三冊	同	同	同
十二神樂稚輕業三冊	同	同	同
紺丹手織縞三冊	同	同	同
大和田	同	同	同

荒山水天狗鼻祖三冊	曲亭	馬琴作	西村
花團子食家物語三冊	同	同	同
昔語銚子濱三冊	同	同	同
市土産於多福神二冊	同	同	同
万福長者傳三冊	同	同	同
智恵次第箱根話	同	同	同
銘正夢楊柳一腰五冊	同	同	同
増補登坂寶山道三冊	同	同	同
曲亭馬琴出る是より年々續て著述多し天保の今に至る迄著作最多し鹿杖眞顔後に狂歌堂と號又誹諧歌の宗匠なり桃栗山人は一號鳥亭焉馬落嘶の中興たり	同	同	同
七曲舎云芝全交終	同	同	同
寛政六甲寅年岩井川口開帳	同	同	同
貧福兩道中之記三冊	同	同	同
忠臣藏人唯一心命三冊	同	同	同
宿昔語筆操二冊	同	同	同
小人國櫻櫻二冊	同	同	同
花之笑七福參詣二冊	京傳作	春朗書	榎本
福壽海無量品玉	馬琴作	同	同
茶で喰ふ三樹大夫七人娘	同	同	同
忠臣藏即席料理	同	同	同
眉見尺三人泥醉	同	同	同
竹齋老寶山吹色三冊	同	同	同
全交法師つね草	同	同	同
百福壽老人三冊	同	同	同
仙傳趣向氣工二冊	同	同	同
秘法趣向氣工二冊	同	同	同
工面壁觀師大通三冊	同	同	同
祝見喰節穴三冊	同	同	同
敵討伊吾二十卷二冊	同	同	同
氣の藥二冊	同	同	同
揚屋町伊達豆腐屋	同	同	同
百人一首戲講釋再板	同	同	同
忠臣藏大道具舖幕無三冊	同	同	同
十一段續	同	同	同
第一御徳用物語三冊	同	同	同
御馴染花咲祖父三冊	同	同	同
小人鳴七里富貴	同	同	同
好町作	同	同	同
京傳校	同	同	同
唐來三和作	同	同	同
慈悲成作	同	同	同
通笑作	同	同	同
春朗書	同	同	同
享和元板	同	同	同

源平布引瀧三冊 春英書
 同 緒旭出幼源氏二冊 同 西宮
 大福長者藏三冊 石上作
 旨趣向棚牡丹餅 同
 馬鹿親々道成寺二冊 竹杖 爲輕作 政美書 萬重
 等舖 芝全交腹内 芝山人 虛呂利作
 五丁夢 式亭三馬作
 天道浮世出星操 同
 人間一心視替線三冊 同 豐國書 西村
 鉢冠物語三冊 同 同 同
 繪木阿房袋二冊 同 同 同
 鎌倉頼多意氣二冊 同 同 同
 春遊相馬將門二冊 同 同 同
 大入日普葉初役金烏帽子魚袋入京傳作 一九書 萬重
 見物山時鳥 式亭三馬出る全交の趣を慕ふて世俗の風を穿つこ
 とを得たる妙法多し樹下石上福祿壽の趣を年々
 作りて能行はる是もまた稗史の一家也按に年の始
 に出る物は人々目出度ことを好むゆへ永く行れし
 もの歟

寛政七乙卯年淺草開帳、小金原狩
 外郎相州小田原相談三冊 善好作
 早言 心學晦莊子三冊 馬琴作
 昔怪談 二代目 春町作 長喜書
 浮世草紙洗小町三冊 同 重政書
 兼讀本在爾爰身成金言三冊 同 同
 草双紙 十返舎 一九作 春町書 萬重
 心學時計草三冊 同
 奇妙頂禮胎錫杖三冊 同
 新録小判、腰三冊 同
 善惡邪正大勘定三冊 唐來三和作重政書
 根無草筆抄 同 同
 金銀先生造化夢 同 同
 忠臣藏前世慕無 同 同
 落咄百噺二冊 森羅亭作 泉市
 花笑顏相指南杖三冊 楚滿人作
 敵討義女英三冊 同 同
 源九郎狐如何辨慶御前二人二冊 慈悲成作
 葛の葉狐 同 同
 古手妻品玉手箱二冊 同 同
 嫁入桐長持二冊 同 同
 内辨慶堪忍帳三冊 同 同

昔料理狸之吸物 慈悲成作 豐國書 榎本
 才布の紐しわみうせ薬三冊 同 春郎書
 最世界 手前漬赤穂の鑑二冊 同 同
 愚民殿 萬歳諷諸神柱立二冊 森羅亭作 春町書 村田
 桃食三人子寶噺 通笑作 長喜 同
 根無草曾我和物三冊 笑丸作 同
 落咄若夷 同 同
 大昔化物ばなし 豐國書 泉市
 徳若水縁記金性三冊 同 同
 怪物つれ〜雑談二冊 黄龜作 榮之書 西宮
 白石ばなし 豐國書
 弘法大師御本地一冊 再板四部
 三莊太夫一冊
 子敦盛一冊
 かるかや一冊

七曲舎云一枚摺京傳偽作多く流行去年藍表紙袋入
 に初る
 寛政八丙辰年泉岳寺開帳、ク、リザル流行
 人心鏡寫繪三冊 京傳作 重政書 萬重
 諺下司話説三冊 同 同
 酒神鬼殺心角樽三冊 同 同
 餅神 四遍摺心學草紙三冊 馬琴作 同
 昔語狐娶入三冊 景則作 同
 怪談筆始三冊 一九作 同
 化物小遣帳二冊 同 同
 物年中行狀記二冊 同 同
 中華手本唐人藏三冊 善好作 鶴喜
 身代開帳略縁記三冊 同 同
 胡盧〜笑春の山 同 同
 嗚呼可笑糖分類 同 同
 堪忍五兩金言語三冊 曲亭 馬琴作
 墨田川柳、禿筆二冊 同 同
 曲亭増補萬八傳二冊 同 同
 小雷雨見越松株二冊 同 同

常盤國風土記	十返舎	榎本	怪籠箱根歌舞妓	樂山	西宮
初登山手習狀	一九作		早野勘平若氣誤	馬笑作	
垣視本草盲目三冊	同		たふく万兩分限	石上作	豐國畫
怪席料理献立三冊	望月家		白石晰後編	同	
油斷敵藥功能書三冊	秋輔作		歌等功雀高名三冊	寶倉主作	
擲會入雲鳥二冊	一九作		初日影七福即生二冊	一九作	村田
虫看鑑野邊若草三冊	同		敵討於蘭の狂尾三冊	馬琴作	鶴喜
花軍二冊	笑丸作		鴛油揚凌搦三冊	一九作	
御詠向鼠嫁入二冊	一九作		北尾政美青本を書く事此年止る是より後書風を變じて蕙齋鐵形紹真と稱し略書式を著して大に行る七山舎云今年草紙問屋改極印あり株式の始歟		
浮世賽錢箱	同		寛政九丁巳年細齒師出		
落咄風の神	同		三歳圖會雅講釋三冊	京傳作	重政畫
增補執柄太郎三冊	楚滿人作	泉市	正月故事談三冊	同	
青海波龍宮三冊	一九作		安部清兵衛一代八卦三冊	馬琴作	
千里一刃勇天遍二冊	同		加古川本藏綱目三冊	同	
擲打變術卷	同		押繪鳥癡漢高名二冊	同	
替錢通用壽護錄	同	岩戸屋	大黒楹黃金柱礙二冊	同	
雷門御膳淺草法二冊	同				
再興御膳淺草法二冊	同				
信有奇怪會二冊	同				
怪談家内奇狐狸	同				

庭莊子存物茶話二冊	馬琴作	重政畫	萬重	夜眼遠目笠之内三冊	一九作	
虛生實草紙三冊	京傳作	同		千早振紙屑籠三冊	同	
和莊兵衛後日話三冊	同			太平記無禮講中三冊	同	
身体開帳略縁記三冊	萬唐丸作	同		家内安全鼠山入三冊	同	
北國順禮唄方便三冊	馬琴作	同		閑思獸堺界二冊	同	
龍宮苦界玉手箱三冊	同	同	鶴喜	碧菴變藥二冊	同	
无筆節用似字盡三冊	同	同		風光花桂男三冊	同	
楠正成軍慮智輪二冊	同	同	萬重	花筐勇者命二冊	同	
武者合天狗俳諧二冊	同	同		化物見越松二冊	同	
彦山權現誓助劍五冊	同	同		忠臣店請狀三冊	同	
芝全交夢寓書三冊	式亭三馬作	同	泉市	時花遊拔井二冊	同	
唯頼大悲智恵話三冊	同			源氏口切	同	
三世相郎滿八算八冊	楚滿人作			平家盛開今昔狐夜嘶三冊	同	
敵討姥捨山三冊	同			携師直開帳二冊	同	
嘘八百萬神一座二冊	樂山人			諺東埔塞掌二冊	同	
今度は鬼息子	馬笑作			壽金太郎月二冊	同	
化物大閉口三冊	楚滿人作	豐國畫		釣惠比須水揚帳	同	村田
富士色板絞會我三冊	同	同		親唐本之寢言三冊	三馬作	豐國畫
長生調合	同			新版新作		
金々世界悖入寶山吹三冊	石上作		西宮	咄の繪合三才智恵二冊		
				福徳壽五色目鏡二冊		西村

泉岳寺開帳詣笑南志

羽白作 盧呂利校

押強者何茂八文二冊

鹽賣文太都物語三冊

古昔花咲勢親父二冊

猿茂延命龜万歳二冊

兒嘶舌切雀

玄猪節あひらさけ三冊

大無筆節用似字盡三冊

京傳の作今年は四部何れも教訓を専らにして戯作の体にあらず是より勸懲を専にす

楚滿人號 志筈房團

寛政十戊午年大佛炎上、品川鯨、女髮結振替

兒訓影繪噺三冊

百化帖準擬本草二冊

筆津蟲音禽二冊

洛爵一口淨瑠璃三冊

似字盡 龜相案文當字揃三冊 馬琴作

京傳作 重政書 鶴喜

同 同 同

同 摺見作 重政書

雲上道中記三冊 一九作 西村

御徳用黄金草鞋二冊

黒手八丈狸金性水二冊 慈悲成作

めりやす 二文字鬼角文字二冊同

假名文章女忠臣三冊 一九作

天運 實生金榮花鉢植三冊 石上作

人問一生 磨淨頗瑠璃心照子一冊三馬作

善惡邪正 江戶紫其跡幕婆道成寺三冊同

京鹿子 新井柔術 吾孀街道女敵討三冊同

兎角人唯樽底拔三冊 一九作

一升 俗湊寶乗合三冊 初作 榮昌書

奇遇 唯雄 籠三冊 同

鬼燈提灯教捷徑三冊 同 豐國書

君子威徳富貴機三冊 同

産田圖面 離病一摺 即席御療治三冊 同 豐國書

墓書筆回氣三冊 同

忠臣星月夜二冊 一九作

義光夜功珠三冊 同

御慰忠臣藏之攷二冊

馬琴作

一刻價萬兩回春三冊

京傳作

鼻下長生藥三冊

馬琴作

大雜書拔葵綠組三冊

同

家内手本用心藏三冊

三和作

東海道五十三驛 凸凹話一冊

京傳作

人間一生五十年

同

時代世話足利染三冊

同

足利染拾遺雛形二冊

同

增補獨猴蟹合戰二冊

三和作

會我物語嘘實錄三冊

同

賽山伏批狐修怨二冊

唐丸作

仙術須臾之間方二冊

重政書

化物和本草一冊

同

熊坂物見松御休所三冊

同

長半 倅益照降町一冊

同

敵討柳下貞婦三冊

楚滿人作

怪談奇發憤二冊

同

一狂言狐書入二冊

同

三角雪婦腹鼓臍 噺山三冊

同

燒附狐火

同

一陽來伏帳二冊

一九作

前度往昔軍二冊

同

雨宮出 儲器縁記三冊

同

三浦待爲連次第三冊

同

河童尻子玉三冊

同

福神江島臺三冊

同

取得貨徳用二冊

同

十返舎戯作種本二冊

同

尻擲御要領三冊

同

百合若多武の眼

楚滿人作

昔嘶赤本狂歌

巴扇堂

初賣大福帳景物

一九作

素後壯雪信二冊

芝全交遺作

東海道娘敵打豊國が書絶妙也是より豊國大に行はる壁前亭九年坊妙作多し纔に一年にして止む惜むべし

寛政十一己未年三圖開帳

京傳主年十六利鑑三冊

京傳作

重政書

鶴喜

五體和合談三冊	京傳作	重政書	
彼岸櫻勝花談儀三冊	馬琴作	同	
鯨魚尺品革羽織三冊	同	同	
料理茶話即席說三冊	同	同	
無茶盡押兵三冊	同	同	
夫楠木俠太平記向鉢卷	三馬作	重政書	西宮
是噓木	同	同	
心教音引返警幕明	同	同	
五段續	同	同	
實生金生樹繼穗子寶三冊	石上作	豐國書	
後編	同	同	
奈良大佛江戸見物袋入	虛呂利作	可候書	泉市
大佛餅東餅惣名所	白山人作	同	
夜守幸給剛魔神三冊	南仙笑作	豐國書	
敵討沖津白浪三冊	同	同	
無難作行形會我三冊	同	同	
金春徳和家隱居三冊	石上作	同	
兩頭筆善悪日記三冊	京傳作	重政書	萬重
假名手本胸之鏡	同	豐國書	
風見草婦女節用	馬琴作	重政書	
世諺口紺屋雛形	同	同	
穿幹吹出笑三冊	同	同	
	橋		
	香保留作		
敵討住吉詣二冊	一九作		
殿下茶屋譽仇討三冊	同		
善惡兩良樂二冊	同		
腹内養生主論三冊	同		
大福茶香嘶二冊	同		
竹本義大夫武士二冊	同		
正真即功紙三冊	同		
作者根本江戸錦二冊	同		
敵討巖の松五冊	同		
運開大黒傘三冊	同		
穴賢狐縁組二冊	同		
増分福茶賀間二冊	同		
大鯨豊年貢二冊	同		
教いのはたなか二冊	同		
御聖代節用學問二冊	同		
鳩試禮者笑宴三冊	同		
太閤記筆の連五冊	同		
三十石夜船の始	同		
花軍梅の先陣	同		
備前播磨一代記三冊	馬琴作	重政書	
寇將軍肝略卷三冊	可候作	北齋書	
口巾の甘哉名利研三冊	京傳作	重政書	鶴喜
不壽鏡	馬琴作	同	
視藥霞報條三冊	同	同	
錢鑑貨寫繪三冊	同	同	
人間萬事塞翁馬三冊	同	同	
譬喻義理與禪輝三冊	同	同	
問合俗物譬問答三冊	同	同	
孝行白子息金持三冊	同	同	
五体不具毒解藥三冊	同	同	
春長閑千金玉物二冊	同	同	
通萬言金世界捕能艶	同	同	
愚妄言	同	同	
男達吾妻錦繪二冊	同	同	
増補大江山物語	同	同	
見巡開帳ばなし	同	同	
男一面髭拔鏡三冊	同	同	
怪談富士詣	同	同	
明眼千人盲仙術二冊	同	同	
食言の大木三冊	同	同	

中村傳九郎追善三冊	清遊軒作	子與書	
赤木鼠	同	同	
黒木狐	同	同	
芝全交寺	同	同	
戲作開帳	同	同	
七曲舎云今年西宮目錄有之不出板間屋衰微可見	同	同	
八百八後家	一九作		西宮
天正より以後の事を書し上梓すること享保以前には憚らざりしにや大坂軍記其外あまた見へたり享保已後は上梓を憚ることゝなりしに此頃に至りて浪花の玉山が繪本太閤記を上梓して大に行はる夫にならひて今年筆のつらなりを顯はし又豊國が太閤記の錦繪出て共に行はれしが幾程もなくて前のごとく憚ることゝなりたり去年品川浦にて鯨を獲たる其事に擬して作る本二部品川羽織豊年の貢あり俠太平記俗にいさみ太平記と云三馬が妙作なりしが障事ありて少しの間に發板を止む故に世上に此本少し			
寛政十二庚申年吉原焼失、鳥越祭			
平假名錢問答三冊	京傳作	豐國書	萬重
洞人形肢體機關三冊	馬琴作	重政書	
備前播磨一代記三冊	馬琴作	重政書	
寇將軍肝略卷三冊	可候作	北齋書	
口巾の甘哉名利研三冊	京傳作	重政書	鶴喜
不壽鏡	馬琴作	同	
視藥霞報條三冊	同	同	
錢鑑貨寫繪三冊	同	同	
人間萬事塞翁馬三冊	同	同	
譬喻義理與禪輝三冊	同	同	
問合俗物譬問答三冊	同	同	
孝行白子息金持三冊	同	同	
五体不具毒解藥三冊	同	同	
春長閑千金玉物二冊	同	同	
通萬言金世界捕能艶	同	同	
愚妄言	同	同	
男達吾妻錦繪二冊	同	同	
増補大江山物語	同	同	
見巡開帳ばなし	同	同	
男一面髭拔鏡三冊	同	同	
怪談富士詣	同	同	
明眼千人盲仙術二冊	同	同	
食言の大木三冊	同	同	

夫京部見物左衛門二册 是東都	色主作 一九作	岩戸
臍煎茶香嘶二册	同	
心學芋蚶汁三册	同	
貧福崎蛤返二册	同	
出世鯉四方瀧水二册	同	
運次第出雲の縁組三册	慈悲成作 子與書	泉市
福神金大帳二册	和樽作 豐國書	
二重緞子三徳平三册	慈悲成作	
黄金長者二幅對榮花春袋三册石上作 白銀長者	楚滿人作	
娘敵討扇銀面三册	一九作	村田
去御力雅衆忠臣藏三册 御好二付	同	
化物見世開二册	同	山口
人間萬事二一天作五二册 道笑作	同	
謀得世人の情	同	
塵功記二足陸月二册 今此奈縁唐にもあろか	群馬亭作 北齋書	岩戸
花見咄武盛衰記	馬琴作 自書	山口
昔男意氣成平二册	春滿作 豐國書	西宮
子を産金七夜祝	和樽作	

御手遊達摩心學三册 和樽作 子與書 岩戸
 寇將軍は北齋の畫作也可候は假に設たる名也是よ
 り二三年續て出る世人の情と二一天作五は天明の
 頃より板を再摺にして外題と序を取替面目を新に
 せし也此類の本折々出る事あり開帳咄しに歌妓の
 長袖を着たる圖あり歌妓の長袖此頃に限るか此後
 の本に見當らず
 七曲舎云塵功記も再板と見ゆ

寛政十三辛酉年改元享保、嵯峨開帳、文字流行 昔男意氣成平三册	京傳作	重政書	萬重
生得通奇の見勢物語三册	馬琴作	同	
曲亭一風京傳張三册	同	同	
春之駒象碁行路三册	同	同	
兒童文珠稚教訓三册	可候作	同	
敵討梅之接三册	楚滿人作	春亭書	泉市
御惡文珠馬鹿附藥三册 御惡相丸鹿附藥三册	一九作	同	
質流思の外幸三册	同	石上作	豐國書
陰福貴自在金年玉三册 陽福貴自在金年玉三册	三馬作	同	
鼻毛三尺日本一癡鑑三册	同	同	

伊呂波短歌二册	一九作	岩戸
敵討巖流島三册 同後日話二册	同	
縁組千代之子寶二册	和樽作	一九書
嘯馬假多手綱忠臣鞍三册	京傳作	重政書
浪速秤无女芬輪二册	馬琴作	同
買飴紙爲野弄話二册	同	鶴喜
父響宇都宮物語三册	馬琴作	同
宇津宮五段淨瑠璃酒肆二册 四五卷	馬琴作	同
敵討蚤取眼三册	馬琴作	重政書
教訓跡之祭戲草三册	同	同
足手書草紙畫賦三册	同	同
雲飛脚二代羽衣三册	竹塚東子作	同
金實身跡直二册	一九作	榎本
福徳三年酒二册	傀儡子作	同
春霞男達引三册	同	同
坂東七英士三册 前編	同	同
人武忠義功二册 後編	同	同
繪本報譽録三册	玉亭子作	豐國書
	山口	

下界驢鼻落天狗三册	可笑門 鶴聲作	見越入道作一九校	豐國書	西宮
化物忠臣藏三册	同	同	同	
人之心兩面摺三册	同	同	同	
蝶夢式亭三馬自惚鏡三册	同	同	同	
七曲舎云寛政十一年目錄に出つ	同	同	同	
京鹿子從夫道成寺三册	福亭三笑作子與書	同	同	
招其後	同	同	同	
本家唐土	同	同	同	
出店本朝廿四孝安賣請合三册香保留作同	同	同	同	
藤江丹右衛門敵討根笹雪三册樹下石上作豐國書	同	同	同	
田水郡右衛門敵討根笹雪三册樹下石上作豐國書	同	同	同	
鏡越業平形三册	慈悲成作	同	同	西村
櫻川話帳絨二册	同	同	同	
敵討初嵐桐一葉三册 敵討操草菊之籬二册	同	同	同	
厄神西ノ海原二册	同	同	同	
忠臣藏畫事素人狂言三册 十一段續	同	同	同	村田
家内山神御祭禮二册	同	同	同	
安全山神御祭禮二册	同	同	同	
色揚鼠の嫁入	同	同	同	
落咄福種蒔二册	同	同	同	
三番豆	同	同	同	
昔嘶枯木花二册	同	同	同	
敵討布施利生記三册	楚滿人作	同	同	泉市

忠臣藏四十八文字三册 一九作

享和二千戌年風邪、白山祭 村田

蝶々開帳延喜繁花二册 一九作

的中地本間屋二册 同

増益山莊太輔三册 同

昔咄由良濃二册 同

春通氣智之鏡光記三册 京傳作

夏買帳香込多靈寶緣記三册同 重政畫

秋賢忠添錢湯新話三册 同 鶴屋

冬枯樹花大悲利益三册同 同

合戦和睦香之物三册 通笑作

野夫鶯兒歌曲訛三册 馬琴作

筆咄作種蒔三世相三册 同

養得前名鳥圖書三册 同

初老了簡年代記三册 同

挑灯庫開七扮三册 同

太平記忠臣講釋三册前編 同

金力降豊年貢三册 白銀堂 一九作 長喜畫

豐次郎通人寢言二册 同

警討夜居ノ鷹三册 同

旅ノ耻辱書拾一通二册 同

武家物奇談三册 同

異療寢野種三册 京傳作

御覽親孝經三册 三馬作

忠臣陶物藏三册 一九作

播州平川仇討實記三册 同

赤穂平川仇討實記三册 同

夏粉男達編五册 同

玄徳武勇傳三册 同

増補五大方 同

漸板塵功記 同

京傳作鏡光記より大悲利益迄四部を名附て出板す
カ初土番摺三册合巻にして表紙も上の黄表紙に犬
を墨摺にしたり是合巻の權輿とも云べき歟鶴屋の
本此時より外題を横に長き形とす年々同じ楚満人
敵討大に行はれ靈生太郎田形三郎杯六册續にて出
る此以前敵討六册物は皆實録なり作り物語の六册

又燒直稗史億說年代記三册三馬作 西宮

鉢冠娘封鎖心鑰匙三册 同 豐廣畫

武茶盡混雜講釋三册 樂亭馬琴作

金龜山寶案内子三册 石上作 豐國畫

自先達錦温石三册 三馬作 同

御吹聴錦温石三册 楚満人作 同

虚空太郎武者修行咄三册 同

御利生告子之艶男三册 同

米銀多羅福長壽傳三册 石上作 同

敵討松寄生三册 楚満人作 同

市川國藏早業七人前三册 京傳作 重政畫

御誹染長壽小紋三册 同

六冊懸徳用草紙一册 馬琴作 同

衣食往世帶評判記三册 同

急度心明花春爲化三册 同

鐵鎖枕 同

敵討時雨ノ友三册 内新好作 歌九畫

開々風耳學問三册 楚満人作 豐廣畫

美男狸ノ金箱三册 一九作

嗚呼愚鋪咄三册 同

屈伸一九著三册 同

楚満人を初とす

享和二癸亥年はしつ、善光寺開帳、太郎稻荷
怪談摸様夢字彙三册 京傳作 重政畫 鶴喜

人間悟道迷所獨案内三册 同

人相萬事吹矢的三册 同

手紋裡家算見通座鋪三册 同

陰益陽珍紋圖彙三册 馬琴作 同

信濃雲客 同

淺間主人俟待開帳話三册 同

座香記由來 同

三五十五張胸中算用噓店御三册可候作 北齋畫

分解毒胸中双六三册 京傳作 重政畫

花浴之水 同

浪花風爐 同

不厨厄即席料理三册 馬琴作 秀麿畫

三國和漢蘭雜話三册 可候作

昔咄和漢蘭雜話三册 鬼武作 可候畫

大道具 同

報讐四萬物語三册 楓亭猶錦作 西村

舊土產吾妻錦繪三册 同

鎌倉街道女敵討三册 石上作

敵討播州皿屋敷三册 徳永 素秋作 豐廣畫

安部川敵討前二册 一九作
 賤富一代之早替二册 貫斗作
 仇敵碓打手三册 楚瀟人作 豊廣畫
 色外題空黄表紙三册 一九作
 通俗三香志三册 荻聲作 長喜畫
 引方三册 大黒本種三册 虚呂利作 同 豊國畫
 善惡角力勝負三册 一九作 長喜畫
 一陽來福鼠嫁入二册 同
 桃太郎初寶鬼嶋臺二册 同
 木庭杜野狐復讐三册 同 豊國畫
 文盲先生珍學文三册 慈悲成作 長喜畫
 職流義仕上押繪三册 ヤナギハシ源川 八重成作 同
 敵討攝州合邦辻五册 一九作
 慎道迷盡誌三册 鬼武作 春亭畫
 八百屋加羅操狂言三册 榮色堂色二 夢中堂作
 深山草化物新話二册 一九作前編四年不審
 兩面世 編裏面心、抜路次三册 鬼武作
 昔貝嗚呼屋氣樓三册 三光作
 十念嗚呼屋氣樓三册 三光作
 以呂浮世の頭木三册 三光作

兄弟仇討備前德利二册 馬光作
 善惡仇討備前德利二册 恒醉作
 忠臣蔵 後日天哉義心平成三册 虚呂利作子年新板
 兩面出世鑑 此頭袋入の上本出る是迄の袋入は半紙に摺たる本
 なり此上本は糊入に摺て紙形も殊に大にして表紙
 も厚し製本異也王侯に呈すべし兒童の翫弄すべき
 物にあらず此上本は並の袋にせずして直に青本に
 直して出せり後年合巻の出来たるは最初に上本夫
 より合巻夫より青本と三度に直して出せり
 享和四甲子年改元、文化、福助流行、大黒開帳
 黄金長者江戶砂子娘敵討三册 京傳作 重政畫 鶴喜
 白銀長者江戶砂子娘敵討三册 同
 作者胎内十月圖三册 同 一九作
 化物敵討二册 一九作
 小夜中山霄啼碑三册 馬琴作 豊廣畫
 新研十六武藏坊三册 同 重政畫
 御伽五人拍部言三册 同 同
 怪談五人拍部言三册 同 同
 敵討思乱菊前二册 楚瀟人門 面徳齋夫成作
 蓮の若葉 編犀蛭緑之林二册 一九作 西村

蓮の若葉敵討三册 一九作
 仇報孝行車前二册 楚瀟人作 豊國畫
 敵討長太郎柳三册 同 豊廣畫
 小女郎戀仇討狐助太刀三册 一九作
 敵討桔梗原前二册 同
 太郎稻荷婚禮二册 一九作
 風薫婦仇討二册 一九作
 地神五代記三册 同 春亭畫
 化繪本太閤記三册 同
 はしか草双紙 同
 同落咄 東子作
 穿山甲作 楚瀟人作 豊廣畫
 五人揃目出度娘三册 同 同
 親子塚冬雪物語前二册 同 同
 敵討水潜蜀紅錦三册 同 同
 仇敵意寫繪三册 同 同
 敵討春手枕三册 楚瀟人門 待名齋一世作同
 萬福長者寶藏開三册 石上作 同
 信夫摺錦伊達染三册 鬼武作 同
 忍指陸奥警女仇敵二册 同
 後編陸奥警女仇敵二册 同
 兩面出世鑑 篇恩愛猿仇討三册 虚呂利作

兩面出世鑑 篇娘敵討陸友綱二册 虚呂利作
 後 二代目七色合點豆三册 京傳作 萬重
 藤原下宇兵衛五人切西瓜斬賣三册 同 重政畫
 砂糖獅子兵衛 同 馬琴作 同
 松林木三階奇談三册 同 同
 敵討二人長兵衛三册 同 同
 敵討磐手躑躅三册 鬼武作 長喜畫
 妻の復寇千疋牛三册 楚瀟人作 豊廣畫
 仇撃錦誰袖三册 石上作 同
 敵討名譽一文字三册 東子作 同
 千支甲子 報響小槌本望三册 赤城山 同
 利生大黒 報響小槌本望三册 家女作 北俗畫
 敵討猿番塙柏餅後二册 一九作
 人慾看通下巫三册 同
 咄年男笑種 同 紀尾佐丸作北齋畫
 新曲五人切 松亭竹馬作長喜畫 山口
 和藤内 一九作
 敵討の本いよく行はれ京傳馬琴此年より始て敵
 討の作あり今年の新刻敵討三分の二にして其餘僅
 に戯作あり

文化二乙丑年

寶茶翁復讐煎茶濫觴三冊 祇園祝	京傳作	重政書	鶴喜
猫奴收忠義合奏三冊	馬琴作	豐國書	
復讐阿姑射之松前後三冊	同	豐廣書	
父母怨敵現腹鼓前後三冊	竹塚東子作	重政書	
莊子自慢名産杖三冊	京傳作		萬重
殘燈奇譚案机塵三冊	同		
二代順禮奉打札所誓三冊 兩度誓討	馬琴作		
返咲八重之仇討三冊	感和亭鬼武作		
花紅葉二人鮫鱗三冊	内新好作		
茶漬原御膳合戰三冊	萩原萩聲作		
早替平氣之景清三冊	内新好作		岩戸
復讐阿部之花街三冊	一九作		
後編戀仇被形容二冊	同		
三編 隴月安西堤二冊	同		
防州水上妙見宮利益助劔三冊	同		
後編 星宮大内鏡二冊	同		
敵討 蜘蛛蛇梭後三冊	楚滿人作		西村

御講向金生木息子三冊 一九作
 後 葉手 編 金澤彌二郎廻國奇談三冊鬼武作
 天怪報仇夜半嵐三冊 同
 金生樹榮花鉢植三冊 石上作 豐國書 泉市
 今年新梓彌敵討多し戯作の本は纔に十餘部に過ぎず
 翌年よりは残らず敵討となりたり

文化二丙寅年成田不動開帳、三月四日大火

河内老嫗敵討兩輪車前後六冊京傳作	重政書	鶴喜
近江忍村敵討孫太郎蟲前後六冊	同	
敵討鼎壯夫前後三冊	馬琴作	同
敵討春告鳥前後三冊	眉壽亭作	
報仇 奇談 數千里虎尾峠六冊	鬼武作	
敵討狼河原前後六冊	京傳作	豐國書 萬重
大師河原撫子話前後六冊	馬琴作	
敵討雜居寐物語前後六冊	同	
武者修行木齋傳前後六冊	同	
鳳凰染五三桐山	山旭亭作	鶴喜
五三後編跡着衣裝	一九作	萬重

戯作外題鑑

五三桐山操染心雛形 三 淺草親音 利生仇討 雷太郎強惡物語 前後五冊三馬作	一九作		
敵討安達太郎山五冊合	同		
敵討擊山魅前後三冊	楚滿人作	豐國書	西村
仇報妹春扇前後三冊	同		
昔語姑獲鳥仇討三冊	同		
銘者正宗刀珍說前後六冊	同		
敵討三人姥前後三冊	同		
敵討柳四郎兵衛前後三冊	同		
敵討旭霜解前後三冊	同		
再板敵討姥捨山前後六冊	同		
復讐岐枝川前後六冊	同		
敵討鶯酒屋前後六冊	同		
敵討讀誠齋前後六冊	同		
敵討袴勝負三冊	石上作		
復讐矢指浦前後六冊	一九作		
法誓輪廻仇討三冊	同		
嵐山花仇討前後六冊	同		
玉櫛笥二人奴三冊	同		

敵龍田山女白浪前後三冊	楚滿人作		
仇討梅と櫻三冊	同		
五風十雨狐嫁入	御子様方の昔語桃太郎傳		
敵三組盃初後九冊	楚滿人作	豐廣書	泉市
一人娘嬬訓歌字盡三冊	三馬作	同	
二人婿嬬訓歌字盡三冊	楚滿人作		
敵 藤川衛前後六冊	同		
仇都印籠前後六冊	鬼武作	豐廣書	榎本
悟迷惑心之鬼武二冊	源家武功記二冊		
富士日記會我社二冊	落咄叶福助		
金剛力士武道礎前後三冊	赤城山人 一九作		
敵討岩手の梅香前後三冊	守信亭作 月廣書		
敵討金糸の結縫後	面徳齋 夫成作	竹東子作北園書	
怪談四更の鐘	東紫作	石上書	
妙黃奈粉殺道成寺三冊	馬琴作	長喜書	
老實製法親響勝膏藥三冊	三馬作	豐廣書	山口
滑稽妙刺親響勝膏藥三冊	滑稽しつこなし二冊	一九作	

青嵐柳下蔭前二册 後三册 一九作
 申戯じふらぐんしつこなし後篇三册 竹宗 同
 敵他力之燒繼敵前 東子作 北周書
 敵討日本一瀧勢袋入七丁 櫻鯛助作 國長書 芳町
 睦月笑顔短歌袋入七丁 同 同 岩戸
 虚氣の早替三册 蘭衣作 同
 花弁大安賣三册 一九作
 敵討此方の世界三册 同
 恰悻怪異話三册 同
 怪談おそろ史記 西村
 猫の嫁入 楚満人作 豊廣書
 甘趣向棚牡丹餅三册 石上作

發行せる本を載たり合巻出てより後はことごとく
 次の合巻に出たり
 昔は青本と呼しは藍表紙の事なるべし宗因が誹諧
 談林(延寶四年撰)附合の句に
 青表紙かさなる山を枕もと 卜尺
 一ふしかたる松の夜あらし 在色
 按十二段梵天國大江山等の淨るり本を其頃青表紙
 と稱したり則今の草紙のはじまりなり其後行成紙
 表紙となるまた赤本と替る黒本あり寶曆の頃薄筋
 黄表紙となりたり明和の頃黄表紙となる文化年中
 黒本筋黄有赤本もあれど厚表紙にて繪外題をはる
 役者似顔の繪本は寶曆年間既にあり世にいふ双紙
 古代は舞本也上古は源氏物語榮花物語清少納言大
 鏡水鏡等をいふ足利將軍家の頃専ら舞流行せり今
 の會我物語義經記などは夫を全部したるもの也故
 に實録にはあらじ青表紙の事清輔が袋草子に見え
 て和歌の本をいひたるなり平家物語も謠曲に作り
 盲目にあたふ夫に節を付うたひものとす
 享保二三四年のころすぎがへしにごふんちの表紙
 模様書にて外題をはる赤本の次にや淨るりの正本

なり
 保元物語盛衰記の類も謠曲本也實録にはあらず唐
 土に稗史といふ物我國にて讀本と云

燕石十種第六輯叙言

叢書と云物亦縣にても明の程榮が漢魏叢書より古きはあらし皇國にては温故堂の群書類従を以權輿とすべき歟此類従は續編も有て三百年前の物は大かた遺漏なかるべきを近世の物の本の世に多くもあるまじきが紙虫の栖どもなり果池魚の難に罹りなごして散逸するを吾友の書賈法齋翁(五一)の門人活東子書好む心に深く憂ひ物の考どもなり事の證どもなるべきは更にもいはず猥雜なる浮世草紙様の物をも棄得ず十種を一帙とし始より師の校訂を請て既に六帙に及びぬされば鄙諺にも陰陽師身上知らずと云如く書嚮ぐ人は書名をこそ廣くも普くも諳じたれ其書の大旨をだに知らで過るが多かるを法齋翁は然らず物學の道に志厚く詞林にさへ入立戯文章狂歌杯をさへ傍に翫びて雅俗に通じたる博識なり麥の流るゝをも忘れたりと云けん人のやうなれごさらに渡世の營に賢く日毎に市に出て店棚を守り一日も人に任されたるを見ず其貿易の間暇ある時は草烟吸ひ木芽の湯噉る間をだに甚惜みて書をも讀筆をも執て二六時中怠慢な

しかる質人は珍書よりもいと得難し抑書坊の主にて文筆に遊びし人昔より絶てなきにしも非ず遠國のは棚つ先古くは忍ばずの池の邊に住し和泉屋半三郎は書賈といふものゝ始なりとぞこれ孫は學者たりし由事跡合考に記せり元祿年間に萬屋清兵衛青物町の人にて凡の賈客にはあらざりきとぞ芝の田町の狂歌讀濱邊黒人も三河屋半兵衛と云し書賈千種庵霜解も淺草人にて山中要助とて同じいとなみせし市客なり二世の燕栗園(山田佐助)も亦同じかさしにてこは皇國學に信切にて普通の歌讀にはあらざりき猶廣く索なばさる人共ありもすらめご二百年來十人には過べからずそれはた翁(五一)の如く性質の篤實なるは上件の人々にもあるまじげ也その實情に校合せられたる書どもに杜撰なる事有べきかは人に知られぬ書どもの世に現れ寫僻めしなども能讀るゝやうになりぬるは蟬室共の面起にて情ある物ならば其よろこび淺からめやは此叢書今に百卷にも充なんか人やりならず嬉しきにつけ不覺に思ふよしを巻首に書添つ

文久三年癸亥仲春

二世柳亭種彦

附言

毎輯原本傳寫の誤字多かるを憂ひて家父鶉翁に例の點檢を請ふ翁邇來多病萬事放肆一回の塗竄良久して落成す然して後是を備書に委す彼文字なく將用意あらねば重ねて根銀の錯字をなせりされば校正かぎりなく落葉を拂ふに匹しといはん予再訂せんとするに忙中の閑をだに得る事なし則以四方の主顧に分疏をなすと云ふ

文久四年甲子發春

江戸書僧二世達磨屋左七活東子識

江戸往古圖説

爰に一圖を得たり武江往古の地理をしるすものなり
 視るに證とすべきものにもあらずと捨置ぬ其後また
 視る事再三に及びり時に其圖の地境を備考るに古書
 を引且古老の言傳ふる事どもに因て推はかるに又捨
 べきにもあらずと是を感辨するに取べき事少からず
 然あれども邑里倒置差訛の事もあれど元より此圖書
 寫せしものにして其誤りもありなんと察し訂正する
 事もなく舊文のまゝにしてこれに説を副る事になん
 ぬそも、都城の興基は康正二丙子にして太田入道
 の築る、處也又北條の領地と成夫より天正年間に至
 りての年歴凡百三十有餘霜を経し間の地境なるべし
 元來此圖いづれの人又後人の製作なるやしらす既に
 其頃のものにして見ればはるかの星霜を経る山川道
 路の姿其荒廢今たがひぬるも多かるべし世移り物換
 り蒼海桑田の例なきにしもあらずと今更論じがたし
 蓋太古は荆棘茂り藪薙に屬したる地にして方角抄に
 も武藏は一國おしなべて野也といひしうちにて古歌
 に「行するは空もひとつに武藏野の草の原より出る

月かけ」かく詠せられしもむかしは今に改りたる勝
 地なれば里の名物の唱へも易りてさだかならざる事
 多くあるが中に陳跡舊名の幽に存せるもあり且波の
 さわぎの目ざましく血戰軍陣の街も今海内恬平に化
 し月に嘯き花にめづる風流の名境となり殊に東都は
 萬邦に秀でし繁花の大都會と成んぬ古今の沿革凡三
 百四十有餘年來の過にし蹟を今視るものならしとし
 か云
 寛政庚申年 大橋方長尺寸堂におゐて記之

凡例

- 一 凡圖中〔地名〕池沼宮寺此外朱印を以てす 今〇を以て朱印に代ふ
- 一 凡名區陳跡は天正十七年より以前の事をしるし同十八年後今のことに至りてはこゝに不云それは今世に行はるゝ江戸砂子其餘江都の地理をいふ書多ければ其書を以て照し合せて見るべし
- 一 凡神廟佛刹の開基草創起立縁記等は古書の正しきを引證とし且國中にあらざる事も其因に依て古き事どもは説を副る
- 一 凡舊蹟佳境は古歌古語を以て是を辨正す
- 一 凡古地の荒廢古今の沿革は古老の傳説舊聞異事等を専らとす此書元來俗談より出たる事も多ければ誤り傳へしことも少からずされば博知の後好士考訂を希ふものなり
- 一 凡書中に記す處の年歴は享和元辛酉年迄と知るべし
- 一 凡書中故事等江戸砂子に無之事且相違せる事あるべし其異同を疑ふまじき也

江都往古圖説目次

上卷

- | | |
|----------------------------------|---|
| 一 城郭 | 一 下平川村 <small>本住院三遺院
明神一三神明</small> |
| 一 上平川村 <small>池
築土神明</small> | 一 櫻田村 |
| 一 比々谷村 | 一 横山村 |
| 一 新倉村 | 一 大澤村 |
| 一 今井村 <small>神明
池</small> | 一 阿左布村 |
| 一 大根原村 | 一 國府方村 |
| 一 上澁谷村 | 一 下澁谷村 |
| 一 三田村 | 一 銀三田郷 |
| 一 高繩村 | 一 北品川村 |
| 一 南品川村 | 一 目黒本村 |
| 一 市谷村 | 一 千駄ヶ谷村 |
| 一 牛込村 | 一 原宿村 |
| 一 山中分 <small>戸塚
内</small> | 一 富塚村 |
| 一 落合村 | 一 池袋村 |
| 一 僧司谷村 | 一 中新井村 |
| 一 石神井村 | 一 練間村 |
| 一 谷原在家 | |

下卷

- 一 神田村
- 一 芝崎村道場
- 一 本郷村
- 一 巢鴨村
- 一 小日向村
- 一 平塚村
- 一 西ヶ原村
- 一 梶原堀内
- 一 瀧野川村
- 一 板橋村
- 一 志村
- 一 廣澤村
- 一 根岸村
- 一 金杉村
- 一 新堀村池
- 一 鳥越村
- 一 無戸分池
- 一 石濱村會下寺
- 一 大川宮戸川
荒川下流
- 一 新堀間村神田ノ内
- 一 湯島村神社
- 一 小石川村
- 一 金曾木村
- 一 駒込村
- 一 田端在家
- 一 尾久村
- 一 豊島村
- 一 十條村
- 一 大藏郷板橋ノ内
- 一 下谷村
- 一 代山村廣澤ノ内
- 一 箕輪高屋
- 一 谷中村
- 一 三河島村
- 一 淺草村觀音堂
- 一 千束村
- 一 阿佐ヶ谷
- 一 牛島村

- 一 柳島村
- 一 須田村
- 一 木下川村
- 一 龜高村
- 以上
- 一 石原村
- 一 關屋村
- 一 平井村
- 一 洲蓑沼二ヶ處

江戸往古圖説上卷

〔城郭〕 興基

康正二丙子年巧匠を始翌長祿元丁丑年四月八日成就す云

人皇百三代後花園院御宇京都將軍足利八代義政(稱東山殿)關東は足利左馬頭成氏(稱古河御所)執權山内上杉兵部大輔房顯扇谷上杉修理大夫定正是を兩上杉と云定正老臣太田備中守持資後に入道道灌此城築かれしより當今享和元辛酉年に至りて凡三百四十六年に及べり

此城地は今の西御丸の邊りのよしわづかなる構也と云其後の事憚りあれば爰に不記

此城郭の地を江戸郷と云よし今は惣名となれり

〔下平川村〕 北條分限帳に出

○本住院 文正中太田氏此地に建立其後柳原又谷中に移り元祿中今の地本所へ移る今の平川山法恩寺也開基より凡三百三十五年

鎮守 平川清水稻荷

番神堂之事 本朝三國志北條五代記等に載たる太田源六兄弟法恩寺の番神堂に集りて神水を香

て合戦の評議したるとは此法恩寺いまだ平川に有し時の事也

往古此地に平川といふ流れあり今の江戸川龍慶橋の筋より水道橋の上三崎稻荷社の邊より飯田町下まな板橋の所へわたり一ツ橋少し東南の方に流れ白銀町油町濱町の方に流れたり今の常盤橋も其川筋にかゝりしを大橋と呼しなり(今の川筋とはたがへり)

又云平川の一水を隔て三の丸をさして江戸の郷と稱し平川の北の方を神田の郷と云其小名を芝崎村といへるよし

○祝村 今の大手の邊也

○祝言寺 天文十二太田氏建立今淺草にあり草創より凡二百五十九年

○三逸院 是今の坂本養玉院也と云、此説非也養玉院元桔梗御門外に有て三明院と云よし)

○吉祥庵 太田氏平川に造立遠山丹波守中興今の駒込吉祥寺也

〔上平川村〕 今の平川御門わたりの邊歟

太田道灌江城鎮護として文明十戌年六月廿五日三

吉野天神宮を梅林坂に勧請天正中平川口に移され又慶長中今の地へ遷座にて舊名のまゝ平川天神と神號す 凡三百廿四年

此外に平川に造立の寺院多し尤太田氏草創之所今赤坂源照寺

○同浄土寺 牛込平川寺等也又押上大法寺（大永六年草創）凡二百七十六年

○麻布東福寺（藥師堂） 文明八造立より凡三百廿六年

○淺草誓願寺 今の西御丸下の邊にありと云其後神田銀町明曆中より今の地にうつる草創不知

○芝切通 金地院 古へ御城内に有と云都流の毛衣に云古へは神社裁判の事金地院にて取

行ふ寛永頃より武家の職となる今境内青葉楓も舊地より寺院ごとにも引るゝ所と云

○局澤 北條分限帳に此名出或云今の吹上邊と云新寺町善徳寺 專稱院 聖徳寺等あり

○梅林坂 牛込正藏院にあり太田氏建る處

○紅葉山

○四谷西迎寺 太田家士伏見助七建

或云柏崎永以の事の序と云書に載る處のよし龍之口巽角邊に江戸上宿人足間屋吉澤主計江戸下宿間屋馬込勘解由同馬借問屋宮邊又四郎

右之地者千代田寶田村の遺蹟なるべし

○大橋舊址 今の常盤橋古名也 此地いにしへ平川村の内歟

白石先生紳書に云是は昔より在し也平川より落入る流れに掛し橋なるべし其後今の京橋より本町筋迄の町出來しに至て川筋堀ひらき日本橋江戸橋も出來たるならんこれらは慶長五以後の事なるべしと云々

按るに京橋邊より北の方は後に開かる京師よりの往來は京橋向より赤坂へ出西の丸下へかゝり本町通りに至る

其頃は本町とはいふまじ古名不知是も白石先生の説也

○大橋柳町とて今のときわ橋内の邊にても有しか此地は遊女屋など住しといふ

又今の鎌倉河岸の邊其頃の古名不知此邊にも遊女屋ありしとぞ

○千代田村遺跡 今の龍之口邊ならんか今常盤橋内土手に千代田稻荷祠あり其地にありし神廟を後にうつせしもの歟しらす

○東光院藥師堂 慈覺大師の開基にて太田道灌尊敬有し處古へ今のときわ橋と呼し頃其北に在といふ其後今の小傳馬町邊に移りし也故に今藥師堂前の名残り今淺草にあり

但慈覺開基とあれば凡九百二三十年に及べり

○福田村舊跡 今の本石町銀町邊のわたりを左云しといふ今銀町向河岸御菓子師大久保氏も大橋の邊に在しよしト養の狂歌にも見へたり此大久保氏今居住の地内に福田稻荷の宮勧請有是福田村鎮守の神也

○白旗稻荷祠 是も福田村鎮守と云和銅年中起立と云

○寶田村 是は今の大手邊ならんか或は龍の口邊なるべし今の大傳馬町は其地より引かれしよし今馬込氏居住の地に寶田稻荷祠あり是は其町と共にこゝにうつされしよし太田道灌の句に「千代田より寶田いつる間米哉」此短冊馬込の家に今に傳へ

しといへり

○六本木村の跡 今の小傳馬町此地にうつらざる前の古名のよし是往還にて馬糞の宿也とぞ其後大傳馬町と同時に小傳馬町も同じ所より引しよし

○千代田諏訪稻荷祠 小傳馬上町新道にあり此祠は古へ湯島郷に有勧請の時は不知文明中太田氏湯島の地に天満宮造營の時忍ヶ岡に移し其後此地宮邊氏の地に祭る也千代田の號は寛正中道灌弟千代田若狭守勸請故に此號有と云江戸砂子に千代田村の遺跡と云は誤り也夫は南傳馬町の條に委し

○追廻し馬場遺址 馬喰町北裏通り今は常の馬場也是古へよりありしと云

此邊古へ馬喰町上寺町と云今元岩井町橋本町邊へかけて寺々多し

○淺草新堀 清水寺 此地より以前草創の地あらんなれど其舊跡しれず造立は慈覺開基は天長年中と云凡九百年來也

其外寺々ありといへ共いづれも此地以前起立の地あるよし其寺々後深川淺草へうつる也

○牛島渡し 今の兩國橋かゝらざる以前迄は渡し

也兩國橋掛りし頃は大橋と呼び其頃より常盤橋と改りしと也

〔櫻田村〕 今の外櫻田御門内外南をさしていふ

風土記に荏原郡櫻田郷の岡及び野櫻樹多きを以て也今は豊島郡に入ぬ倭名抄に櫻田郷出ず北條舊記に櫻田村みへたり

新著聞集に云櫻田虎の門より愛宕邊迄田地にて畔には櫻の木千方本もありし田の中の流れを櫻川といひし今の源助橋其時のしるしとて残りたるとかや(下略)

○櫻川 あたご下小流れを云古へ大に流れしと江戸砂子に今櫻田の名證残りたるは永田馬場飯山本多侯の内の御庭に往古の櫻の古樹一株あり古木は枯れて其根より枝葉生じ再び花咲今春毎に盛りをみする誠其古きを残すは此樹獨りのみ

○鳥森神祠 社傳に櫻田村に勸請鎮座年代は不知舊祠のよし藤原秀郷將門退治之頃奇瑞の事など載たり

○霞山稻荷 舊地往古は霞山と云よし社傳に云澁谷庄司重國勸請文明中太田道灌再興又頼朝公の時

云

按るに戀が窪といへるは多摩郡府中の邊也

其説區々にして一定しがたし然れども名高き古跡にて星霜二千餘歳にも及べる地境にして昔は今に改り世移り物換りて蒼海桑田の變なきにあらず今論じがたき事多しされば此わたり古へ京師より陸奥往復の地に相違あるまじ其境の姿を考るに外櫻田西南の方高く富士見坂にて下り又赤坂御門より向へ下ると餘程の坂也此地至て高き處霞山とも云しなるべくや

○泊船門 櫻田邊

○小田原門 今外櫻田御門の處を云し歟

〔比々谷村〕 今比日谷又比尾谷とも書し歟北條分限帳にも此名みゆ今比日谷と云邊也とぞ此わたり山もなきに谷とはいふかし按るに今霞關邊霞山とて高し其谷にてありしならんか又山下町も其山のふもとゆへの名なるや今のすがたにては論じがたし古へ此地入江にて舟入の地にて今の御用屋敷と稱する地は新井先生の話に云此地元來水の中なるを伊達政宗侯築かれし地と云々されば此邊入江の説

櫻田村美田五百七拾石寄附とあり御供田の印に櫻木多く植られ又要害を構へ江戸太郎重長に守らしめ往來を改めしむと云夫よりはるか後此地を麻生へ社と共に移され今の麻布(櫻田町百姓町)是也今もあたご下櫻田町久保町邊産土神とす

風土記に云櫻田神社は此霞山稻荷の事成と云別當霞山櫻田院と云

○霞關舊址 今藝州侯筑前侯のわたりをいへり風土記に云荏原郡霞關は日本武尊東征の頃開かれし所にして勝景の地其遠望霞雲を隔つ故に霞關の號ありと云これ當國第一の舊跡名所也今豊島郡に屬す

傳へ云往古奥州往還にして前の方海につゞき遠干潟にて岸の松生茂りたるよしいへり

宗祇名所方角抄に霞が關西に高き岡あり東向きの所なれば富士は見へず東に川流れたりと云々季吟翁の云淀橋を過て霞村と云あり此所霞が關のあとにや其謂は宗祇の云西の方高く富士はみへず東の方川流るとあり

廻國雜記に云霞が關を越て戀が窪といへる所有と

符合せり或云此地東南の方潮入の入江西北の方陸地と云馬場先邊の處は田畑の由八代州河岸の所獵師の住家にて海岸に寄りたる所と云今は比日谷の地新し橋より芝邊にうつされたり

或云土橋と云邊にて今魚賣有て是を業とするも其遺風也といふ

○深川法禪寺 往古八代洲河岸に在と云(中頃馬喰町に有後深川今の地に移る)

○山王宮舊蹟 糺町御堀端元山王谷町と云處也文明中(文明中より凡三百三十年來)太田道灌入間郡川越仙波より平川に勸請延徳中(延徳中より凡三百十有餘年)山の手城西に移され修造万治元溜池の上今の地へ遷座

初て平川に勸請より凡三百有餘年と云今山王末社稻荷祠に掛候處の鰐口あり其銘に願主遠山丹波守直景奉納天正十四戊戌年凡二百十六年也

是は山王宮舊地に在し頃遠山氏は北條家に屬し江戸在城也今大社と成し故相應せざるを以て末社にゆづりしものならん誠に江戸一二の古器と

いふべし

○貝塚 今平川三丁目裏通り邊の古名也(其説區區爰に略す)

○青松寺古跡 今平川の馬場より南の方を云故に今以て貝塚青松寺と呼り

○増上寺舊地 貝塚臺と云一に御堀ばたとも云至徳二丑年開基 古名光明寺と云由凡四百十七年圖面城郭南の方に池沼のかたちあるは今の溜池なるべし溜池古來よりありしと見ゆ圖初の砌りは上水に用ひられしや寛永の頃の圖に上水の源とされるたり

○市谷八幡宮舊地 市谷御門内北角今山本氏居住の地隅大木榎一株在る所と云寛永中今の市谷の地へ遷さるゝと云しかしながら今市谷八幡社地にある所の鐘の銘にも舊地の事は記さず

〔横山村〕 此名不知 北條舊記には載たり

或云今の飯田町のわたりを横山村の舊跡と云

〔新倉村〕 北條分限帳にも見えたり今の飯倉なるべし

按るに古への穀倉の跡の地ならん

山林鬱々としたる處也

○西窪に城山と云處あり熊谷直實居住の所と云是直實にあらず其類熊谷何某の館舎なる歟

此邊はいづれの屋敷にや鷲の宮と云有しよし是熊谷氏神にして武藏の住人私の黨の祖神也

武州崎玉郡私の市神社也村上帝の頃丹治何某大里郡に下向私の市太夫と號す

○飯倉八幡宮西窪 一條院寛弘中鎮座と云凡七百九十七年程

○加藤左馬之助舊地 切通し阿部家の地也と云

○勝手が原 赤羽根廣小路の所にしへ廣原のよし太田道灌出陣の時人數を揃へられし處といへり

○金杉西應寺 は應安中草創

○本芝海手三穗神祠 文明十二年鎮座凡三百有餘の古祠也

○飯倉熊野神祠 は養老中芝濱に勸請後に今の地へうつる凡一千有餘年也

○田町五丁目 三辻の所を元札の辻と云日本橋より一里昔の高札場と云

○三田八幡宮 田町七丁目

文武天皇義倉を諸國に建給ふ是貧民を救ひ給ふ古の善政也

○芝神明宮 寛弘二乙巳年鎮座舊地は飯倉のよし故に飯倉神明と云其後今の地に遷座あり寛弘より凡七百九十七年計りの舊社也

○増上寺 開基は百一代後小松院至徳二丑年貝塚に草創今の麴町平川邊其頃は光明寺と云此地へ移されしは慶長二酉年大伽藍と成るは同十巳年也誠に東方寺刹の冠たり貝塚に草創より凡四百十七年今の地へ移されしよりは二百餘年に及べり

武徳編年集成に云慶長三戌戌年武江龍口より去り天正辛卯年平川口に移されし増上寺を芝の地に移されしと云々

しからば天正十九年平川口に移され慶長三に龍口の口より芝の地へ移されしならん

○西窪の名舊記に見へず是も飯倉の内歟

○天徳寺 天文二草創始天知庵と云よし凡四百四十九年

○番神山 西窪仙石侯第宅の所 むかし太田氏出城の所と云古江戸圖を見るに此わたりより南の方

社傳に云一條院寛弘中草創 凡七百八十有餘年

風土記に蔭田八幡和銅二己酉八月始行神禮凡一千九十年一本風土記に箕田八幡(天平六辛未八月自宇佐宮遷御于茲凡一千七十有餘年)

今芝と云地は芝口橋より南の方田町高輪に至りての惣稱なり其地甚廣し

宗祇法師歌に 宗祇法師東都に來るは文龜二の頃也凡三百年計

やかぬよりもしほの煙名にそたつ

船にこりつむ芝のうら人

源持資歌に 平安紀行

露しけき道の芝生をふみちらし

こまにまかする明暮の空

此平安紀行は太田道灌道の記也

瀨名氏云南向茶話の朶の説不問談の斯波の説共に信じがたし今を以古をいふに似たり芝は則芝生にてむさし野につまき平原つまき芝生たるよりの名なるべしと此説是なるべし大永四年正月十三日品川高輪合戦に上杉朝興没落品川の宇田川和泉守芝十郎降参すと是を以みれば芝といふ名も古く云來

ならん

又芝口より金杉橋邊に至り東の方海邊にて今の新
錢座新網の邊など皆茅萱生て洲にてありしは遠か
らぬ事にや寛文の江戸圖にもみへたり

〔大澤村〕 今此名しるものまれ也是今赤坂の舊名に
して一ツ木町つゞきにわづかなる所を大澤町とい
へり古名の残りたる也北條氏康の武藏野紀行に大
澤の庄と見へたり今氷川の神事に大澤町の名出た
り

○一ツ木村 今一木町と成いにしへは一面の平原
にて一木原と云し鎌倉九代記に大永四年四月十二
日北條氏綱上杉朝興に打勝敵の首實檢し勝鬨をこ
り行ひし由見へたり此地町屋に成しも天正十九年
頃といふ

○平川山淨土寺 往古平川口にありしと云

○圓通寺の鐘銘深草元政の作也

〔今井村〕 今赤坂を惣名とす今井町と云

此地古へは荏原郡なるよし今豊島郡に屬す

此圖に神明と有は今の氷川神社の事なる歟
風土記に荏原郡赤坂庄古呂故岡天神白鳳三鎮座と

みへたり今氷川と稱す凡一千九十餘年の舊社也舊
地は今の赤坂御門外傳馬町坂上元氷川と稱する處
也今の地へ遷座ははるか後享保十四年也

○今井城跡と云所あり今松平藝州侯中館の所

是田子先生義賢出城の地と云或今井四郎兼平とも
云南向茶話に云赤坂の號は赤坂の地なれば稱する
なるべし既に濃州三州ともに赤坂と云あり何れも
山の土赤し故に號ると云往古の往還は府中より此
赤坂へかゝりて通せし事又一頃は相州の方より二
子へかゝりいなげの通りもあり夫にても赤坂へ通
せしとぞ又一頃は品川より芝へ出京橋邊より赤坂
の方へかゝり今の西の丸下其頃は城下なるべし本
町通りへ出ると云いづれにも赤坂とかく往還筋に
ありしよし故に赤坂傳馬町の名ありと云

〔阿左布村〕 北條分限帳に出今麻布と書又麻生と書

し由古く言傳ふ元荏原今豊島郡に屬す

此地往古麻布を多く植置き布など織出せるよりの名
なりと云又云淺生と書く時は草淺々と生るの謂と
もいへり

○善福寺 是元真言宗空海師開基大伽藍四百年程

後中興了海上人より改宗淨土眞宗とし夫より四百
有餘年とす山號を麻布山と云當所第一の古跡也

○氷川神社 麻布惣鎮守とす文明中太田道灌起立
なり凡三百有餘年と成

〔大根原村〕 北條分限帳にも出今此名不知巢鴨の邊
に此名ありしが是も今は此名呼ぶ事なし

氷川の舊地は今増上寺退院の所麻布大明神と號せ
し由武德安民記に慶長十八岐阜より敵の首數級の
内宗徒の首百廿をおくられ實檢有て麻布の原に埋
みて首塚を築く増上寺源譽上人(玉藏院忠義院)に
命て教養をさげらると云々此説不詳今の増上寺屋
敷の處ならんか

○一本松 六孫王經基の謂あり

或古老云古への建札とて今に此地へ持傳へしまゝ
是を見るに小野篁用木としるしあるよし

〔國府方村〕 北條分限帳に出今弁橋と云國府方橋の
轉せる也といふ又小貝の郷と云しとも又香具とも
或鶴ヶ谷とも書る由又云甲賀伊賀橋と云しを呼誤
りて弁と云とも江戸砂子に源經基龍川にて帶刀の
鉤匙を關守に給ひし故によつて鉤匙橋なるを後に

弁になりたるこの故事あり右の説々區々いづれを
是とし非とせんや國府方の説是とせんか此わたり
往古の往還といへるはさもあるべし百人町田町家
の内にも其古跡残りしと云

〔澁谷村〕 北條古記に見ゆ今上下村あり

往古谷盛と云或は矢盛とも

八幡宮邊は下澁谷也此地澁谷氏居住の地と云
當社は寛治六年勸請にて凡七百年にも及べり或は
云經基陣宿の所を改一寺となし親王院と號す是今
の東福寺の事也とぞ 八幡宮縁起に云河崎土佐守
基家軍功によつて武州谷盛庄を賜り寛治六年正月
此所に八幡宮を勸請一子重家(二十三)澁谷の姓を
賜る是澁谷氏の始其子を金王丸と云由載たり或云
龍見左京貞重入道澁谷を領す家系に云貞重子龍見
平次左衛門重明元弘三癸酉年三月十六日入間川合
戦に討死す

金王丸城址 八幡宮

河崎庄司次郎館址 堀内と云處

姉尾平次光景館址 同邊

澁谷重國屋敷跡 上澁谷岡部家下館内

○長者丸 澁谷長者と云し者住し所と云
 或此長者の墓と云所松前氏の内にありと云又丹羽
 家内にありとも何れが是なるをしらず
 ○長谷寺曹洞宗 天正十二の頃溜池よりこゝにうつ
 ると云

山口家傳に云當寺昔山口重政開基にて屋敷内に寺
 を建菩提所とす龍雲院と云重政母公の爲に起立す
 ると云是當寺の事也

○氷川神祠 澁谷川はた別當寶泉寺 慈覺開基
 【三田村】 和名抄三田風土記に 御田 箕田

北條舊記に三田彈正少弼とみゆ惣而國々往古神領
 に寄せられし所を御田神田と云地あり後年轉じて
 三田と書にや鶴峰文集の箕田園の記に云此地は會
 津大守下館に渡邊綱の陣迹也と云塚上に松を植て
 其印とす民俗古く云傳へしを證とするもの歟然る
 に舊記にもとつき考るに此地は三田家の舊領代々
 居住す其家譜を按るに三田河内守子駿河守綱勝住
 せしは武州三田とあり代々綱の文字を續ける故に
 後人誤る成べし又西の窟に三田八幡宮有り綱の石
 碑といふ有り年號も時代相違せりと云是も三田一

黨の碑ならんや又武州足立郡箕田郷八幡宮あり是
 源吾綱出生の地にて代々住する處にして其地に祭
 れる事渡邊系圖を以て見るに明白なり三才圖會に
 云綱老後に箕田に退居す其廟寺を建寶持寺と云然
 れば綱の遺跡箕田の本處足立郡箕田村うたがふ所
 なし

三田臺町の地にしへ六孫王經基東夷征伐の時出
 張の地と云是も足立郡箕田の事にや既に承平中經
 基武藏守を兼て其地に在城のよし今一基の碑を建
 其趣を記す其文に詳也

○春日神祠 當社は村上帝天徳中武藏國司藤原正
 房卿任國の時藤原宗廟たるによつて勸請あり鎮座
 より凡八百四十有餘年

○濟海寺 臺町 當寺往古竹柴寺と云よし藤原孝
 標の女のさらしな日記に出たり

【銀三田郷】 北條分限帳にも三田銀を載たり

風土記に金洲崎と云は此白銀の事の由今白銀
 荏原郡品川領一に麻布領ともいしへは此わたり
 すべて白銀原とて一圓の廣原のよし故に古跡もす
 くなし今も白銀臺町八丁目の邊を原と呼べる由

土筆が原は豊澤村の内也三田の原といへるは豊澤
 の西からの畑と云へり

○鷺森神明 白銀邊鎮守

社傳に云七十代後冷泉院御宇源賴義公白旗を納め
 祭れりと故に白旗山と號す

○雷電神宮 白銀村 神王山と云

社傳に云七十二代白河院の時祭る神軻かぐつち突智ちちの分
 身也と云

○三鉛坂 鷺森より白銀臺への通り

専心寺に有は三葉の松也土民はこゝを三鉛の松と
 云三鉛松は二本榎高野寺にあり

○氷川神祠 白銀惣鎮守とす

祭神武州大宮同社遙拜所と云鎮座年代不知至而舊
 社のよし

【高繩村】

是高繩手の下略なるべし今高輪と云其高輪といへ
 る地は田町より牛町二本榎へかけて高輪の内也と
 云古へ一圓の廣原にして既に大永戰場にて今の田
 町邊より白金二本榎品川大井わたり迄をさして高
 繩原と云し歟

北條盛衰記に云大永四年正月十三日上杉朝興品川
 へ打て出小田原の先陣と高輪原にて戦ひ北條氏綱
 後陣軍勢は澁谷へ廻りて前後より責かけ上杉方敗
 北此時宇多川和泉守芝十郎次郎降參谷ツ山邊も此
 時の血戦の場也されば此わたり軍戦のちまたにて
 彼のさわぎのおだやかならざりしも時なる哉海宇
 治平に化し浦風靜に安房上總を望み遠景いわんか
 たなしさしにも廣き平原も今は家居建つべき繁花
 の地とはなりぬ

○泉岳寺禪宗 元あさぶ臺にあり

○東禪寺同 同

○寶藏寺淨土 開山慈覺大師天台の佛閣にて大寺
 なりし兵火にかゝり今小院と成る

【品川村】 南北あり

元品川村といへるは今の地よりは西の方池上道北
 に平地あり今は畠と成東海寺南門向の岱也品川の
 民家品草を染て業とす往古御殿山ふもとより今の
 品川宿迄は一圓に洲にて今の道筋より上の方を往
 來せしといへり昔の街道といへるは荒蘭あらかん宿より矢
 口の筋にて今も一里塚の跡とて榎一株残り其道

筋は磯端近くて道あしきゆへ山道を往還せしよし

○兜島 今洲崎獵師町の古名也と云

此所に往古は往來の船を改めし番所ありて條目制札を立北條山内上杉等の制札寫猶當所に今存すと云

○寄木明神 同所日本武尊橘姫を祭る源義家公兜を納む

○南品川常行院天台 開山慈覺大師此邊第一の古跡也

○同所妙國寺法花宗 開山天目上人古へ七堂伽藍と云

草創年月不詳靈現の二王尊あり運慶作也

○さみつ觀音堂

弘法大師回國の時常所押領使品川氏に附せられ其家に有て品川左京亮迄傳へ應永中左京亮討死す夫より太田持資此品川を領する頃一字を建て安置す其後長祿元江戸の城にうつる文明の頃道灌鎌倉におゐて上杉定正の爲に死す兩上杉不和と成る關東亂れ諸社寺院破却に及べり北條武田と對争の時武

田は武藏の北方にかゝり此邊燒火す此時本尊武田家へ渡り夫より告ありて本土に歸し草堂に安置し承應元壬辰年法印弘尊なる者堂宇修造すと云

○海晏寺禪宗 開山道隆和尚

後深草院建長三辛亥五月七日此浦より大鮫上り腹内より正觀音の像慈現是當寺本尊にして此所を是より鮫洲と云今俗さみつと呼り 北條時頼堂塔建立あり凡五百五十餘年同六年春入佛同七年供養あり

平時頼石塔五輪

二階堂出羽守石塔

梶原石塔と云有 是梶原美濃守政景なる歟 當寺鐘寶徳三年榎本出羽守寄附鐘銘は古溪和尚製也

此品川の地建頃二階堂出羽守守護と云品川氏領せし始不詳左京亮に至り應永中絶へ享祿天文頃は北條家士宇多川和泉守居住

〔目黒本村〕 北條分限帳にも出 上中下三村とす

往古は一圓の曠野にて目黒原と云諸書に見へたり大永頃戰場也又永祿元龜頭圖面にもみへたるよし

○大鳥神祠 大同年間の鎮座のよし此地大鳥村と云此神は三日黒の氏神と云祭神日本武尊と云

○不動堂 慈覺大師草創の地と云

慈覺大師入寂は貞觀六同關東下向は貞觀元也凡九百四拾六年に及べり

或云本尊不動の像は元日本武尊也故に鳥居を立ちりなど云説あり

或云目黒不動尊を日本武尊と云は大鳥社の事を誤りしにもあらんかと云へり此目黒山地主の神は今本堂うしろ左右に祭る所の二神在 大行事權現は高皇產靈尊也早尾權現は素盞鳥又猿田彦とも云本地不動とす此神は五月十五日也此御神は不動尊安置以前より此地にありしなるべし然れども其年歴はしれずといへども誠に舊社也

〔市谷村〕 古書には市買に作るよし

八幡社は長祿中太田道灌勸請

境内茶の木稻荷は當山地主の神なるよし故に山號を(欠文)

此地も大永の兵亂に神殿破壊すと鐘の銘にみゆ 往古此地邊一面の芝原にて長延寺谷あるより市谷

の名あると云又長延寺谷の邊は大池ありて其餘水船河原と云地へ落たりと云

○藥王寺 是太田氏勸請の稻荷鎮守とす

○大窪天神祠 是安貞中明恵上人勸請

〔千駄ヶ谷村〕 北條分限帳に出 此地古は四谷の内也

古へ此地は萱野廣原なるよし八幡宮の地舊名は鳩の森と云よし其頃慈覺大師京師往復の時こゝに八幡神祠を勸請あるよし于時貞觀二庚辰年也凡九百四十五年に及べる舊社也

○聖福寺觀音堂 是行基北越遊行の頃此地に來て草創す神龜二乙丑年也凡千八十年に成此わたり往古のみちのく京師の街道也と云紫一本に云太田道灌順見の時此谷わたりの稻千駄も有べしとて千駄ヶ谷の名ありと云

○寂光寺 是元日蓮宗今天台とすいにしへ貝塚にありしといふ

○四ッ谷の名 古記に見へすいづれにも此邊往古は武藏野につゞきて曠野にして家居もまれにてわづか四軒のみあり甲州路の通りのよし自然と四ッ

家の名呼來りしものか此四家の末今四谷に一二軒残りてありと云

或は此地東西南北谷なる故四ツ谷の號ありとも云南向茶話に寛永十三外御廊出來御堀の揚土を以て東西の南谷を埋めしと也今に舊名残り鹽町入口を坂口と云又大木戸は南北谷にて深林の一筋道なれば往還を改めし所ならんと云元武家の預る所故今に其餘風にてこの辻番にはつく棒さす股を立置たりと云又此大木戸を霞ヶ關などいへるは非なり是大宗寺の山號を霞關山といへるより誤るものならんかの寺は元霞ヶ關邊にもありしかと云説あり是なるべし此霞ヶ關の説は季吟翁宗祇法師などの説あれども夫とも定がたし元頼朝鎮座ある太神宮の社傳に永承中源頼義吾妻堤の地に建立とあり

四谷の先淀橋を以て豊嶋郡多摩郡の界とす

〔牛込村〕 此地はいにしへ曠野にて牛飼養の地にてあらんと云

北條分限帳に牛込は大胡常陸守領と云

大胡氏は牛込家先祖西の窪城山と云より西北上高

田の地迄領せられしとぞ

上野國大胡城主大胡氏十代目に至り始めて武州牛込に移り北條氏康に屬し牛込並今井櫻田日尾谷其外下總堀切千葉を領して此牛込に居住大胡を改氏を牛込とす天文頃也

牛込城址今の菓店の上城地也と云牛込氏居城

○行光寺天會宗 開山慈覺大師往古は大寺にして惣門は今の牛込御門内の地にあり神樂坂に中門あり左右南天の並木あり又赤城社も當寺の鎮守と云大永の頃破壊に及べりとぞ

牛込市谷の邊は大永中戰場也と云

往古は赤城より目白迄の間皆田畑のよし改代町邊も水田にて早稲田高田猶田畑也榎町原町邊は野原也と云

○若宮八幡宮 若宮小路

文治中源頼朝建立むかしは大社なりしと云凡六百五十六年に至れり

○四谷天龍寺舊地 御細工町邊今に元天龍寺前と云

○築土八幡宮 津久戸とも書

往古上杉官領時氏岩の跡也其城主の弓矢を祭る處

○寺町閻魔堂養善院 は古へ平川口に有故に平川寺と云

○同所草刈藥師正藏院 長祿中太田道灌起立元平川梅林坂にあり其後田安にうつる

寺町白銀町邊は田安の地に古く住せし民家をうつさるゝ處也と南向茶話に見ゆ

○太田道灌別館之地 築戸山の西今の万昌院の地にして後は此所を御殿山と云いにしへ小日向邊田畑なりしを此御殿山を崩し築立られしゆへ今に築地と呼べり

○赤城神社 牛込惣社とす

當社は大胡の末葉牛込氏の勸請と云

○大友屋敷古跡

濟松寺の所にしへ大友宗五郎義延旅館の地と云

○宗參寺 は天文十三甲辰造立牛込氏勝行父重行の爲也境内の碑石に委し

○馬場下誓閑寺境内に小流れあり荏原豊島兩郡の境とす今本堂の方を荏原郡とす鐘の銘は武州荏原郡と記せり

○穴八幡宮 此地いにしへ阿彌陀山威成院中の坊と云古跡なりとぞ

〔山中分〕 北條舊記に戸塚の内と見ゆ今此名不知

〔富塚村〕 今の戸塚村なるよし此邊牛込郷高田戸塚村と云よし高田の地はいにしへ街道にてありしとぞ

○水稻荷社 は文龜二年上杉朝興勸請と云天文十九年牛込主膳時國修營

○寶泉寺 は禪英山と云是上杉朝興の追號なるべし當寺則朝興の建立也此寶泉寺内に富塚と云あり又云此境内は新田家陣所のよし旗立櫻冑掛梅等の名あり

○高田の名分限帳に出

高田馬場 は源頼朝勢揃ひ在し所と云又北の馬場は武田信玄北條攻の時馬を乗廻されし所ともいふ後人傳入ナリ太田道灌狩に出けるが雨を凌んとて民家に入て蓑をもとめしに一女棗棠の花をさし出したりける是は「とし毎に花はさけともやまふきのみのひとつたになきそ侘しき」といへる歌によりし也夫より道灌感發して和歌を好めりと是は童兒もしれる所

なり今高田の馬場のほり清水卿の御別荘の内方十間許の所に山吹あり是るの古跡を殘せりと朝三翁曾てひそかに其地を寓目しける時園丁の物語しけるとぞよりごころはあらざれども聊書して異聞にそなふ

○威光山法明寺 寺傳に云往古眞言宗の山にて威光寺と號

東鑑に云源家數代の御祈禱所威光寺と有るは當寺の事にて後に寺號を山號に改しと云草創は弘仁元庚寅年安永六に至て凡九百六十八年に及今の祖師堂其遺址にて祈禱殿と云今高祖の像を安置して祖師堂といへり

〔僧司谷村〕 北條分限帳に出今雜司谷と書す

此わたりいにしへ巢鴨の庄と云し由

○法明寺 は開基慈覺大師元天台の靈地也日源上人の頃日蓮宗と改開基より凡九百八十有餘年に及べり鬼子母神は永祿の頃清土と云地より掘出すと云清土又清戸とも書民俗はセイドゥと云へり此地に今三角の井と云あり此地鬼子母神出現の所と云

〔落合村〕 雜司ヶ谷に近し高田の内也と云

〔池袋村〕 同上

諏訪村といへるは池袋に近し諏訪社あり至て舊社鎮座不詳別當玄國寺鎮守此地古への鎌倉道と云頼朝公社參の事あり大窪の北高田の西也

〔中新居村〕 今中新井と云ぞうしがや西南壹貳里にあり

〔石神井村〕 上下村あり石神の社と云あり別當三寶寺神代の石劔也と云三寶寺池と云あり此下流王子村の方へ流るしかし此圖にては今の水筋とは少したがへり

〔練間村〕 今練馬と書上下二村あり江戸より三里餘大根名産とす

〔谷原在家〕 今谷原村なりまに隣れり

○長命寺眞言 佛閣あり是東の高野と云紀南高野をうつせし境なりしが今其かたち變たり

江戸往古圖説下巻

〔神田村〕 北條分限帳にも神田の名見へたり

風土記に神田又韓田公穀假粟畧之

神田の名義往古は一國に一所づ、神田と號せし地有て其歳の初穂を伊勢兩宮へ獻する舊例也とぞ今絶て此義なし然るに此地柴崎村を以神田とす故に神田大明神と云往古此わたりは皆田畑曠野の地の由古き書にみへたり小川町邊も三崎村とて田畑茅野なりと三崎神社の縁起にもみゆ此三崎稻荷の祠至て舊社のよししかれども鎮座年代は不知と云今の三川町の地も三ツの小流れ有しゆへ此名ありと云小川町も小川の流れありしゆへと云又其後の頃に至り國初の頃は通り町と三川町のみにて外は田畑寺院のみ也と云

○小川の清水 今の小川町内藤家宅地にありと云太田道灌の歌に

むさし野の小川の清水たえずして

岸の根芽を洗ひこそすれ

此歌關東古戦録に云富士見橋長に當て小き池あり道灌ある時眺望してとみへたり

○猿樂町といへるは白石先生の神書には觀世太夫屋敷有しゆへ此名ありと云尤是は御國初の御よりの事なれども因によつていふ

○新堀間村 神田の内とあり今此地不知道て可考

〔芝崎村〕 柴とも書今の神田橋内の邊也と云

古書に云平川と云流れを隔て北の方を神田郷芝崎村と云よし往古は茂りたる木立ありてこゝに

○神田神社 天平二庚午鎮座凡一千七十五年湯島臺今の地へ遷座あり 祭神 大己貴尊とす舊名のみ、神田大明神と神號す元和二年より百九十年許に成

○柴崎道場 今の淺草日輪寺也時宗遊行派遊行二世眞教坊草庵也延文中より凡四百四十九年其後柳原土手下に移り明暦五淺草今の地にうつりし也

此芝崎村の地は今の神田橋御門内今の淺草田甫慶印寺新堀の東漸寺など芝崎村に在しと云今の下谷

幡隨院も神田山と號すといへども舊地は湯島天神下也然ば古は此邊迄も神田に屬せしにや今麻布東福寺七佛藥師(傳教作)經基公守本尊ゆへに六孫王寺とも云文明八年道灌江城平川に安置其後神田に移せしといふは今の上野廣小路也然るを世に神田藥師と稱號せり今の地へ移りしは貞享頃也

○田安の名 北條分限帳に見へず 酒井氏云もし田安の號は平川村の中にもありしや
瀬名氏云今の番町より牛込御門内のわたり迄を下田安と云よし

○築土明神舊地 田安臺
永享記に曰太田道灌文明十年六月五日江城乾に田安明神を崇む是川越水川神社に准すと云

或云築土社元三の丸に鎮座天正十七年牛込門の内に移し元祿二今の牛込の地に遷座津久戸明神と號す又說文明之頃城内鎮守として平川に建立天正七田安に移し夫より四十年程後今の地へ遷座二に天正十七迄牛込御門内にありしといふ今飯田町氏子とす
南向茶話に此築土神社を風土記に載る江戸神社也

と此説如何未考此圖西城郭上の方に築土明神とあり築土の號は牛込へ遷座以後の事也
求涼雜記に云飯田町は往古千代田村と云田安につづき田畑なり後に飯田町と改ると云々
○世繼稻荷 文安の頃崇れり 太田道灌城地草創の初より此邊を田安と云しよしいへり
○飯田川 飯田町下雉子橋の方より入堀むかし神田川堀割以前は江戸川こゝを流るとぞ
小石川御門内高松侯南の方下水石橋を袖摺橋と云よし傳へいふ往古は市谷長圓寺池水牛込御門通りより飯田町堀止の水につき流れたり然るを後神田川堀割の時堀は埋て飯田町にて止め其時の堀筋に残りし橋也とぞ
今の神田川の流れ古へ江戸川龍慶橋の筋川南方へ流れて平川といふに落合也慶長の初駿河臺の地ひらけし時に至り水府公の前の堀淺草川へ堀つづけ其揚土を以て土堤を築き内外の隔出來たり其後仙臺侯奉命して其堀を深くほらせらる然ば神田川御茶の水堀割と云へるは後の事にて其以前より川筋は有しとぞ是万治二年也是を神田川と云

○三崎村舊地 小川町邊

○三崎稻荷祠 社傳に云上古の勸請にて年代詳ならず近くは天文七北條氏綱江戸千代田居城の頃造營あり此地其頃は田畑茅野也三崎村と云後年鷹匠町と云其後小川町と改ると云々
いにしへ今の雉子橋外より北の方大沼あり是より西飯田町もちの木坂と云へる下迄入江にて在る由

〔湯島村〕 倭名抄 湯島郷 風土記に湯島

北條分限帳にも此名見ゆ白石先生退私録に油井島と見ゆ

風土記に云湯島神社 九祭 雄朝津間雅子宿禰天皇御宇二年癸丑八月自官所祭天ノ手力雄神也神貢百束三毛田是天神社の西北隅戸隠神にして當山地主の神也凡一千二百九十有餘年の舊社也

○天満天神社 太田道灌文明十八年勸請也凡幾惠法師此地へ來りしは文明十九年にして北國紀行に云湯島といふ所有古松はるかにめぐりてしめのうちに武藏野の遠望かけたるに寒村の道すがら野梅盛に薫ず是は北野御神と聞しかば
忘れずは東風吹むすへ都まで

遠くしめの、その梅か、

○香月亭遺跡 太田道灌遊望之亭也と云
其處今さだかならず天神社の邊といふ又坂下寶珠辨財天の地にて今の池も其時のかたち残りたるともいふ又說柳原家屋敷の邊ならんともいへり一に大永中北條氏綱はからひととして本城に富永四郎左衛門二の丸には遠山四郎兵衛香月亭に太田源六兄弟をさし置云々
今神田明神社地の所舊名を篠崎と云しと南向茶話に見ゆ

○妻戀神社 至て舊社と云社傳に日本武尊東夷征伐歸陣の時此豊湯島に戈を納め一社を祭り妻戀明神と稱すと云祭神日本武尊橘姬倉稻魂神也今按ずるに往古白鳥神社といふは當社なるべし豊島郡の内に日本武尊を祭れるは妻戀より外に聞傳へずと江戸志にみへたり白鳥神社の説鳥越の條にてらし見べし或は今の駒込蓮光寺にしへ此社地にありしといふ此妻戀社は其頃蓮光寺境内にありしと云今駒込の寺地に妻戀稻荷と云有
○押上靈山寺淨土宗談林 舊地湯島妻戀坂

〔本郷村〕 湯島本郷と地脈相接ぎ或云本郷は元湯島の内といへり南向茶話に中興治亂記を引て太田康資本郷の館にあるよしを書き北條分限帳にも本郷の名出たり古老云今の元町といふ邊太田氏壘城ありし地にて今の地面深く掘る時は地中大石ありしと云又古記に云永祿の末本郷に北條家の太田篠原山角寺尾諏訪等の士在住すとあり

○鏡坂 往古こゝに武藏鏡を製せし者子孫ありて鏡を製せし所と云伊勢物語に歌あり今いふ五六鏡の事也續日本紀に元正靈龜二高麗人を武藏に遷す事あり此末の者其鏡を製せしとぞ

〔小石川村〕 此名北條分限帳にも出たり往古小石川といふ流れ有て大川のよしいへり既に牛天神社傳にも見ゆ船繫松かきながら坂網干坂などの名此邊にあり光圓寺の寺傳にも小石川の入江といふ事ありかの小石川の流れば巢鴨西北よりねこまた橋の方を通り傳通院うしろの邊を流れし大川也といふ光圓寺は行基開基天平中草創といふ其頃は此わたりを中臺村といひしゆへ中臺山の號ありしと縁起に見へたり

○水川神社 孝昭帝御宇鎮座と云又八幡太郎義家參籠の事あり三日月上人再興あり此地は上人卜居の聖岡庵の古蹟也

○水川白山神社舊地 應永中勸請と云四百有餘年

○極樂水宗慶寺 應永廿二より同廿七迄之間に草創

開基了譽三日月上人元傳寶院と云凡三百五拾餘年

○傳通院元 明德年間建立

○淨心寺 指谷町 天文十九太田新六郎康資母義

元平川口に建立有

○祥雲寺 遠山丹波守の開基此地へうつりしは慶

安正保の頃ならんか

○吹上 今水府大學侯の地古へ奥州街道とて大木

の板有と云今は此邊すべて大塚と呼べり

○大塚 是は太田塚の畧稱也といへる説あり此邊

七ヶ所に太田氏塚を築れしと云古へは東西大塚と

呼んで至て廣き地也鷄聲ヶ窪土井家の邊は東大塚

と云浪切不動の所なごを西大塚と云し由廻國雜記

に

我かたを思ひふかめて小石川

いつを瀬にとか戀わたるらん

風土記に足立郡巢鴨郷氷川神社を出す是武州一宮氷川の事にはあらず江戸の小石川氷川の事也と江戸志に記す又篠川原とあり是も小石川の事也と云猶考ふべし

〔巢鴨村〕 今小石川の内とす 風土記に巢鴨郷足立郡に入中興治亂記に應安元年正月六日芳賀入道禪可子息伊賀守高貞武州板橋原に打出ければ上杉兵庫頭憲將同兵部少輔能憲大將として千葉助直胤二千餘騎是も武州巢鴨に陣取のよし記せり

○鷄聲ヶ窪 今地名のやうになれり元皂莢原と云よし

此地土井家内に鷄聲ヶ窪古跡あるよしいへり今は酒井家の内に入たりと云

○眞性寺 は行基師開基也

〔金倉木村〕 今金杉村小石川に屬すといへども小日向に入組たり

古へ豊前山城守居住の所後に間宮と改め北條家に付間宮豊前守と名乗よし

○金杉天神社 今牛天神と稱す

源頼朝公元暦元年建立江戸砂子に北條氏康勸請のよしいへり非也是は氏康再興の事にてもあるべし

〔小日向村〕 和名抄日頭郷名あり小日向は日の頭の轉せる也と云

風土記に日頭公毅假粟貢物等載之又云風土記に白鳥神社と云を載す今しれず

或大己貴尊とも云勸請の年歴詳ならず凡四百年にも及祠とす太田道灌再興ありしと云然れば風土記の白鳥神社はもし是かと云説あり猶考べし

南向茶話に北條分限帳を引て云北條家の臣興津加賀守六十四貫貳百十六文領地の内江戸廻り落合櫻

田小日向とみゆ又小日向彌三郎知行所貳拾貳貫八百四拾文又小日向彈正屋敷あるよしいへり 往古

此地に白鳥池とて大池有よし今久永氏宅地にわづかに其名残りの池ありといふ又此邊いにしへ沼池

多しとぞ既に江戸川は關口の方より流れ小日向築地の間を通り飯田町の下へ流れしを後に神田川へ

水筋替れりといふ

○善仁寺一向宗 當寺開基は鶴高日向善仁と云者のよし境内に此鶴高の經塚と云あり又鶴高氏は中興

の開基の人ともいふ

江戸砂子に此鶴高日向の名によつて小日向の地名起りしやうにいへり此説いかいふかし然れ共水道町里正飯塚氏は鶴高の一族と云よし

○金剛寺 文明中太田道灌再興と云草創は頼朝時代にて有べし東鑑に治承六年に當寺の事みゆ今ここに實朝石碑太田道灌木像位牌あり

○上水端道祖神 牛天神別當龍門寺持也南向茶話に云當社は明德二年勸請龍門寺に青石にて勸請の碑石あり 求涼雜記に云此神は面足惶根兩尊故第六天と云々

○目白 道山幸神社一名駒塚神社と云あり關口臺町祭神猿田彦大神社傳に鎮座年歴不知舊社也と云往古此所廣原にて鎌倉街道の間道成と云

○上水

〔駒込村〕 是は古への收地なるべし込は多く集るの義と云古へ武藏野につゞき原多く牧地も所々にあり今駒込馬込牛込目黒など云地名の所は牛馬の飼養の所ならんと云

〔田端在家〕 北條分限帳に出 今田畑村と云

○八幡宮 文治五源頼朝勸請凡六百十五年に成別當東光寺開基は行基僧正也

○六阿彌陀四番目興樂寺開山行基

〔西ヶ原村〕

○昌林寺禪宗 往古補陀洛壽院と云本尊末木觀音行基開基應永中鎌倉持氏公母堂建立文明中太田道灌美田寄附大永五兵火にて堂宇灰燼と成

○六阿彌陀三番目 初長福寺と云

開山行基

此西ヶ原は北條舊記にみへたり平塚の内と云染井の名は見へず

〔尾久村〕 上下あり

〔梶原堀内村〕 豊島村つゞき荒川のはた此わたりに

○本村神明宮 は文治年間源頼朝勸請と云凡六百十有餘年に成

○三ツ家活妙寺法花宗 太田道灌草創と云同石碑有根津の地元駒込の内と云今根津社内裏門の方に有る駒込稻荷祠は此所の地主の神にして往古より有之御神と云へり根津の地にしへ田畑也今地名となる往古は伊留佐森といへる所よし根津縁起に見ゆ 根津權現の祠舊地は千駄木の方今元根津と云地にて不寝權現と云小祠ありよし名所記に來歴しれがたしと云武江神寺録に云當社祭神素盞鳥尊勸請或相殿大己貴命事代主神とあり或區々の説あれどもとるにたらずいづれにも往古よりの社なり

〔平塚村〕

北條家舊記を以て見ればすべて此邊平塚といへるが惣名にして西が原田畑中里王子わたり迄も此内と見ゆ今は平塚と稱する所わづか也然るに駒込邊迄を平塚の庄と云ひよし古きものには見ゆ平塚明神社傳に云平塚の名は奥州征伐の頃八幡太郎義家此地に甲冑を納らるゝ所にて今具足塚と云あり

堀内と云二ヶ所あり梶原村につゞく故に此名あり他國にも此類多く梶原村は此圖に欠く是は北條の頃梶原美濃守あり天文の頃豊島郡に住めり又梶原日向守と云ありこれらの古跡にもあるべし

〔豊島村〕 是豊島郡の豊島村といへばいにしへの郡府なるべし豊島左衛門清光舊蹟今に清光寺と云眞言寺院残り 延喜式の古蹟の地なるべし

○六阿彌陀一番目 靈場あり開基行基僧正にして神龜三丙寅年也凡一千八十餘年に及べり

〔瀧野川村〕 古名松橋辨天と云

源平盛衰記に瀧野川松橋に陣を取る事見へたりされば六百有餘年の古蹟也

〔十條村〕 王子在也 天正頃北條氏政臣遠藤何某領地也と云

此圖上に王子村を欠く其頃は何村にかこもりありしやされども王子神社はあり飛鳥山碑銘には元亨中豊島某起立の由記されたれども是は再營の年號成べし八幡太郎義家其後源頼朝公等參籠の説などあるよしをもてみる時は至て起立は久しき事と覺ゆ

〔大藏郷〕 此名未考

按るに北條分限帳に板橋内大谷郷といへる名みへたり若や是にて有べしと覺ゆ此大谷ヶ原は武藏名所に出たり今の庚申塚といへる邊と云よし古歌あり

〔志村〕 下板橋につゞき往還にて廣き野にして今も

志村の原と呼べり春は櫻草多く夏月より末に至りてきりくす松虫鈴虫音を發し虫聞の興あり元は堀内村とも云しが此邊りを志村の庄といへるよし

〔板橋村〕 上下邑あり下の方は驛場にて中仙道口江戸より二里上の方は練馬につゞき川越路也此わたりは野方領と云

○武王山安養院西明寺眞言宗 北條時頼建立と云
○板橋古城地 板橋肥後守居住の處千葉次郎に屬す鎌倉大草子に出す
又云志村に丸池と云ありむかしの川筋のよしいへり水鳥鯉鮒の類多し
右村々に添て川あり是戸田川にてあら川の流れ下流は淺草川につゞけり此川を以て豊島足立兩郡の界とす川向は上戸田村也

〔下谷村〕 此地湯島本郷の方より低く又上野の下な

ればとて下谷の名ある歟
風土記に下谷岡と出下略
○六阿彌陀常樂院 開山行基 順禮五番目下谷
○下谷稻荷社 下谷惣鎮守 今俗に廣徳寺前いなりと云

天平中行基勸請と云 凡千八十年許

天慶中將門追討の後藤原秀郷造營と社傳に見ゆ

〔代山村〕 今此名不知地理を考るに上野山下の邊の

地にてあらんか北條分限帳には廣澤内代山と見ゆ
上野の名此圖には載ざれども古き名にて北條舊記にも上野金杉など出たり元此地小高き岡にて草生茂りたる地なれば上野と云ひしよしへり又忍の岡とて八雲抄等にも武藏名所に出たり又森とも方角抄に

涼しさをならの葉風に先たちて 宗祇法師

夫木集しのぶをかむさし 忍ふか森に秋やきぬらん

我戀は忍ひの岡に秋暮て 慈鎮和尚

ほにいてやらぬしのゝをすゝき
廻國雜記に忍ぶ岡と云所にて松原の有けるにやすみて

霜の後あらはれにけり時雨をは 道與准后

忍ひの岡の松もかひなし

是文明十八年なり

北國紀行に武藏野の東のさかひ忍岡に優遊し時鎮座社五條天神と申侍り折ふし枯たる茅原を焼侍り契り置て誰かは春の初草に 堯惠法師

忍ひの岡の露の下もえ

此歌は文明十九年正月末の事にて

此五條の社は今下谷にあり其頃は今の上野山中のわたりにありしとぞ中堂初て建らるゝ頃遷せしといへり

五條天神は少彦名尊にて後に天滿天神を祭る處と云

又上野といふ名義の事は江戸砂子にも古へ藤堂家の第宅ありし故伊賀國上野に地理の似たるをもて號せらる且車坂屏風坂の名もありといふ然るに天正の後の頃此藤堂家のみにあらず津輕家堀家の宅

にて此家ありしよしもいへりいづれにも伊賀上野

に對していへると云は御草業後の事也夫より以前上野の名ありて北條家の時より聞へたり又今坂本の地に祀る小野照崎明神の社傳をみるに元此社今の上野山中の邊にあり寛永の頃にや今の地にうつされしなりいにしへ小野篁朝臣上野の國任終りて上京の時しばらく此地にとまり其處を亭といふこゝをさして上野殿と稱してより上野の號初るとあり

此邊りに池沼のかたちあり是不忍池なるべし

風土記に云篠輪津池周り三里計

〔廣澤村〕 今此名不知北條分限帳には廣澤村内代山

と出たり倭名抄風土記ともに廣岡の郷ありもし廣澤は廣岡の轉せしにや猶可考

〔根岸村〕 上野の下也よつて山の根岸なるべし

〔箕輪高屋〕 今三之輪とも箕輪とも書けり金杉のつづき也

慶安頃の圖に原宿村とあり北條舊記には箕輪守屋とあり往古此地は廣原にてみのわ原と云よし古老

の説也

〔金杉村〕 坂本のついき今町屋あり根岸の方に金杉

村あり此邊皆今上野領也

○坂本の名古きものにみへず元入谷村の内といへ

り

○小野照崎明神は小野篁の舊跡にして舊地は上野

山下門現龍院の所といふ此地へ移りしは寛永中也

〔谷中村〕 北條分限帳に此名出いにしへは谷にて三

崎についき駒込と上野の間なる故下谷に對してい

へるなるべし清水村清水稻荷の舊地は今の清水門

の邊也今は淺草駒形にあり是も寛永中にうつれり

とぞ今の本所法恩寺も同じ邊に有今伊豆侯の地也

駒込法花宗大乘寺も谷中に有しといふ當寺鐘の銘

は深草元政の作也今谷中に寺院多しといづれもいに

しへよりありしは永隆寺長樂寺善光寺舊地今善光

寺坂の所今の青山善光寺也

感應寺開山は日蓮上人元日蓮宗也今天台宗とす

〔新堀村〕 北條舊記に出今日暮里と云

諏訪縁起に云當所開發は行基僧正と云諏訪神祠は

豊島氏の勸請

中興太田道灌城内の鎮守に崇る由今道灌山といへ

るも此謂也とありいかにも其地砦城の跡と云も據

あり其地のありさま城地に必定せり元此地草木生

茂り家居もあらず次第にひらけし地のよし

○道灌山 古名は新堀山也船繫松といふも崖岸に

あり

道灌斥候臺丘といふ本行寺境内にあり其傍に筑波

先生碑銘あり此邊此類ひ七ヶ所の其一也といふ

〔三河島村〕 新堀村ついき

此邊いにしへ入海になりしと云蠣壳山と云あり

すべて此邊より尾久のわたりへかけて今も土中を

深く掘るに蠣壳多く出る也三河島はいろく説あ

れども一定なしがたし北條分限帳には此地細谷三

河守といへる人知行住居の所といへり

〔鳥越村〕 此名北條分限帳にも出たり

鳥越神社至て舊社のよし延暦大同の間鎮座といふ

年數凡千年に近し

祭神天兒屋根命一座

此地圖をもて視る時は海岸に寄りたる地にて堯惠

法師の北國紀行にしろせしも鳥越の海村とみへた

也

○第六天神社 欽明天皇の御宇起立と云凡八百年

計に及べり但し今の地にあらす舊地は今の御藏前

森田町元戸倉屋と云米商家のうちに其しるし今に

あり

○風土記に云 日頭 公毅假粟貢等略之

白鳥神社 白雉二辛亥五月所祭日本武尊也神貢五

十三東三毛田云々

和名抄に日頭郷名あり 此地今たしかならず

按るに鳥越の地往古海岸にて武州東方の地頭なれ

ば日の頭といふべき歟既に鳥越神社に熱田神社並

び立りとぞ熱田祭神は日本武尊とす然るに此地正

保二官命によりて武家の地と成其替地山谷にて給

はり熱田社と共に今の新鳥越へ移されたり風土記

に云白鳥神社は此社の事にてもあらんか又鳥越と

いへるも白鳥の縁にて號るにや或云小日向を日頭

の地と云説あり是は日に向といふ事をもてそれと

するにてもあらん又いにしへ江戸川の邊に

白鳥池と云ありし由又小日向邊惣鎮守とて氷川の

祠古く日輪寺境内にあれども此氷川は太田氏再興

り其頃は文明年間の事也其後次第に陸地となりた

るべし海陸の變遷ある事にて然るに右の紀行の文

章をみて今の姿にて考る時は三谷の新鳥越を古き

地と心うる也既に堯惠此地へ來りしはるか年歴を

經て官地となり其代りとして三谷へうつされてよ

り新鳥越の名あり其頃地所と共に熱田祠もうつさ

れ此地は元鳥越と呼し事明白なり

北國紀行 文明十九年也

治まれる波をかけてや筑波根の 堯惠法師

やまごしまねに春やたつらん

廻國雜記 文明十八年也

暮にけり宿りいつく急ぐ日に 道興准后

なれもねに行鳥越の里

○鳥越橋 天王町大通りにしへはこのわたり皆

鳥とへと云しやさすれば水邊にありし里に相違な

し

天王社鎮座年歴不詳明和元の頃迄凡七百年に及ぶ

舊社のよし求涼雜記に出たり

○銀杏八幡宮 福井町此祠は後冷泉院永承六年源

義家公奥州征伐の頃建立と云然れば是も古き社地

のよしにて古き祠なれども所祭は大己貴の神と云然ればそれとも一定しがたし猶考ふべし新鳥越に今在る鳥越山源壽院(浄土宗)此寺院も元鳥越に有て天慶頃の起立のよし寺傳にみゆ此寺も正保中移りし處也

〔淺草村〕 東鑑に淺草の名見へたり北條分限帳にもみゆ

往古下谷より此わたりへかけて平地にして武藏野の末にて草もおのづから淺々しき故淺草と云しなるべしといへりさもあらんか此末に淺茅原の名あり是も草のあさきをもちへり既に觀音堂の邊も一圓野原叢にて蕪蕪に屬するの地にて觀音靈像出現の頃草刈わらべの藜を以て假堂をもふけしと云されば

白川院の御製にも

武藏には霞か關や一ツ家の

石の枕や野寺あるてふ

○觀音堂 本尊出現は推古天皇二十六年當時迄凡一千百七十一年

藜堂舊跡 今の一の權現觀音草創の地也凡三百十

餘年の間こゝに安置

貞觀中慈覺大伽藍建立或は大化年間勝海上人再興とも中興開山ともいへり

當山地主の神は西の宮稻荷社と云或云稻荷にあらず稻荷境内右の方に小祠あり西の宮蛭子大神宮此神を以て神地とす故に稻荷をも西宮と稱するよし然れば鎮座至て久遠にして觀音出現以前年歴はしれず誠に舊社也當山第一の古木といへるは今傳法院門前に在る所の大榎也又本堂のうしろの相生銀杏至て大樹古木なるべし

五重塔并輪藏 駒形堂

朱雀院天慶五 安房大守平公雅建立

但し經藏天和中燒亡其後再興ありと云

神輿堂 本堂の戌亥の方福壽海と云額あり此堂は

古への普請也といふ

鐘樓 鐘銘には至徳四年丁卯五月とあり

馬の繪馬 民俗狩野古法眼筆と云非なり筆意古法

眼にあらすと云しかれども凡六七百年餘の星霜を

歴たる舊物にあるべしと云

宮戸森稻荷 江戸砂子に云當社は觀音出現以前の

舊社にていにしへ今の淺草川も宮戸川と稱し此地も宮戸森と唱へしよし

當觀音の地いにしへ森々たる木立にて此門前は奥州街道今の並木町も松原の並木といふ

或云近き頃並木町山屋などにて普請の時土中より大なる木の根を掘出したるよしいふ

六地藏石燈籠 廣小路東の方辻にあり

いかにも古物とみへたれども年代たしかなる事を不聞

廻國雜記に云淺草といへる所にどまりて冬の色はまた淺草のうら枯に

秋の露をも残す庭かな

此里のほどり石の枕といへるふしぎなる石ありと云

是の紀行は文明十八年の事也

東國紀行に云關東順禮觀音淺草と云所となむ

秋ならぬ木するの花も淺草の

露流れそふ角田川かな

是天正十二年の書なり

砂利場は古へは砂利取池と云今埋りて町屋と成新

安手筋に云淺草砂利取場元は岡にてありし所陸谷の變遷目前に有しとぞよほどの岡山のよし云々又田町の邊は皆田畑のよし

〔無戸村〕 今此名しれず

今花川戸今戸などの名あれども北條分限帳には其名きこへず此わたりの事にや

○待乳山 或は眞土山

歡喜天鎮座社傳に推古帝御宇當山に降臨ありといふ當山地主の神とて今末社に道灌稻荷と云小祠あり定て太田氏の勸請にありぬべし是を地主の神として歡喜天鎮座の年歴に合ざる也いかゞ猶考ふべし待乳山の名聞へしは文明十八年道與准后の道の記廻國雜記に歌あり

いかて我たのめもおかぬあつま路の

まつちの山にけふそきぬらん

しくれてもつるにもみちぬまつち山

落葉をときここからしそ吹

(勝地吐懐編に云淺草のうしろまつち山と呼ぶ

處あるは古歌によりて後の人の名付たるとおほ

し○按ずるに廻國雜記を以てみれば文明十八よ

り享和元に至り三百十五年に及べり)

○今戸八幡宮 康平六年勸請と云

〔千束村〕惣て淺草は千束郷といへるよし

淺草寺の鐘の銘にも千束郷と出

今龍泉寺持にて右寺院の脇に千束稻荷社あり又新

吉原の地もいにしへは此龍泉寺の境内なりとぞ今

龍泉町は下谷に屬せり

〔石濱村〕今橋場と云 北條分限帳に石濱領四十一

坪文と在り

砂尾郷石濱庄橋場村と云古へ今の渡しに橋を懸け

られし跡故橋場の名残りりと云 眞崎といへるも

本名は石濱也されば眞崎神明宮石華表にも石濱神

明宮とあり

○朝日皇神明宮 世に石濱神明と云土民は眞崎神

明と云

といへり廻國雜記に歌あり

〔阿佐谷〕今此邊此名不知今淺茅原と云ありもし此

地にてもあらんか淺茅原は總泉寺門前わづか計の

所をいへり

○鏡池 同所にしへ大池なりしといふ

○妙龜塚 同所縁起に云六十二代村上帝の御宇と

あり

○妙龜山總泉寺 橋場

當山中興開基 千葉介守胤法名總泉寺殿昌轍大居

士弘治三丁巳年十一月八日卒すと云又縁起に云妙

龜山と云山號は梅若丸母堂喜子局後妙龜尼といふ

終に妙龜大明神と崇祭れるをはじめとすことあり

梅若丸の時代

中興千葉氏開基弘治中より

又當寺に宇都宮彌三郎石塔と云あり弘安徳治の年

號なり彌三郎の名は彼家の通稱也是は中頃の人の

碑なるべし元祖にては有まじ此圖に會下寺と云あ

り是は今の總泉寺の事なるべし此地はいにしへ千

葉氏城地の所と云

廻國雜記に

聖武天皇神龜元甲子鎮座中古千葉介常時建立文治

五年源頼朝公奥州泰衡征伐の頃參籠ありと云

同所眞崎稻荷は千葉介兼胤の靈を祭る所と云

○橋場法源寺

○石濱古城蹟 總泉寺の地と云又者寺の後の所と

も云或は神明の北の方ともいへり其地不詳 千葉

系譜に云千葉守胤は天文中石濱に住して太田道灌

死後より五十年に及びしと云

○砂尾山不動院 天台宗 橋場

砂尾修理大夫建立此砂尾氏太田道灌と合戦あり是

を石濱争戦と云

○千松山本性寺法華宗 橋場

往古此地にて日蓮聖人諸宗と問答ありし所也是を

橋場問答と云傳ふ其舊跡今扇の如く芝残り松一本

あり本堂と番神堂の間也境内に秋山自雲の堂あり

世に痔の神といふ是近世の事也

○橋場渡し 隅田村へ渡る則隅田川也

此地むかしの奥州街道といふ

○駒洗川 古名思ひ川 今橋場の下小溝を云とぞ

南向茶話に云頼朝公角田川合戦の時馬を洗はれし

人めさへかれてさひしき夕まくれ

淺茅か原の霜を分けつる

此わたりすべて古戦場の地ゆへ今も首塚など云あ

り是を今はへび塚或は文塚などに轉せり蛇塚は總

泉寺うしろ畑中にあり文塚は眞崎稻荷門前道の端

にあり

○玉姫稻荷社 橋場田の中にあり

新田義貞祈願の事社傳に見ゆ然れば是も久しき宮

居なり

○山谷 或は三ッ谷とも云この地山なきに此名い

ぶかし又谷もなければ三ッ谷もふしんなり按るに淺

草の原淺茅が原などのつゞきにて三野ならんかと

江戸志にみゆ愚考に此地も野原の頃は家居もまば

らにてわづか三軒計も有しゆへ三家三屋にても有

しや此類他に多し

○山谷町うら易行院淨土宗 文龜二千戌起立と云然

し此地へ移りしは明曆二の由元は山の宿小出家屋

敷の處にありしよし

○小塚原飛鳥祠 祭神大己貴神事代主二神也中古

より素盞鳥命を合せ祭りて今箕輪天王と云舊き社

也天曆中鎮座

○此圖面右村々に添ふて流れあり今の隅田川淺草川なり古名宮戸川といふ此水源荒川と云秩父山中中津川大瀧とす大古此邊にては海の入江にて有しとぞ夫故漁人も住て海苔もとりしといへり既に眞土山も松山の森にて葛西迄もかすみに見わたせしといへり又北條氏康紀行にも此地へ來り隅田川より安房上總まで見晴らせしとみゆいかにも其頃は本所の地もわづかに今の小梅柳島龜戸わたりのやうに察す夫より時去りて今よりは百年前迄は本所も新島と呼びしと明暦の頃のものにみへたりいづれ後年に至り追々に本庄の地廣くなり川も狭くなりしなるべし觀音の地殺生を制せられしより其地の漁人業なくして品川の先大森村の邊へ移りにしとぞされば其古例をもて今に觀音祭りと云日には大森村より爰に來りて神輿を船中に移し守護す是其古への遺風成し由三社權現の前の碑銘に見ゆ

○古へ此大川を以て武藏下總の堺とせしよし延喜式倭名抄にも武藏の國は廿一郡とす葛飾郡の名みへす武藏に屬せしはいつの頃にや北條の頃の圖に

もむさしに葛飾郡の名なし

北國紀行に云是文明十七年の頃也

角田川の東岸は下總西岸は武藏野につゞけり利根入間の二河落あへる所に彼古き渡りあり東の渚に幽村あり西渚に孤村あり水面悠々として兩岸にひとしと云々

長門本平家物語源平盛衰記等に云

扱兵衛佐武藏の國と下總の界隅田川のはたに陣をさる(下略)しかれば治承の頃は葛飾いまだ下總に相違なし

瀬田問答に云本所中之郷林某の別荘に建る碑有

葛飾郡本下總國也貞享三丙寅春閏三月割利根川西屬武藏國云(下略)

萬葉集卷十四下總國の歌四首之内 作者不詳

爾保村里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之

キナトニカクテモヤモ 葛飾郡也 早稻 爲靈雖 我思戀人ナ云

伎乎刀爾多氏米也母

外 立セシ

はつ菊の稻にてにえをして纏する時は其一日門をさして人をゑらみ田作る時やとひ手つだひなどし

たる人々のみを纏する事也其時我思ふ戀人來りたりとも外にはたせまじ内へ入べきとよめる也

〔牛島村〕古へ本所邊の惣名を牛島と云し由今はわづか牛御前のわたりのみをいへり

○牛御前祠 慈覺大師開基貞觀二辰年勸請

凡八百四十五年 別當最勝寺北本所表町

或土中より掘出す石碑には貞觀十七未三月とあり

○秋葉祠 請地村 正應中勸請と云凡五百十有餘年

此邊今民俗向島と呼べり本名小梅洲崎村之内也又庵崎と云名あれども是は隅田川眞土山の名に寄せ夕越くれば庵崎のといへる辨基の歌にもとづき名付しものならん此歌は駿河國の詠なり

川越記に云庵崎まつち山世に移りにたる名を残し侍ると(下略)此川越記は天文頃の書にて證文にはたいしきもの也然れば凡貳百六七十一年にも及呼來りし也

〔柳島村〕今妙見堂の邊と云

龜戸の名古きものに見へず舊名何と呼びし地にや然るに此地には至て古跡あるを以て見れば古名は

たしかならざれども其地は至て古き所也

○香取神祠 龜戸鎮守と云 藤原鎌足公勸請と云

正治建仁の間起立と云凡六七百有餘年也

○寶蓮寺 吾妻森別當也

乾元二年開基 凡五百年計

○吾妻森 小室井村

景行天皇御宇鎮座と云へば誠に東武第一の古跡と云べしとすれば凡二千有餘年に及べり中興開基正治二也凡六百有餘年に成

○六阿彌陀六番目靈場 行基開基別當常光寺凡千有餘年に及べり

○龜戸普門院 は大永中隅田川邊りに有之年月不知其後此地に移るよし淺草川鐘ヶ淵の鐘は當院此地へうつる時鐘沈没する所と云其旨趣鐘銘に委し或龜戸邊の地古への往還の由日蓮上人房州より鎌倉へ通行の路も此所なりといへり既に千葉石に誓

ひを立て廣布石と號る由大法寺縁起に見へたり

○寺島村 白髭祠 天曆五年勸請と云凡八百有餘年

○本所元本庄と書しよし古へ下總の一郡也今は武

州葛飾郡西葛西領と云武藏廿二郡なり延喜式倭名抄ともに武藏廿一郡にして此郡は下總とす拾芥抄には武藏廿四郡とあれど此郡はなし然れども東鑑に武藏住人葛西三郎清重と出太平記には武藏住人葛西太郎なごみゆ小田原北條の頃は遠山彌九郎葛西在城と南向茶話にみへたりいつの頃よりか此一郡を武藏に屬せられ利根川をもて武總の界とはなりけん

又本所の地いにしへは新イ嶋或は牛島新田など云又柳島出村などいひしとなり今の御舟藏邊は柳島の内大西と云よし江戸鹿子にみゆ然るに其ころは此地は渺々たる芝野茅原葭生茂り或は田畑にして隅田淺草の流れに添て堤あり今も回向院前に土堤側の名残れり南割下水は古へ田畑の頃の用水堀の址と云

都流の毛衣と云書にも本所元芝野或は田畑也と云此地至て古き跡は龜戸柳島隅田牛島の邊りにあり南の方兩國邊より立川わたりへかけて古跡なきをもて察すべし

○中ノ郷邊には古跡あり業平天神縁起を以てみれ

ば在五中將卿の事に寄せて今誤て中ノ郷になりたる云

按るに上郷中郷下郷の残りたるなるべしと覺ゆ中ノ郷普賢寺第六天別當也 文明五年起立凡三百有餘年

同多田薬師 別當東江寺 天正十一年起立

同泉龍寺 八幡別當也 文明三年起立

同八幡宮 文明七年鎮座

同太子堂 如意輪寺 慈覺大師開基也

北本所表町神明宮 鎮座は貞觀二年といふ凡八百有餘年

原庭成就寺 正和二年草創

小梅代地福嚴寺 延徳三年草創

〔石原村〕

妙源寺法華宗 あら井町 建武中草創 凡四百七十有餘年

清光寺天台宗 文明三年草創

本久寺法華宗 天正三年草創

○小梅村 はいにしへ梅が原と云し地也と三圍縁起にみゆ

○三圍稻荷祠 開山弘法大師 別當延命寺

○中郷業平天神祠

求涼雜記に云往古此社横川向小梅に在横川堀割頃今の地へ移さる舊地は今水戸公御館舎内に入とぞ

〔須田村〕 今隅田村と云

古へ隅田川と云しは今呼所にあらず木母寺の後也今是を古隅田川といへり

○木母寺梅若塚 貞元中起立と云 凡六百八十餘年

武藏野紀行 北條氏康 此紀行天文十九年也

都鳥すみた川原に舟はあれど

た、其人は名のみ在原

北國紀行 養憲法師 此紀行は文明十七年也

浪の上のむかしをよへはすみた川

霞や白き鳥の涙に

廻國雜記 此紀行同じ

古塚のかけ行水のすみた川

聞わたりてもぬる、袖かな

同

おもふ人なき身なれども隅田川

名もむつまじき都鳥哉

此外畧す

〔關屋村〕 今此名なし關屋里跡とて木母寺うしろ牛田と云處に其印の松二本あるよし

照高院御門主御歌

歸るさの道に關屋の里もあれや

すみた河原のあかぬ詠に

〔木下川村〕 薬師堂 別當淨光寺

開基慈覺貞觀二年より享和二戌春開帳の時迄凡五百四十三年に成木下川村薬師佛像縁起に委し

北條氏康武藏野巡見の頃當時に宿りて歌あり武藏野紀行に出是天文十五年仲秋の事也

松風の吹聲聞けは夜もすから

調へことなるねこそかわらね

此歌扶桑拾葉に入

〔平井村〕 上下村あり龜戸より中川を渡りて向ふ也

此邊村々多し此圖になきゆへ其説を欠く

〔龜高村〕 木名木川末砂村邊今存す

持寶院真言

今深川の地は本所より後にひらけしならん深川と

書て是也深に作るは非也西葛西領也古きものには
深川新田とみへたり永代島の邊其外深川の地に古
跡かつてあらず

○洲渡沼 一に島ともあり海汀の所に此かたち二
品あり

按るに是今の濱町たりより八丁堀木挽町などの
地へかけての地所にて未生以前のすがたならんか
既に元渡原の地ははるか後の年元和三の頃に及び
沼池渡場を埋み築き開發ありしといふ

○圖面上の方より右へかけて朱筋一通り有是古へ
の官道にて京師よりみちのくへ往復の古跡也傳へ
云此圖は東の方は海岸池沼多くして往來あしよよ
つて西の方山の手にて通路したりとぞ此朱筋の
通 古記を以て考るに往還に相違なかるべし其地
其地古道といへる證あり今に傳稱する所多し或云
武藏も東海道に屬して古へ觀察使も東海道より今
の稻毛通りを來り給ふ也又古へ夫より西の方府中
あたりも通せしよし時代によつて道筋の變する事
諸國に多し

此圖の道筋にては西の方目黒の上(世田谷通り也)

澁谷青山百人町西北原宿を経て千駄ヶ谷八幡門前
四谷より高田雜司ヶ谷法明寺寺脇通り護國寺うし
ろの方より板橋を横に見て瀧野川豊島村(一に豊
島より千住の方へ古道一筋ありと云)西ヶ原平塚
より石濱へ出隅田川にかゝり往來すと云此外に道
筋あり青山百人町よりかゝり相州小田原へ往來せ
しを中道と呼んで東海道より二里近しと云
源持資平安紀行は文明十二年也此時の道筋芝より
大森河崎かの川とつゞき東海道を京師に至れり
北條氏康武藏野道紀は天文十五年也此路筋は小田
原を發し鎌倉へ出藤澤甲斐國より武藏に入むさし
野にて

むさし野はいつくをさしてわけ入ん
行も歸るもはてしなけれは

夫より長井の庄(此長井の庄未考)夫より大澤の庄
此大澤は今の赤坂なり是よりすみだ川に至る

慶長年間江戸圖考

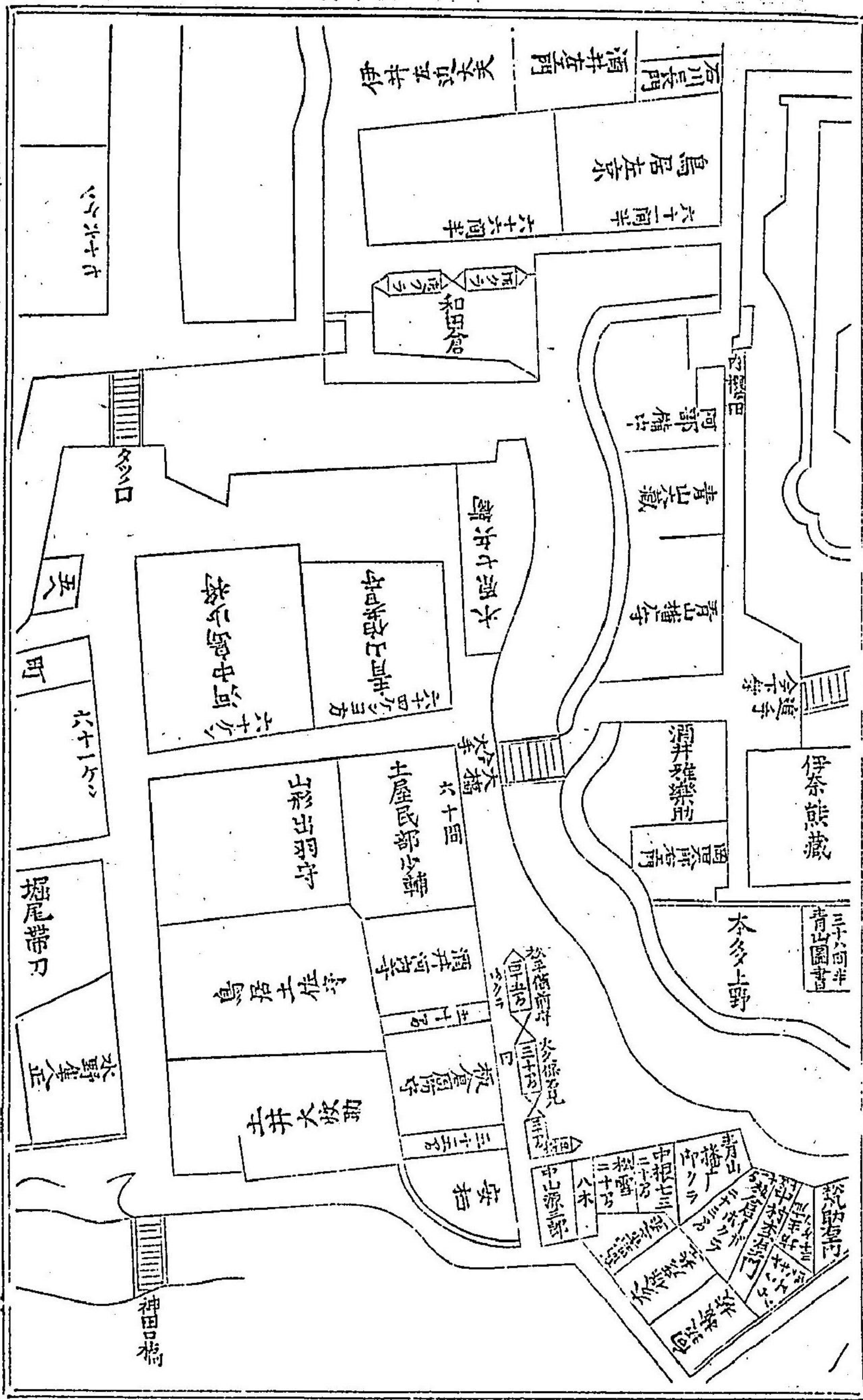
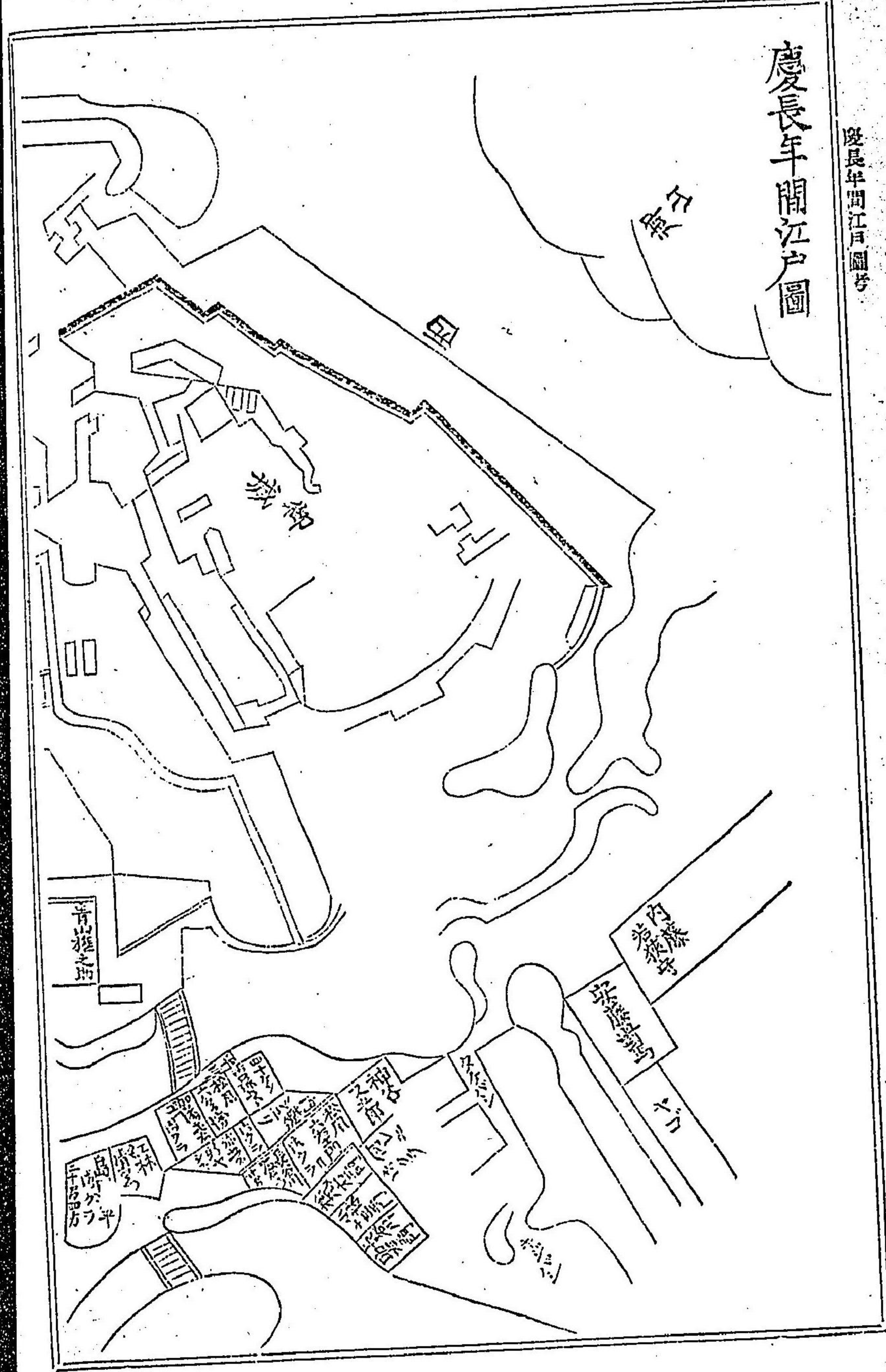
世にふりたる江戸書圖は長祿長亨にますものなしし
かれども彼二本はこゝろ得難き事なきにあらず昔鎌
倉管領及北條氏のとき城邑の書圖ありて今の世に遺
らんにには武藏のうちにも八王寺忍岸附等その他なほ
あり何ぞ江戸のみ二本傳りて他邑は一本も遺ざるや
是疑ふべきの一つ也梅龍園主人も亦云彼長祿の江戸
書圖を見るに千速村と石濱村の間に會下寺といふあ
り會下といふ寺號やばある是疑ふべきの二なり願ふ
に好事者北條分限帳などより取よせて後に作れるも
の歟といへり然れども據どころなきにあらねば姑く
温故の一助とすべし又近ごろ元和の江戸書圖出づと
いふわれいまだその果否をしらず古印本は寛永の一
張のみこれも多くは寫本にして當初の刻本は稀なり
元和寛永よりあなたのは見るよしなしと思ひつる
にある人の藏弄に慶長中の江戸繪圖あり曩に梅龍園
主人巨細に攷證して伴の地圖を慶長十四年の物とす
その辨論竟に一卷をなして縮圖を卷の端に載し命て
慶長江戸圖考といふ余幸に閱することを得て圖説の

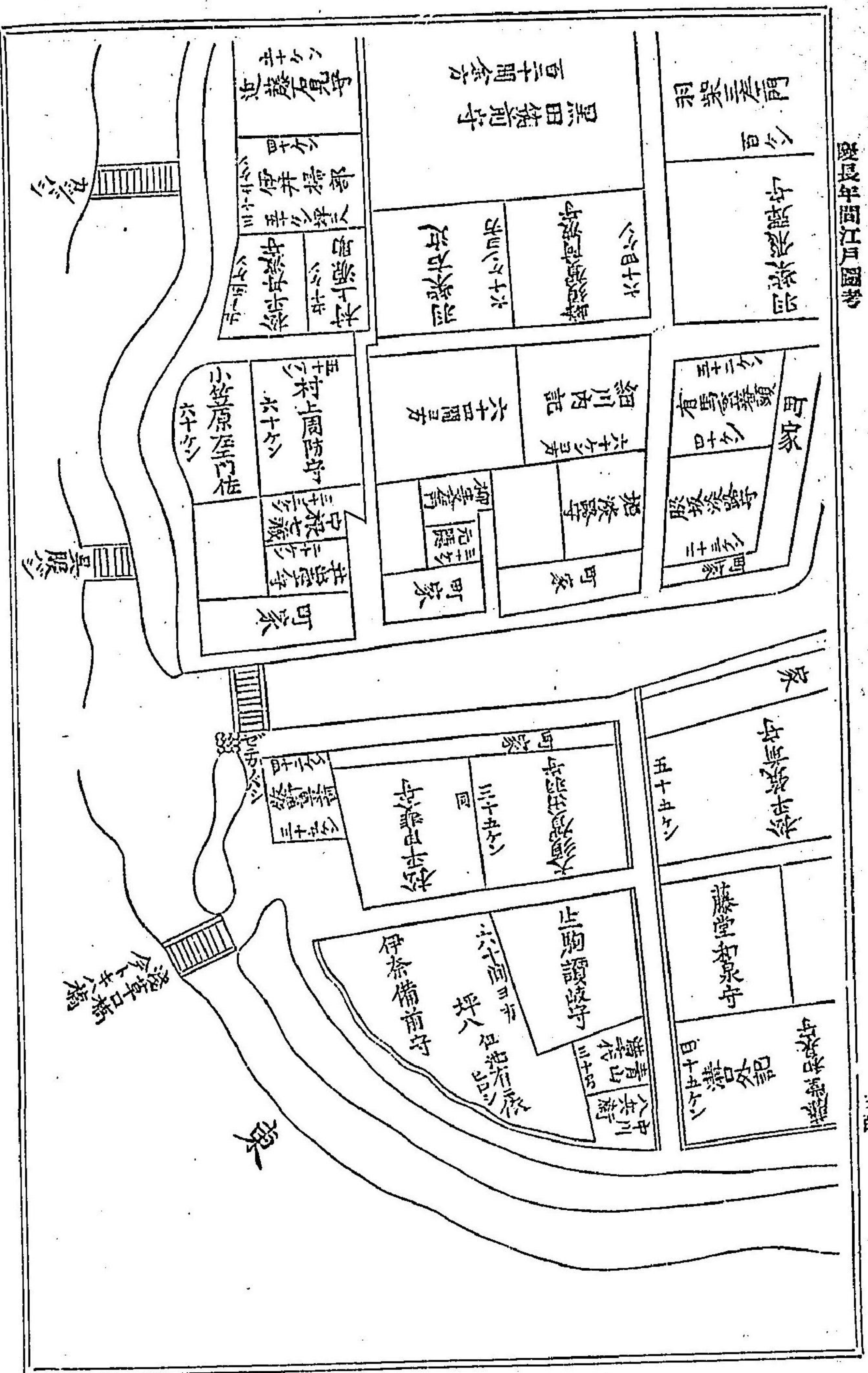
精細なるをしれり凡圖中に在どころ今の什が二三に
だも過すその街坊のごときは就中はづかにして一ツ
も町名を唱るものなく御橋の名も識ざる多かり是を
寛永中の江戸圖に比校れば更に簡古といふべし且そ
の考證するどころ北條分限帳開略記慶長記見聞集
この他得がたきの舊記多かりこの書もし世に出なば
大江戸の古圖てふ物はなべて一ト卷に盡せりといは
ん

右抄録玄同放言中而載卷首

活東子

慶長年間江戸圖





慶長年間江戸圖考

慶長年中の江戸圖はいづれの年になりしや其まさしき事を傳えず或云十二年に成りしものなりといづれ其頃の圖なる事は勿論なりされど十二年とも定め難き歟今按るに此圖に載る井伊掃部頭直孝は慶長十三年叙任せり(月日を詳にせず)爰に掃部とあるは頭の文字を畧せしなるべし外にも此例多し(酒井雅樂頭慶長十二年七月三日に改む)藤堂佐渡守高虎も同き年和泉守に改む内藤修理亮清成は同年十月二十日五拾四歳にて卒せり大須賀出羽守忠政は十三年九月十一日廿七歳にて卒す忠政が十二年に卒せしといふは疑ふべし(諸記を按るに皆忠政が卒年八拾壹歳とすれば現存のごとくしるせしにや)細川内記忠興は十四年四月五日叙爵して越中守となれりされど爰に内記とのす此等をもつて按るに此圖の成しは慶長十三年より十四年の間と見ゆ是を委しくは十三年の冬の頃と見へたりされどかゝるものには卒せし人の名をも改めざる事まゝあれば叙任の方をもつて推を

まさしとせんか夫も大家には其家に世々唱へ來りし名を記す事もあれば必とも言がたし何れにも十三年に成しといはんは大やうたがはざるべし又或説に此圖は西南の方見へされば元武枚ありしもの、今は其壹枚残りしならん此説もうけがたしその故は見聞集に云(此書は慶長十九年に成しもの也)江戸より外へ出るに五方の口あり南は品川口西は田安口(是より外をば此頃田安のはらとも云へり)北は神田口(是より外を神田といへり)東は淺草口又舟口といふなり(此所は下に辨せり)北條五代記にも西は(南の誤りなるべし)志波口東は淺草口とあり(此志波口といふは則品川口の事成べし今もしば口と唱る所芝はほゞ此圖に備はれる成べし其及ばざる所は此圖の成る所此頃の御城の左右なる諸家の屋敷の廣狭などを専らとすればなり抑慶長のはじめ江戸内といふは南の方は今の芝口よりこなた大名旗本の邸宅多く夫より品川へかけては町家續きしと見ゆ是東海道の大路なれば此頃も殊に賑ひし成べし此邊より東南は海邊なり西北には櫻田山あり麴町の方へ續けり麴町の

邊をも古へは山の手といへり又初にも載ることく江戸より西は田安の原といへば此田安口より出れば今の番丁のあたり旗本の土屋敷杯も少しは有しなるべけれ共多くは山野也しと見ゆ北の方神田口の外にも原有て其内神田山柳原の方へ掛りてあり夫に續き今の駿河臺より本郷へかけては皆山々なり見聞集に江戸の邊神田の原より板橋迄見渡し竹木は一本もなし皆野原なりしが(按に爰にいふ所はわづかの間の變遷と見ゆ慶長初年迄は此邊神田山なりしに同八年其山を掘崩しければ其跡原と成し故竹木もなし限なく遠き方迄見渡されたる成べし其取崩せし事は下にあり)今は榮ゆくまで(慶長十九年の頃を云なるべし)あたりの野原三里四方に家を作りふさぎし(外曲輪迄立らるゝ神社佛閣等もほゞ出来しならん世に傳ふる正保年中の江戸圖を見て推て知べし)東は淺草口といへるは今の常盤橋なるべし(此橋むかしは大橋と云り)是より淺草の方へは町も續き昔よりの街道なり北條家より天正の頃出せし宿次の文章あり其文に云傳馬一疋可仕候但彼出家に可渡者也仍如件壬午九月九日直景(遠山左衛門なるべし)壬午は天正十

年なるか)江戸淺草葛西新宿但是は白井迄是にて江戸より淺草へ宿次の海道なる事見るべし舟口といふは川舟の江戸へ入る口といへる意ならん其所は定かならねど今の錢瓶橋の船入の所をいふか此頃舟町といひしも爰ならん又同書云舟町と(此圖に載る今の道三河岸の端なる町家をいふなるべし)四日市の間に(四日市はむかしよりの名也)ちいさき橋唯一つ有(是も御打入の前より掛りし橋なるべし)是は往來の橋なり文祿四年夏の頃(翌年は慶長元年なり)此橋の許にて錢瓶を掘出す永樂京錢(京錢は鑄錢の事にて古くより用ひし也)打交りて有しを四日市の者共此錢瓶を町の兩御代官(按に此後貳人地奉行といひし由古き物に見へたりいまだ町奉行杯いふ唱へはなし地奉行といへるは古き唱にて東鑑にも見へたり)板倉四郎左衛門殿彦坂小刑部殿へ捧申たり夫より此橋を錢瓶橋と名付たり其はし柵橋ともはみな朽はて、其跡堀川と成(今の道三河岸の堀を云り)今は夥敷橋掛り昔の柵橋は絶て久しく成ぬれば名こそ流れて猶聞へけれど古き言の葉ぞおもひ出にけること云々北條五代記に町には西は(南の誤歟)志波口に舞臺を立置

毎月晦日勸進能有りて諸人見物すと云淺草口にも同じく舞臺有し是は慶長五年關ヶ原の役終りて後諸侯旗本の面々江戸につどひて世もおさまりしかばかかる事も免されて諸人の勞をなぐさめられしものならんされば慶長十二年二月十三日より御本丸と西丸の間今の紅葉山下の邊にて觀世今春が乞ひ奉りしに任せられて勸進能を始め興行す同廿日國といへる女來りて歌舞妓をさへかの能の跡にてせし事も有し也諸人をなぐさめ士風を和らげ給ひし故此頃の江戸のさまをおもひやるべし扱も慶長八年癸卯の後武家町屋杯粗定りて十三年の頃江戸圖を作りて官府におかれしは則此圖なるべし其載る所も神田口橋淺草口橋あり是はまさしき唱へにて御打入の前よりも有し成べし其餘今の呉服橋鍛冶橋といふものありしなるべし其餘見ゆれど只橋のみ記して名なし其名は下町も出來て町の名も定りてよりの唱へなるべければ此頃は未だ載ざるもむべなり又今こそ橋の名と成たれど其頃は公のものにするすことあらざりしならん又錢瓶橋とおぼしき橋有り是はかの舟口と云所にて其名をのせず又西北の方に掛れる橋あるはいまの一ッ

橋なるべし昔丸木を一本わたしたる橋有ければ是を一ッ橋丸き橋とも云ならわせりと又此木一本云御入國の時大なる丸木の一ッ橋をかけしより此名ありと寛永九年の江戸圖には一ッ橋とのすまた是より西北の方に口有り是は雉子橋御門の建る所也此門を出て右の方に雉子橋有り見聞集に云關東へ御打入の以後唐國の帝より日本へ勅使わたり數百人の唐人江戸へ來たり(按に慶長十二年壬辰四月朝鮮國の三使江戸へ來れり信使呂祐吉副使慶遠從事丁好寛といひし者也是是等をもてなし給ふには雉子にまさる好物なしとて諸國より雉子をあつめ給ふ此流の水上に鳥屋を作り(此流は柳原へ出る也其事下にあり)雉子を限なく入置ぬ其雉子やの邊りに橋一ッありけり夫を雉子橋と名付たりと是もまさしき名にはあらで後の世の人假初にいひ習はせし事なれば此圖には雉子橋口をも載ざるならん又此南の方に有口は竹橋なるべし同書に云竹をのみみて渡したる橋あり是をば簀子橋とも名付たりと事蹟合考に云平川口竹橋の邊は藤堂佐渡守高虎が繩張なり功者の所爲也云々又大坂兩度の御陣の

時松平大膳大夫忠重江戸竹橋口御門の守を勤むと其家譜に見へたり此頃の御門といへるは今は異なるべし或書に竹橋はむかし有竹橋といへり北條の家譜人に有竹攝津守といへる者有(按るに攝津守は伊勢新九郎と共に京都より駿河に下りし有竹兵衛尉が一族)永祿七年鴻の臺の合戦の時討死す其子を彦四郎と云り父が討死の忠により上總國推津城を賜ひ其身は江戸二の曲輪に置く彦四郎が家の者共は神田竹橋に置くより其ころ有竹橋と云しを後に呼よき儘に竹橋といへり彦四郎は小田原没落の時推津の城に於て討死す子孫今に會津の藩士たりと此竹橋の西の方にも御門とおぼしき所見ゆ是は今の矢來口といはんにも西へ寄り過たり此處は御搦のやうなれども大に變革ありしと見ゆれば今よりいかにとも言難し此餘田安口品川口を記さるは此圖に載る所其地に至らざれば成べし扱も御打入の後江戸の地にして上方の諸侯に邸宅を賜ひし始は櫻田のかた尤早かるべし落穂集に云慶長五年關ヶ原御一戰御勝利有し後上方の衆のうちにては藤堂高虎(佐渡守)關東衆にては伊達政宗(陸奥守)の兩人を始として何れも江戸御城の邊

にて屋敷を賜ひ候様乞奉りしが東照宮被仰しは何れも大坂に居宅あれば江戸にて新に賜ふ事成難き旨なりしが兎角賜り度由頼りに乞しかば外櫻田邊と今の大名小路と云るあたりにて東西の外様大名衆と云る面々へ屋敷を賜し也(伊達政宗は外櫻田今の御用屋敷也藤堂高虎は大名小路の北の方に賜ふ圖の通り)唯加賀中納言利長卿にさきつ頃母堂芳春院(土方河内守雄久が伯母也)江戸下向有し時(慶長五年六月七日江戸着也)將軍家より御城追手の先にて廣き屋敷の内にかめしき家作りをまふけておかれしかば其儘是を屋敷に定めらる(今の道三河岸の脇定小屋の邊松平筑前守と圖に載るものは歟されど松平といふは不審後人のみだりに書改しにや未考)次に淺野左京大夫幸長も父彈正長政外櫻田霞ヶ關といへる武藏にとつても名高き土地を先達で賜ひしかば其所を上屋敷となし父彈正が致仕の地と定め(是等を見て櫻田方にて賜ひし人は早く殊に多かりと見ゆ下に云黒田を始め櫻田也尤大名小路の邊にても殊に加賀の芳春院杯早く賜ひしといへど外には沙汰なし慶長十三年此圖の成し頃坪敷杯定りて諸家屋敷立し事

見るべし)又外に屋敷を添て賜ひし也安國殿御系圖といへるものに云慶長七年淺野彈正長政はじめ江戸へ下りし時に屋夜宇寸が宅を旅館とす(本注に云屋夜宇寸は南蠻入寺の様に家を作り居す今此所を屋夜宇寸河岸といへり)當日かの旅宅へ安國殿見まひ給ひ遠路の所罷下り別して満足是に過ぎず緩々休足有て待入とて歸城し給ふ云々是に據れば明る八年にも霞ヶ關へ移りしにや落穂集に云其頃は(慶長五年の後をさす)大名小路の邊は悉く葭原なりしかども御堀より上たる土をもて引ならせしかば地形も故なく出來しと(是は始の町屋の成し時を云なるべし)殊に櫻田のあたりは地形の高下も有し故いづれも土を上るに難義せり又御新城の(西の丸をいへり)外搦の御堀も狭くて漸く十間も有しを屋敷拜領の人々乞ひ奉りて御堀の土をあげ爰かしこへ引取地形に用ひしかば今の如く御堀の幅廣がり底も殊の外深く成しとなり其頃櫻田にて屋敷を賜ひし人々は加藤清正(肥後守)をはじめ黒田長政(筑前守)鍋島勝茂(信濃守)毛利中納言(輝元)島津義久(修理大夫)伊達政宗(陸奥守)上杉景勝(中納言)南部信時(左衛門尉)伊東

長實(丹後守)龜井茲矩(武藏守)金森(法印)仙石盛胤(彈正大弼)水谷(信濃守)土方雄久(河内守)等也云々(爰に載る大名は皆櫻田の方に大名小路には未だ及ばざると知るべし)按に天正十八年より慶長五年迄は僅に十一年の間なれば也されど御打入有しより先づ執役の重政其外諸役人の邸宅を賜ひし成べし落穂集に云天正十八年八月御打入被遊候節榊原式部大輔義は(圖に載る遠江守は則康政が子康勝なり)一三味の御用承りて其外青山藤藏(圖にのする伯耆守也始め藤藏忠俊也)伊奈熊藏(備前守忠次)四郎左衛門(圖に載る伊賀也)伊賀守勝重也)その外是迄御領地四ヶ國へ御掛置被成たる地方役人衆は早々江戸表へ可罷出由被仰出候と也按るに此圖にも載る如く今の大手の内外よりして内櫻田の邊に居りしと見ゆるは皆地方役人御代官のたぐひ也是は御打入の後人々江戸にあつまり其後夫々に居宅等定まりし故成べし慶長五年の後は次第に外櫻田及び大名小路のあたりにて賜ひしならんされど其所より大名小路の邊には町家多く有しと見ゆ見聞集に云

此町と云は大名小路の邊に有しにて慶長八年の頃今の下町へ移されたる以前成べし此圖にも道三河岸八重洲河岸の邊に其名残る町有し由見ゆ既に寛永年中の江戸圖にも見えたれば其大名小路の町まづ引れ次に八重洲河岸の邊の町を移され道三河岸の町は尤後に引れし成べし此邊に町有しは古き世よりの事にて文明の頃記せし江戸城内静勝軒の記に城門の前に市場をまうけ諸國の名物澤山にあつまりし由をいふ夫より打續きし町成べし落穂集に云御入國の頃をいはんに町杯は甚少くして下町杯も壹町もなく平川口御門の外に平川町とて町の有しが夫より今の麴町の方へ續き甲州海道といひて有しとなり爰にいふ所の如きは町は絶てなき様なれども御打入のころ下町は水地なれば町の無きはもとより也されど八重洲河岸の邊にても町家ありしと見ゆれど落穂集には平川天神の事によりいえば廣くは及ばざるべし

然れども地形廣からず是によりて豊島の洲崎へ是今の常盤橋吳服橋等外下町と稱る所を云成べし町を立んと仰有りて慶長八卯の年日本六拾餘州の人

夫を寄せ神田山を崩し今の駿河臺の山東へ押出し柳原の邊迄すべて神田山といふ又駿河臺より御茶水へかけて昔は神田の臺と云り本郷邊もかく言しにや此事吉祥寺の舊記又天正の頃の文書にも見へたり南の海を前に云洲崎の東南の方芝よりの入海をいふなるべし

四方三拾餘町埋させ陸地となし三拾餘町の海邊を埋立し土を取し山を神田山といへるは餘程の地なりし事思ふべし其上に在家を建給ふ

慶長日記に云十四年正月四日江戸本町五町村又石川玄蕃頭屋敷も焼失せしと云々是等にては此邊にて諸侯の屋敷をも賜ひし事見るべし

此町の外家續き廣大なる事は南は品川西は田安のはら北は神田のはら

神田山を掘崩せし後此邊彌原と成しかば斯云なるべし昔は此所に大塚などいへる所もあり見聞集に云慶長二年の頃おひ行人江戸へ來り云様神田の原

大塚のもとにて來る六月十五日火定せんと觸て町を巡り漸く定日も極りぬれば老若男女大塚にあつまり難有事かや是を拜んと貴賤群集し廣き野原も所せきごもなかりけり塚本に柵をゆひて行人あがり其下に薪を積み火を附焼立る所に行人火中へ飛入たるを弟子の行人共側よりつきおとしたるごもいふ我たしかに見ざりけり次の日朋友ごうち連立行大塚のあたりを見るに人氣は獨りもなく跡には骨交りの灰計り残りたりと云々(此大塚も此時に掘崩せし成べし)

東は淺草まで町續きたり是はもとより有し街道の町に續きたる成べし又云江戸町の跡は大名町となり

是御曲輪内に元より有し町にて此町今の如く大名小路となりしをいふならん今の江戸町は始めにもいふ今の下町なり

拾貳年以前迄は慶長十九年よりいへば同八年をいふ也大海原なりしを當君の御威勢にて南海をうめ陸地と

なし町を立給ふ

按るに上に載る所のごとくは今の本町駿河町の如きも八年の後出來しやふに見ゆれご是は夫より古く有りし町にて大變革ありしは八年の事也正しき書にも慶長八年の二月頃諸國より江戸へ千石一人宛の役の者下る町に國の名書付町場を受取普請せしと云々其初より有りしと云は見聞集にいふ江戸御打入以來町繁昌し家居多く出來たりされ共皆草ぶきにて焼込しけり慶長六年霜月二日巳の刻駿河町河岸の商家より火を出す(此河岸の商家は何なる事を知らず)此大焼亡に江戸町一字も残らず御奉行衆仰には町中草ぶき故火事絶す幸なれば此次に皆板ぶきになすべき由御觸有ければ町々悉く板葺に作る所に瀧山彌次兵衛と云者諸人に秀て家作らんと工み海道表棟より半分瓦にてふきうしろ半分をば板にてふきたり皆人沙汰しけるは本町貳丁目の瀧山彌次兵衛は家を半分瓦にて葺たり扱も珍らしや奇特やと人々ほふびして異名を半瓦彌次兵衛といふ是江戸町瓦ぶきの始なりと云々又云江戸町割は十二年以前の事なりと是も八年の事也慶

長日記に十六年六月二日江戸新開の記町割の事有べしと後藤庄三郎光次に命せられ京師堺津の商人を呼下し屋敷をたまひしといふは又後の事にて其所もたがふべし

其頃商賈に壹兩貳兩の屋敷は今百兩貳百兩五百兩の價する

十九年の事なり

町の榮へゆく儘皆人屋敷を高く築上げ家を新ら敷作り直す昔の境杭を尋るに細き杭を立置つれば皆くさりて其印一ツもなし然る間寸地分地の境を争ひ人ごといひごとして近き隣も心遠く隔りぬと

遠碧軒隨筆にいふ

江戸町人の角屋敷を持しものは御目見をゆるさる權現様の御時町に角屋敷を立る事は人のいやがる事故其規模に御目見を許さると見ゆ又角は費用も懸りやぐら抔立るゆへなり江戸始りの事例と見ゆ按るに上にいふ所の如き今を以て推に慶長八年の二月の頃より南海を埋立し明る九年にはかたまらしかして町を移せしは十年には終らざりしならん其町の引し跡へ大名及び御旗本の土屋敷を賜ひし

も又一二年もかゝりし成べしされば十三年の頃屋敷も定りしかば此圖も出来し成べし故に此圖は一枚のものにして是にて全き成べし外櫻田の邊の圖ありとも地理をもて考るに纔の地なれば若あるともおのづから別に成し物成べし是に寄れば元二枚なりし物の今片われのみ傳はりし様に覺ゆるはひが事成べし

扱も十三年の後武家町家等も一間に出来しさまは見聞集に云江戸御城は西にあたり石垣おびたしく御殿は南向に立給ふ大木古木並ぶ木の間よりも高櫓角屋倉あらわれ殿守は雲井にそびえて松風はおのづから萬歳を祝ふかどあやしまる

是太田入道灌漑が長祿の頃はじめて取建し江戸の城にて其後上杉北條の持城と成し時の當城のさまは此頃とは大に變りしならん慶長日記云十一年正月江戸御城御普請御手傳大名十五人に被仰付加藤左馬助松平土佐守加藤肥後守羽柴左衛門大夫黒田筑前守淺野但馬守羽柴右近大夫有馬玄蕃頭細川内記松平左衛門督京極若狹守京極丹波守鍋島信濃守寺澤志摩守又云二月上旬に右江戸若何れも主人は

在江戸人数は石運送のため伊豆國には石積船以上

三千艘本ノ、十艘あり一艘に百人持石二ツ入往還す江戸米

石は去年承て買置けるを金に替られけるいまは殊

の外高直なり頃日江戸にて百人持の石一ツ銀貳拾

枚ごろたの石は坪に金小判三兩の價也關東衆は去

年上洛供奉故手傳御免但上洛せらるゝ衆は千石に

人夫一人宛出す又云同年石垣五月の末出来九月

(玉露叢八月に作る)廿三日御本城御經營新に成て

將軍家御移徙なり同書云十二年四月朔日江戸普請

始る關八州安房信濃越後奥州出羽百万石にて勤む

但八拾万石にて石を寄せ廿万石にて天守の石垣を

築て百万石の外は堀普請是を勤む右普請衆各々二

月より扶持方出る又云去年江戸石垣高サ八間内二

間は切石なり又切石をのけ二間築上げ其上に切石

を置合て拾間(天守なり)惣土居も二間上られ合八

間の石垣なり天守臺は二十四間なりと云々

諸大名高廣たる屋形造り棟を並べ町は簷を並べ家居

ゆたかに煙立民の竈は賑ひけり

此頃諸大名の家居新に成りて其美麗の様は後の世

までもたぐひはあらし其詳かなる事は下に載す

見渡せる舊跡には淺艸にくわんおん

丙辰紀行云爰に寺あり尊き觀世音ましますとて人

の多く參詣すと申ければ大士の日人に誘はれて余

もまかりけるげにも人のいふ様に男女の群集する

事京の清水よりも多く見へける竹齋物語云西田む

ろ路にさしかり木深き森の見へけるは音に聞へ

し淺草寺立寄拜み奉れば松杉梢をならべ飛鳥は樹

を争ふなりうしろは廣き田づらにて末は在家に續

きたり前には牛馬の通路あり遠く陸奥の忍ぶ山し

のびて通ふ人も有左に大河清くして末は海に落け

ると云々是元和より寛永頃のさまなり

湯島に天神

見聞集に云見しはむかし湯島天神の御社あれ果て

社壇は葎の下にむもれ社頭はひとへに塵にまじわ

り神は威を失ひ祭禮祀奠も時を忘れ權實靈社も沼

土に朽ぬる計にて和光同塵の結縁も餘り有る計也

「かゝる所に神をまします」といふ前句に「捨ぬへ

きちりの浮世に交りて」と專順が付たるも思出せ

り然るに當君江戸へ打入給ひしより以來民豊に繁

昌他に異也ていれば今湯島の社へ祈をかけ往詣す

る事去りもやらず社壇の塵を掃ひいがきを磨き如
在の敬見へたり靈驗あらたにおはしますといひ習
はし參詣怠らず取分毎月の縁日其前日一夜籠りて
十八時中は貴賤群集をなす現當二世の願望成就し
再禮の袖つらなりて海道に寸土見えず去程に下向
の人々は道をたがへてかへせりと云々此淺草觀世
音と湯島天神のみはむかしより同じ所に建り餘は
多く移轉せり

神田に明神

落穂集に云神田明神は今の酒井讃岐守の屋敷の所
古來よりの社地にて御入國の時は地内に大木ども
生茂り其中に建り年毎に九月祭禮の節は件の木立
のうち一幟を立ならべ遠近町方より栗柿をはじめ
種々の賣物持出參詣もあまた有て賑ひし由小木曾
が物語也其後はるか程經て此邊も御曲輪内に成則
明神の社も今の社地に移されて其跡をば土井大炊
頭屋敷に被下けり今に神田祭禮の節は彼屋敷の表
門の前に神輿を御し屋敷の主より馳走の躰など有
けりと按に此圖にはや土井家の屋敷を載す寛永九
年の圖にもはや同じ社傳によれば今の地に移され

しは元和二年の事とす落穂集にいふ所と齟齬せり
按るに或家の記に慶長十二年二月江戸御本丸と西
丸の間にて觀世太夫今春太夫立合の勸進能を命ぜ
られし時日本橋淺草橋芝札の辻四谷札辻神田明神
門前の五ヶ所へ札を出せりと是等をもつて思ふに
此頃ははや今の駿河臺の邊に移されし時の事なり
古きものに神田明神山といふも則駿河臺の事にや
元和二年に爰よりして今の地にうつる

貝塚に山王權現

淺羽氏覺書に慶長十二年山王の宮を貝塚村へ移さ
れしといふ是紅葉山より移されし也慶長十二年の
頃御城内外御普請始りしかばかく移されしならん
櫻田に愛宕

見聞集に云十年前以前の事かこよ櫻田山へ愛宕とび
給ひしと風聞する是は希代の不思議かなとわれ人
も此山へ登りて見れば草むらのうちに唯幣帛ばか
りを立置たり其後草の假屋を結び御幣を納め愛宕
を守護申せしが今見れば莊嚴殊勝におはしますと
云々は慶長十九年にいふ所なれば十年の跡は則九
年の事也

いづれもくあらたにましませば詣る人晝夜とも貴
賤群集を成せりまた諸宗寺々の古跡に増上寺

今の地をいふなるべし安國殿御系圖云文祿二年の
頃三緑山増上寺霞ヶ關より金杉の地に寫し給ふと
又天正年中今の地へ移されしともいへり鐵醬塵埃
抄云當寺は芝口より金杉近所へ慶長七年寺地を轉
せられ今年普請御建立成就舊地は今の數寄屋橋内
にて其頃堀美作守秀家に賜ひ半は惣門となると按
るに此圖には數寄屋橋内の大名はみえず三緑山方
丈歷代系譜に云當地は草創の地貝塚の臺にありて
後日比谷邊に移り後慶長の始に移り或は同三年
八月なりと江戸名所記云當寺始めは貝塚の臺にあ
り光明寺といへる眞言宗なりとかく區々の説なれ
ば舊き事は定かならず何れも此見聞集にいへる所
は芝の地なるべし

吉祥寺

爰にいふ所は今の水道橋の邊に有し頃ならん當寺
開關略記に云吉祥寺は今の和田倉の内に有諏訪明
神の社地なりし故に山を諏訪山と號す又天正十一
年辛卯(恐らくは十九年のあやまり成べし)五代

本ノ、
衆照和尚この地は後世繁榮して數多の衆徒參禪口
道のたよりよろしからじと替地をこひ神田の臺に
移る今の水道橋は其頃表門の橋なるにより吉祥寺
橋といふ

廣徳寺

事蹟合考云當寺は元來北條家の時小田原の城下に
在りしなり天正十八年氏直父子滅亡の後其住僧江
戸に來り今の昌平橋の内松平伊豆守上屋敷の地此
頃いまだ足入の沼地なりしを兎角して茅ぶきの僅
なる堂一字を建たりこの住僧を希叟和尚と云清首
座といふ僧希叟に従ひ來り其地の内に少しの茅庵
を結び長春院といふ是唯一字塔頭として有りしな
り爰に甲州武田家の士に志村又左衛門といふ者志
村金之助が一族なりしが天正十年勝頼滅亡以後徳
川家に勤仕しやがて御子の下野守「、」君に御
附の列に入奉仕する所彼君松平陸奥守政宗方へ永
樂五貫文に抱へられ隨身せし處男色の沙汰にあひ
其意を得ず退き芝竹川町に隱居せし後又青物町に
寓居して終りを取れり此又左衛門伊達家半人の後

(寛永の始めつかたか)或年の七月十五日未だ江戸にかひく敷住居故菩提所もなきにより此廣徳寺に參詣す其時は門内のこらす沼地にて材木の四面引おろしたる脊板一枚をりしきついで其堂の前迄通路としたり又左衛門寺院やあると尋ありく事故悦びて寺に入先何宗なる事を知らざれば何宗と問ければ禪宗にて小田原より引たる廣徳寺と申すと答ふ是今の長春院の開基清首座なりさらば和尚に對面し頼みなんとて希叟へ永樂三拾六錢清首座へ同廿四錢包みて布施として即座に希叟にあふ和尚いふ貴方は何れより來られしと云時某は元來武田家の武士志村又左衛門と云者也尤代々禪宗たり已來檀那にならんと云和尚も悦び約束す夫より無二の懇意也と云々按に爰に云處は寛永の始めつかたとあれば此見聞集に記せし頃よりは餘程の後ノ事也されど慶長の頃吉祥寺など、共に移さる、寺あれば少しの茅庵ありしといふは疑ふべし

彌勒寺
當寺は慶長十五年庚戌の起立にして昔は馬喰町上寺町に在しが天和二壬戌年本所の地に移さると起

東本願寺

開基の事を詳にせず此寺始めは神田に在しが明曆の火後其所に移る其舊跡は今明神の下加賀屋敷といふ所也門跡の井とて名水の井今に有なり西本願寺も御入國の頃淺草御門の内にて寺院を賜ひしが明曆三年築地に移されしといふ

此外寺町と號し寺院僧坊は東西南北に門をならべ時鐘鼓音絶へず見佛開法袖をつらねきびすをついで人跡たえず

按に寛永九年の江戸圖正保年中の圖を見るに柳原より馬喰町の邊へかけ寺尤多しされば上下寺町の名も有し也明曆の頃諸方へ移さる

又云諸侯大夫の屋形作りを見るに唯小山の並びたるが如し棟破風光り輝き其内に龍は雲に乗じて海水を卷上げ孔雀鳳凰のつばさを双べて舞下る是をふりさけ見んとすれば天津日うつろいひかりまばゆくして其形定かならず軒のめぐり門の邊りに虎が毛をふるひ獅子がはがしらす本、風情誠に生て働かど身の毛もよだちてあたりへ寄難し又云江戸大名衆の屋形の

東光院

立の年に寄れば舊跡にはあらざれど櫻田の愛宕山の如く此頃世に沙汰有し大伽藍にてもありしにや

藥王山醫王寺と號す本尊は藥師如來春日の作江戸名所記云むかし太田持資入道道灌此本尊を崇め奉る江戸の鬼門に立て利生の守りをあふがれしに東照宮此御城におはしましける御代も尙あがめ給ふ事古へに越へ給へり其時の院主に仰せて殿中にて毎年正五九月には大般若を轉讀せしめ江城長久の御祈禱有ける其時は今の常盤橋の北の地に有けるを江城月を重ね日を追て賑ひ榮へ給ふに依て寺を傳馬町に引移されたり寺院いらかを磨き樹木梢をあらそひける明曆酉の年の回祿の後淺草の地に移さる按るに常盤橋の邊より傳馬町に移されしは慶長八九年の事なるべし

常樂寺
今いづれの所に有寺なる事を詳にせず下谷に常樂院といへる天台宗の寺あれど其傳を詳にせず三田の邊に常樂寺橋といへる所あれど此寺抔有し故といふ事いまだ聞かず此餘江戸の内に今有事を知ら

棟破風に風風舞ひ門のあたりには獅子虎麒麟抔を大きに作り色取たるはさながら生たるが如くと云々事蹟合考に云蒲生飛驒守秀行の屋敷は(此圖にのする羽柴飛驒守則此人也)台徳院殿も御成有て無双美麗の經營なり表門諸家より高し冠木とほりに高欄などを付て羅漢廿四孝等の人形家屋岩木など彫物悉く金をちりばめ門の左右の柱には金をもて藤を上より下迄はわせたり尤花葉ともに金にてゑりたる也諸人此門の美麗を見て歸る事も忘るゝとて日暮し門とあだ名せり此秀行が屋敷は慶長五年より前に給はり家居もとくに成りしと見ゆ或書に云慶長六年正月三日蒲生飛驒守の家より出火して門は残り飛驒守は二日歸國留守なり舊冬御成の時に俄に家作し新らしければ倉相也(御成に付此時建つし成べし)門は御成門を結構にすと云々爰に云日暮門は則此御門の事成べし又慶長日記十九年正月の條に此頃江戸大名屋敷の一番結構なるは松平筑前守長政也又門の結構なるは上總介殿と沙汰せしと云此圖に川中島少將の御屋敷といふは則上總介忠輝君の御館也同記に十七年五月五日江戸龍の口上總介殿館夜半に焼亡すと云この

後建し御門の結構なれば世の人珍美せしなるべし
 武藏證といへる書に大久保彦左衛門諸大小名を勸
 進して鷄聲が窟に屋敷を建る條に奇麗莊嚴金銀を
 ゑりて人の目を驚かせし由をいへり是は彦左衛門
 がおのが儘なる様なれ共おのづから世の風なる事
 見るべし因に載す見聞集に(初にのする見聞集と
 は異なり)家康公はよろづ結構なるを御嫌ひ江戸
 御城の内光る金物杯一ツも御座なく候和田倉の方
 御矢倉の破風に金かな物を將軍家より被仰付候事
 駿府へ聞え候由にて夜中金物を御取らせ此後頓て
 御所様江戸へ成らせられ候ひつる其御用心と皆人
 存知候金物取候跡我等共も見申つると云々是を以
 蒲生飛騨守秀行上總介忠輝君などの御所行にくら
 ぶれば質素華美の分いかにぞや讀史餘論に當家の
 風は忠信を心とし儉素を尙む事なるに大閣家の人
 人譜第の人々の中に交り往々三河の風うせて彼家
 の風になる歎心得あるべき事にやと是國初のさま
 を論せしなり
 見聞集に云常君の御威勢にて南海を埋め陸地となし
 町を立給ふ然るに町中ゆたかに榮ふといへども井に

鹽さし入(もと海中なればかく有しもむべなり)萬民
 是を歎くを君きこしめし民を憐み給ひ神田の明神山
 の岸の水を東北の町へ流し山王の山もこの流れを西
 南の町へ流し此上水を江戸へ普くあたへ給ふ又云古
 より細流只一筋有り是神田山岸の柳原より出るなり
 昔は此水を上水として遣ひたる事諸記に見ゆ寛永
 の江戸圖にも此池の水を下町邊の水道とせしと見
 ゆ其始は慶長八年の後はやはじまりし事此文にて
 知るべし東海道名所記にも此池其かみ江戸中の水
 道の源也と有江戸中といふは誤なり按に此池は古
 くより有しものと見ゆ武藏國狭山の池は則此池な
 りといふ説もあるにたれり是は附會の事にて論ず
 べくもあらず北條分限帳に江戸櫻田地方貳百貫文
 の地を太田新六郎領せし由を載す此新六郎といへ
 るは道灌の孫孫六資康が子なり後武庵と號す北條
 氏康に従ひ數多江戸の地を領せりされば此地方も
 道灌よりの舊領なるべし是前にいふ神田山岸明神
 山の水と同じ流を言なるべし是によれば神田山の
 麓柳原まで出てありし事知るべし北條分限帳に江
 戸神田新堀堀といふは此所にや今も柳原土手の下

に雁が淵なごいへる古名を唱ふる處あり其邊より
 水源も出來しにや又柳原といへる地名も古き事と
 見ゆ溜池も昔より柳つゝみと云り此二水を上水の
 源と被成しよりかゝる名も起りしにや
 慶長十一年の春玄仍(此頃世に聞へし連歌師也)此流
 の邊に來り「青柳の梢よりわく流哉」と發句をしたり
 實におもしろき舊跡後々末代までも詩人歌人此流に
 いかで吟詠なかるべき
 按に只柳原といふ地名によせたる句にもあらで柳
 も多く有しさまに見ゆ明曆の回祿にて此柳もこと
 ごとくうせしにや昔此處に柳原町とて六町程有し
 を寛文貳年本所の地へ移されしと云々其柳は享保
 の初年此所へ被爲成し頃柳原といへば柳を植べ
 き由鈞命ありて植られしとなり
 又云此水御城堀のめぐりを流れて舟町へ落る
 此舟町は始にもいふ如く舟口の事なるべし然らば
 柳原より流れ出神田堀の方へ續き道三河岸の川へ
 落しにや水路未詳
 此流に橋五ッ渡せりされ共皆棚はしにて名なき橋共
 也

此五ッの橋今その所を詳にせず此所につきて色々
 かふがへを加へばより所も有べきを其いとまあら
 ず
 以上載る所はあながち圖説の事にもあらず御打入の
 後慶長年中江戸のさま御城を始奉り大名の邸宅町屋
 いできし初め山川のかゝる所または神社佛閣あらま
 し江戸外にも及びてしるせり是はその世に成りし地圖
 及記録等によりて考記せり是より外はおほやふ今の
 田野の地に替らざりしなるべし夫も後の世よりいふ
 所なれば誤すくならぬなるべし

慶長年間御曲輪内圖説

今按るに此圖慶長十二年十年の頃未だ西丸御築城の以前に改しならん大手邊の一二の屋敷をもて見るに酒井右兵衛大夫青山雅樂助貳人皆慶長十二年に改名せしを此圖酒井雅樂助青山大藏と記す又伊奈熊藏慶長十三年筑後守に任せしに此圖熊藏と記せしにて推して知るべし又名氏の今に著顯ならず或は銘名之時代など齟齬せるの類下の姓名の側に大略を記して後考を俟又按るに此圖殘欠と見へて御本丸今の大手内より東の方常盤橋御土居内迄北は神田橋内より南は鍛冶橋通より今の坂下御門邊までの間を存せり

大手

今の下乗橋なるべし

酒井雅樂助屋敷

右兵衛大夫 忠世慶長十二年七月三日雅樂と改む(慶長十四年七月十四日御奉書には雅樂頭と有り)屋敷御勘定所の邊なり

青山播磨守

播磨守忠成慶長十八年二月卒

青山大藏

雅樂助幸成慶長十二年大藏少輔と改む

阿部備中守

阿部善九郎正次慶長五年亡父善左衛門正勝跡職を給はり御書院番頭となる此時備中守に任せし成べし右三軒の屋敷今の大手内廣場なり

伊奈熊藏

熊藏忠政慶長十三年筑後守に任ず

岡田太郎右衛門

太郎利治元和元年歳七十六にて卒す

本多上野

上野助正純なり

青山圖書

圖書助成重元和元年九月卒す

青山權之助

圖書助成重の養子なり實父大久保石見守に連座して慶長十八年に罪せらる右五軒の屋敷今の二の丸三の丸の邊也

大橋

今の大手の御橋なり

河中島少將

上總介忠輝卿慶長八年二月川中島にて御居城を給り給ひ四月十六日從四位上權少將に任せられ元和二年七月没收せしめられ給ふ又按に伊達家記に慶長十六年西丸御普請及び山手以下石垣御普請の時上總介殿屋敷の裏鹽入築きたるよしを記せり是今の龍の口石垣樋の落口を始めて作りし成べし此圖にて見れば今の往來より東に御堀通して其東寄りに橋ある時は一圖慶長十六年より後のものにあらずる事知るべし

羽柴飛騨守

蒲生秀行也慶長十七年五月十四日卒す

羽柴三左衛門

松平三左衛門輝政慶長十七年八月廿二日御稱號を賜り同十八年正月廿五日卒す

羽柴右近

森右近大夫忠政なり

近藤石見

石見守康用は天正十六年三月十二日卒す其子平左衛門秀用は寛永二年二月石見守に任ず今慶長年中の圖に石見守と書する事疑ふべし

井伊掃部

辨之助直孝慶長十年四月十六日叙任し掃部助と稱し十五年に至りて掃部頭と改む

村上源助

今子孫斷絶す

村上周防守

周防守義明祿九万石元和四年三月六日家人争論に依て配流せらる

中根七藏

中根七藏記録に所見なしもしくは御代官中野七藏重吉を誤り記せしにや又中根喜藏正次の誤寫なるも知るべからず

井出志摩守

志摩守正次慶長十四年卒す

元隠

五兵衛

貳人の傳未詳

松平筑前守

前田筑前守利常慶長十年五月御稱號を賜ふ

大須賀出羽守

出羽守忠政慶長十二年九月十一日卒し子息五郎左

衛門康勝元和二年柳原氏の嗣と成家廢す

松平甲斐守

甲斐守忠良寛永元年卒今の但馬守中務少輔康盛等

が祖也

牧野豊前守

豊前守信成慶長十年四月廿六日叙任し其後内匠頭

と改名す

青山滿千代

傳未考

中川八兵衛

慶長十五年壬二月八兵衛御小性勤しが同列岡部八

十郎を討て切腹す

山形出羽守

最上出羽守吉光也慶長十九年正月廿八日卒す

安栖

田村安栖長有慶長十八年被召出法印に叙すと云此

人丹波の醫業を相傳して久しく關東に在しなれば

是より先宅地は賜りしも知るべからず

松平備前守御藏

備前守某は庄左衛門昌利四男也然れ共此人子孫斷

絶せしにや事實傳らず下の武ヶ所の御藏皆御代官

所の御藏なれば或は伊奈備前守の誤字なるも知る

べからず

大久保石見守御藏

石見守長安なり慶長十八年七月九日卒せり

彦坂小刑部

小刑部元正慶長十一年代官所百姓公事に依て改易

せらる石見小刑部が御料所を支配せしは世に知る

處なり

八木、松雪、高野市之丞、りう菴、松風助右衛門、松風

六兵衛

六人の傳未考

市野矢五郎

市野惣太夫實利が初名歟

内藤修理御藏

修理亮清成慶長十三年十月廿四日卒す

神谷又五郎

彌五郎の誤歟彌五郎某大坂御陣前人を殺害して立

退し事異本當代記に見えたり

小林十左衛門

傳未考

西隅の山

此山今の西丸御殿及び紅葉山御宮の所を云成べし

四ッ谷西迎寺記に此所御築城前は地名をすべて紅

葉山と唱し由見ゆ

此圖考は文政十三年の冬内命ありて江戸古圖を

調進せし時地誌局に於て集録する處なり雕盤の

暇密に記して参考の補とす

江戸古繪圖考附録

貞如考

内藤若狹守清次

初彌三郎慶長十年若狹守に任ず同十三年十月父修

理亮清重卒して其遺跡を繼ぐ後執事職と成大坂兩

度の役江城に於て若君を守護し奉る

安藤對馬守重次

空助基能が二男天正年中より數度軍功を顯し後台

徳公に仕へ奉り慶長五年關ヶ原の役山道の供奉同

十二年十月上州吉井に於て五千石を賜り大坂の役

供奉す

青山圖書助成重

台徳公御母堂寶臺院殿御由緒の人なり本苗服部氏

青山牛太夫忠重が嗣と成青山氏を稱す後食祿一万

石を賜る慶長十九年御勘氣を蒙り三千石を賜り在

所へ塾居す

本多上野介正純

天正十九年正純十九才の時より神君に奉仕し慶長

五年終に執事職に補せられ元和二年神君薨御の後關東に下向して再執事職に補せられ元和八年御勘氣を蒙り羽州由利に配流せらる

伊奈熊藏忠政

備前守忠次が子也神君の御側に奉仕し父備前守卒後跡役關東御郡代を移め後筑後守に改む

酒井雅樂助忠世

河内守重忠が子也天正十八年關東御入國の時別に五千石の地を賜り台徳公に仕奉る慶長五年關ヶ原亂後上州那須郡一萬石を給ふ同年江州の内にて加増五千石同十四年加増五千石大坂の役供奉後年從四位侍從に叙任す

青山播磨守忠成

青山大藏幸成

台徳公に奉仕慶長七年下總臼井にて采地を賜ひ追追加扶有同年四月十六日大藏少輔に任せられ同十八年父忠成卒兄忠俊父が遺領を賜ふ忠俊が部屋住の采地は悉く幸成に加へ賜る大坂の役には御勘氣故忍て軍功を顯し御勘氣御免
阿部備中守正次

始名善九郎幼少より神君に奉仕す弘治二年御軍始より大小の戦に供奉す慶長五年父伊豫守正勝が遺跡を賜り後御書院番之頭大御番頭と成大坂の役に供奉す

鳥居左京亮忠政

慶長五年父の遺跡を賜り左京亮に任せらる同七年奥州岩城を賜はり大坂の役若君の守護として江城に止る

石川長門守康通

慶長五年關ヶ原の役尾州清洲の城を守る翌年二月美濃大垣城を賜り同二年父日向守家成に先達て卒す

酒井左衛門尉家次

始小五郎又宮内大輔と號す慶長五年關ヶ原の役後陣の固めを勤む同九年上州高崎村を賜り大坂兩度御陣御先を勤め元和二年越後高田に移る

井伊右近大夫直勝

井伊兵部少輔直政が嫡男にして慶長七年父の遺跡を賜り同九年台命を奉り江州彦根の城を築く同十九年大坂役に病者たる故弟の掃部頭直孝をして陣

代たらしむ同年命に依て江州の所領を直孝に譲りて上州安中に居城す后改めて兵部少輔

榊原遠江守康勝

慶長十一年父の遺跡を繼大坂兩度の御陣に供奉再亂に天王寺表に於て戦功を顯はし同五月廿七日病に臥三十六歳にて卒す

●木原七兵衛

青山伯耆守忠俊

幼少より奉仕し關東御入國の後御書院組頭慶長十年台徳公御上洛の時供奉慶長の末御書院番頭同十八年二月廿日亡父播磨守忠成が遺領一萬五千石を賜り忠俊が部屋住の采地舍弟大藏少輔幸成が所領の内に加へ賜る

川中島少將殿

上總介忠輝主慶長八年二月信州川中島城及び采地十二萬石を賜ふ同十年從四位少將叙任同十五年越後國に所替大坂の軍終りて翌年勢州朝熊に謫せらる

土屋民部少輔忠直

天正十年甲州没落の時六歳にて死を遁れ同十七年

神君御鷹野の時駿河國清見寺に於て召出され阿茶局養子と成同十九年初て采地を賜ふ關ヶ原に供奉慶長十七年卒嫡子平八郎幼少にして父の家督を繼り

板倉周防守重宗

父は伊賀守勝重と號す重宗は台徳公に仕奉り御小性組番頭小十人組御歩行頭等を兼て大坂の役に供奉す後年從四位少將に任せらる

酒井河内守重忠

始與四郎天正年中より奉仕し屢軍功を勵し慶長五年關ヶ原亂翌年上州厩橋城を賜り大坂の亂には江戸に止り再亂に供奉

安栖

初北條家に仕ふ彼家亡て天正十九年より神君に仕奉りし田村安栖歟

土井大炊頭利勝

初甚三郎と云幼年より台徳公へ仕へ奉り慶長七年下總小見川にて采地を賜はり同十五年下總佐倉の城主に被成老中に輔せらる

山形出羽守義光

天正十九年九月追討として神君奥州信夫郡大森に御陣を居へらる此時義光神祖の御陣營に來り拜謁し二男四郎二郎(十歳)を召具して御家人とす大名の子御家人に列せし始也后駿河守家親と云伏見御在陣の砌も義光志を通じ關ヶ原亂にも己が在所に止りて上衫と戦ひ慶長十九年義光卒して家親家を繼ぐ又曰最上氏山形居城なる故時の人山形出羽守と記せしものなる歟

水野隼人正忠清

始權十郎慶長七年より台徳公に奉仕し御書院番頭と成大坂の功に依て三州菊屋城を賜ふ若年より台徳公に奉仕し關ヶ原役山道の供奉し後元和大坂の功によつて甲州都留郡を賜り忠長卿に附らる

堀帶刀吉晴

元尾州の人信長秀吉に仕慶長五年關ヶ原役に御味方と成て軍忠を勵ます爰に於て出雲隱岐の兩國を賜り同十七年六月卒す

松平筑前守利常

本苗前田中納言利長の嫡子慶長六年元服此時御稱號を賜り從四位下侍從兼筑前守に任ず同年九月台

徳公姫君を利常に配せらる

五兵衛

阿茶局の子神尾五兵衛歟

羽柴飛騨守秀行

本苗蒲生氏文祿四年父卒して家を繼ぎ羽柴氏と稱す父氏郷の時に秀吉媒して神君の御婿と成慶長十七年五月十四日卒す息男龜千代家を繼后下野守忠郷と稱す

羽柴三左衛門輝政

始秀吉公に仕豊臣姓を賜羽柴氏と稱す文祿三年神君の姫君を賜り室とす關ヶ原の役御味方と成慶長十七年に至りて御家號を賜り參議に任ず

藤堂和泉守高虎

元江州の人父は源助高虎と云高虎慶長關ヶ原亂より神君に屬し奉り忠功を顯はす依て伊勢安濃津の城を賜はり後年從四位少將に任せらる寛永七年に卒す

溝口外記

一万石以下の人なり大坂の役に供奉し再亂の時故有て切腹す其子幸左衛門は改易せらる

脇坂信濃守安治

始名甚内秀吉に仕ふ慶長五年關ヶ原役御味方と成て軍忠を勵まし元和元年致仕して寛永三年卒す有馬玄蕃頭豊氏

秀頼公の奉行人神君を失ひ奉らんとて大坂伏見の間以の外騷動す于時豊氏父有馬法印と共に神君を守護し奉り關ヶ原役にも父子忠を盡す其功に依て采地を加へ賜はり慶長七年神君の御養女(松平原七郎康忠女)を豊氏に配せらる後年從四位下侍從に叙任す

●中川八兵衛

前にあり

青山滿千代

青山圖書助成重が子實子本ノマ、にて別に台徳公に仕へ奉り後作十郎と改め大坂の役に軍功あり

生駒讚岐守一正

始秀吉公に仕慶長五年關ヶ原の役御味方と成て忠功を勵す軍畢て後其功を賞せられ讃州を賜ふ元和六年六月五日卒す

大須賀出羽守忠政

柳原式部大輔康政が嫡子也外祖大須賀五郎左衛門

康高が養子と成天正十七年七月家を繼關ヶ原役には宇都宮城に止る慶長六年遠州横須賀の城を賜り后出羽守に任ず同十二年九月十一日卒す其子國丸三才にて家を繼ぐ

堀淡路守直重

監物直政が二男台徳公に奉仕し信州須坂に於て一万石を賜ふ大坂兩度御陣御先を勤む

細川内記忠利

慶長五年御味方と成て父越中守忠興兄與一郎忠隆一同東國に下り小山御陣に至る然處に上方蜂起に寄り忠興忠隆は御先を打て海道を登る内記忠利は御旗本に止る關ヶ原の時も忠興忠隆は御先に在て敵を破る忠利は君の御側に在て功を顯はす此時の功に依て豊前小倉并豊後杵築等の舊領とも三拾一万石を賜る其頃兄忠隆父の勘氣を受く依て忠利を嫡子とす慶長十年侍從從五位下に任ず大坂兩御陣の節も忠興台命に依て國に止り忠利供奉す元和五年忠興致仕(三齋と號す)忠利家督寛永九年十月四日肥後熊本を賜る五拾四万石なり

蜂須賀阿波守至鎮

慶長五年父阿波守家政入道して蓬庵と云至鎮家を繼阿波守と改大坂初度の軍に功を顯し元和元年正月御家號を賜る

黒田筑前守長政

神祖伏見御在城の砌父勸解由入道孝高と共に無二の忠功を顯はし關ヶ原の役にも父子共に御味方と成軍功を勵すに寄て父入道筑前國を賜る慶長九年孝高卒て後長政家を繼て筑前守に改む室は神君の御養女實は保科彈正忠直の女也

伊奈備前守忠次始撰職

神君に奉仕し關東御入國の時武州小玉鴻巢に於て一万三千石を賜ふ后備前守に任せられ關八州祖稅の事を掌る慶長十五年六月卒す

松平甲斐守忠良

神君御異弟松平因幡守康元の子なり慶長八年父の家を繼て大坂の役に供奉す

●元隱

柳生又左衛門宗矩

但馬守宗嚴が子なり慶長五年上杉御征伐神君與へ

后大御番頭大坂役兄兵部少輔直勝が陣代と成て供奉再亂の砌尙軍功あり

●近藤石見守康用

松平丹波守康永

本苗戸田氏にして彈正忠重が子なり始孫六郎と稱す後御稱號を賜り松平氏に成文祿元年丹波守に任じ神君異父同母御妹(久松佐渡守俊勝女)を賜り室とす關ヶ原役に供奉

小笠原左衛門佐信之

始名は小平治實は酒井左衛門忠次三男神君の命により小笠原掃部介信嶺が養子と成關東御入國の後上州にて二万石を賜り慶長三年父卒して家督を賜り關ヶ原の御陣大坂とも供奉

○内藤修理清成

修理亮清成は仁兵衛忠政養子實は右近進義清が二男台徳公御幼稚の頃より奉仕天正十八年當麻の地にて七千石を賜り關東の奉行職となる慶長六年職を免され其後は御臺所の事を承る同十三年十月卒す

○板倉伊賀守勝重始名四郎左衛門

御下向の時野州小山に於て上方に軍起りたりと聞ゆ其時宗矩未だ浪人にて國人を催し上方にて兵を越すべき旨命あり關ヶ原の軍終て知行を賜はり御家人に列す父宗嚴は兵法の達者宗矩も其業に達す

牧野備前守信成

内匠頭事此頃は豊前守と云し成べし關東御入國の時武州石戸を賜り慶長關ヶ原の役供奉后大御番の頭を勤む

井出志摩守正次

駿州の人父は藤九郎正直といふ神君に奉仕し租稅の事を掌る慶長十一年冬叙爵して志摩守と改む

●中村七藏

村上周防守義明

始丹波守長秀太閤秀吉公に仕へ慶長五年關ヶ原役上杉景勝を防ぐ大坂再亂に上總介殿に屬し上方に發向す然るに遲參せしむる故沒収

●村上源助

前に考あり

井伊掃部頭直孝

慶長十年別規に台徳公に奉仕同十三年御書院番頭

神君に奉仕し天正十六年御家人の内より撰出され駿府の町司に補せられ關東御入國の後には江府の町司と成慶長六年京職に成同八年伊賀守に任せられ大阪御陣兩度其京都に在て帝都を守衛す

○大久保石見守長安

前圖のする近藤石見守の異同なるべし

武田家の扶持人猿樂なり幼名十兵衛大久保相摸守忠隣苗字を授て神君へ執奏し御家人に列す段々登庸して二万石を領す諸國郡代の司と成御収納の御藏を預り金山銀山を支配せり慶長十八年四月卒す

羽柴右近大夫忠政

忠政は森三左衛門尉可成が二男也天正十二年三月兄武藏守長可尾州羽黒に於て討死の後家を繼同十三年侍從從五位下に叙任羽柴と稱す秀吉公に従て所々軍忠を勵し同十八年信州川中島四郡十二万石を賜る慶長五年御味方と成て東國に下り小山に至る又中納言様御供にて山道より登り眞田が押へとて石川玄蕃允康長仙石越前守秀久と共に三人各在所に止る卯二月六日美作一國を賜る十八万六千五百石なり又大坂前後の軍に功あり其後美作守に成本姓に復し森と名乗る寛永三年八月左少將に成

同十一年六拾五歳にて卒す石川玄蕃頭康長松本五
万八千石仙石越前守秀久小諸六万石

●此印あるは貞如が考に脱せしなり
○此印あるは前圖にのするところなり貞如が見し異本にあるなる
べし

麓の花

書をよみて倦ておしまづきによりいねて枕につかず
といひたりし人にもをさくおとるまじうふみ見る
ことをこのめる好問堂主人をさぶらひけるに折しも
書の虫はらひすとてさころせきまでうちらしたり
あるふみの中なるをおのれひと巻とりてひろげけれ
ばあるじのいへらくこはふつに人に見すべき書には
あらずといひつよそごにいひこしらへてさて雨
はいつふりけん夕だつ雲のけしきもなく空にはた
あやしき峯のみ立つらねてつちさへさくこのごろ
のあつさは例のさが野のみほとけのとばりひらかせ
給ふ年は日でりがちにすささびごとにいひのし
るもことわりなりひるのほごはふみゝることのいと
ものうくて夜は蚊のせむるも中々雖さすこちせら
れて短よもをしごおもへるに思ひよれることもなく
たゞ手ならひのやうにかきつけたるものにしあれば
しひてふかく心いれをししいでたるにはあらじごと
ひきかくしつるをせちに見むとすまひければさらば
このふみの名をしもつけたらましかは見せましとま

たはれ給へりとまれかくまれそむかじまづく
てみもてゆけばかうがへのくはしきことよまた廿の
うへみつよつなるわかうごのものしつるごは世にえ
うけひくまじくなんおぼゆるかつ藏書にさへ富つれ
ば謔にいへる鬼にくるがねの杖とやいふべきをもそ
もかゝるすさびはみよし野の山口にしてなほ奥ふか
くわけいりて尋ねごひなば千本の花なすかうがへの
いとおほかりぬべしさればこのふみの名をしもやが
てふもこの花とよびてんはあるじの心にかなへりや
あらずや

文政二年六月

池勝躬

しるす

麓の花巻上目次

- 奥州五節風俗
- 壬生狂言の繪
- 濱弓
- 憲法染
- 友禪染
- 車戸棚
- 三ツ指
- あしで繪
- さとり繪
- 百万遍
- 葛西念佛
- 竹之丞寺
- 不忍辨天

麓の花巻上

江戸下谷 好問堂主人著

陸奥國の五節風俗

すべてとにかくにつけ遠き國には古への事も傳はりかつ質朴にすなをなるといふのでたし「東國旅行談」卷の三「曰出羽國庄内領の町家在々まで古風の作法あり往昔は日本國中みなかくのごとくにてありしとかや五節句ともに三方を用ゆる事なり正月は橙子草薺藻鹽草根松藪柑子芝菜喰積臺これなり當所の海には海老なし寒國ゆへ蜜柑もなし三月には桃の花と草の餅を積合す五月は粽を三方の内へのるほごにこしらへて五ツづゝ把て載る七月七月は槐の葉をしきて素麵をのする九月は菊の花に餅なり家々かくの如し家内には鶴龜松竹また寶蓋しなどの目出度もやうを染たる暖簾を中の間に二間三間ばかりのあいだにかけて手代麻上下を着し其まへに座し件の三方を禮者のまへに出し禮をうくるまた正月十一日には大なる木の枝に梨子を結付て圍爐裏の上にかざりおき十五日

麓の花巻上

に至りてこれを叩おとして祝儀とす是五穀成就の祭とかや」余このことをもて友人堀尚平にかたらく尙平ぬしは奥州南部の産なりかの國にもこの事ありとされど少しづゝのかはりめあり七月槐の葉に素麵をもるをまくは瓜をもるといへりこれにことなるはつねに始て來りし客には必ず平盆へ米とごまめとをのせて祝儀とするなり

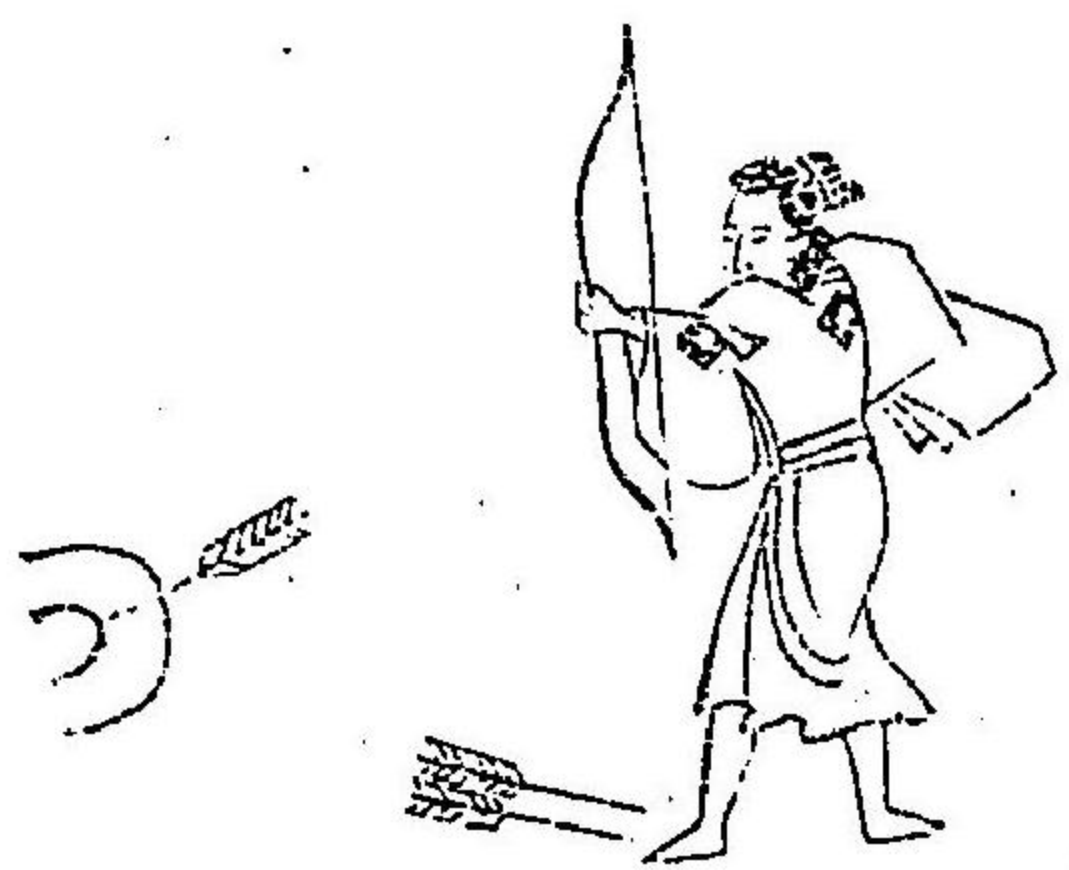
壬生狂言の繪

みぶ狂言の繪「京童」等に見ゆといへどもこは寛政庚戌の年江戸にて開帳の時の繪本をそのまゝうつしのす



破魔弓

今正月わらはべのもてあそぶはま弓といへるものは
 「世諺問答」卷の上「曰孝徳天皇の御宇に正月に弓を
 いさしむ凡まとは虫尤の眼と名付て此をいたましむ
 るなり」「滑稽雜談」卷の一日或説云然れば正月に射戯する童等は
 虫尤の眼を射破る義なれば實は破目弓なるべし通唱の宜
 きによりて破目はま矢と稱 今世にたえてはまを射るわ
 ざたへたり「俳諧五節句」 はまを射る圖「世諺問答」
 日本歳時記
 貞享五年卯木 内田順也作 曰吾妻の方の
 子供細繩をまろめ玉とし
 打時に破魔まいると聲を
 かけ打破魔矢にて左右に
 立別れ玉を射てあたるを
 勝とす都にも昔は射たる
 となり大路禮者の足もと
 へ矢を射あつるゆへ玉は
 木なり棒竹箒乳切木ぶり
 ぶりやうのものを持とむるなり當時破魔有て玉を射
 ず毬打も玉をこめるなり」これにてそのおもむきつ
 ばらなり今こゝにのする圖は「あと追」寛文七
 年卯木卷の五
 に出したるを抄寫してのす五節句にいへると合せ考



ふべし

憲法染

明暦萬治の頃京西洞院四條吉岡憲房といふ者始て染
 る吉岡染ともいふ此人劍術を得たり一流を窮め門弟
 あまたあり房を法にあらため實名を以て法名とすと
 いへる説世みなこの説をもてしかりとす思ふに「毛
 吹草」寛永十五
 年卯木卷の四山城名物をいへる條「曰吉岡染
 憲法染とあり」寛永二十
 一年卯木「藥師通夜物語」寛永二十
 一年卯木曰りんずやさや
 に羽二重をけんぼう染に數をして」このふたつの證
 をもて思へば寛永に既に憲法といへる名あるをもて
 明暦頃開始るといふ説のひがことなるをしるべし
 「通言便蒙抄」卷の中彩色門「曰憲法染黒茶のこと也
 近頃憲法吉岡とて兵術をもて世に鳴りしもの有此人
 始て染出せる故に黒茶を憲法染とも吉岡染ともいひ
 ならはせりとなり」世にいへる説の如くならば吉岡
 憲法とこそいふべきをさいはざるは實名及法名にあ
 らざる也余こゝにおゐて黒川道祐の説をもて定説と
 すそは「雍州府志」卷之七土産門下「曰吉岡染吉岡氏
 人始染黒茶故謂吉岡染倭俗毎事如法行之稱
 憲法」斯染家吉岡祖毎事如此故世稱「憲法」この説

憲法をもて異名とすはなはだおだやかにてよし俗説のひがめるをしるべし

友禪染

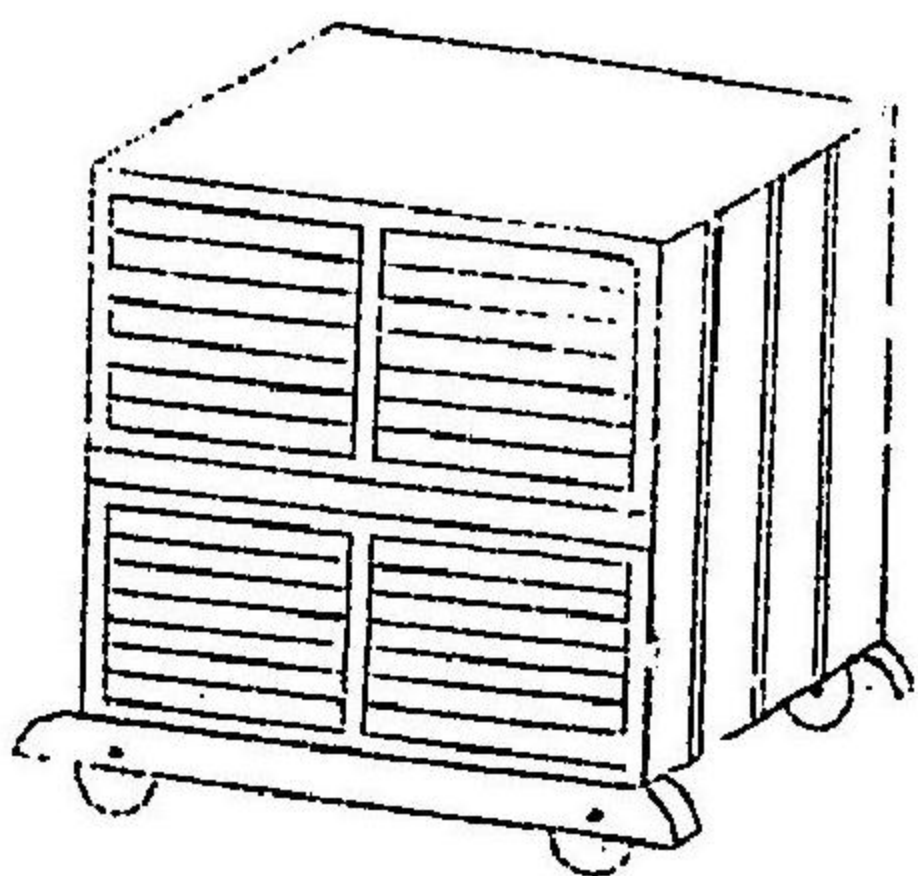
今世に行はるゝ染に友禪ばりて草花などに彩色せるをいふ昔よりの説に友禪は繪師なりかれが書く所を寫し染たるなり尤墨繪にかきたるも有なごいへりされど友禪染といへるは草花の類を丸くしたる也そは「女重寶記」卷の一染やうのことをいへる條曰中頃の吉長の小色ぞめ友禪染の丸つくし「伊勢家雜記」卷の二曰ゆふせん染とて竹を丸くし或は梅が枝をまごかにして模様とするはゆふせんさやらん申せし畫師が書そめしを衣服のもやうとしてゆふせん染と申なり」これこの文にて友禪の丸もやうなることしるべし貞享四年印本「女用訓蒙圖彙」卷の四に丸もやうくさくを載たりそのかみ行れたるを見るべし

車戸棚

天正より以來明曆のころまで都鄙ともに車長持といへるものを家々に備て非常の具になしたり其かたちには下にのするを見てしるべし余こし文政二年四月ふたらの御山へまうでしをり古河といへるうまつぎ

又車戸棚といふもの有これと同じをり日光街道石橋宿といへるうまつぎの茶店にあるを見たり世の人のさるものありともしらぬものなればこれもその圖を摸して左にのす并せ見るべしとにかくかたいなこそ古へぶりの器ものも遺りあるものなり

車戸棚の圖大ききは常の戸だ
なにかはる事なしと無骨に
つくりなしたるもの也



三つゆび

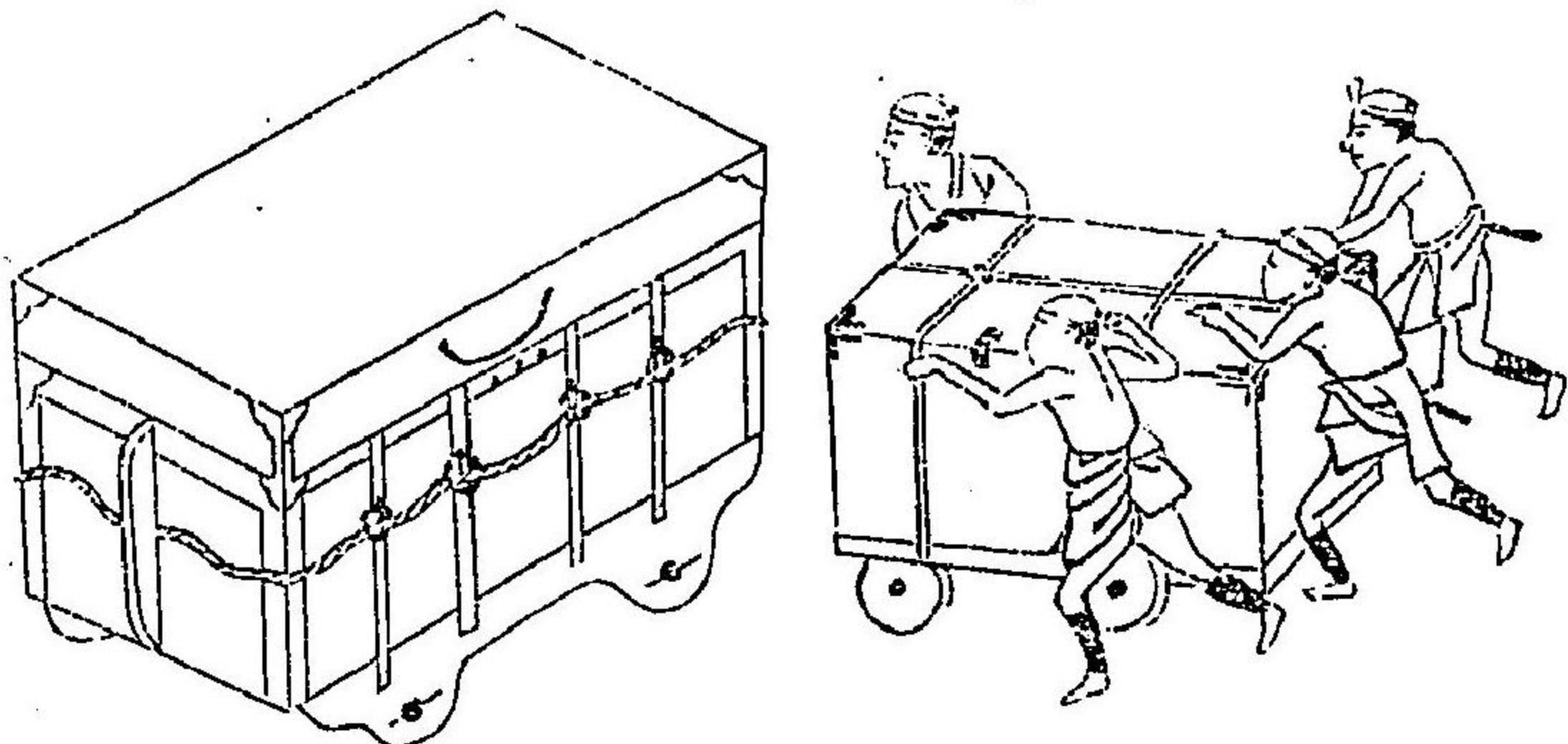
「艸堂雜錄」享保十四年印本 卷の四曰江城繁花能移人朱赤墨黑誰守志莫學賓主相見初卷舌三指大張臂此武風俗この詩意にては無禮の事に三指といひし様なれどりきみのあることにとりなせしものか「迹追」卷の四に元日雨ふりけるにつく指も三ツのはじめの禮儀かな

にてある家に車長持ありまのあたり見たりしまへラつし來りて今そのかたちを左にのす

「むさしあぶみ」万治四年印本 所載

車長持の圖

この圖古河宿にて見たりしもの

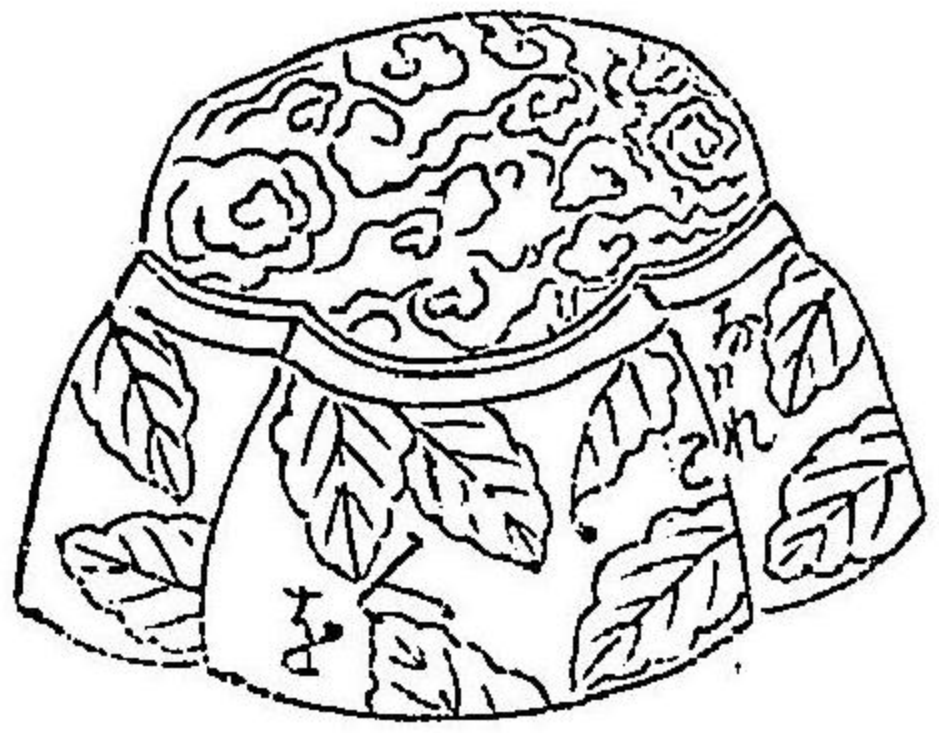


ふるくは「きのふはけふの物語」の頭のもの下にも見ゆ今も老人の三指つき合かつといへるとなり
(頭書)「獲纏輪」卷の一曰みせ男老三指でつめひらき冠角といへる見ゆ

あしで繪

「遠碧軒記」卷の下曰古代の視箱などにある古歌の跡を詩繪にかき歌を大低にかきて畫にあることは繪にてもたせてかゝぬ法をあし手がきと云」又「結駝錄」中の巻にもあしで歌繪と云こと繪と文字を雜へて書くなり」とも見へたりあしでの事名目はふるく見へたるもあらずこは近き世の事のみもはらひへるなむれとすればこはただあしでこいへるゆへの見へたることそのかたをのすればこはたふるく見へたるをいはずよりうつれることいはするたりの料なりその物語「塵添藤葉抄」拾芥集「王生集」源氏物語「續世織物語」今「申務集」尺素往來」などにも見えたり

この圖「五月雨日記」に見
えたる香の具なりこの記
の奥書に文明十一年五月
十二日於東山殿執行之
と見ゆ



桐のはもふみわけかたくなりけりかならす人をま
つとなけれど」といふ歌をもてあしでにするなり

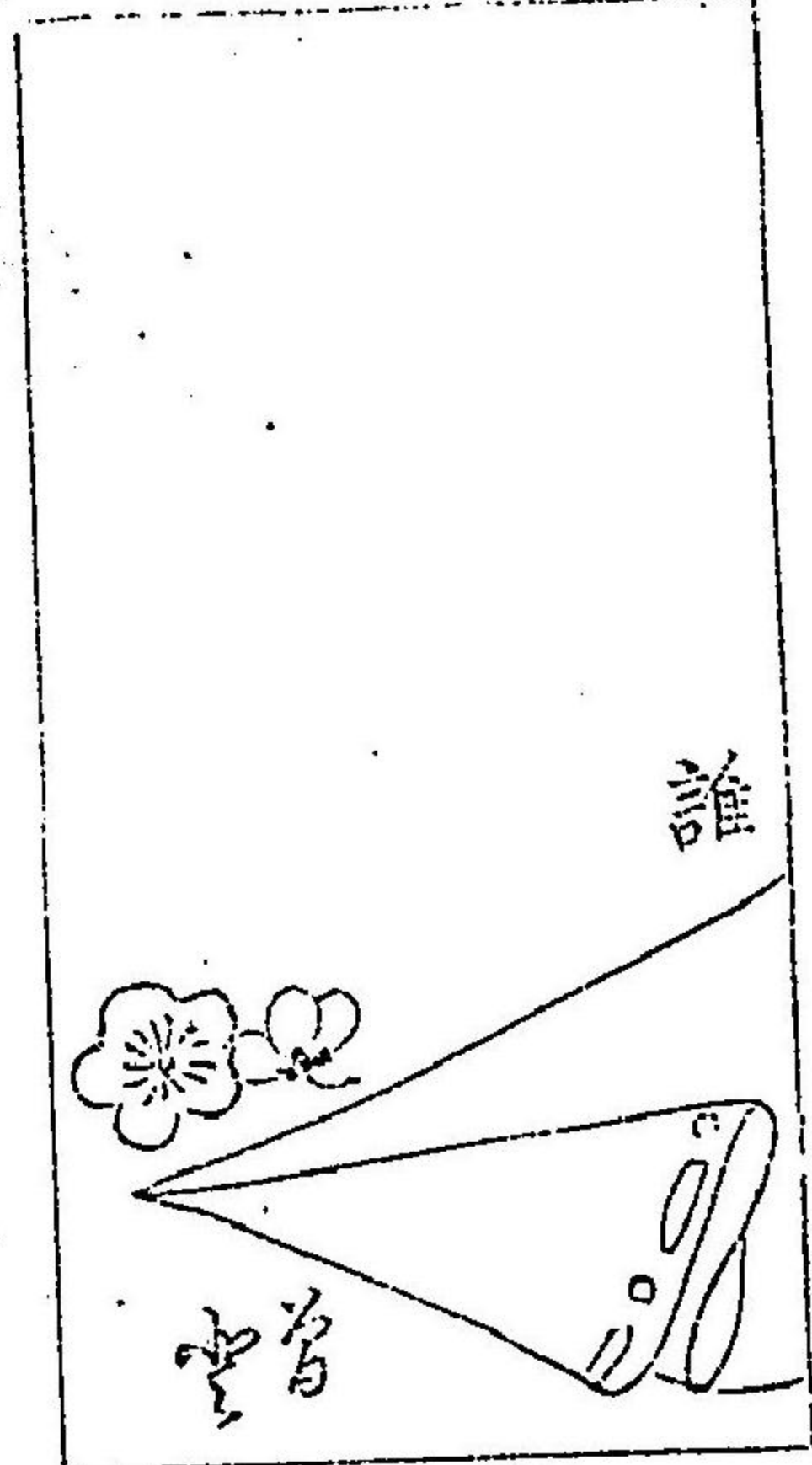
一番

左 梅花たか袖ふれし匂ひそと春やむかしの月に
とはゝや」といふ歌をもてあしでにかかり

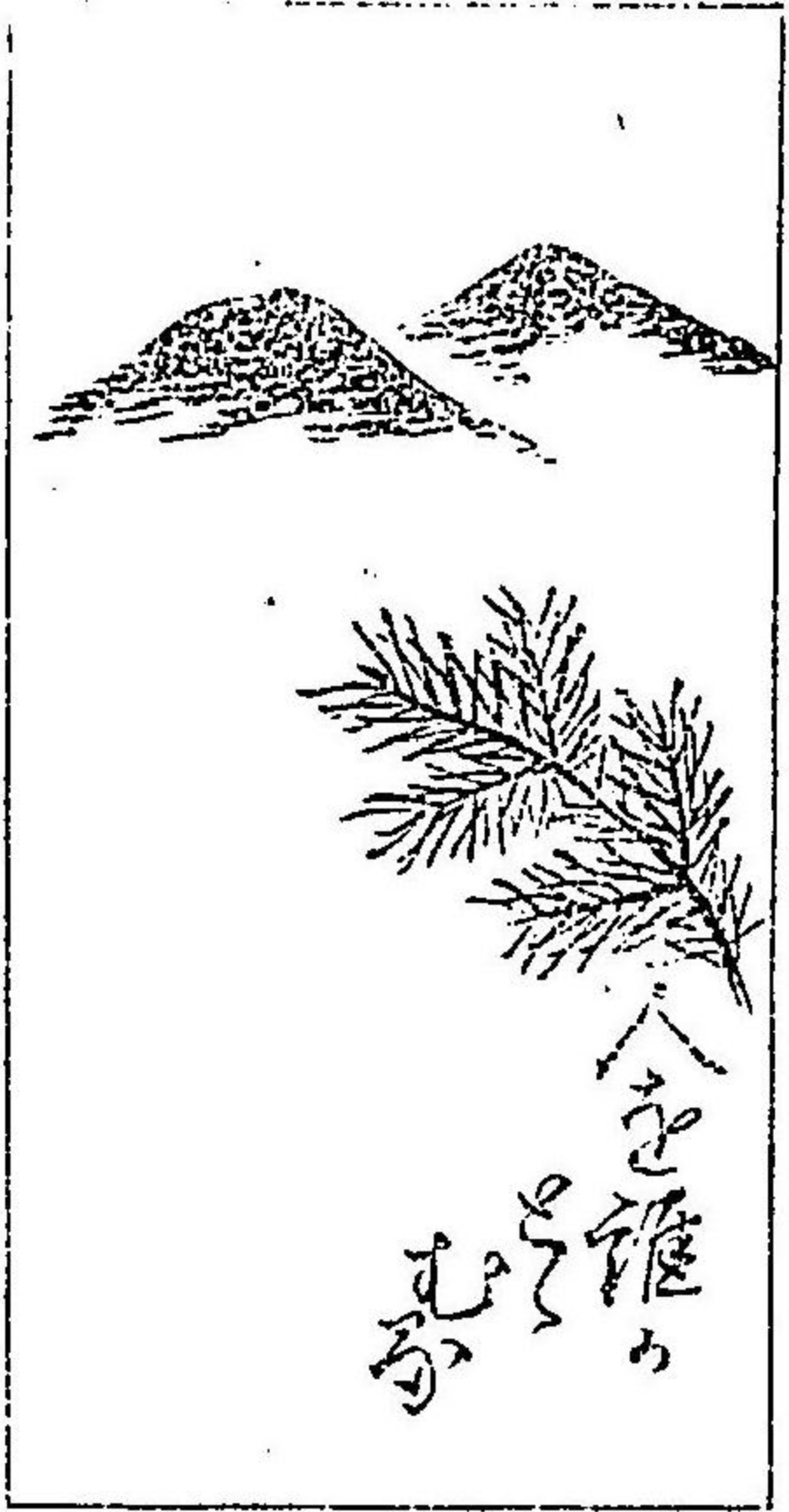
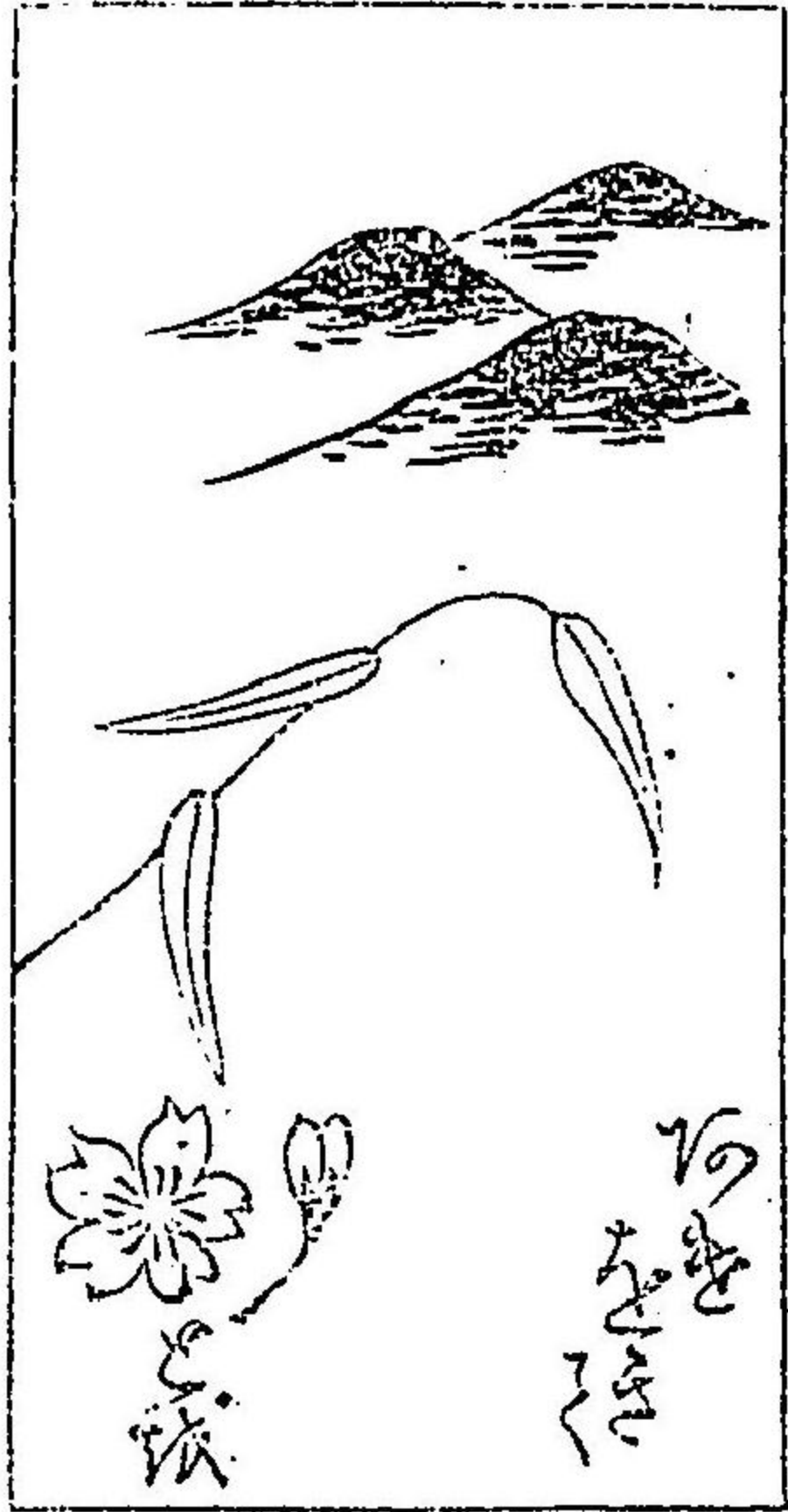


誰

裏



右 あしひさの山さくら戸をあけをきて我まつ人
を誰かさゝむる」といふ歌をもてあしでにかかり



「北邊隨筆」卷の二にあしでの事をいへる條に藤原貞
幹所藏のよしにて圖よつをいだせり今そのひとつを
のすこれもあしでの變體ともいふべきものにや



いまあくるこのうの圖をよもてあしでのさまをお
もふべし

なごり繪

「遠碧軒記」卷の下曰安土の惣見寺佛殿の繪馬に男子が棒をつきて楯を傍にすておき篋を片手にもちて傍に蚊帳をつりたる跡狩野永徳が畫ありこれは信長公御好にて氣を直にすきをすてかせげば身を持と云をさとり繪に被仰付珍敷圖なり」此圖のうつし世に傳はるばのこゝにさとり繪といへる名の見ゆるはおもしろし今も世にもてはやす鎌輪ぬといへるものも明曆の比もはら菰びしものなり是さとり繪といひてよし

「水鳥記」江戸版上木所載
の年號なし

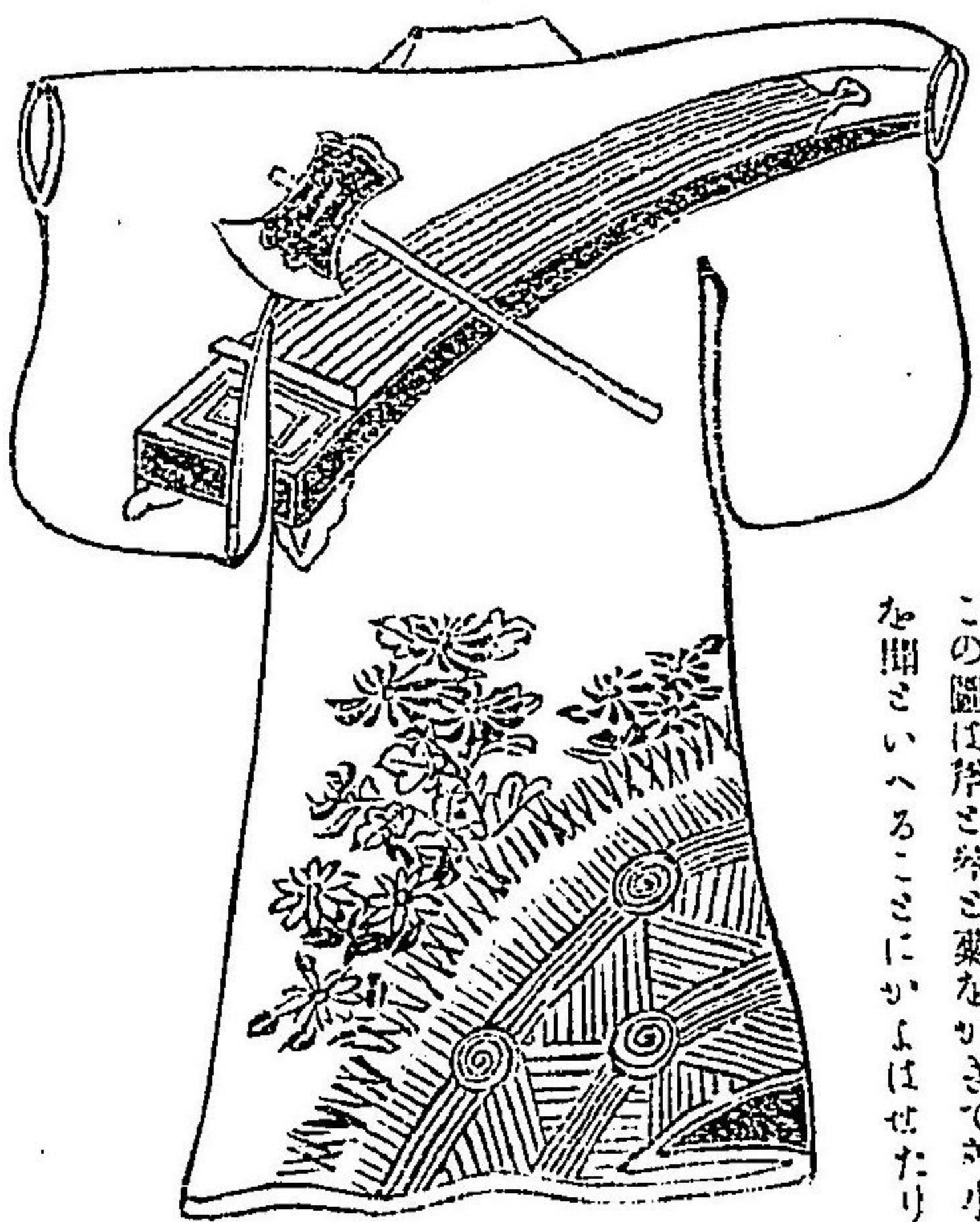
狂言記所載



鑿て文
字かきし
は飲手
いへるこ
と也

「女用訓蒙圖彙」真享四年所載

印本
琴に芥菜垣のうちに菊御はんじ物



この圖は芥と琴と菊をかきて其事を聞さいへることにかよはせたり

因にいふこはそれとはかはりたることなれど今もわらはべの戯れ咄に無筆の狀やるとて畫かきてことをもらせしなごいへることもしもいごふるく見ゆ「醒睡笑」卷の上曰文盲なる人ゆかけをかりにやるとて紙をひ

るげ手のひらに墨をつけひたとをしょうでくびのかたにはそきすぢをまはし書て是をおかしあれといふてもたせつかはしたりみるにうなづきゆかけをかせといふことの返事をせんと云まゝ皿と椀のなかを書てもごしけりかりにやりたる仁合點しさらはると云事か是非にをよばぬ」といへる見ゆまた「曾呂理狂歌咄」卷の一日唐はしのあたり酒うる翁有本より無筆にて帳に書をかきて覺とし十二月廿日ばかりに物書人をたのみて酒手の書付せさせ借ける人のもごにつかはして代をば取ることなり書の書たる有様色々なる中に馬の前足の間へ人のかしらを入て噛つき居る所あり是はいかなることぞとこへば馬をくらふ所は馬九郎と云事也馬の俣をくらふところは又九郎といふ心也といふにをかしくてかくぞ讀ける「馬九郎と又九郎とをひとつ書にかくはまごに覺二九郎」

「曾呂理狂歌咄」所載

酒ばやしの圖くさぐさありといへどもこゝに見ゆるも又一味なり



百万遍念佛

世に百万遍さて先妣の年回あるは祖師の忌日などにこのわざをいとなむ事「謠曲道明寺」に念佛百万遍申さば往生疑ひあるまじきなどいへるも見ゆあるは後醍醐帝の元弘元年七月に疫病のはやるをりよりこの

わざ始るよしいへるはひがことなり「選擇決疑集」曰
 道禪云須依小阿彌陀經一七日相續無間念名號若滿一
 百萬遍以得往生云々いとふるくは「榮花物語」玉のか
 ざりの巻曰としころもいと道心おはしまして百万遍
 の御ねん佛なごつねにせさせ給ふまた布引のたきの
 巻にも見ゆそのわざのいともふるくよりなすを見る
 べしもとは佛の國よりもおこれるものと見ゆそは
 「本總經」曰若復滿一百万遍者當得斷除百八結業と見
 えたりこれにておもふべし

葛西念佛

近代世事談綺卷の五曰葛西の土人鉦大鼓に笛をまじ
 へて躍念佛にて江戸の大路に徘徊す是を葛西念佛と
 いふ泡齋と呼ぶは寛永のころ泡齋と云狂人の法師あ
 りて町小路を走るわらんべあつまり氣違よ泡齋よと
 はやせり今以てかく云事ありて氣違の名目となれり
 此泡齋はやされて躍るかたち異形にして人の笑をか
 さねしむかの葛西念佛が躍る所一様ならず左へ飛あ
 り右へはねる有頭をうなだるれば又一人は尻をふり
 ておのがむきく心々にしてさだまれる拍子もなく
 たゞ物に狂ふが如く泡齋坊が躍るにひとしよつて泡

齋念佛とよぶ誠に氣違念佛躍ともいふべきなり

葛飾念佛

此念佛
 ねんぎ
 ねんぎ
 ねんぎ
 ねんぎ



乳籠舎 西嶋自画

この圖事保十八年卯木「名物鹿子」巻の中に見えたり

竹之丞寺

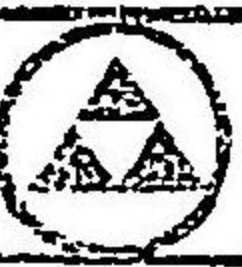
「瀬田問答」曰日本所豎川通龜戸村自性院略縁起
 抑當寺はもと境内に鎮座ある所の稻荷の別當職也然
 るに葺屋町歌舞妓狂言太夫元市村竹之丞若年にて太
 夫元となり幼少より佛乘に入て自性院の弟子と成り



言保のしし給

好問堂所画

此間、園十郎の画
 あれと今裏肉へ
 収載することよ
 たはさるをりて
 賞けり

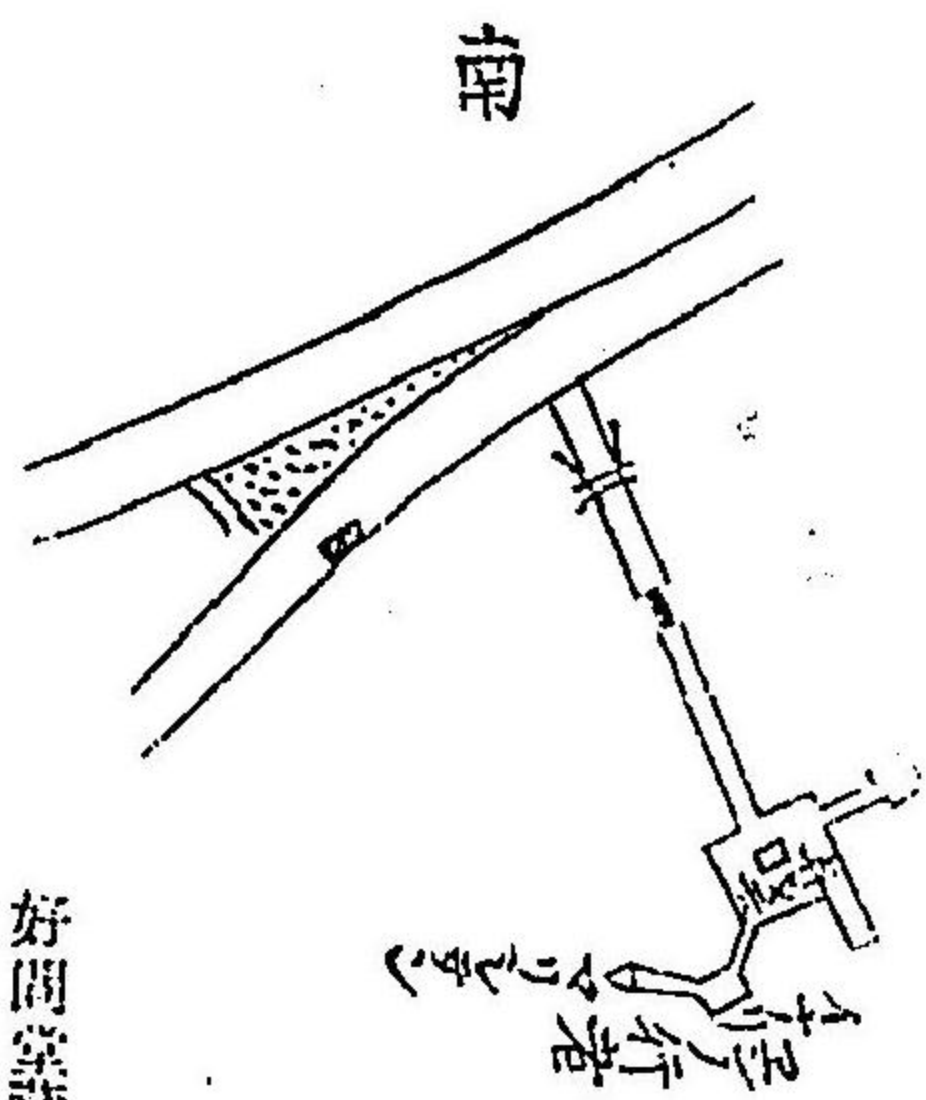
元極屋秋鱗  筆信清居鳥所繪

頻りに天台學をなせり廿八九歳のころは狂言も上手ながら手につかず唯自性院へのみ通ひて親族の輩へも兩度まで出家得度の願ひありける故一時もはやく妻をむかへて御たからもてる身さなば思ひ止もやせん色々々諫れども終に承引せず三十三歳のころ又願ひけるは斯のごとく今佛乘に入て迎も家職の狂言も手につき侍らねば甥其甥某甥河をもらひ養子となし木夫元を譲り隠居仕りたしとぞねがひける今は親族ももてあまし是非なき次第なりと挨拶するほどこそあれいそぎ隠居となりやがて日光御門主の御剃刀をいたゞき得度をこげ京都叡山にのぼりて勤學し段段出精して終に法印權大僧都阿闍梨の官位を給はり叡山の宿坊安住院の住職となれり夫より後年に及んで江戸に於て先師の自性院毫ぬれば一度故郷におもむき養育仕たしと御門主へ願ひ出すに付御許容ありて隠居仰付られける故いそぎ江戸にくんだり自性院に入て諸堂ごとく再建し或は百姓地を買求めて寺領のごとく附屬し終に先師入寂以後自性院後住とはなれり時に日光御門主の御意にかなひて上野へもひたすら召れ剩へ新宮の御師範まで仰付られけるゆへ

歸依の人おほく寺中にて滅さひもいつとなく執行ひけれども御門主の御威光にて誰ごがむる人もなく終に寺ごはなりぬ因て自性院を以て當寺の開山と稱し今以て安住尊師と唱へて木像を安置し尊敬す希代の名僧なり寂滅後遺骸をば當寺本堂の下に葬りて今に其石碑本堂の内安住師木像の下に袋戸の内にあり其脇に養子市村字左衛門初名竹之丞富士見西行の木像あり此故に竹之丞寺と云となり

不忍辨天

上野のふもとのしのはすの池なる辨才天の宮は「江戸咄」卷の二曰忍ぶが岡にうちつきてしのばすが池有云々池の廣さ五六町四方も有ぬべし夏は紅白の蓮花さきて今一入のながめ也池の中に島有辨才天の宮有是は水谷伊勢守奉りて立らるゝそのかみは道なくてなべてのものゝ參詣することならざりけり其後道つきて鳥井も立たり此島の内の左に經堂有右の方の中に役の行者左に稻荷の宮右に摩利支天有也扱かの經藏は了翁と云道心者の建立なり」今こゝに載る圖は寛文十一年印本江戸繪圖を抄寫して出せるなり



好問堂藏

案に此繪圖は「落穂集」卷の十曰嚴有院様御代酉の年大火事以後井伊掃部頭殿保科肥後守殿を始其外御老中方御打寄當地大繪圖と申ものなくては不叶事也とあり御相談にて云々」其後遠近道印と申書物屋方へ渡り板行出來之節云々」と見ゆさればこの繪圖を江戸圖印行のはじめとすべし年號姓名共左にのするを見るべし

寛文十一年

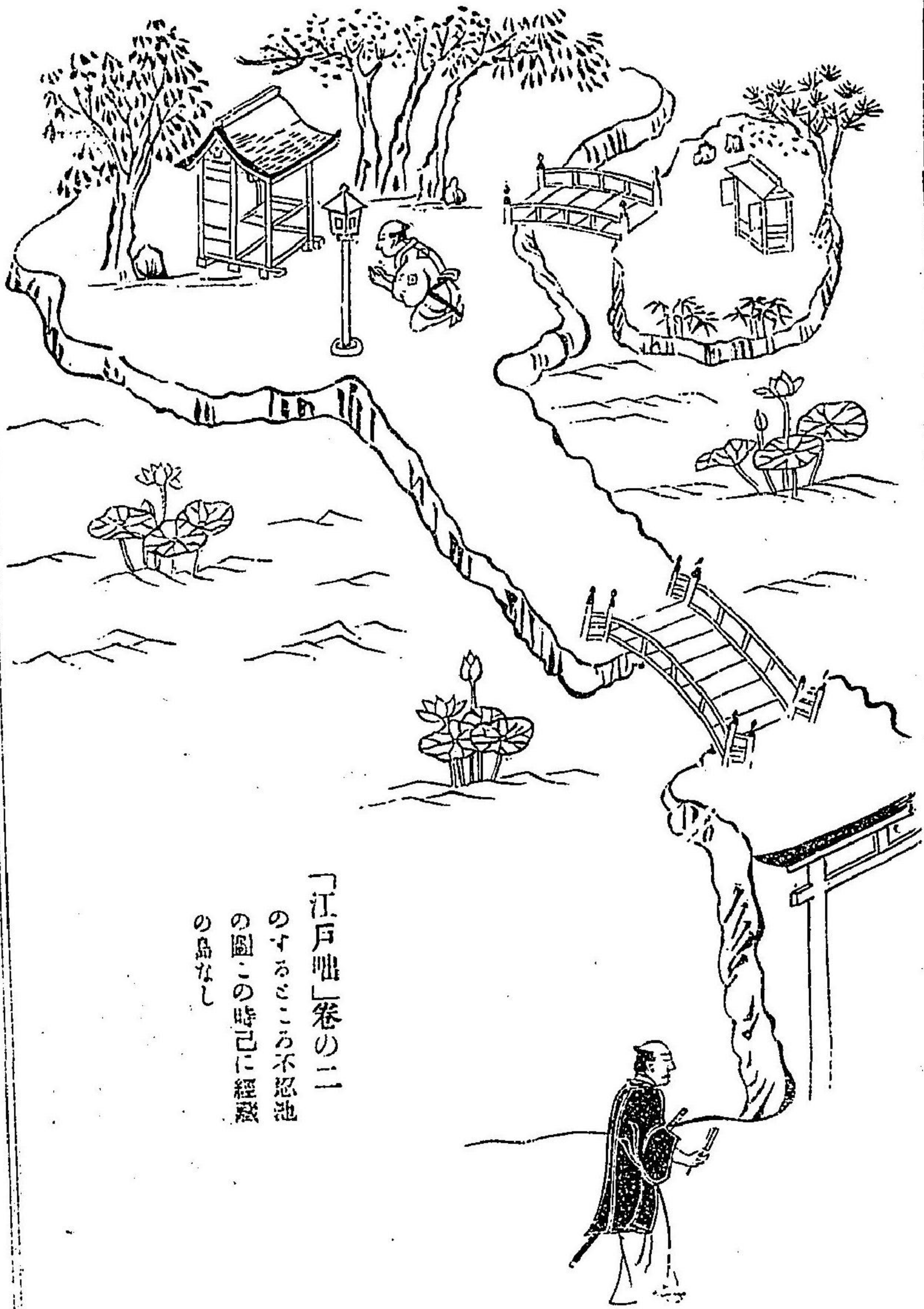
霜月吉日

遠近道印

經師加兵衛



今のする圖と前にいへる江戸咄にいふ所の不忍中島の事とかなふを見るべし今は了翁建立の經藏もなくあまつさへ島もそのかみ地震にゆりこぼらて知れる人だになくなりたり今聖天といへるは役の行者なるを是も社の名さへかわれるを見て思ふべしさてふるくは今の橋ある方はうらにて西のかたより參詣のもの舟にてまうでしと見ゆ「自遣往來」一名江稱不忍池中築一島被安置辨才天參詣之諸人者解錦纜桂棹蘭楫敲鼓謠今様且岩松風岸打波頻添颯々聲詩人者題池邊之月歌人者詠山頭之花」今の橋出來て社のむき迄かはりこのこともやみたりと見ゆ「江戸土座」曰不忍池邊といへる條に洛陽の比叡のふもと湖水に表して中に島を築き辨財天を安置す云々もとは舟にてかよひしよし今は陸地つゞけり此ごろはうらにあらたにはし渡して根津湯島の通路とし參詣の男女むかしに十倍せり」この文にていとつまびらかなりそれよりはるかの後八橋なごかけ渡したりと余が祖母なご幼き頃かの橋わたりしなご常に物がたれり因に云此池をしのばすと呼事沾涼が記に上野を忍ぶが岡といへばそれに對しての名なるべしといへ



「江戸咄」巻の二
の「忍」の「忍」の
の「忍」の「忍」の
の島なし

るはとるにもたらぬひがことなり又「武藏風土記」
豊島郡、條に曰篠輪津池 貢鯉鮒鰻魚鴻雁鶴鶴鷺
鴨等周行十里許旱日水不涸霖雨不爲害祈旱雨人詣
于茲所祭瀬織津比咩也」されどこの風土記といふ
ものは後世の偽書にしてそのかみの風土記にはあ
らすことに武藏國などはいよゝ後の世のものと
見ゆしたがふべからず戸田茂暉が「とりのあと」巻
の六雜下云しのばすの池にて月を見て
月見つゝ昔を誰かしのはすの
池のぬなはの長さよすから
とてその注にいふある人のいふしのばすの池はし
のぶが岡につきたる地なるゆへしのおが池なりそ
れをしのはすといふはは文字を父としす文字を母
としてかへしを見ればは文字なり不忍の池にはあ
らず忍ぶなりといへりおもふに不忍などの字をあ
つるは例の假なればなづむべからずこの説おだや
かにてしたがふべし

麓の花巻下目次

- 豆腐の紅葉
- 淨瑠璃物語
- 淨瑠璃ぶし
- 三絃
- 河東ぶし
- 河東節京童
- 河東節を鳩鳥と云事
- 長範のあて飲
- 鐘木杖
- 大神樂
- 豆藏
- 烟草を客に出す
- 烟草袋
- 染わけ足袋
- 鉢叩贊
- 近松門左衛門の法名
- 誓文拂
- 麴五吉の札

ふる
綿帽子

麓の花巻下

豆腐の紅葉

「堺鑑」天和三年印本 卷の下名物土産の部曰何國ニモ豆腐ハ有レドモ別シテ當津ノヲ勝タリト古ヘヨリ云傳ヘリ紅葉ト云名ヲ加ヘタルコトハ堺ノ櫻鯛ニモ不劣味ナレバトテ角云トゾ花ニ對スル紅葉ノ縁成ベシ又或人云此豆腐ヲ人ノ能クカフヤフニト祝テ付タル名共云リ買様ト紅葉ト音便成ル故歟今豆腐ノ上ニ紅葉ヲ印ス詞ニ就テ形ヲ顯ス成ベシ買用モ通ヒテヨシ」この説また「國花万葉記」卷の五和泉名所にも見へたり今江戸にて豆腐に紅葉をつくることはこれが據なるべし江戸にて紅葉を印するもいとふるくよりなすわざなりそは「俳諧當世男」延寶四年印本 卷の上紅葉といへる題にて

朝風や紅葉をさそふ豆腐箱

重秀

と見へたるにて延寶の頃已に江戸にあるを見るべし按に「きのふはけふの物語」卷の上曰ある人寺へ參る長老御覽じてさて〜きとくの御參りとてしやう

じ給ひて先々御茶しん上申せもみぢにたてゝまいらせよとおほせらるゝ此人聞てふしんして色々あんどもがてんゆかすいやく〜とふは一度のはぢとおもひ長老さまにとひ中せばこうようたてよと申事じやとおほせける」この一くだりは豆腐のことにはあづからねども紅葉を濃能濃能といへるに音便もてかよはせたる事のあれば堺鑑の説も音便の説に従ふべし

「好色二代男」にのするところ



この圖は落首咄に見えたるなり

「諸國落首咄」卷の四に落首にいふ
とうふやの豆の喧嘩でうすでおひ
一町の衆をおびやかしぬる
といへる歌をのせたりこゝにのするは豆腐に分銅

をつくるもめづらしければ載す

淨瑠璃物語

淨るり物語といへるさうしありこは小野おつうといへる女房の作なるよし「江戸咄」卷の六堺町の條曰淨るりの起りはあまりひさしきものにも侍らすとかや古寫本淨瑠璃物語笛段の繪そのまゝを抄寫す

問好堂所藏



豊臣大閣秀吉公の御臺様の宮仕に小野のおつうと申
てゆうにやさしき上らうの有けるが云々昔左馬頭義
朝の末子牛若丸くらまの東光坊の弟子と成合那王丸
と名をつきおわしけるが十五の歳の春の比奥州秀平
のもとへ下るとて金賣吉次信高が家人にまぎれ三河
國矢矯の宿長者のもとにつき給ひて長が娘の淨瑠理
御前に忍めひ給ふとてぬれにぬれたることの葉を十
二段にわけてかきしるし御臺様へさし上げれば云々
〔近代世事談〕卷の二には參州矢作淨瑠理女が事をつくる藥師のさ
瑠璃光の縁十二神を象り十二段とし淨瑠理物語と云々見ゆ
れば淨瑠理物語を一名十二段草子ともいへり余寛文
の比の印本にて十二段草子とうはぶみせる三冊のも
のをもち又外に上るり物語の古寫本二本及び近き
寫本一本をおさむ各異同あるが中にいたく違へるは
天正頃の寫本には十六段にわかれてりそのうへ文もこ
とにながやかに書なしたりこれをもて見れば藥師十
二神を象るといふは妄なることしるべし

淨瑠璃といへる調もの

さきにいへる「江戸咄」の同じ條曰十二段にわけて
書しるして御臺様へさし上げれば御臺様上覽ましま
して誠に言葉のつきやさがたに筆せい玉をのべた

り今の世のいせか紫しきぶかまこと小野のながれ程
こそあれとて御かんのあまり大閣様の御上覽にそな
へさせ給へば秀吉公取上させ給ひて是程のものをそ
のまゝすておかんもをしきもの也とて岩松檢校にふ
しをつけよとおほせ付られければげんげう仰を承り
云々通女が作なくば音曲の妙もむなじからんによき
さいわひにも生れ合候とてしばらく閑居してふしを
付かたり初めけるとなり云々それより世上の座頭つ
たへてかたりけるを上るりぶしとてはやし次第
に事廣くなりて云々「獨語」卷の上曰淨瑠りといふ
ものも三味線と同じ頃初れりといひしものゝことを
國矢作の宿の長者の女淨瑠りといひしものゝことを
十二段の昔語に作りしを其頃盲法師これに節を付て
語り出せしとかや」とあるにて淨瑠り節の起り知る
べし淨瑠りといへる名目のいとふるく見えたるは
「狂言記」外五十番卷の一「昆布賣曰今度は上るりぶ
しにうれ▲▲ト是もうつてきかせ▲▲こぶり心得たつれ
てんく〜てれ〜てんまづ是が三みせんのことゝろも
ちじや」と見ゆ〔乳河原勳進申樂記に狂言といへるの見え
たる頃のものと見へたり〕

三絃

右にいへる外狂言昆布賣に三味せんといふこと見え
たればそのふるく渡れること思ふべし「護園談餘」卷
の三曰本朝ニ寛文ノ比琉球ヨリ傳ヘタリト「獨語」
卷の上曰慶長の頃とやらん此國に傳へしといふこと
ある説ごものひがことなる知るべしまた「大麻」真享二年
印曰三味線の起りは永祿年中に琉球國より是を渡す
其時は蛇皮にてはり二絃なる物なり泉州堺の琵琶法
師中、小路といひける盲目小人にとらせたりける故
此盲目よろこびてしらべつゝこゝろみけれぞ教へお
かざれば音律かなはず是を心うく覺へて長谷の觀音
へ詣て一七日參籠し引やうを祈しにあらたなる靈夢
ありて階をくだる時に大中小の糸三筋盲目が足にか
かる是より三すぢの糸をかけて引に無盡の色音いで
たりそれより三絃にきはむるゆえに三味線としかい
ふ云々これにいへるごとく永祿の頃琉球より渡りし
なりゆへに「松の葉」卷の一に琉球組といへる小歌を
のせたり是彼國より傳へし時に作れる曲ゆへにしか
名づけしなりおもふに大麻おほほに二絃わたり後三絃にせ
しといふはあしゝそは「桃林伐山故事」卷之四曲名類

曰今之三絃 小山詞云三絃玉指双釣、草字題贈玉娥兒
これにてもとより三絃器なるものしるべしまた三味線
に蒔繪などせしことは近き比の俗と思ひしにいとふ
るく見えたるは「うらみの介」卷の上曰ころはいつ
ぞのこと成に慶長九年の夏の末云々いまやうの三尾
線の轉手てんじゆきりとおしまはし糸を調てかんをとりあい
のてひかせらるゝさやしやみせんのかつかうには心
詞ものべがたしるびの尾の所には雲井のかりの音信
て翅を並べて古郷へ歸る處を蒔繪にすきて糸くらの
左右に日月をあきらかに白かねにて顯せりさてさほ
の下りには「世の中は夢か現かうつゝとも夢とも更
にありてなければ」といふ歌をかなもじにて書にけ
り扱又筒のまきゑには都の内をぞかきにける祇園清
水加茂春日」と見えたりその頃にはいとめづらしい
とくらといへる名どころなご「和漢三才圖會」卷の十
八樂器の部に三線の圖あり名どころごとくくに出
したれざる名は見えず

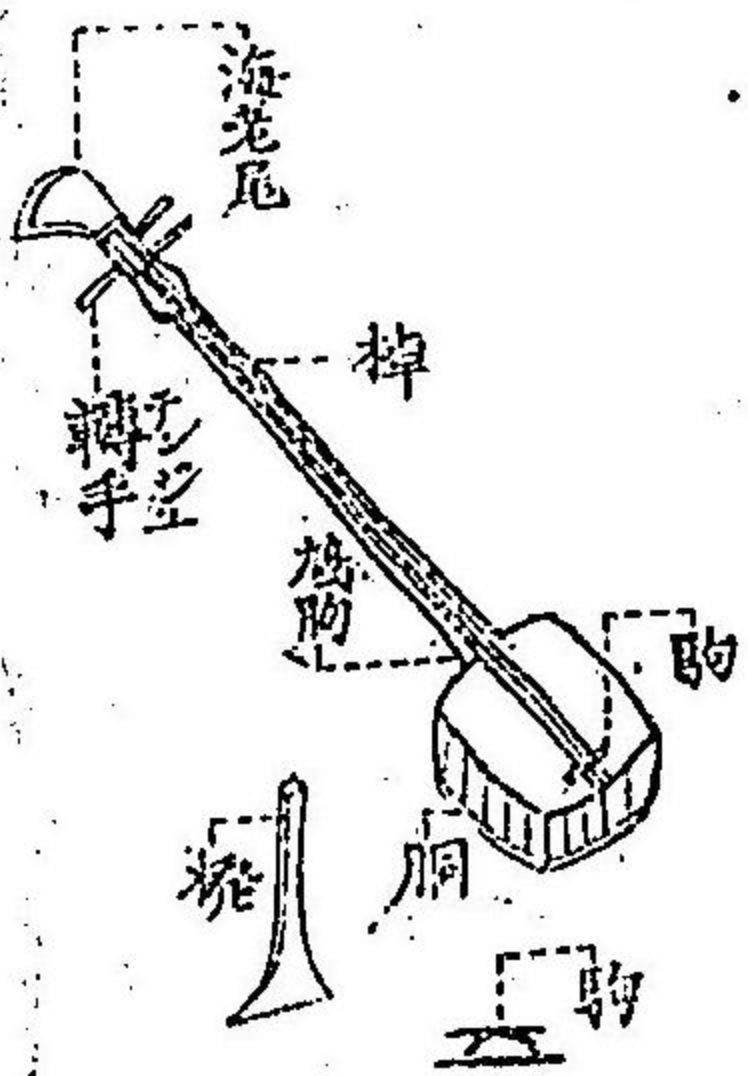
因に云「蘭亭序原考」曰弦說文作弦从弓象絲軫之形
會意按并从弓从糸平古文糸字與玄黃之玄異隸或變
作弦漢張遷碑云西門帶弦右軍蓋用之說文別無絃字

弦借爲絃歌之絃 美成按にこの説尤よしおもふに今長唄といへばよく説文の古字を傳へかけるといふべし



この圖寛永の初の頃のものと見ゆは柳亭主人とくられたるころなり

「和漢三才圖會」所載



河東節 ○十寸見河東が傳は「近世奇跡考」卷の五に詳なりされど是河東一代の傳にして其業を傳ふるよしは記さず今友人平蕪ぬしの藏本に「江戸節根元集」といへるもの一冊ありて甚つばらなり今河東節の條一節を抄す曰「江戸河東節小田原町御納屋天満屋藤左衛門粹藤十郎半太夫門弟に成しが此者近世の名人となり一流語り出し藤十郎世となり御納屋も外へ譲り母の里淺草御藏前に在しが此名字を河部氏と申彼家と同居せし故河部の河の字に藤十郎の藤を取り河藤と呼也藤の字の譯は前文有元祖河東弟子河丈是は吉原大門外下駄屋庄右衛門といへる者也二代目河東となり二番弟子夕丈事二代目藤十郎と改名す此時一流二つに割れ藤十郎方へ三弦山彦源四郎附し也河東方は三弦十寸見東古附このころ双方とも名人多く賑々敷相互に勵み繁昌せしなり藤十郎後に剃髪して榮軒と改鳥越邊之御屋敷へ醫師格にて被召抱相勤ける也悴事は澄師職にて堆朱源藏と云ものなり」と見えたり

京童

「江戸節根元集」曰京童是は夜目遠目笠の内五段目な

り此淨瑠璃古來は振袖の染しもやうは月見草九月になれば菊童と語りけるがいつ頃よりか八月九月の文抜し事知れ難し三弦前引は近頃より引し也干圓子の大明神は三井寺觀音堂下に結構なる社あり此所にて尋ければ本鉢は鬼子母神也といふ初代半太夫節付也」と見えたりしかはあれど夜目遠目笠の内といふ淨るりいまだ聞かずかつ振袖の云々といへる脱文あるよしいへるはよけれど文にあやまりあり今流布古印本「京童」「鴉鳥後選集」「鴉鳥太々神樂」等によつて校正するを左にのす

「鴉鳥後選集」ことさらあやまりなし今實本とす

河東節の本を鴉鳥といふ事

河東といへるうたひもの、本に「鴉鳥集」五卷、この書にて分「鴉鳥萬葉集」二卷「鴉鳥紅葉集」二卷「鴉鳥後撰集」二卷「鴉鳥太々神樂」二卷その他「夜半樂」「十

龍の花巻下

三百五十一

寸見要集」等ありといへども鴉鳥をもて書名におゝせたるは余が所藏には此五部に過すおもふに江戸節といへるものはその音聲いとながやかにうたひなすものにしあれば「萬葉和歌集」卷の二十散位馬史國人の歌に曰爾保利里能於吉奈我我波半多延奴等母伎美爾可多良武己等都奇米也母といへるよりいひはじめしもの覺ゆそは「冠辭考」卷の七曰鶴鷗の水底に入てきてうかみ出ては長く息つきて鳴故に息の長き意にて息長川につけしなるべし」こゝにいへる眞淵が説をもておもへばかの曲節のいと長ければ鴉鳥の息の長きにかよはせてしかいへるなりさればこの萬葉の歌よりしか名づけし事しるべし

長籠のあて歌

「毛吹草」卷の二曰ちやうはんのあてのみかへるは口からのまるなごいへる謠をのせたり今も人の物をあてになし居るをしかいへり「三道明訓抄」夢恭物語の條に

黒法師 ちるもあり今さくらあ先手後手
白法師 長の半是もあてのみ花見酒

舞の本「烏帽子折」曰さても青のがはらによりきする

三百五十一

舞の本鳥帽子折に
あるところの繪を
そのまゝうつす



ぬす人はたれ〜ぞまづ越後信濃のさかひなる熊坂
ちやうはん親子六人さす云々あをのが原にうちより
て大まく三ゑにうたせ大づたいへいかきすへわれ
らが酒をのまばて飲こそ吉次がかはこそをのむなるにのめ
やうたへや尤とてまふつうたふつ酒もりをする

因に云舞の本の事物に見へたるは「つれ〜草」巻
の下に曰多久助が申けるは通憲入道舞の手の中
に興あること共をゑらびて磯の禪司といひける女
に教へて舞せたり云々其後源光行おほくのことを
つくれり後鳥羽院の御作もあり龜菊にをしへさせ
給ひけるごぞ」これにてそのふるき思ふべしまた
世に舞といへるものは本のみありて舞の手はなき
もの、よしもいへれご思ふにさにあらず「醒睡笑」
巻の下曰鳥帽子折をまふとて山路殿がふく物の名
をば何といふやらん名は何といふやらんごくり返
くり返よごもついに横笛いすなごあるぞあか
しなりける余がもたる本卅六番あり次に購へる外
舞四番すべて四十番あり

鐘木杖

「毛吹草」巻の三に鐘木といへる付合に杖を出せり思

ふにそのかみ鐘木杖といへる名目ありと見ゆ今も盲
人の勾當檢校のつける杖に鐘木ありされごその名あ
るもおもしろし

因に云「和名類聚抄」卷之十三三丁僧坊具部曰漢語
抄鹿杖和名加勢部惡又卷之十四十九丁旅行具部横首杖の條
一云鹿杖と見ゆ「牛祭書卷」一伴大納言書卷」その
外にも見ゆこのかせ杖のうつりて鐘木杖といへる
名はいでましならんと思はることに横首杖と和名
抄に見えたるなご思ひ合すべし



この圖ふるき草子の類のかさの本に見えたる繪
なりすがたはやまごのひごにもあらねご鐘木杖
をうつせるさまその本を考ふるに百二三十年以
前のものと見ゆ

菟川吉兵衛畫
本「浮世百人
女」といへる
物に此繪あり
天和元年印本



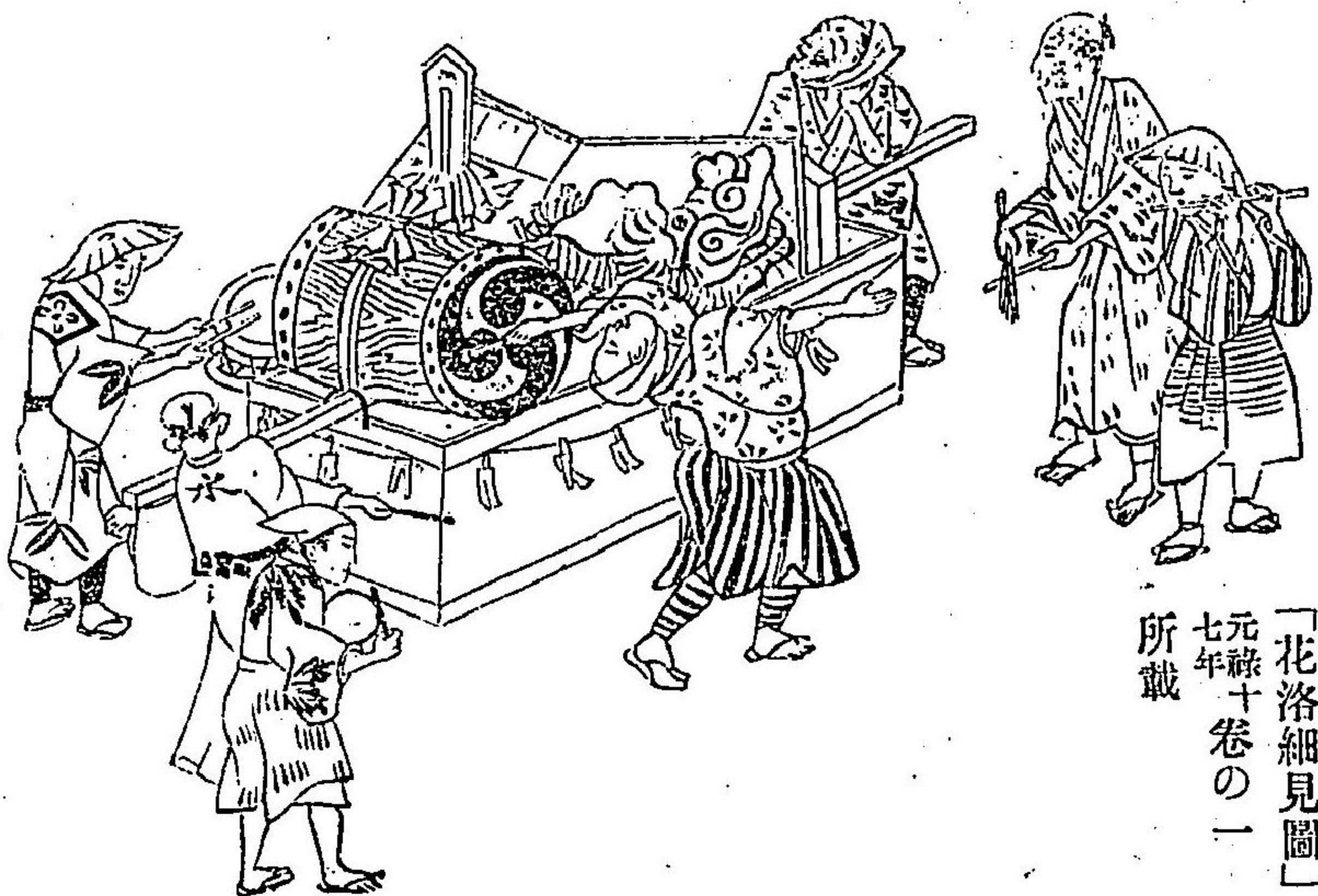
大神樂

今わらはべの慰にすなる大神樂といふものもとは獅子舞といへり「勘進聖歌合」の繪にも獅子舞の圖を載たり「人倫訓蒙圖彙」卷の七勘進御部にも獅子舞惡魔を拂ふと云なり出所たしかならず」と見ゆ思ふに大

神樂と文字にはかけど大字は假にて代の字なりそは代參代垢離などの代にて神樂のかはりにすなるわざといふことなり「南嶺子」卷の三日都鄙ともに大神樂と號して獅子を舞來る輩あり伊勢國吾鞍川より出て諸方をめぐるものなり「伊勢參宮名所圖會」卷の三日伊勢國桑名郡大夫村桑名の近村なり此所より代神樂獅子舞六組又三重郡阿倉村より六組以上十二組いづる諸國電拂ひをなす故に太夫村といふ云々

「花洛細見圖」

元祿十卷の一
七年
所載



豆藏

今みや寺など賑ふ所には必ず豆藏といへる乞士ありそは重きものを曲持にしあるは滑稽をいひ人の笑ひを催せりそは昔豆藏といへる名の乞士ありしよりそれが類ひのものにしか名をおほせたるなり「齋諧俗談」卷の三日貞享元祿のころ攝津國に一人の乞士あり名を豆藏といふ市町に出て常に重きものをさへげて錢を乞ふ」と見えたり「諸家餘知錄」曰江戸本橋町に大和屋入あるは訴訟公事沙汰男女婚姻の媒酌等を肝入す一これより人の口入をなすものを腹安とよぶなり豆藏のちもむきに非似たれば因にする

烟草をもて賓を待す

烟草の中國に渡りしは天正の頃なりしかせしよりこのかた世にあまねくもてはやし今にてはひと日といへどかくまじきものとはなれり「雍州府志」卷之六雜菜部曰近世本朝之流風而家々有來賓則寒暄談未了中先出烟草盛是於筥埋火於銅鐵或磁器是稱火入并葉所吸之渣滓灰燼器并火入等之物居方盆或圓盆是謂多波古盆また「めさまし草」寛永二年印本下の卷曰たばこといふもの異國よりわたりて烟をすひならはし上より下に至るまでもちあつかひける何のごくありとはしらす

たゞ客の入来て相伴などなき折ふし獨ありてさびしき時などの用なり」なごみゆ又「唐錦」に後水尾天皇御製の歌に「あまのすむうらならねともけふりくさ人のなみあるしほごそなれ」そのかみすでにかくひろごり翫びぬるは世の人の心にかにかなひけんものにしてかくまれびとをもてなす具にすなるわざは異邦の俗をまねぶにもあらねど自ら彼此おもむきを同じふすともいふべしそは「本草彙言」卷之五烟草條曰門吉士曰此藥氣甚辛烈得火然取烟氣吸入喉中火能禦霜露風雨之寒辟山蠱鬼邪之氣小兒食此能殺疳積婦人食此能消癥痞北人日用常客至即然烟奉之以申其敬如氣滯食滯痰滯飲滯一切塞凝不通之病吸此即通と見えたり

たばこ袋

たばこの世に専らはやりて中頃よりはみづから持て人の家にいたりても又は野邊などにも持行てくゆるす事にはなりにたりさればたばこといふものをいれるものなくてはかなはぬゆへに初はかみにつゝみてもたりそは寛永元和の頃かごよ今こゝに出せる圖をもてそのさまをしるべし



この圖は余が所載土佐繪を挿したる屏風にあり元和ころのものとも見ゆ



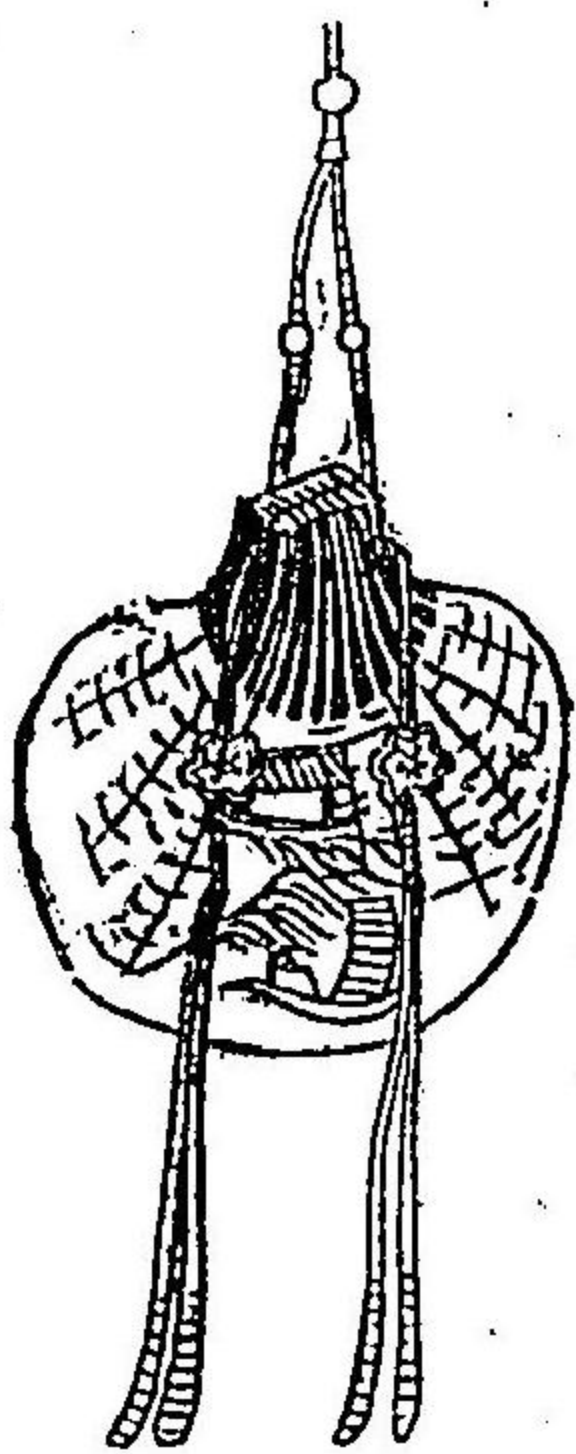
さてそれより袋にいれたりゆへにたばこ袋といへりそは次にいたせる「あやめ鏡」の繪をもてそのおもむきををしるべし

「あやめ鏡」上木の年所載圖



左にのする漢土たばこ包の圖はたゞ彼此おもむきを同じふするを示すのみ

「燕録」所載漢土所用燕包之圖



「鳥籠物語」この書寫本にて所載せり年號なしされ曰藤八角内や珍藏などの小坊主にたばこ袋にきせるづゝ火なほの烟りほのやかに松吹風にさそはれて」など見ゆそれよりのちつぎくかゝる器に美を盡し玩弄に志を失ふ事になりゆくぞうたてきもし箕子とかいへらん人に見せたらんには何とかいはいめそのかみひとたび御制禁のありしもうべなる事にこそ

染わけ足袋

紫革の足袋の事及び昔も木綿足袋の有しも詳かに載せて「骨董集」上編巻の中に見えたり染わけたびといへる名目いまだ人もいはねば見しまゝを記す「めざまし草」寛永二年印本巻の上曰此頃のうき世わたりの光廣廻歌あり

若法師受戒のさたはさもあらでうら紫の小袖きてこごまうしろへひきまはし依文金砂の平帯してきぬ本ノ、もし衣身にまごひ染わけたびに紫紐紅うらの九頭巾黄纈縷のきんちやくに蒔繪梨地の印籠さげからのやまごの緒ごめして身なり足ふみふりかゝり人にかはれるおかしけれ」この文かくくたくしくはえうなけれごこれにてそのかみの風俗思ひやるべしゆへにこと長くかきのせたり

鉢敲贊

「半陶鏡」卷之三鉢叩贊曰爲眞乎蓬鬢飄蕭爲俗乎床褥勃窣非眞非俗抑鹿角仙人之流亞也耶是空也上人度一類之機設瀝利者也吁顔飄展空空也已沒空不在斯乎哉



一休鉢扣贊曰晝不著笠夜不齒、東西南北自由身、一飄扣畢有何益、花發十方淨土春、この詩のせて「年浪草」巻の十一空也忌の條にありされど「狂雲集」「續狂雲集」及び「一休はなし」

「一休諸國物語」「續一休はなし」などにも見えず
さて鉢叩の事「日次紀事」卷の四「舉白集」卷の十及び
近きころ印行せし「瓦礫雜考」などいふものに見え
れば今は贊の詞のみあぐ

近松門左衛門が法名

「今昔操年代記」卷の下に近松の事をのするも甚つば
らなりその中に若辭世はと問人あらば
夫辭世去程扱も其後に

残る櫻が花しにははい

入寂名阿禰院穆矣且具足居士と見ゆ

柳亭主人曰近松が自筆法名有それに阿禰院穆矣日一
具足居士とあり日蓮宗故に日字を付たるを二字をあ
やまりて一字とすといへり」世人のいまだしらざる
ことなれば今こゝに記す

(頭書)活東子曰既く南畝翁が假名世説に日一と記
せり

誓文拂

今乞兒のすた〜坊主とて手に扇と策杖を取こしに
注連繩引まわし物をこふ有おもふにこれはもと誓文
拂といへるものうつり來れるなるべしそは「日次紀

事」二卷之四曰俗傳此神令免偽盟之罪故商賈詣此社
稔欺賣之罪者也故今日參詣曰誓文稔然此社實不詳何
神世或爲土佐坊昌俊於義經之前偽誓不爲追討使因此
神罰果被殺救他人偽誓之罪云未知然否右官者 殿條これ
をもて見れば今物こひのなすわざはその罪を犯せる
人の代りにはらへる心には伊勢宮川のほざりに代ご
りとて小兒のいで、物こふあるは箱根權現の御社に
も參代せんとてわらへの物こへると同じるいにぞあ
るらん

按に「神社便覽」曰官者殿京極四條鎮舉世所謂此神
者誓文起請赦免社也云々依此考則唯一所傳起請返
神乎起請文上書靈印以奉神供一七日祭之誠唯受一
流大事非其家則不傳也故今本縁不載之耳今世武將
俗云土佐房之靈者蓋花言哉乎 正純祭之



この圖は享保七年印本「俳度曲」卷の下に出づこの
本謠曲百番を題にて俳諧とせしる本なり

麴五吉が札

神社佛閣には千社參などてその稻荷社かしこの
天神宮などいへるまでうるさきばかり札はれるわざ
はもとといづれの時か帝の法皇の御位にならせ給ひて
卅三所の靈場を札うちめぐり給ひしより起れるとい
へり近くはそのおんあそをつぎ奉りて天愚孔平とい

鏡の花巻下

ひし人なせりそれに次ては麴町てふ所の五吉といへ
るものこのわざをもばらなしいづれと定めもなくお
のがまうづるまに〜札をはりしとなりその頃は今
のごとく印刻しける札にはあらず書たる也かの札は
れる人々のなかにはことさらにこの麴五吉が札をば
いとめづらしきことはいひなし慕り購ふに至るとか
きし余旅行せしをり比叡の御山より坂本へ下る路
の傍の小社にあるを得てかへりぬ今左にのするを見
るべし



好問堂所識

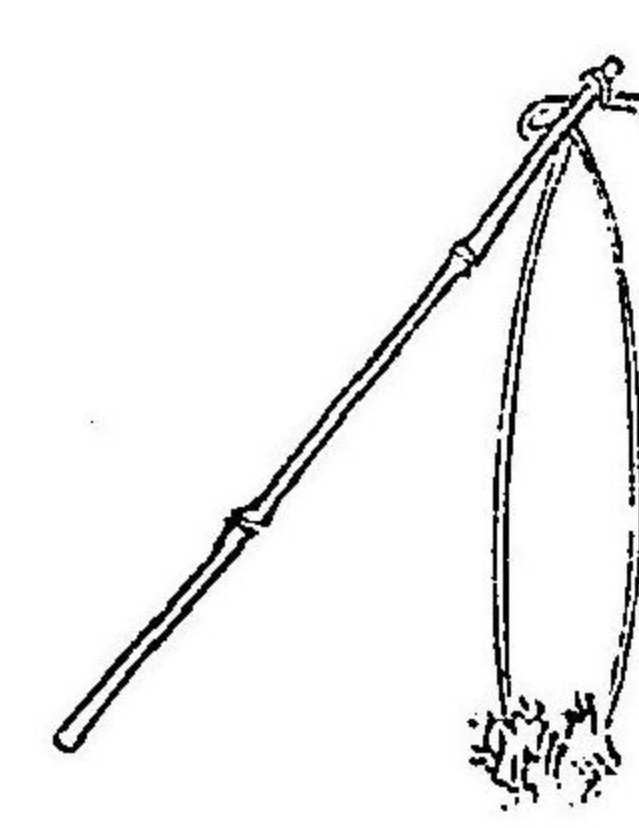
(頭書)池田勝躬曰麴町てふ所の五吉といへる云々
そは五吉といへる名にはあらで麴町五丁目何某と
いへる文字をはぶきて麴五吉と書し物ならんかさ
る例し張札見あたりしこともあれざわすれたり今
もあき人の番がさに目印及び町名しるせる中に本

丁一丁目大傳馬町二丁目などを本一大傳馬二どか
けるものあなればしか思ふのみ

ふるといふ童の戯にもてる具

わらはへの春の遊にいかのほりあぐるにそをどらん
とてふるといふものをうちかけてとることありそは
糸もて石をくゝりてうちかくるなりおもふに老人は
それをふるふんべいとぞいふなるこは「和漢三才圖
會」卷之二十一征伐具曰

石フリスツム
編石今云不利豆半
波以飛礮互布天



このふりづんばいをよこな
まれるもの歟戯の具といへ
ごゆえよりごころあるもの
ぞかし

綿帽子

近き世までもかうぶりし綿帽子といふものゝふるく
見えたるは「富士御覽記」永享四年の記おなじあした御わた
をかしまいらせらるべきよしありてやがて御ひたひ
にうちをかせ給ひて
我ならず今朝はするかのふしのねの 嫺真居士山名金吾

綿ほうしともなれる雪哉

雲やこれ雪をいたくふしのねは 雅世朝臣飛鳥井殿

ともに老せぬ綿ほうし哉

富士のねを雪そいたく万代に

よろつまん綿ほうし哉

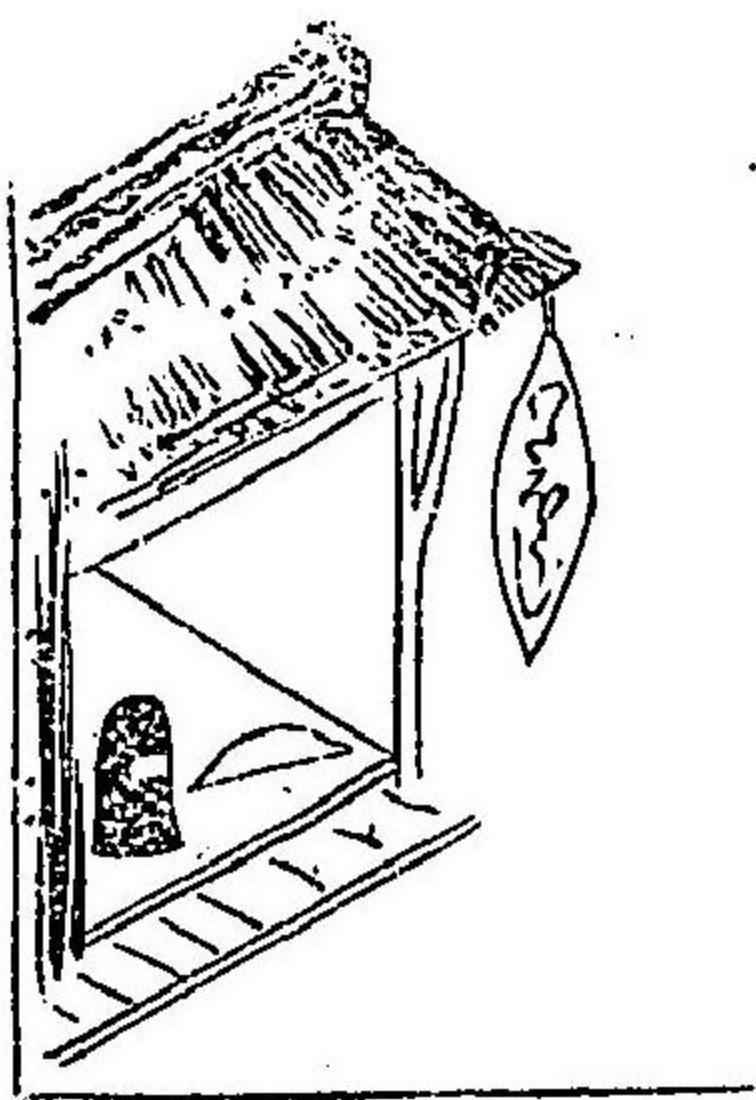
「古今夷曲集」卷の四冬歌山雪を

雪になる雲をほうしに打かぶり 淡海守宗増

かしらもさぞな大びえの山

北山のかしらにかぶる雪の綿 尊純法親王

寒もて寒をふせぐなるべし



この綿帽子看板の圖は「俳諧庭訓往來」卷の下に見
へたり

「太古やぐらかしらがき」所載

上木の年號なしといへ共天和
二年の印本と思はるゝ證あり



「新竹齋物語」二わたぼうしといひうなぎと解く謎を
のすさればうなぎわたといへるも有なるべし今は舟
わたといへるのみ名目は世にのこれり

貞享元年印本、
「武器訓蒙圖彙」所載

綿帽子



「骨董集」上編中の卷にいふ物類稱呼に編ほうし江戸
にててぼそといひ堺にてこきんわたといふ肥後にて
手ばそといふは腰帯のことなりといへり醒々云これ
制作の形によれる名なり○又ある物に紫のてぼそと
いふ事見えたり菱川の繪などに少年の女紫のほうか
ぶりしたる体を多くるがける是なるべしさればわた
にもかぎらずはいのせまきをさして手細といふなる
べし腰帯を手ばそと云もはのせまき謂ならんは
せまき布の細布といふたぐひなるべし



今江戸に余が見る所ニテ所
ならては此看板を見ず

「洛陽寛濶壽」寶永年の印本「こはうれしやと朝鹽はか
 たへのてうし盃を手ぼそをよせてむすびつけぶたい
 の下へぞさしおろす」この手細といへるは前にもい
 へる腰帶のことなる證なり綿帽子にもくさくの名
 有うなぎ綿舟わたなごあれどわたぼうしの事別に考
 へあれば今はそのおほむねをいふのみ
 「尺素往來」卷之上曰鷹師不論貴賤蘇芳衫綿帽子付
 緝袋云々

鹿の巻筆

それやまど大わらひのはじめはむかしくあつたと
 ころにそろうといひけるおごけもの、御きげんなを
 しにおたるもつてまいつたといひしよりはじめてよ
 ろづのことばにはなをさく作意いのかる口はあまねく世
 にひろまり月まち日まぢのねぶりをさますおごぎば
 うずのひざをいためうゑつかたの御まへにては下が
 かりのさしあひおほくかたりの、しるもきやうげん
 きいよのみちすぐに三佛生のゑんはいなもの我がい
 ほはみやこのたわこといひ鹿がすむとなりにてよを
 うぢ大和繪師古山師重ふうりうのゑそらごごはた
 がゆひそめたしかのまき筆きは御免

鹿のまき筆惣目録

第一

- 初 ばんごうや才介
 - 二 三人ろんぎ
 - 三 せりふのけいこ
 - 四 いなかもものゝごうわすれ
- 第二
- 一 筆屋のじゆりやう
 - 二 にせやしま
 - 三 同二ばん目
 - 四 夢中のろうにん
 - 五 火の見やぐらのみたて
 - 六 松本尾上が狂歌
 - 七 いみやうなりひら
- 第三
- 一 たいこやぐらのらくがき
 - 二 浅草観音梅の狂歌
 - 三 さかい町馬のかほみせ
 - 四 にくづし

第四

- 五 正月は物いまひ
 - 六 無筆のけんくわ帳
 - 七 むそうのよみそこなひ
 - 八 やぼのかげま持
 - 九 吉原ひなあそび
 - 十 佛事のいんしん
 - 十一 よしはら酒の行末
 - 十二 きよつねのうたひ
- 第五
- 一 くごくの念佛
 - 二 きかぬやつこのしゆうごう
 - 三 くるま善七が火事
 - 四 代官のかる口
 - 五 ひやうぐやのかけ物
 - 六 初心大こくまひ
 - 七 かんばんのよみちがい
- 第六
- 一 ぬれのはじまり
 - 二 ゆやのあま
 - 三 くだりなぞばなし

- 四 ばゝが寺請状
- 五 作藏がかた事
- 六 躰の屋道具
- 七 あにさまのりやうけん
- 八 しばい太夫もとの日待
- 九 心ばかりは我物

鹿の巻筆第一

ばんごうや才介

浅草新寺町にすご六のばんさいとごうなどつくる事
めいじんの細工人あり江戸中よりあまねくあつらゆ
るものもおほかりけるさるによつて弟子なども四五
人ありてふつきにくらし名をばんごうや才介とつき
けりさてうらにやぶのありしに此竹をきりてごうに
つくるほどに竹の子なごのじぶんはずいぶんたいせ
つにしたりさればもしや人の竹の子をぬすみてきり
もやせんとおもひてかぞひしるしなごをつけておき
しにいつのまにか竹の子十四五本もぬすみごりたり
才介もつての外に立腹して弟子どもよびてごかく外
からぬすむべきにあらずとことくせんぎするに
きけばすきとすごろくの事にて申あいけりやいそこ
なでつちめはしらぬかでつちきいてわたくしが重二
や三にてそもやそも此竹の子をとりませうか一六に
おとひなされいと申一六をよびてせんさくすればう
らに母いんきよしていらるゝにいんきよのしゆ三と



てをりばがなかつた
三人ろんぎ

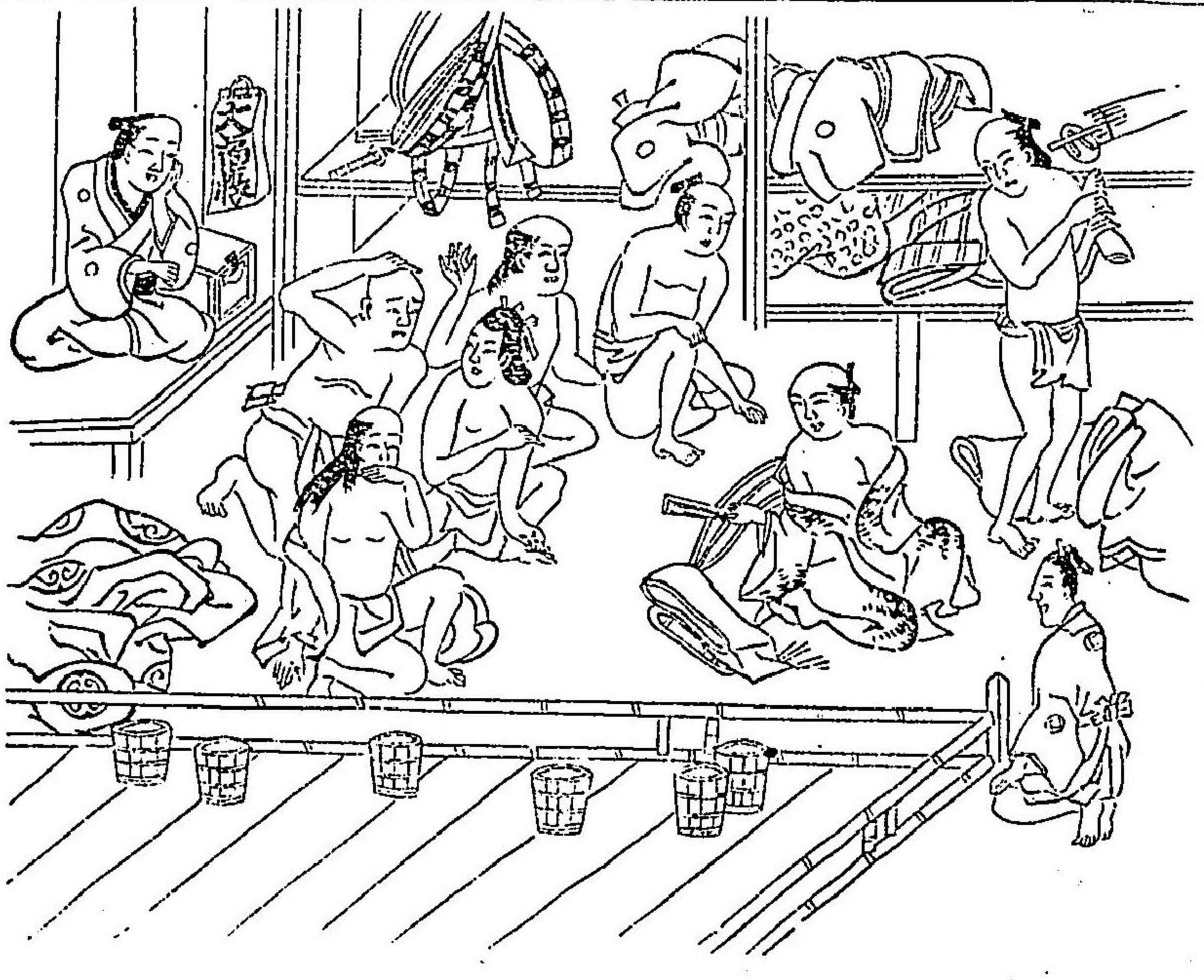
まにおきゝなされいと云さらばとてさい介いんきよ
へゆきてしゆ三坊こなたは竹の子はきりたまわすや
「どいふにぬんきよさ」おてまへのたいせつにし
らるゝものをおれがきる物かそなたのふせうからお
こつたじやう六ばかりかいていてうかくとしたる
ゆへでく介や三四郎をよびてきゝやれあいつらが一
二をあらそふて四かねるやつでないといわれて又兩
人をよびてごふに「我々四六年もほうこうつかまつり
ますすいぶんふぎはつかまつらぬ物を六地に御意な
されいわれらがばんはしませすとごひごうぎりにな
りまするとてもぞんじませぬといふさい介きいてお
のれらがあくじはさいの事じや一をうつてばん
をしろおれがおふめにみていれば目のないものじや
とおもふかたまゝものをいひつけてもぐじゝば
かりぬかしてしろきをくろごあらそひてもあらそわ
せぬぞごともぬかすごきるぞ手を見せぬといふそ
の時三四郎いかにでく介もはやばんじきわまつた此
うへはごうもならぬだんなむじゝいわしやればせ
ひなしおみとをれとさしちがひ四の二とごいゝるをち
がへていへば四の二とごいわれてさい介ものばりつめ

浅草俵町松崎源内と申者ありむかし何様よしあるろ
うにんなりしがいまはひきかへ少しやうばいなごし
られをりふかくつねにはなしあふ人ふたりありしに
一人は平川與市左衛門とてろう人なりいま一人は三
河屋三郎兵衛と申けるが是ら三人朝夕ともにわけて
したしくせられけり此與市左はこの外なるごしや
うねがひにてついにじゆずをはなす事なしたゝ西方
をのみいのられけり源内はあけくれしやうぎをすき
てあいてのあらんかぎりはよるひるごもにさゝれけ
るまた三郎兵衛はかるたをすきてよみのあわせのか
うなごゝいふ事のみふかくのぞみけりあるごとき源内
方にて三人ともに出あひ夜すがらよも山のはなしし
けるに與市左いひ出されけるはさてゝ兩人へいけ
ん申たき事ありといふ何事をさればにんげんわづか
のゆめの世にむまれながきらいせのことわりをしり
たまわぬこそくちをしけれあわれごしやうにもごづ
き給へかしといふていしゆきいてまご仰のごとく
なりしかしわれは少もごづく心にやごしやうぎを申



すがしやうぎまではすき候さりとては三郎兵衛御じ
ぶんににはあわすかるたわざふつくとやめたまへ
かるたはばくちのだい一なり人のおもふ所もありな
ぐさみとはよもいはじさりてはやめさせ給へ與市
どのと云三郎兵衛きいてかるたもごしやうになるま
じやそれかるたは人間のせいすいのもごされば佛法
しいわんにはまづ四十八枚はみだの四十八ぐわんな
り一より九までは四とをりにて四九三十六地の三十
六めんをひやうし十四枚はしやかみだやくしみるく
佛にて四枚はもんじゆふげんくわんをんせいしきり
四枚はじごくびしやもんこうもくぞうてうさてまた
いすこつふはうおうる一本四しなにさだめしはしゆみ四
しうをかたごりたり一はばんもつのはじめなればあ
ざを天下にたつるなり一よりきりまでの十二とさだ
めしかずは十二月をひやうしたりさればきりといひ
ては何にてもすきをいたすいきもの、十二枚は十二
めんゑんなりやくしの十二神をもひやうし心は人の
なぐさみにしてよろづのやまいをわすれ氣をほうす
るゆへなりよみのかるたは一枚のこりあがられぬ事
八つのせんありながら一つのあくにひかざる、心な

り九枚もつは九ほんのじやうごごしやうに入ふねな
りさるによつてかるたごなづく米は是人をたすくる
そのいねのあとをかるたごいふあわせて人のせんあ
くをしりかうにては人のうんぶを三枚まくはみ
くじのこゝろなり是もかやうにこゝろへばいかでこ
しやうにならずやといわれたりその時源内申されけ
るはさやうにいわんにはしやうぎはなをまさりたる
事あれば是にもとぎ給へかしそれしやうぎはかう
うかうそなりさて佛法にては兩王はしやかみた王の
わき八枚はほけきやう八くわん歩九枚は九ほんのじ
やうご飛車角行はもんじゆふげんくわんをんせいし
さればなるさきはし、ぞうのいかりありばんのおも
てに八十一の目は天の三十三天地の三十六めん十二
めんゑんは八十一なり四つのほし四天王つむごころ
は人間のちゑによりしやうぎの學によるべしつめあ
ひはほうもんにおなじ一手のあくじにて一ばんのま
けありしりよあるべしてき三つめに入て金になるは
是かうみやうの人又はすゝめの師くわんの心てき
よりどりたる駒をはる事はいけごりの人をつかふこ
ころ但しさきの學をわがものにしたるにひごし金は



左大臣あとのすみへかゝむ事なし銀は目付なればす
 らすらくきく桂馬は馬にてはしるやくなれば人の
 うへをものりこへて高名をきはむ香車は軍使なれば
 てきちんまですぐにかける歩はあしがるなればさき
 にそなへをたつるかうみやうきはめてきちんまで入
 時金になりては左大臣にもおなじ飛車は一方の大將
 なれば後に龍王となる角はきりんのいかりあれば龍
 馬となるひとつとして佛法仁義の兩道にはづる、事
 なししやうぎ經とてきやうもありとかく是にもとづ
 き給へかしといはれるに與市左是をきいてげにげ
 に源州の仰せもつともなりせめては是にし給へかし
 まづかるたつくりいだすいへなさへわるきぞやかる
 たをすくといふ事のほかへもしもきこへなばてじや
 うをおろされかぎやうをざりあげられてせんかたな
 したい笹ささやきてきくもいや人のなんまでかぶとやの
 もはやおもひとまりたまへとてかるたのなんを一
 からきりまでたんにいはれた

一二わるきは 三郎兵衛 四まいつかへて
 五めいわく 六しんけんぞく うとみはて
 七にすつきと おきあげて 八をひらくは

いまのまぞ 九にのしをきは きいれず
 十々そちの あやまりて 馬じやといへど
 かひあらじ 是よりきりを あげたまへ
 せめて將棊は げいのうち たゞ王々に
 しくはなし 金銀さらに ついやさず
 みたる桂馬も あしからで ざしきの香車を
 もよをして 歩々のつきあい おほくあり
 人の角行 よくなりて ざうりも飛車も
 するなりけり

何事も人間ばんじさいをふが
 馬とたとへし事もこそあれ
 さてこそ三郎兵衛かるたをとりめられしとなり
 せりふのけいこ

過にし霜月より竹之丞しばぬはじめてかほ見世に出
 る出来島吉之丞まへへかげまのときより殊の外は
 やる子なりしばぬへ出るによりいよ／＼よるひると
 もにつかのまもひまなしされどもかたきうちのきや
 うげんせりふをいふやくなればこゝろのうちにく
 しけるに夜ふけてきやく少ねいりけるとき今ぞと心
 えてきやくの大小をさし身ぶりをしてみんとやおも



鹿の巻第一

ひげんかのきやくのまくらもとにたちてようせうよ
 りねろふといへどもをりのなければほんいをどげす
 ひごろこゝろをつくせしに今夜にいんぐわやさだま
 りけんしかしね入たるをきらんはしにんをきるにこ
 こならずとあゆみの板をふみならし三千ねんに一度
 はななきみのなるせいおうほがその／＼も／＼とくは
 のせちるうごんげのおやのかたきにあふはまれなり
 といへどもおもへばやすかりけるぞやと云てたちを
 さやとにもふりあげればきやくおごろきはだかに
 てだい所をさしてにげゆく是はいかにおやかたをさ
 きとしてさわぎきげばさりとはおほへなし人たが
 へにてあらふと云いやきやうげんのせりふなるがあ
 すのかほみせに出るによりふくしてみましたといわ
 れてやう／＼あんどした

田舎者のごうわすれ

とをり町三丁目へとしごろなる男きたりてわかきも
 のにむかひちとものたづねましたいといふなに事ぞ
 ととへばこゝらにたづねたき人ありといふ名はなに
 ととへばわすれましたといふいへ名はととへば是も
 わすれましたさてとほうもない事をいふ人じやそれ

ではしれぬといへばわたくしははるくをき水戸
からまいつたものでござるおしへてくだされねば二
日ちの道をかへりますさりとはいふ此おごもき
のどくにおもひてせめてかたしろでもおぼへたまは
ぬかごとへば名も家名もみなさすやうなと云しばら
くかんがへてさてはむかひの上下やごにまつばや有
助が事であらふまつばもありもさす物じやほごにと
いふいやそれではござらぬさではかみやはりのま
かみかごさふにそれでもござらぬまつごきつくさす
ものじやといふ今おもひつけた伊賀屋の八兵衛かど
いへばそれといふてたづね逢ふた

鹿の巻筆第二

筆屋のじゆりやう

とをり町にじゆりやうしたる筆屋有名をのどの守と
いへり十四五なるわつぱくをつかひけるにをのれの
このかみの内に長吉はにあわぬきくわうとつけうと
いふ長吉さいてまことにちやうさちさはいなもの
ござるきくわうとつけて下されませいわつぱへもつ
うじますると申けるこゝにまたのどの守のいへぬし
に八兵衛と申おごこありしがのちにひまをとりての
このかみの弟子になりけりわつぱのいひけるはのど
の守のみうちに八兵衛とはいわれまい名をかへてよ
かるべしをれも長吉とはにあわぬとてだんなのきく
わうとつけられたそなたの名はつぎのぶとつけふと
ていへぬしよきたる八兵衛を次信とぞ付にけるさ
てわつぱ八兵衛をつぎのぶとつけましたといへばの
この守きゐてさてくにくひやつかなつぎのぶはを
れがためにかたきなるになせつぎのぶとつけたと
てさんくにしかるきくわうさいてさてくくだんな



はおろかな事をおつしやるおまへの大やにいられま
したさかいにつぎのぶと附けましたと申た
にせやしま

去る戌のとし極月廿八日火事のじぶんにたるせう
じ屋が子ささふうり三郎兵衛がゆらひをくわしくた
づぬるに五十四軒のせうじ屋にかくれなき人なりと
しよりければみなせうじ殿とてきんじよの人もち
ゐける三年さきに病死せられるに兄弟の子あり兄
に三郎兵衛弟に四郎兵衛弟子に新五郎三人いづれも
きりやうのものなればおやのあとをとりみださず大
かたにとせいをおくりけりしかるに三郎兵衛弟子に
申けるはかゝるおりからに三人もろ共におなじわざ
ばかりもせんなしなんち弟子新五郎随分かせぐべし
我はあきないをせんといふいか成事をやととへばさ
とふをうりて見んといふ四郎兵衛申けるはせうじ屋
が子ささふうりいかにももつてにあはしきひとかせ
ぎかせぎて見給へとそれよりしたくをして或ときば
ん町うしごみかうじ町四ッ谷赤坂青山芝木挽町つき
ぢてつぼうづをかぎりにうりてかへる時もあり又或
時はとおり町江戸橋小網町箱崎町れいがん島大わた

しをこゑてふか川てら町本所兩國橋を渡り淺草下谷
 かんだへんをうりありく程に毎日五百三百はもふけ
 ずといふ事なししかるに極月廿八日にはもはや正月
 もちかしていつくよりもみめいより出て本所龜
 戸のへんまでゆき四つ時分には大風ふきてつちほこ
 りおびたしこれはごおもふにあはや火事といふて
 天にくろ雲まつくろにおほふ是はごおもひかのさ
 ふはしる人のありしにかくといふてあづけ置一
 もんじにかけたるもはや兩國橋あたりは一めんこ
 まつくろにしてわけてそれとも見へがたしされども
 ふてきのものなればやうくにしるがね町迄駈來る
 にかみやのこの守がへいの焼おちたるうへをこへ
 てゆかんとすればしのびがへしでつちふますのまつ
 たなかにのぶかにこそふみたてたり心はごうなれ
 共いたでなればなにかはもつてたまるべきごてぎわ
 にひしとたふればんしのゆかにふしにけり是はさて
 おき四郎兵衛は新五郎もろごもにはるかににげのび
 たりしがかゝるおりから我々がさぬくもたくさんに
 あるべきなればいざやまづ焼はらへゆかんとて我の
 どころにかへりそうく焼ばいごりのけて新五郎兩



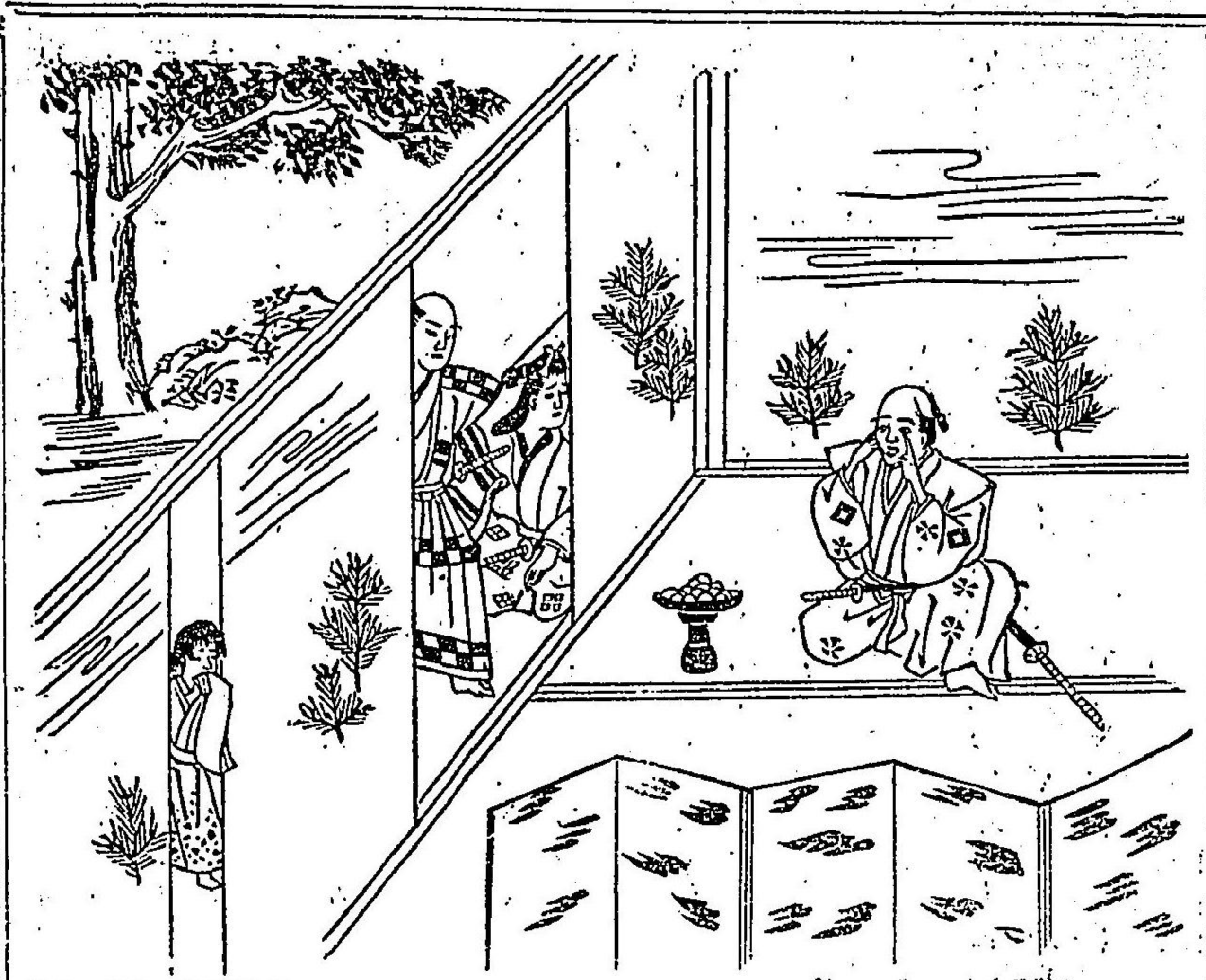
人にてその夜にこやをぞどりたてたりされども兄の
 三郎兵衛はみえずさてくふしぎの次第かな兄三郎
 兵衛は我々とはちがひひとときりやうある人なるに今
 までをそきはふしん也何様我々をたづねたため火事
 の處にふか入してけむりにむせてしにたもふかさな
 くばけがばししたまふかうちすてははおかれまいと
 て大屋へゆきてこのよしをかたるおりふし名主殿も
 いであひてやうすをきこしめし實に三郎兵衛が事な
 ればうちすて、おかれじと大屋あいだなもろごもに
 たづねてこそは出られたりたづねし所はごこくぞ
 くの内にこめがしやひよりはしれぬてりふり町や
 けしはげにも小網町こゝにてあはし町やげにや
 うき世の堺町おほくの人も乗物町ごもなけれごご
 いもく町にもつを深く堀ごめやおおはなけれごてつ
 ぼう町兄がゆくゑのなにこてかしろかね町までたづ
 ぬれご廿八日の事なればくらさはくらしておい死人
 のおほければさらにそれともみゑわかすたまくこ
 ごごふものさてはやけはらの火のまはりごてのうへ
 の松風ばかりなり四郎兵衛申けるはかくたづねては
 しれがたしごかく名をよびてこそごおもひ爰元にさ

ごふ賣せうじ屋が子兄の三郎兵衛はおはさぬかどひ
 そかによふてぞ通りけるかゝりける所に四郎兵衛が
 聲ごきゝて土手の風もろごもにたごごころはごはれ
 ける四郎兵衛兄のこゑごきくよりも心もそらにうれ
 しくてやけしびごをのりこへていかにけがばしした
 まふか是はくご申ける三郎兵衛申けるは我身の事
 はいわずして名主様はそくさいな大屋様はまめ成
 かわごのはげがばしせぬかといふあひだな大屋もろ
 ごもに是はごいひてきん所の焼ごやよりやり戸一枚
 どりもちて三郎兵衛をかきのせてさきは四郎兵衛か
 き跡は弟子新五郎さてあひだな大屋殿いづれもさき
 にたちそひて焼ごやさしていそぎけり

二番目

去程に焼ごやに成しかば名主殿にかくといふ名主よ
 しを聞て是はいかに三郎兵衛心は何と有やらんけが
 はごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご
 たいうなづきたるばかりにてもものをもさらにはご
 りけり其時弟四郎兵衛兄に心をつげんとやおもひけ
 ん是はたごへでなけれごも鎌倉がしの五郎助は鳥越
 橋の彌三郎にゆんでのかたをたゝかれて三日つけて

ねらひついにたゞきかへすとさくわづかのほそくぎ一本にてやみくしなふものかなまくらもとは名主様わきにおわすは大屋さまその次はあいだなしゆこう申は弟の四郎兵衛と申けるその時に三郎兵衛おもし枕を少しあげさもくるしげなるいきをつきこの三郎兵衛がかまくらがしの五郎助におとるべきにはあらねどもこの守がしのびがへしはかみがたまでもかくれなしかほどの名高き大釘にまつたいなかをさほされて三郎兵衛にあればこそかくいづれものその中にてものは少しもいふぞかしに名主様大屋様四郎兵衛はわかればばんじはたのみたてまつるかたみのものをおくるべしきりかなつちのみのこぎりは新五郎にゑさす也此羽おりはけざれしたれど四郎兵衛とりてきてわれにそふとおもふべし是をさいこの詞にて三十一を一ととしてつるにむなしくなりにつり人々是はどのたまへごともかなはぬしでのみちあさくさいふくじにてとむらぬをぞしたりけりしかるに大屋殿黒いぬ一疋いだきてこのいぬわねがひざふなり名をば小黒となづけたりねこいたちにかけ合ふてそのはやきこいちもつなりぬす人



鹿の巻第二

なごにはある事よのいぬには十ばいせり三郎兵衛つねにのぞむされどもあいだなにもものぞむ人多ければつゝにさらせすいまのべのおくりさせんとしる布一反より出しかの小黒にまきつけて寺々一所におくりけるあらふしぎやさいふくじにてやきけるに火その折からかのいぬわれとび出てかの火の中へこんで入るいにしへのぎけいはつぎのぶがさいごに大夫黒をひかれける今の大屋は小ぐろのいぬを送られしに火の中に入りし事めいご迄ともしたりあふしうにかくれなきつぎのぶがさいごに同じければにせやしまご申なり

夢中の浪人

爰に大和田源五左衛門と云浪人ありて永々のろう人にてをばをうちからしうもれぎの花さくべくも見へず身の成はてのあはれらしきありさまなれども心はいまださらにおとろへすあなたこなたを勤けるに或時いつもめをかけさせらるゝ御屋敷へまいりけるに御きやくの方様へかの源太左衛門をしる人になされければなかくねんごろに仰られにあはしき所もあらんにはききもをいるべし身がかたへもちごまいられ

よさりながら方々へつとむるゆるひまなし来る十一日には宿におるなればひまにおいては御出をまつと仰ければあまりにうれしくてすみよしの前に二葉をうへそへて千年まつ心にて十一日をおそしごまちけりその日げんになればあかたれたるくろはぶたへのうへに時ならぬもちのかたぎぬなごもんげだかくひきつくりいまひりけるにそうじやであひてないない御じぶんの事だんな申付おかれましてさしきにせうじけりしばらくあつて口上仰出されるはよふ御出なされた御まぢごふにござろふがさかやきにそりかゝりましたしばらくまたせたまへと有て茶たばこぼん出し又ひぐわしをたくさんにつみ持出てろう人のまへにをくもごよりまつくすみになりていけるに家中の子成けるが六つ七つばかりのかみをうちちらかひたるがせうじをそろりとあけて浪人のかほをみながらのくわしをぬすみたせうじのかげにゆきてくらふまたきてはごりてゆきけるろうにんこゝろにおもふやうはさてくきのごくな事じやろう人がひたるさにくわしをあらしたとおもはれなん事よに口惜やおどしてみんとおもひて又きける程にめと

はなに手をあて、めくちをひろげても、んぐわあど
云へばかの子もおどろきてにげ又來ればおどし二
三度しけるが又せうじをあけてくるかの子供とおも
ひめくちひろげても、んぐわあといへば殿なりその
ま、御かえりあつてさて、あの浪人はけふきそ
ないそいでかへせと仰けるそふじやきたつてだんな
やうの儀有てまかり出られますまづおかへりなさ
れませいかさねて此方からよびにしんずべきむね申
さる、といはる、にろう人さてはいまのもの、んぐわ
あ故とおもひながらせひなくさしきをたちけるげん
くわん口へ出ければ又かのいたづらがきげんくわの
わきにいける、さて此子め故しんだいとりそのふ
たとおもひにくさもにくし又も、んぐわあどめくち
ひろげておどしければ見る人いよ、けうきには
まつたといはれた

火の見やぐらみたて

いなかも三人づれにて江戸見物のために來りしに
まづ屋敷くを見あるきけるが火の見やぐらを見つ
けひどりの云ひけるやうは國元にてき、およびしく
ものうへ人さまといふは是にてあらふといふ一人が

申けるは見れば侍そなほごに天ちくろふ人といふ
もので御坐るふ中にもどしのよりたるもの申けるは
屋敷になに浪人があろううへに太鼓がある程にかみ
なりの下屋敷だといふた

松本尾上が狂歌

尾上もとはかげろふにておはしける過にし霜月朔日
より勘三郎芝居へ出けりまへくよりしたしくゆき
けるきやくの友どち來りて申けるは今日尾上方へ
御こしあるまじきかといへばいやはやむかしのやう
にはまひられぬくらいあがり給へば花代もあがるら
めしかし是をおやかたの方へおくりてたべとて狂歌
を書て遣しける

花代も高砂ならばこちはいや

尾のへのかねをもたぬ身なれば

おやかた返歌を書ておくりけり

まつがひやまへがみかづらながき夜に

あかつきまではかけてやろふぞ

いみやうなりひら

江戸堺町のはどりになりひら勘右衛門といふものあ
りわかきものどもよりあひひやうばんしけるやうは

勘右は成程ぶ男なるになりひらとはいかなればいふ
やらんといへばその中にひどりの申けるはよくはた
らく男なればまめ男といふぎりでなりひらであらふ
といふ又ひどりのいひけるはいやわかき時おとこた
てありつらめむかし男と云ざりかといへばはるか下
座にありし人我よくいはれをしりたり勘右はいにし
へとつとふべんな人でござつたがおや代々よりしつ
けたるしよくにてもものういかむりやをして奈良京都
かすがの里にいた人じやさかいでなりひらといふと
いはれた



鹿の巻筆第三

太鼓やぐらぐらぐら

過にし春のころ中村善五郎新芝居取立にながなは
りたる事をせんと思ひ太鼓やぐらのまくをかきに染
てはりければいかなるものがしたりけん
新しばいおもてにかきのまくをはり

さぞやうちにはへたのあるらん

かくぞはゆがみしければ善五郎氣のどくにおもひて
そめなをしこんのまくをはりければ又かくなん

うちまはすたいこやぐらのまくのいろ

そめかくしても見てはこんく

つゐにしばるつふれしとなり

浅草観音梅の狂歌

四方のけしきものごかなればしたしきともごちふた
りみたり春を忍がほにともなひてつみもむくひもあ
さくさのくはんせをんにもふでけるにめての寺に梅
花のさかりなればけんぶつの貴賤袖をつらねていろ
めきけるむめのはなたが袖ふれしにほひやらん春や



鹿の巻筆第三

むかしをおもひでにたちよりて見ればながふよこさ
まにつくりなしたりまこと弘誓いのふねなりとも
いつべし法の人をやまつこゝろかされどもしたが
きをゆひまはしけりこれは花をおしみてこそと石川
氏の何がし狂歌し侍る寺の名をきけばちこうぬんと
申

二世かけてかはらじとはなになちこうぬん

まがきは人にちぎらせじとや

堺町馬のかほみせ

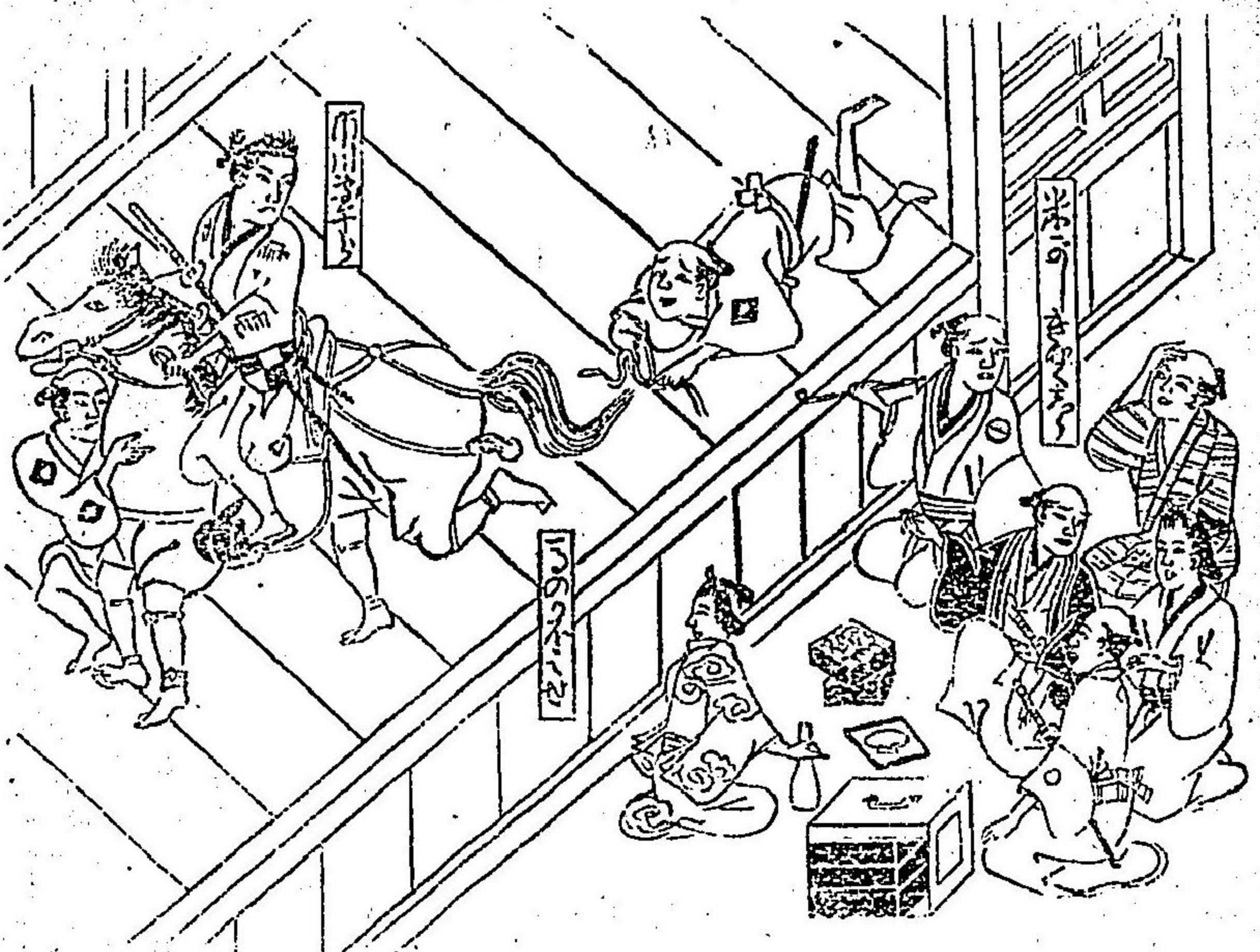
市村しばるへ去る霜月より出る齋藤甚五兵衛といふ
役者まへかたは米がしにてきざみたばこ賣也とつと
かるくちきりやうもよきおとこなればとかく役者よ
かるべしと人もいふわれもおもふなれば竹之丞太夫
もとへつてをたのみ出けり明日よりかほみせに出る
といふて米がしのわかきものごもたのみて申けるは
はじめてなるになにさぞ花を出してくだされかしと
頼みける目をかけし人々二十三人いひ合せてせいろ
う四十また一間のだいにとうがらしをつみてうへに
三尺ほどなるつくりものゝたこのせ甚五兵衛どのへ
とはりがみしてしばるのまへにつみけるぞおびた

し甚五兵衛大きによるこびさてくおそらくは伊藤
庄太夫とわたくし花が一番なりとてもの事にけんぶ
つに御出と申ければ大せいけんぶつにまゐりけるさ
れどもはじめのやくしやなれば人らしきげいはな
らすきりきやうげんの馬になりてそれもかしらはは
たらくなればしりのほうになりかの馬出るより此馬
が甚五兵衛といふほごにしばい一ごふにいよ馬様馬
様としばらくなりもしづまらずほめけり甚五兵衛す
ごすごともならじとおもひんくくと云ながらぶた
い内をはねまはつた

(活東子云此話しを作りて武左衛門流罪になりし
事元正間記に載たり所狭ければ記さず)

二くづし

遠州はまゝつ袋やの治兵衛といふものゝ子次郎助を
江戸へあきなひにくだしおわり町に店をいだしたび
屋をいたすわかきものゆゑ御法度きびしき中にちと
しよふわさをすきあきなひも身にそますあしきと
もをのみまねきてうつらくくらすほごにさいしよ
よりぢさんのかねもみなうちこみけつく借金おほく
あきなひもなりがたきゆへしよたいをしまひこごう



ぐをのりかけににごしらへざいしよへのぼらんとど
りつくりふおりからざいしよおやのかたよりひきや
くきたる次郎助何事やらんと文をひらきみるに何々
そのほう儀もどをうしなひ大分かねなごかりたご
きいたちうくのふさき此ほうへのぼりしたひに
うちきりすてべきなきさんくにいひおこしけれ
ば次郎助おもふやうざいしよにかへりてもいかあ
しからんとこしらへたるにもつをくづしける友だち
見まひにきてそのほうはのぼるよきいたになせに
にをくづすといへばおやがうちきるふと云により二
くづしたといはれた

正月は物いまい

田所町にかふしう屋の甚右衛門とて代々法花宗にて
ものいまひをせらるゝきうとう廿八日までしやうば
いいそがはしかざりのごうぐもこしらへざるゆる作
助をよびてかざりなはをなへといふに作助手をつい
てぶてうほうなるわたくしかざりをいたさばろくで
はござるまいといふていしゆ氣にかけてばかめがご
いふてそはなるまきをなげつける作助これだんなま
たなげきをなさると云甚右さてくせひもなきたわ

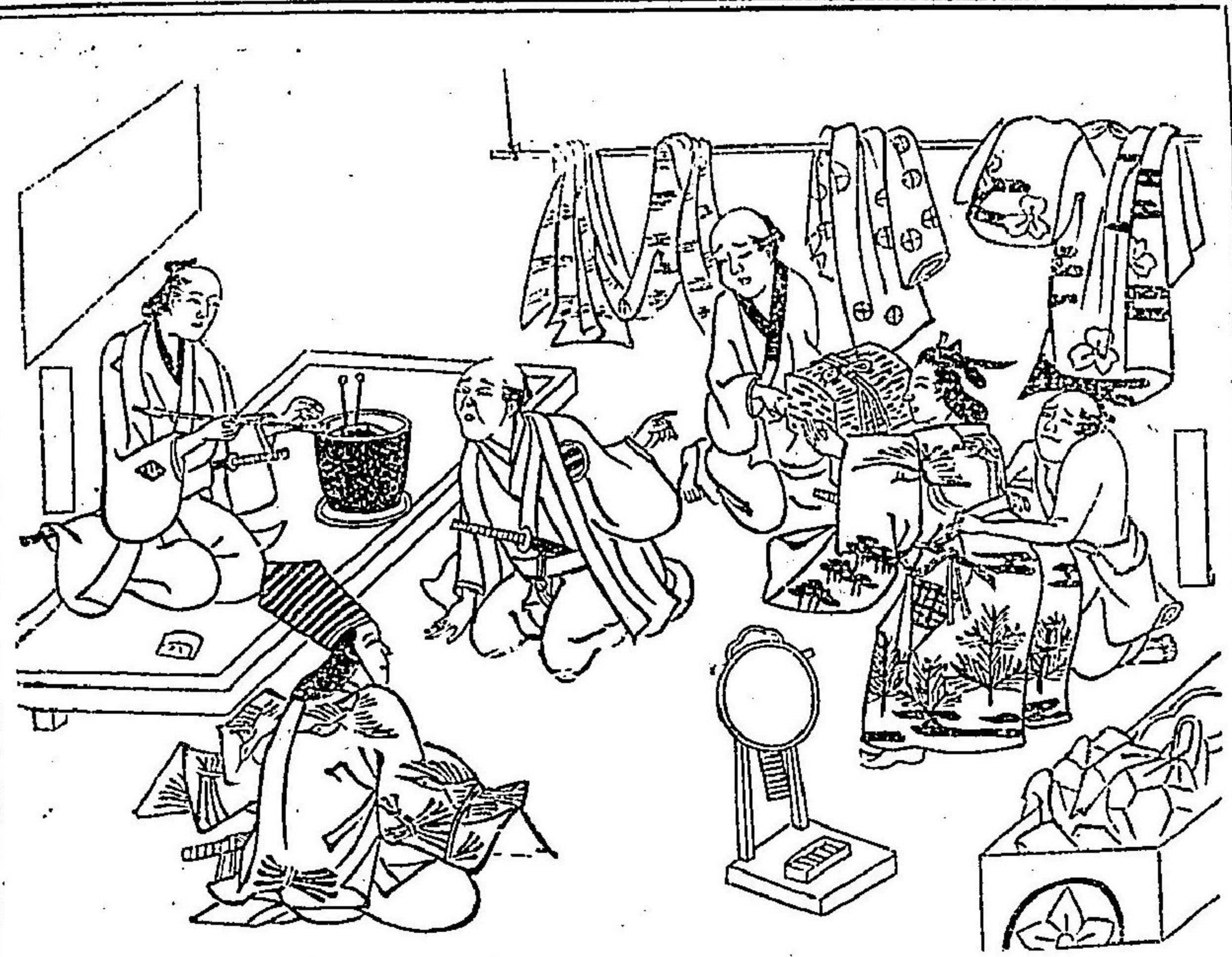
けじやさやうの事はぬかさぬものじやあすは大つご
もりじやかならずそゝうをいふなことに元旦には諸
事どりおとし物をうちわりなごしてもめで度なつた
とばかりいへといひつけゝるにたなよりものゝおち
かゝりければ作助ちうにてどりわがあらんかざりは
めつたにめでたくはせまいといふた

無筆のげんくわ帳

五十嵐勘解由とて手まへよきう人ありされどもい
かなる事にかむひつにておはしけり正月の禮者きた
るに作内といふ男げんくわ帳をつくるにだんなも無
筆われも無筆なればゑにかきておきけり勘解由帳を
どりてみるに文とさくらをかきてをきけり花の丞が
きたかといふにけさまいられたと云また上に松の枝
と下にじやうぎをひきわる所をかきてありまつがえ
さくわんのわせたかご云ござりました男はねたくま
しきがけんをもちてつゝたちあがりているところを
かきたり作内よ是はよめぬがごへばりきのけんも
つ様といふだんな是はあて字でおじやらふぶどうの
んにまがふといはれた

むそうのよみそこなひ

神田大工町に大黒や長兵衛とてしまい物やあり(し
まい物や今云ガラク屋也)過し正月朔日の夜むそ
を見けりことなふ長兵衛ものいまいする人なれば氣
にかけおきもあがらす二日のひる時分までふしけれ
ばさい女まくらもとによりていか御心ばしあしう
御入候やしよくじをもまゐらすかやうにうちふし給
ふ事いかなれば御心におほしめす事もやおはします
るわらはとは二世とかねたる中に御つゝしみはいか
がごかきくごく所へ同じ店にいらるゝ和泉屋の興三
といふてちと歌學なごすかるゝ人見まはれけるに内
室右のよしをつぶさにかたる興三ふしんにおもひ長
兵衛に聞いていしゆ枕をやうゝあげてその方つね歌
道をもすかるゝ人なればはなすなり夕べゆめの内に
三度までおしかへしておくよりわつとないて出ける
といふ下の句をみたり年の始かやうのふきつなる事
心にかゝるゆるつやゝおきもあがらすといへば興
三よこ手を打て是は目出度ゆめひらにおきてよろこ
び給へといはれおきあがりことぶきさまゝとりつ
くろひ扱目出度いはれはいかにごへば興三さいせ
んの下の句に上の句をつけて目出度とていだされた



大こくにびんぼうがみがたゝかれて
 おくよりわつごないで出ける
 とかゝれたれば長兵衛大きによろこび殊の外には
 はれければまことにそのさしよりしあはせつゝさ
 かへられけりそのごなりに松田助之進にて小知をも
 のぞむろう人有此春

まつたぐひなきあしたかな

といふむそうを見るこそ長兵衛が事などおもひあは
 するにあしきいわぬはよくさかゆるまして目出度ゆ
 めとたんざくにかきてみきなごすへてさまゝいは
 ひなかばのころへ近所に居けるそゝうものきたり
 しかゝゝさきゝて初々目出度事かなとてたんざくを
 ざりつくゝうちながめてまゆをひそめければてい
 しゆいかにといへばかのそゝうもの此ゆめ目出たか
 らすよくゝままれよふきつなりといふ松田さには
 あらじといろをちがへていへばそゝうもの是みやれ
 まつたくびなきあしたかなといふゆめが何がめでた
 からふといふた

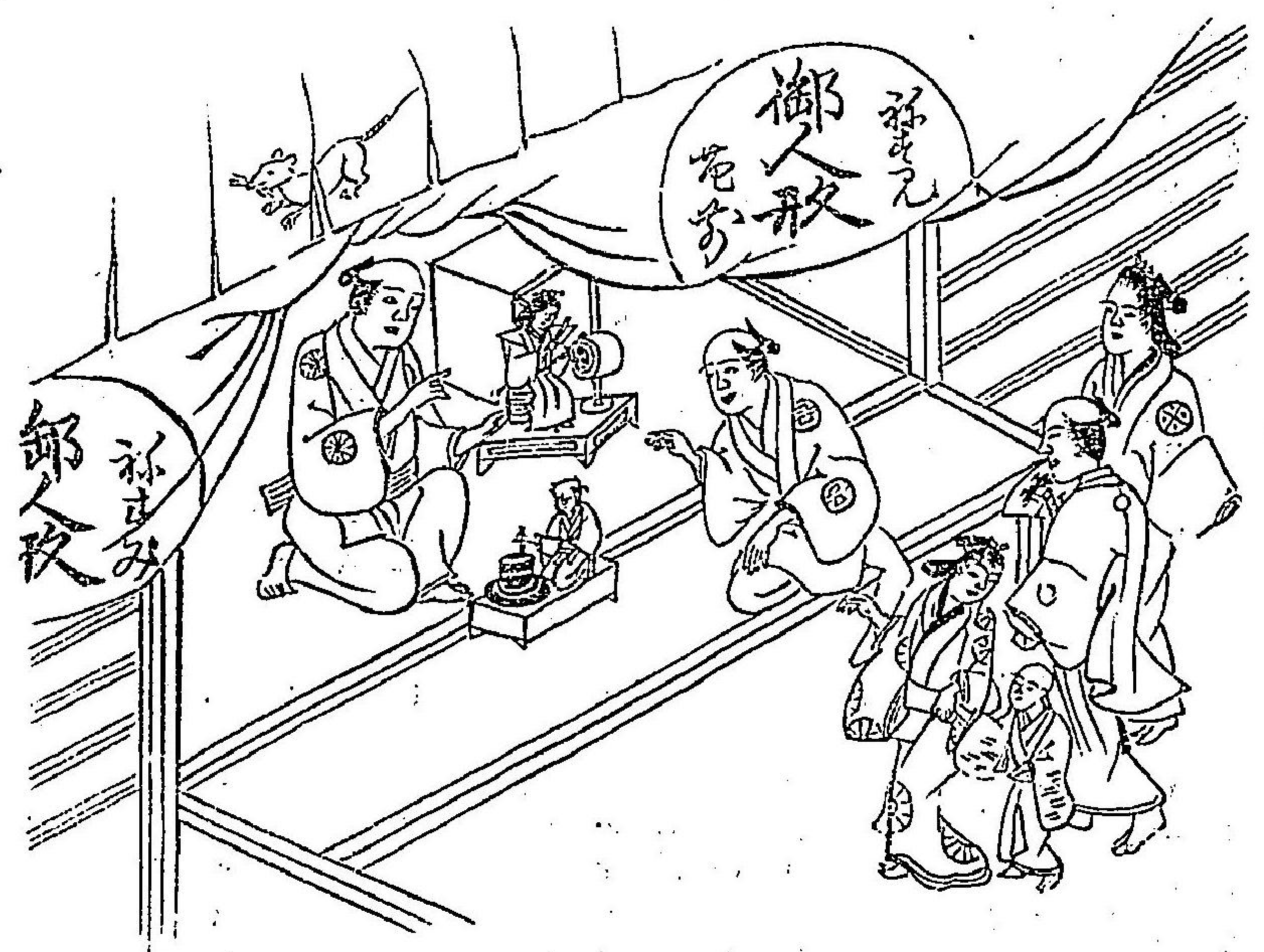
やぼのかげまもち

さるろうにんさかい町へんにすみければかげまをか

かへけるに勘三郎しばるへ過にし霜月より出しけり
 まへゝのきやくそれゝに花なご出しけるされど
 もぶたいなれざる子なればやうゝ三番三のせんざ
 いにいだしけるきやくごもひる時分よりいつもくる
 にあささくにしまふやくなればつゝにきやくの見る
 事なしおやかたゆきてみてきのごくにおもひて太夫
 もとへまいりておやかた申けるは染之丞がいたすと
 こる朝にてきやくしうもみやらいでなにともきのご
 くは存じまするあはれねがはくはさんばそうをきり
 きやうげんになされてくだされませいといはれた

吉原ひなあそび

吉原の上ろふおもひゝにおやかたのむすめの節句
 なりごとひなをおくられるにその内につごめしげ
 くて二日の日までせつくをおくらぬ上郎ありてぎう
 をよびて申されけるはたいぎながらにんぎやう町へ
 行何にてもしほらしき人形をゝのへうちのむすめ
 子へおくりてたべといふて金子壺分なげいだすまへ
 かたよりちかづきかにんぎやう町の鼠屋豊前かたへ
 行てかの金子なげ出して何にても此金に見合て人形
 を下されといふ壺分ならば是よとてさし出すいそが



はしさにそうく持てかけはしりけるが淺草すは町
までゆきてぎう心に思ふやう中をあけてもみなんだ
がよき人ぎやうかとおもひてみれば小坊主からくり
にて茶をひく所也これはなるまじとてもちてかへり
茶をひく事はおらが町のきらひものなるによのを下
されといへば誠におもひつけなんだ茶をひくはさし
あいじや是をとてたいこをもちている人形をつかは
しけるぎう見てとてもの事にたいこもちよりきやく
人形がほしいといふた

佛事のいんしん

しばひや三丁目に大和屋善左と申てすこびたる人
あり浄土真宗にておはしけるに殊の外後生ねがひに
て過し秋ころざし有少々佛事をいたされけるさか
い町に住せらるゝ和泉氏の何がしふかくねんごろな
りしが佛事のおりから人をおくり給ひしにかやば町
にしやかにがまんぢうとて名物なりしをまきゑの重
箱につめてうへにたんざくをかゝれたり

あちはひはしやかにかわれどみなもとは
おなじながれのたゞのまんぢう

又酒一とくり是にたんざくあり

じようご酒やとくりと是をまいれかし
べつに新酒をそへてしらん

文もなくたゞかくばかりいひおこしける大和やがお
いに石川氏の何がしをよびて此返歌をかきておくれ
といへば二首の歌を一首にて返歌しけり
西方をしやかにたのまんぢうのうち
みきのらいがうせんちしきかな

吉原酒の行末

本町に源といふものありとつとしわきものなりされ
どもよし原はすきにてひたとゆきかよふある時さん
ちやにて大せい一座して酒もりしけるにのちはらん
酒に成てひたさけをこぼす事おびたしないく
しわきものなればおしき事におもひてぎうをよび出
しさがづきさしてさて此さかづきのだいやせんなど
におびたしくさけのしたみがあるはみなすたる事
かごとへばなにむざとすてませうすきとひとつにし
て樽につめておきますそれがなになるごふに
これをうる酒やがござりますそれよりかひにまあり
ますうそをつくものじやといへばさてくおかへり
に御らんなされませい屋敷に酒屋が二軒までござり

鹿の巻筆第四

くごくの念佛

ますかんばんに上々したみもろはくと
さるもんもうなるもの申けるはさても平家の一門お
ほき中に清つねはそゝうな人そゝうな世にござへば
あめのふるにうろたひしなれたげなといふさてく
うたひをきゝたまはずやおもひさだめて身をなげら
れたにといふにいやくうたひもかつばとおちしほ
のといふなればあめにうろたひられたそふなといふ
ひとりのいひけるはをれはうらにいてしてしなれた
ごおもふ是はきやうがつたことじやといふにそれで
もこしよりやうぬき出しとうたふほどにとい
ふた

あるものひたと念佛を申てはかますに入又申てはか
ますに入ひたもの申てかますにつめる程に三かます
づつめて三だんぶりしける程に九かますぞ申ため
けるもはやめいごへゆかんにのみやげ心やすしとて
其後さのみねん佛も申さすいけるに六十八九にてつ
ひにおふじやうしけりされども申置たる念佛を荷に
つくり馬につけてゆくほごにこむろぶしにてゆきけ
り六道のつじへゆけばおに七八人出てざい人をさが
めるされどもこの男はみやげ大ぶんもちたればおに
のなかをまかまわずにのりながらゆかんとするおに
ごもごがめけるにいやとがめるまでもなし此みやげ
を見よみな念佛也と云中にもしやうじき成おにさり
とてはけつかうなる事也通り給へといふに又しさい
らしき鬼一人きていやく前方もあつた事じやにも
つをあらためてとほそふ此前もあらためずしてゑん
まより戸を三日づゝしめられた事有せひ見んといへ